
七色の明日へ

ohan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七色の明日へ

【Nコード】

N7532G

【作者名】

ohan

【あらすじ】

壊れた地球、壊されていく火星。分かれ住んだ人々。「環境を守ることが正しいの?」「環境が変わっても適応しようとするのが正しいの?」答えはどこにあるのだろうか。

第一話・はじまり(前書き)

久しぶりの投稿。

新たなPNで書いていきます。

第一話：はじまり

人間に宇宙開発という道具が与えられて数十年……。宇宙は人間にとって、決して遠いものではなくなった。壊れていった地球、壊れていく火星、新たに開発される新衛星。歴史は繰り返すのか。

『守る』ことが最善だとは思わない。けれど、『立ち止まらずに進むこと』が最善だとも思わない。

「あれが、新たに発見された衛星……」

俺は望遠鏡と、情報部が発行した新聞の天文図を見比べた。

『木星に新たな衛星！人間が住める可能性も?!』

新聞の見出しには大きくそう書いてある。この星では他にも事件はたくさん起こっているのだろうが、このネタより大きなものはおそらくないだろう。

地球に住んでいた頃から、木星にはいくつも衛星が発見されていた。俺が生まれるよりももちろんずっと昔からだ。それでも人間が適応できる環境の衛星は今まで見つかっていなかった。

ただ火星から研究するとなると話は別である。

「こうなると、……疼くね、体が」

火星が壊れたときに移住出来る可能性のある星だ。みすみす逃す手はない。必ず、開発部は動き出すだろう。

ピンポン！

感慨にふけっている（自分で言うのもなんだが）俺に無遠慮なチャイムが響く。

「ふう、あいつか……」

俺は入口に向かった。

「待つてる！今キー解除するからー」

といつても、あいつは俺の部屋の認証キーを知っていたような気もするよなとか思いつつ、入り口に向かう。その時だった。

ドン！

鈍い音ともに勢いよく少女が部屋に転がり込んできた。

「リク！、見た見た？！あの新聞……つても私たちが発行したものだけど！」

「その前に言うべきことがあるんじゃないでしょうか」

俺は入口で情けなく横たわっている。そりゃそうだ。キーを解除しようとして、入り口のパネルに手をやった瞬間、ゲートが開いたのだから。

もつとも、こいつは微塵も気にしちゃいねーだろうけど。

「ごめんね！ごめんね！でも、つい興奮して……一応公にするまではリクにも伝えられないからね！我慢してたんだから！」

「……まあ、いいや。情報部はいつからこれ、知ってたんだ？」

「まだこの事実が発見されたのは昨日よ！開発部の人、発見したんだって……」

昨日……か。そうなるとまだ細かいデータは出てないんだろう。

「つととなると、まだ本格的に住めるかどうかはわからないんだな？」

「そうね、でも多少の誤差ぐらいなら人間はふつとばすでしょ！なんだかんだいって火星さえ住めるようににしたんだから！」

「ユーリ……、情報部なんだからこまめにリークしてくれよ？開発部のタマゴな俺には大した情報ものは得られやしねえ」

「同じ17歳でも、才能の違いよね……」

「うるさい……この衛星の開発が始まるころには俺だって現場に

たてるように……」

「はいはい」

同じ居住区フロックの近所で育った俺とユーリは幼馴染だったが、進んだ道は違った。

彼女は、火星全体の情報を管理する情報部へ。

俺は、新たな他惑星や火星の未開発地を拓く開発部へ。

ところがどうだ、同じ15歳でそれぞれ配属になったのに、彼女はもう現場で働いて、俺はいまだにタマゴとして研修中。

開発部は確かに危険が伴う仕事だが、そろそろ現場に立たして欲しいものである。

「あ、あともうひとつ気になる情報があったわ。こっちはあんまり良くない話」

「……？なんだよ？」

「火星保護団体ってあるでしょ？開発部の敵だから当然知ってると思うけど」

「ああ、火星を地球の二の舞にしてはならない！って謳ってるやつだろ？」

「そうそう、あれの動きが活発になってるらしいわ。この衛星発見によって。」

まあ……それは当然な話になるだろう。

これによって、火星がより粗末に扱われる可能性が増えたんだから。

「なーんか、めんどいことになりそうだねえ……」

「あら、嬉しくないの？衛星発見」

「嬉しくないように見える？」

「……見えないわね」

そう言っただけ俺たちは口の端を上げて笑う。

長い黒髪の長身少女と、ボサボサの茶髪の普通の背丈の少年は、同じ生意気そうな顔になる。

「この星は俺たちが拓く！」
「この星は私たちが拓く！」

僕たちはまだ何も知らない。
人間は地球で生まれて、火星に来た。
その理由も術も、知っている。
でも、僕たちはまだ、何も知らなかったんだ。

第二話：親友（前書き）

えーと、年表を作成してみると、エラーがありましたして改めて書き直していきます……

第二話：親友

ユーリとの会話を終えた俺は、醒めない興奮の中でなかなか寝付けないでいた。

新しく発見された衛星、人類が住める可能性、そして対抗勢力……。火星での平凡な生活の中で現れた夢のような起爆剤。きっと俺以外の人でも同じだろう。

しかも、俺は地球での生活をあまりよく覚えていない。移住してきたときも、そんなに小さくはなかっただろうが、こちらでの生活が記憶の大部分を占める。

それでも忘れられないのは地球の青い空と、最後に別れた地球での幼馴染。

「地球が……」

（あいつは確か、地球に残ったんだっけか……）
もう戻れない地球に、時々思いを馳せる。

「もう戻れない故郷ってもなかなかアリだよねえ……。なあ、お前も早く来いよ。いや、もう来てたりするのかな」

俺は独り言を呟き、眠りに落ちていく。

翌朝の新聞は、やはり新衛星のことでもちきりだった。開発部の研修生に対してでも、今日は多少の報告はあるはずだ。なにせ、発見したのが開発部で、これから拓くのも開発部なのだから。

（ん……？あれは……）

俺は良く知る姿を見つけると、駆けて行って挨拶を交わした。

「よっ、レオおはようー！」

「ああ、リクだね、おはよう」

「なあ、見た見た？今朝の新聞！あ！昨日の号外でも知ってたか」

「残念、僕は開発部が発見してからすぐに情報がきたからね。情報部が握るより、早く知ってたよ」

「え？なんで？」

「開発部の若手エースだから……じゃない？」

屈託のなさそうな笑顔を浮かべてそいつは言った。

ぐ……こいつ俺が怒るのを知ってわざとこんな風に言ったな。

こいつも俺の火星での幼馴染、おなじ居住区ブロックに育ったレオ。銀の少し長めの髪と俺より小柄な体格。俺とユーリと同年、でもって開発部の期待の星ときたもんだ。まあ、こいつは小さい頃から何でもできたからな。俺より少しだけ……だけど。

「どーせ、お前もすぐに現場まで行くんだろ？若手エースさんよお」

「まさか！さすがのリクも木星までの距離を知らないわけじゃないだろ？」

「さすがのつて……朝からそこまで喧嘩したいか、お前は」

「あーごめん、今は素」

「よけい駄目だろ！！」

あははと、悪気もなく笑う。なーんでこんなやつがもう、現場に立ってるんだろうな。技術も知識も体力も、俺とそんなに変わらないのに。

「まあ、実際問題、君ももうすぐに現場に立てると思うよ。ただ、シンラン先生は君に気づいて欲しいことが……あるんだと思う」

「お前は昔から……エスパーかよ！人の考えてることを……。それに、気づいて欲しいことだと？訳わかんねーよ。そもそもあの鬼教師に、そこまで深い考えがあるとは思えん」

「まあ、あれだよ。地球の言葉にこういうのがあるらしい」

「突然に……なんだよ？」

「大器晩成」

「どーいう意味？」

「やっぱり、しばらくは無理かも」
怒って追いかける俺と、冗談だよーと言って笑って逃げるレオ。意味は後で、ユーリにでも聞いておこう。

「『マーゼ・アレイン』唯一の火星か…洒落た名前だな」
「あの人の考えそんなことですよ。あれで結構見栄っ張りですし」
「ははっ違いない…」
「これで…迷ってるわけにはいかなりますね」
「迷いなんてあったのか？私は火星移住計画が施行されたときから迷ったことなどない」
「失言でした……。改めての決意ということに」
「その意味ではそうなるな。あちらの出方次第では、もう会議などと世迷いごとを言ってもらえない。開発部とは名ばかりだ」

火星から遠く離れた月のある場所での二人の男の会話であった。

「なあ、レオ？」
「ん？どうしたの？午前中の授業のノートならあとでコピーさせてあげるよ」
「こいつは……、これも多分素だ。そしてノートも後で借りるけど。」
「ノートは借りるとして……、妹さん元気か？」
「君がそんなこと気にするなんて珍しいね？なんかあったの？」
「いや、なんとなく……」

昨日、地球のことを考えていたからなんて恥ずかしくて言えない。俺はもともとそんな性格じゃないと思うし、やっぱり“前”を向い

ていたいから。

「きつと元気だと思う。最後に通信してから、随分たつけど……ね。それにこれからは忙しくなるし、あまり通信する暇もなくなっちゃうね」

「んだよ、少し冷たいんじゃないか」

「何？好きなの？ロリコン？」

リクがちつつがーうと大声を出して食事のトレイを投げるまでその時間はかからなかった。

もつとも、ロリコンって何？と少しの疑問を持つてだが。彼、地球の言葉には弱いのである。

（ありがとうリク。そこまで気にしてくれて。君は顧みることを知らない人だと思っていたけれど）

「まあ、いいや。俺たちには俺たちのすることがあるもんな」

「研修？つとと冗談だよ、冗談」

「つたく。俺も早く、現場に行きたいなあー」

（それでこそリクなのかもしれないね）

ところで……

「なあ、ユーリ？大器晩成って何？」

「大器晩成？誰がそんなこと言ったの？」

「レオが俺に」

「ぶっ」

「今吹いたな！？」

「吹いてないってば。なるほどなるほどっ。言い得て妙ね」

「なんなんだよー！」

というやり取りがあったのはまた別のお話。

僕たちは知ってゆく。

僕たちは変わってゆく。

でも、変わらない人もいる。

いずれ、思いはぶつかる。

それでも人だから、いつかはきつと分かり合える。

第三話・開発部部长(前書き)

登場人物増えていきます。

第三話：開発部部长

「いいか！新衛星が見つかったことは素直に喜ぶべきだ！だが、私たちにはまだ火星を開き地球に残された人々を移住させるという任務も残っていることを忘れるな！」

「はいっ！」

「だが！人間が住める可能性のある星を見つけれられたというのも喜ばしいことである！」

「はいっ！」

……どこの熱血部活動ですか。

「おい、リク！！今は部活動の時間ではない！！！」

「言つてねーよ！てか、俺の周りは心読むやつが多すぎる！！！」

「お前は基本的にすぐに顔に出るタイプだからな」

（あんたもな）

「余計なお世話だ」

「……はい」

どうも。午後の研修の時間です。いまだに研修生です、はい。

「シンラン先生ー、先生は新衛星に行かないんですかー？」

「んー、そうだな。しばらくはここを動かんつもりだ。私には開発部部长としてお前らを指導せにゃならんし、火星の未開地の開拓の仕事もある。無闇に削れん体な訳だ。行きたいのは山々だが」

他の研修生の質問に短い赤い髪を揺らして長身の女性はテキパキとした口調で答える。彼女の名はシンラン。人呼んで火星人。一応、地球の生まれだが、ずば抜けた能力で、女性であり、まだ30も行かぬ齡だというのに開発部部长の座に就く、恐い人。本音は隠せないタイプ。

「いいか、おまえらうかれているが、新たに衛星が見つかったからといって、すぐに開発に行けるほど宇宙は甘くない！お前らが生きているうちに、その星に移住できるようになるかどうかも分からん

のに」

「えー!? そんなあー!」

他の研修生は不満の声を漏らす。しかし、当たり前前の話だ。そんなに甘いはずがない。だからこそおもしろいんだ。これだから研修1年目のやつらは……、とまあ偉そうに言える立場でもないのだが。

「とうか、この開発部にいる以上、お前らのその開発意欲はいいのだが、今の生活に不自由があるわけではないのだから? せっかく私たちが長い時間をかけて火星を拓いてきたのだ。もつとも私が生まれるもつと前から計画は進んでいたわけであつて、私も偉そうに言える立場でもないのだが」

ここでシンラン先生が、恒例の昔語りを始めた。2年目の俺には聞き飽きた話だ。

(早退して寝よう……)

「先生ー!」

「帰るなよ」

「なんもいってねーよ!」

「ふう、正直言うとお前は開発部に必要な能力自体は優秀だ。しかし、少し分かってないことがある。去年から何度もしている話かもしれないがお前がそこからなにかを学び取ろうとしない限り、お前は一生研修生のままだ」

大きなため息をついた後、俺を指差し、厳しい声で言った。ふざけている訳ではないらしい。それならば、俺も反抗するわけにもいかない。

「ええ、聞きますよ」

「……ふん」

周りでは、若い研修生がなんの話しなんだとざわざわし始めた。

(地球の過去についての話じゃね?)

(いや、まだ見ぬ火星怪獣の話だよ!)

(土星人が攻めて来る話かも……)

んー、ご期待に沿える話ではないなあと俺含めた2年目の研修生は

思う。

「まず…そうだな。新衛星のことを少し話そうか。お前らも知っていると思うが、木星というのは火星より太陽からの距離がある。必然的に寒い。火星も地球より寒暖差が半端なかったが、これはわれわれの技術力でなんとかなるレベルだった。まだ完璧なものとはいえないがな。木星を太陽につくりかえるシミュレーションなんかも行われているそうだ」

（おおー！！木星を太陽に？）

（すげえー！！）

おいおい……なんかすげえ面白い話じゃないか。いつもの話と違っぞ。

「とこうい話をすると、みながみな目をギラつかせて聴くだろう、なんておもしろいんだろうと。しかし、そんな簡単な問題でもない。酸素の有無、気圧の確認、水分及び食料の確保。皆が住めるようなモジュールの建設。これらの問題は全て地球から火星に移住するときも考えられていた話だ。お前らが住んでいる火星もそんな様々な問題を抱え、それをたくさんの人々の力で乗り越えてきたんだ」

ふう……と彼女は一呼吸おく。

「それなのに、今壊れゆく地球から火星に移住できているのはまだほんの一部。しかもそれは、偶発的に決まったものでもなく、権力のあるやつらが勝手に決めて、勝手に行ったことだ。お前らはまだ若い。興味本位で揺れ動いたりもする。しかし、学ばなければいけないんだ。私だってこっちに来ていた身だ、偉そうに言っつもりはない。しかし私だって大切な人を残してきた。レータ……」

（キヤー！悲恋よねー）

（切ないわー）

2年目女子が、騒ぎ始める。

それで、先生の悲恋の物語が語られ、今日の授業は幕を閉じたのだ。

「と、いうわけだ。涙無しに聴けなかつただろう」

(ロマンティック……、それでいて悲しい)

(私もあんな恋がしたい……)

一年目女子は、少し夢見心地のようだ。

「で、それが俺に聴かせたい話っすか？」

「ん、ああそうだが」

「俺はあんたの色恋聴いても、どうもできねーよ!」

「ふう、お前は表面的にしか物事が見えないからそうなるんだ。よく考えてみる」

ああ？表面的??だからどうすれば……考えるしかないのか。

「セレナちゃん……、辛い思いをさせているね。私たちが言ってもなんの慰めにならないことは分かっているが、言わせてくれ」

「いいえ、私にはその言葉だけで十分です。私のこの体が、将来の人類の為になるなら。みなさんも私には優しすぎますしね」

そういつて長い銀髪の少女は白衣を着た老人に笑いかける。老人はそれを見てなんともいえない顔になる。

(こんな若い女の子まで……、どうしてこんなことに)

若い男が無機質な白い扉を開けて、部屋に入ってくる。少女はベッドに寝かされ、老人が近くの丸椅子に座って少女と話していた。

「ドクター、セレナを少しいいですか？」

「おお、フィエン。検査は終わった、いいぞ。いつも世話をすまんな」

「いえ。私にできることは全て行いたいのですから、お気になさらないください」

そういうとフィエンと呼ばれた男は少女の手を引いて歩き出す。

「セレナ。お父さんもお兄さんもお元気だそうだ。それと新しい木星の衛星が見つかった話は聞いている?」

「いえ、初耳ですね」

「火星のやつら、その開発に動くかもしれない。地球にまだ残された人々がいるのに……！」

「大丈夫ですよ。私は火星のみなさんを信じています。それにお父さんもお兄ちゃんもいつか迎えに来てくれるって信じているから。」

それとフィエン」

「なんです？」

「私はあなたにも感謝しています。あなたがお父さんとお兄ちゃんの近況を伝えてくれるから、安心できます」

「いえ、これも仕事ですから。地球にいる間はなんなりとお申し付けください」

「ありがとう」

壊れていく地球で少女は微笑む。

僕らは、ふいに深い海に潜る。

その奥は誰にも知られない、自分だけの海。

自分だけの魚と自分だけの海草があつて。

そもそも本当の海なんてものを見たこともないけれど。

第四話：地球の暮らしと火星の暮らし

「先生、やっぱり俺、先生の言いたいこと分からねーよ」

「そうか。まあ、それもいいかもしれないな。私の、いや私たちのエゴかもしれないしな」

「エゴ？」

「いや、いい。気にするな」

俺は授業が終わった後、シンラン先生の下へ行き、「俺に必要なこと」を聞こうとした。だが、うまい具合にいなされたのかもしれない。結局わからないままだ。

「お前も来週からは現場に立ってもらおう」

「へ……？」

「なんだ、嫌ならいい。もう1年がんばろうか」

「いやいや！俺も、」外”で仕事ができるんだな？！”

「同じことを言わすな！これからは忙しくなるからな。しょうがない！思い上がるなよ、これからは精進は欠かさすんじゃないぞ！」

「ああ！！」

シンラン先生は俺を認めてくれたわけじゃないと思うし、俺も結局何も分からないままだ。それでも、折角もらったチャンスだから、一生懸命頑張つてやる。それで進んだ先で学べることもあるはずだから。

決意を固める少年を見て、シンランは優しく微笑む。遠い地球にいる誓いを交わした思い人に心寄せながら。

（レータ……。大丈夫。私たちが思うほど未来は暗くなんかない。

あの時のお前が悲観したほど、この世界は汚くなんかないよ。だから早く、……。火星に来て。）

「あ」
「なんすか、先生。いい雰囲気の水を差さな」
「うるさい。黙れ」
ちよつとしんみりした二人の雰囲気はもうそこにはないのである。
「お前、最近実家帰ってるか？」
「実家……？帰る必要ないだろ。どうせ親達だつて帰ってきてねーよ」
ゴンツッ！
「鈍い音がした……、つてなにこのありがちな展開」
「余計に駄目だろ。お前には確か弟がいたじゃないか」
「クーっすか？あいつは俺より、いや親二人よりしつかりしバシツッ！」
「同じ手は二度とくわねーよつと」
「腕を上げたな。とにかく帰つてやれ。しつかりしてようが、まだ子供なんだ。一人で寂しくないはずがない」
シンランは再び先ほどの真剣な瞳に戻る。
（ユーリといい、女つてのは人の心はすぐに読むくせに自分の考えは人に読み取らせないんだよなー）
俺は先生の顔をうかがいながら、そんな事を一人で毒づく。
「……わかりましたよ。俺が現場に立つつてこともクーに知らせた
いし」
「素直な子は好きだな」
「俺は別にアンタのこと好きでもない……嫌いでもないけど」
「そうか。まあではまた明日」
あれ、突っ込まないんだな。とか思ってるうちに研修室を追い出されてしまった。
ひとまず、ユーリとレオを誘って明日帰ってみるか。どうせ、親は帰ってきてねーだろうが。

「ねえ、フィエン？」

「なんです？セレナ？」

「質問に質問で返すのはやめてください」

「あ、いや。そんなつもりもないのですが」

「あら、そうですか。」

地球では、荒廃した中で存続している都市の中の飲食施設で、白い短髪で眼鏡をかけた青年と、長い銀髪をツインテールにした少女が向かい合って座って茶を飲んでいる。

「こうやって研究室を抜け出してお茶を飲み誘ってくれることは嬉しいのですが、これではまるで、デートみたいですね」

「へ？いやいや、セレナと私がデートなど……っ！」

「あー！……いやいやすみません！言ってみただけです！！」

このフィエンという男、いかにも真面目そうで、仕事にも冷静に取り組みそうだが、女性、特にこのセレナには滅法弱いのである。いや、甘いのである。

(こ、これは仕事だ！任務だ！私情を持ち込むなどもってのほかだっ！)

と、冷静を取り繕いつつも内面では焦りまくりだったり。

くすりと笑った後、ふうと息を吐いてセレナは言う。

「でも、すみません……。私はデートといわれるものをしたことがありません。だから、こういうことが凄く楽しいのです」

「それならば地球で、あなたの様な年代の人が集まるところへ行けばよいのです。あなたが望むなら私はすぐにでも手配いたしますよ」

「いいえ、よいのです。人の未来のため、私はここで戦っているのです。そんなところへ行けば必ず、心は緩みます。お父さんも、お兄ちゃんも、火星で戦ってると思うから……、私も頑張る……です」

なぜ、こんなまだ年端も行かぬ少女がここまでせねばならないのか、フィエンはつくづく思っていた。そもそも火星の連中は本当に地球に残された人々を救う気はあるのか。新しい衛星に心を奪われて、

そつちに集中するのではないか。

「フィエン。私は十分に休みました。研究所へ戻りましょう。あなたも所長さんに怒られますよ」

「っとと、そうですね。わかりました、戻りましょう」

「でも、研究所にあなたがいてくれてよかった。お兄ちゃんがいたら、こんな感じなのでしょうが」

そう言つてセレナは楽しそうに笑つた。

（セレナ……。すいません。私はひとつだけ嘘を吐いています。しかし……。必ず守つてみせます。）

「そつれにしても、あいつも大変だなー！、地球でガキのお守りつていうのもさ。なんで断らなかつたんだろうな！」

「口を慎め。俺以外に聞かれて、あの方の耳に入つたらただではすまんぞ。それに彼女の守護も任務の一つだが、メインはそつちでなくむしろ火星政府の所有する研究所に対するスパイだ。あの方は火星政府の医療部の情報が欲しいのだ。もちろん、彼女のことも心配だろうが」

「ふーん。それはいいけどさ。あいつは進んでスパイをやりたいがつたのか？」

「いや……」

「ん？」

「くじ引きだ」

「……………」

月面都市でのある2人の会話

「久しぶりの里帰りねー。お母さんにも久しく顔見せてないし、リ

クにしてはいい提案じゃない？」

「俺の提案じゃねーよ。シンランせんせ、いやシンラン部長がな。クー一人じゃ寂しいだろうからって、急に言い出してさ」

「ふーん、シンランさんがねー。あんたにしては素直に従うのね」

「そうか。まだユーリには言ってなかったな！俺もついに現場に立てるんだぜ！」

「ああ、それ知ってるわよ」

あれ…、これはまだ誰にも言ってないはず。しかも、表情で読み取れるレベルの話じゃない。まさか、本当に心を…読み…

「情報部なめないでよね。あんたがこれから外で働く以上申請やらなんやら必要でしょ。私の耳にはもう入ってるわよ」

「そういうことかよ。ところで、なんでレオは来なかったんだろうなー。おかげで俺がお前と二人きりで帰る羽目に」

「なーにより、嬉しそうにするんじゃないわよーといいながらユーリは俺の頭をビシビシと叩いた。

「まあ、レオにも思うことがあるのよ。あんたみたいに単純じゃないしね」

「なっ、誰が単純ってんだ！」

「クー君のことをシンランさんに言われて、私誘って帰ってるってのに」

「こ、これは違う。ただ、少し素直になってみようかなって思っただけだ」

そうだ。普段の俺だったら、先生に何か言われても大抵は気にはかけなかった。今回は…なんとなくだ。なんとなく。うん。

きつと少しづつだけど、俺は変わってきてるんだ。もちろんシンラン先生だけの影響じゃないし、ユーリやレオ、きつと色々な人に影響を受けて俺は変わっていった。もちろん、それは俺だけじゃなく。

「？なによ？私の顔になんか付いてる？」

「お前も変わっていったのかねー」

「はあ？今日のあんた変ね。いや、いつも変か」
そう言っつてユーリは笑う。俺も笑う。
きつと、こんな生活がいつまでも続いてく。そう信じている。

地球と火星

分かたれた人々

どうして、一緒に生きられないのだろう

同じ場所で生まれたのに

どうして、違う場所へ向かうのだろう

第五話：雛鳥は空を目指して

ガチャ！！

「ただいまー、クーいるかー？」

「おじやましますー」

俺は火星の実家への帰省した。家には多分、弟のクーがいるだけだ。親はどうせ仕事かなんかでいない。別に構わないだけどさ。

「で、なんでお前もちゃっかり家に着いて来てるの？」

「えへへー、いいじゃない。可愛いクー君に会いたいんだもん。つてこら、明らさまに引くな！冗談よ、冗談」

「お前の冗談は、時々本気だから困る」

「なにか言った？」

いいえー、と心の中で独りごちた。これ以上、こいつと玄関で漫才やってる場合でもないなと俺が思っていた矢先であった。

「兄ちゃん！？兄ちゃんなの？」

ひよこつと入口からクーが、顔を出した。

「おう、俺だ！」

「私もいるわよー」

「わあ、ユーリさんもいらっしやい！兄ちゃん、どうしたのさ、急に！連絡もしないで！」

「なんだ、迷惑だったか。ユーリ、帰るぞ」

と、俺が踵を返した直後、クーがあたふたしだしたので、ユーリが俺に拳を見舞う。

「純粋な弟をからかうなんて、ひどいお兄さんですねー。さあ、クー君いつまでも玄関いないであがりましょ」

ツッコミなら口でいいじゃねえかと思いつつ、俺もいそいそと靴を脱ぎ家上がる。

相変わらず、静かな家だなと思う。クーぐらいの年齢で一人で暮らしているのは、別に不思議でもないと思ったが、地球ではそんなこ

とはないのだとシンラン先生は言っていたように思う。

「普通は、親と子、可能なら祖父母交えて家に住むものだ。今の火星での生活にはそういったものがない。そんな暮らしを取り戻すのも我々の仕事であるな」

こんな風に言っていた。

俺にはよくわからない。小さい頃は父さんも母さんもいてくれたけど、それが嬉しかったのだろうか。物心ついたころにはもう、開発部に入って活躍してやる！とか思ってた気がするし、ああでもこれも親の影響なんだろうか……。

「兄ちゃん、今日は泊ってくんだよね？」

考え事をしながら二人のいる部屋に入ると、クーから声をかけられてはっとした。

「ああ、そうだな。今日泊って、明日の夜には帰るよ。いいよな、クーリ？」

「そうね。私もそれで大丈夫よ」

やったー！とクーは手を上げて喜ぶ。俺が帰るだけでこんなに喜んでくれるなら、まあたまには帰ってこようかなとちよっぴり思う。

「ん？レオか？なんだお前は家に帰らなかったのか」

「シンラン部長、こんにちは。ええ、リクやクーリと違って僕には待っていてくれる人もいませんしね」

と、レオは頬をかいて苦笑する。

この二人、今まで関わりはなかったが同じ開府部の先輩後輩である。親父さんは？」

「父は仕事で忙しいので、恐らく今は家にいないでしょう。何をやっているか、わかったもんじゃありませんがね」

「ふっ、お前の親父さんも、クーリのお袋さんも、リクの親もみんな必要だから、火星にいるのだ。そうでなければ今頃地球に取り残

されていたらう」

と、シンランは遠い地球を見て親指で指し、それからレオと同じように苦笑する。そして、だから感謝するんだなと付け加えた。

「そうですね……。でも、僕たちは違います。僕たちは必要とされてここにいる訳ではない。父さんの子供だからです。そして、地球にはまだまだたくさん人間がいます。僕らと何ら変わりのない人間がです。だから……」

そう言つて、レオは俯いた。その頭をシンランが無造作に動かす。

「ちよつと！」

「リク程前向きなもの困りものだが、お前は神経質になりすぎなんだよ。妹さんが地球にいることも知ってるし、なんも罪のない人々が地球に残されていることも事実だ。だが、お前にも同様に罪はない、だから出来ることをやればいいんだよ、……焦らずにな」

「先生……」

「心配しなくても、お前は同年代の中では抜きんでているんだから、すぐに私に追いつくさ。だから、……共に頑張ろう！」

「……はい」

シンランは、自分がこんな説教めいたことをいう資格はあるんだらうか、などとも思っていたが、今はどうでもよかった。ただ、子供たちが、私たちより後の世代が、同じ轍を踏まないように見守り、導いていく。親友であり、未来を誓ったレータとの約束だった。

レオも、まだ迷いを振り切ったわけではなかった。変わつてゆく世界で、自分の存在意義や、自分たちの未来について、妹の安否など悩みは絶えないけれど、とりあえずは足元を見て、そして笑つてみようと思つた。

「で、2年後だっけ？クー君が各部に配属されるのって」

「俺の3つ下だからまあ、大雑把に計算するとそうなるな。勉強し

てるか？」

「してるよ。僕は情報部に配属されたいからね！」

「おいおい、そこはお兄ちゃんと同じ開発部がいいです！だろ……」

「クー君はあんたと違って頭がいいからね。複雑な処理のいる情報部はピッタリだと思うけどね」

むー…、開発部だつて馬鹿じゃできないんだぞ。レオを引き合いにだしてもいいが、そこまで反論する必要はないかと思ったので、あえて引いておく。

「最初は医療部がいいかなあと思ってたんですけど、僕にそこまでの度胸ないかなつて…、思つて」

「そんなことないよー、やりたいことあるんならやってみればいいのよ。情報部に来るなら歓迎するけどね！」

「あ、ありがとうございます！」

「仲良く話してるところ、割り込むが…、ユーリは今日どうするんだ？家に帰るんだろ？」

別に二人に嫉妬するわけではないが、時間もずいぶん遅くなってきたので一応の確認を取っておく。

「そうね。お母さんも待つてると思つし、そろそろお暇させてもらうかしら」

「そうか。じゃあ明日の夜前にはうちに来てくれ。昼間は出かけているかもしれねーから」

「了解つ。じゃあね、クー君。学校や勉強頑張つて」

「はいっ」

ユーリが席を立ち部屋を出ていく。あいつの家には母親いたからな。仕事はもちろんやってるだろうけど、家でもできる仕事だったかな。ユーリの家にクーを預けることも考えたが、クーがそれを拒否した。お母さんやお父さんが帰ってきたとき、誰もいないのは寂しいですよ！だとか言つてたっけ。でも、本当に寂しいのはお前じゃないのか。

「なあ、クー？お前、一人で寂しくないのか？」

「え？兄ちゃんがそんなこと気にしたの初めてだね。あ、怒らないでよ。悪気はないし事実なんだから。…そう思うならこれからも時々は帰って来てくれるとうれしいかなーなんて」

「それで寂しくなくなるのかよ」

「え？う、うん」

そう言ったあと、クーは俺をじーっと見つめた。

「なんだよ？」

「なんか変わったね。優しくなった」

ぶつきらぼうに言い返した俺に対して、そう言って顔全体で笑った。

「ふん、しょーがねーな。今日の飯はお前が作ってくれるんだろ？」

「勿論！折角だから腕によりをかけるよ」

俺は全然優しくなんかなってないと、自分では思うし、特に変わってないとも思う。

それでも、クーが少しでも笑ってくれるなら、こんなのもいいかなと思った。今までほったらかしにした償いとは言わないけれど。

「速報です。先日、新衛星が発見されたことは周知の事実であろうと思いますが、それにより火星保護団体が活発な行動を始めました。団体名を「マーゼ・アレイン（唯一の火星）」と変更した声明出し、各地でデモなどを行っている模様です……」

クーの手料理に舌鼓をうっている最中だった。そんな映像がモニタに映る。

「ちっ、これがユーリが言ってたやつか…、なんでこんなことするんだらうなー」

「この人たちは、きっと心配なんだよ。火星政府が新衛星につきっきりになって地球に残された人々が放っておかれちゃうのが。僕だって心配になる時はあるから。でも、兄ちゃんやレオ兄ちゃん、ユーリ姉ちゃんたちがそんなことするはずないよね！」

「ああ…まあーな……」

この発見に大喜びして、早速行ってみたいと思っていたなんて言えなかった。別に罪悪感はないけれど、変に不安にさせる必要もない。実際、開発部は新衛星につきっきりなのだ。シンラン先生が、上に反論を試みたりしているが、政府は開発部に早く新衛星を拓かせたいのだ。

「地球かー、どんなところなんだろうなー」

地球の映像が映し出され、クーは興味津々といった様子で、モニターにくぎ付けとなった。

「なあ、クー。明日は夜までは俺も大丈夫だから、地球を見に行こうか？もちろん、望遠鏡でだが。市街地に行けば、巨大望遠鏡がある」

「えっ、ホントに？」

「ああ、俺も一回行ってみたいからな」

わーいやったーとクーは子供のように喜ぶ。まあ、俺からしたら子供みたいなものだが。

「だから、今日はもう休もう。俺も疲れてるしな」

「うん。分かった」

「ねえねえ、レータ君？」

「ええと、なんでしょうか？リン」

地球のある施設内の一角で若い男女が声をひそめて会話している。後ろでは子供の騒ぐ声も聞こえる。

「明日、フィエン君に会いに行く予定忘れてないよね？」

女性のほうが、ポニーテールを揺らして甘えた声で尋ねた。

「ああ、そうでしたね。アレを見せる予定ですからね」

男性は、思い出したように答えた。

「うんうん。レータ君は出来る子。フィエン君、セレナちゃんにつきっきりだからなあ。たまには私とも遊んでほしいのにー。ねえ、レータ君？」

「別に僕はどちらでも構わないんですけれどね。僕らは協定を結んでいるだけで、マーゼ・アレインとかに入ってる訳でもありません」

そう言うと、レータは子供たちの声のする方向を見やった。落ち着いた声とは裏腹に瞳は慈愛の色が浮かぶ。

「嫌だー。レータ君、冷たいよおー。でもまあ、明日はちよい本気出す必要があるみたいだけどね。私たちの努力をフイにされたらたまらないもん」

「それが分かっているならいいんですよ。明日はしっかり頼みますね」

「了解ー！」

そう言っつてリンは手を突き上げた。

「うわあ、あれが地球かー。きれいなんだね！本当に壊れていつているの？」

「うん。実際に俺たちが火星に移住してきているんだから、そんなだろうさ。昔は緑溢れる美しい惑星ほしだったみたいだけど。当たり前だよな。俺たちは地球で生まれたんだから。生きるのにこれ以上ないっつていう惑星ほしなんだろうぜ」

「でも、今は壊れていつてるんだよね。僕たちのせいだ……」

「そうかもしれない。でも、お前のだけせいでないことは確かだ。もう間違いは犯したらいけないんだな」

「なに言ってるの、兄ちゃん？そんな他人事じゃないでしょ？僕たちがこの火星を守るのは当然でしょ！」

俺はクーにそう言われて少し驚いた。クーがそんなことを言うようになったのかの意味もあるが、俺が他人事のようにそんなことを言っていたことだ。俺は、この火星を見捨てるつもりはない。そんなこと言葉にするまでもないと思っていた。でも、俺は新衛星が見つかったことで、少しでもこの火星を粗末にする気持ちを持つてる…？

「あー、クー。ちょっとトイレ行ってくる」
「うん」

そう言つて、リクはクーのそばを離れた。そこへ長い銀の髪を後ろで縛つた背の高い中年男性がやってきた。

「君、名は……？」

いきなり現れた男性に、クーは少し怪訝そうな顔になったが、人に話しかけられることも珍しかったので、つい嬉しくて話しだしてしまつた。

「クー！クー！！セブンス」

「そうか。私の名はオーベルト」アケルト。君は火星が好きかね？」

「うん。僕が育つた星だから。地球のことも気になるけどね」

そう言つと男性は、ひそめていた眉を緩めて優しい顔で笑う。つられてクーも笑顔になる。

「私も、地球もそして火星も好きだ。どちらも守らなくてはいけない。もちろん、人の命も尊いものだ。常に正しい答えなんてないかもしれない……」

「おじさんは何か後悔していることでもあるの？」

「ははは。私たち大人など常に後悔してなかなか前へとは進めないもんだ。今もまた、迷っているのだ。君たちはまだ無限の可能性と未来がある。それを守るのも私たちの使命だ」

オーベルトと名乗つた男は遠い目を、しかし意志の強さを込めた目で前を見据えた。

この時、クーはふとアケルトという名前とこの容貌を誰かと重ねた。しかし、はっきりと誰かは思い出せない。

「おじさんたち、それは大変すぎるよ。やるが多すぎるから。だから僕たちは自分で自分の未来を造っていくよ。きっと兄ちゃんもそう思つてる」

「そうかね、頼もしいな」

「へへへ……」

男に褒められ、クーは照れた笑いをした。この出会いがのちに二人の、いや火星を大きく揺るがすことになるとはだれも思っていない。

雛鳥は空を見上げる

いつか、自分で羽ばたけることを信じて

僕はもう雛ではないけれど

本当に空を翔べているのだろうか

第五話・雛鳥は空を目指して（後書き）

少し詰めすぎた感がありますね^^；
次回は全部地球サイドです。

第六話：Messiah - メシア -

「さて、セレナ。今日は少し出掛けてきますね」

「あ、はい。フィエンもお仕事大変ですね。頑張ってきてください」「セレナも無理はしないでくださいね…?」

「……はい」

「今の間は?」

「なっ、なんでもありませんっ。急いでいるのでしよう?さあ、早く!」

「はあ」

どうせ、無理するんだろうなあとか思いながら、私はセレナのいる部屋を出た。あの子は優しい子だ。優しすぎて自分を気遣う余裕がないほど。だから、私が少しでも負担を少なくしてはいけない。これは仕事だから?あの人の勅命だから?そんなことはどうでもいい。セレナが笑ってくれるなら、それで。

「待っててくださいね、お嬢様」

私は目的地へ向け、車を出した。

「レータ君。フィエン君もうすぐ来るよ!準備できてる?」

そう言っつてリンは、赤いポニーテールを揺らして、レータを呼ぶ。年はまだ若く、20かそこらといったところか。普通の同じ年位の女性だったらずまず着ないであろう黒の軍服を身に纏っている。しかし、その幼い言動や表情とは違う確かに鍛えられた体が軍服に映える。

「いつでも、大丈夫ですよ。子供たち含め、私たち以外の人たちは念の為、奥にいてもらいましょう。彼に限って力ずくなどということはないでしょうが……」

レータは少し憂慮した表情をしながら短い黒い髪を手でいじる。彼もまた鍛えられた体の上に黒い軍服を着ている。ただ、彼らにとつてはそれは生きるため当たり前のことだ。この荒廃していく地球では頼りになるのは自分の体のみなのだから。

「フィエン君も大変だよー。マーゼ・アレインから火星政府へのスパイとしての活動に加え、私達との仲介役、セレナちゃんの子守もさせられてるなんてー」

「ははっ、割と最後のは楽しそうにやってますよ。唯一の息抜きなんじゃないですか？」

「もー、フィエン君ったらロリコンなんだから」

そう言うと、二人は声に出して笑った。その二人の背後には、人型をした大きな鋼の塊が異様な存在感を放っていた。

目的地に着いたフィエンは車から降り、気を引き締めた。今日会う二人は地球から火星への移住の際に取り残された人々の一部ではあるが、その能力は群をぬいている。戦いに行くわけでもないというのに緊張を覚える。

「私に地球の人々や火星の運命がかかっているかもしれないのか」と少し大げさかもしれないが、妙な責任感を負っていた。しかし、レータもリンも同様に地球の人々を守りたいという気持ちなのだ。強すぎる責任感が変な矛盾が生んでいた。

「あ、きたきたー」

リンがフィエンの姿を見つけ声を上げた。

「お久しぶりです、レータさん、リンさん」

フィエンは頭を下げて二人に挨拶する。

「もう、フィエン君ったら、もつとこっちに遊びに来てよー。寂しいんだから！」

「リン」

レータの低い声にリンは押し黙る。もう、冗談なんだからとぶつぶつ呟く声がリンから聞こえた。

「リンさん、すみません。私も何分忙しい身なので。今日もなるべく手短にお願いします」

フィエンが眼鏡を上げてそう言っていると、レータはくすりと笑って言った。

「まあ、そう固くならないでください。まずはお茶でもどうです？」

「そうよー、そんなに焦らなくてもちゃんと用意してあるから」

「ありがとうございます。しかし、お気持ちだけで十分です」

リンがそれに同調したが、フィエンはそれを拒んだ。

（ここは私がしっかりしなくてはいけない。ここでしくじったら、色々なところで影響が出る。穏便に、かつ迅速に……！）

フィエンは仕事に熱心な男である。「火星保護団体」マーゼン・アレイン幹部として色々な物を押し付けられていたが、そのどれもを丁寧に対処している。だから上層部もそれを買っているのだが。

そんなフィエンの手をリンが握った。

「まあまあ、いいからいいから。レータ君のいれるお茶すごくおいしいんだよ？」

そう言つて、リンは微笑み、フィエンは青くなる。女の子が苦手な所は直らず、結局押されるがままになってしまつのである。

その様子を見ていたレータは、ふうと溜息を吐いて苦笑いを浮かべた。

「フィエンさん。ところで……、火星は今どんな状況なんだい？」

「……む、火星ですか」

なんだかんだ言つて、お茶を飲んで一息ついていたフィエンはレータから声をかけられはつとした。

そついや、最近帰ってないなあ。ずっと地球で過ごしてるし。でも

私が帰ると、セレナー一人になっちゃうしなあ。でも、どつちにしろもうすぐ報告しに飛ばないといけないしと、結局彼はまた延々と考え事に入ってしまうのである。

「そうですねえ……、実は私も最近あまり帰ってないので分からないのですが、まだ過激な状況ではないと断言しましょう。私はもちろん、あの方だって戦争したいはずありませんしね」

「どうかな……、僕はいまいち君たちのボスを信じていないのだけれどね」

と、疑り深そうに言いつつ、レータは懐疑的な顔になる。

「私たちは火星政府だろうと、火星保護団体だろうとなんでもいいのよ。地球のみんなも火星のみんなも含めて平和に無事に暮らしたいだけだから。だから……、信じてるよ？ファイエン君？」

と、リンは年相応の魅力的な笑顔を見せたのだが、

「あの……目が笑ってないです。リンさん」

「えへへ……し・ん・じ・て・る・か・ら」

「……はい」

ファイエンの気苦労は絶えそうもなかった。

「さて、ファイエンさんも落ち着いたところで本題に入るうか。リン、ファイエンさん連れて来て」

「オツケー！いくよ、ファイエン君ほらしっかり立って」

つとと、向こうに乗せられてる、しっかりしなければいけないかと再びファイエンは気合を入れ直す。

そして、二人に追いついて歩き始めると、レータがゆっくりと語り出した。

「これから見せる物について、頭に入れておいていただきたいことがあります。まず、これはあくまで火星政府とできるだけ対等な立場に立つために造ったもので、戦いには決して使わないでください、本末転倒です。そして、地球の状態を考えても大量の生産は不可能です。最後に……性能だけならば、ファイエンさんに頂いた火星のメギドのデータに、ほとんど劣りません」

「私たち頑張ったからねー！」

「なっ……！」

その言葉を聞いて、フィエンは言葉を失くす。火星のメギドより同性能なものがこの地球で作れるというのか……。しかし、この期に及んでこの二人が嘘を吐くわけがない。改めて未恐ろしい人たちだと思っただ。

「まあ、実際に見てもらいましょう」

そう言ってレータはある場所に入り、なにか機械をいじっている。すると、厳めし気な大きな扉が低いうなりを上げて開いた。

再び、フィエンは言葉を失う。その部屋には、全長5m程はあるだろう、乗り込み式の鋼の人型ロボットが立っていた。

「メシア。地球の救世主という意味です。性能は僕とリンが保証します。地球の技術、材料の集大成です。火星のメギドのデータをあなたから頂いた時は驚きましたよ。しかし、それをベースにこちらの技術を組み込みました。基本性能だけなら、同等かこちらの方が上でしょう。ただし、現時点では……ですが」

火星政府はこんな逸材を見逃していたのかと、フィエンは思った。火星に移住するときに、政府は優秀な人材全てを火星に連れて行っただけだった。しかし、地球に二人残っていたのだ、天才が。

火星のメギドというのも火星政府の天才科学者たちが最新の技術を用いて作った、乗り込み型巨大ロボットである。そのデータを「火星保護団体」が裏から手に入れたので、地球のやつらに出来るだけ近く模造させる、それが私が受けた一つの任務だった。上手くいくわけないと最初は思った。壊れていく地球に残された難民に何が出来るというのか、そう思っていたのに。彼らはやってのけた。このことまで、あの方は予想していらっしやっただのか。

「ちなみにまだ2機しか出来ておらず、材料も足りないのでこの先量産することは恐らく不可能でしょう」

「そういうことー。ただー？もしー？あなたたちが協力してくれるならば、造れないこともないかなあ」

「取引……というわけですか。あなたたちの実力ならば火星保護団体^{イン}でも幹部になれるというのに。おっと、この話はしない約束です。詳しい条件をお聞きしましょうか」

フィエンは呑まれないように落ち着いて言った。ここが正念場であると感じていた。

「話が早いですね。あなたたちは火星政府に交渉を持ちかけた、その為には対等に立ちたい。だからメシアが出来るだけ多く欲しい。そういうことですね」

「ああ、そうなりますね」

「くすつ、だから私たちがあなたたちから材料や少しの人員をもらってメシアを出来るだけ多く造るわ。その代わり、私たち含め残りの人たちも地球から火星へ移住できるよう交渉してくれればいいのよ、簡単でしょ？」

「??それだけ……ですか?そんなもの当たり前のことですが。その為に私たちは動いている訳ですし」

「もちろん、僕たちもそれを信じているよ。だから君たちにとって悪い条件じゃないと思うけど……?」

ふむ、とフィエンは考え込んだ。

少し意外な条件であると思う、地球の人々の火星への移住など、それ自体が我々の存在目的であるし、そのことを彼ら二人が知らないはずがないからだ。本当に、これだけなのか?とフィエンは少し考え込んでいた。……とその時だった。

「わー、めしあの部屋が空いてるー」

「相変わらずかつけー!」

「あれ、知らないお兄ちゃんがいるよ」

数人の子供たちがこの部屋に入ってきた。みな年はセレナよりも若く10もいくかいかないかといったところである。

「この子たちは……?」

と、フィエンは当惑していた。

「こらー!奥の部屋に入ってなさいって言ったでしょ!なんでお姉

ちゃんの言うことが聞けないの?!」

「ははっ、リン、子供たちを奥へ。」

レータはリンにそう言い、リンが子供たちを奥へと引っ張って行った。

「ごめんね、フィエンさん。地球の孤児たちでね、うちで預かってるんですよ」

「地球の孤児？」

「ああ、地球はもう満足に生活できる場所ではないですからね。彼らのように身寄りのない子たちも出てくるんです。だから、僕やリン、他の大人たちでここで世話を一緒に暮らしているんです」
「ああそうか。そうなんだ。レータさんもリンさんも、私と同じ気持ちなんだ。みんなが平和で、仲良く暮らすこと。そのことしか考えてないんだ。変に邪推した自分が恥ずかしい。地球や子供たちの未来を憂いて実際に行動に移しているこの人たちのほうが何倍も立派だ。」

「レータさん」

「ん？決まりました？」

「はい。この話受けます。形式上、本部に報告することになります。が、この件は私に一任されているのでまず承諾できるでしょう。詳しいことはまた追って連絡します」
そう言ってフィエンは踵を返した。

「あれ？もう帰るんですか？リンが寂しがりますね」

「ええ、私も人を待たしてますし……ね」

「ロリコンはだめですよ？」

フィエンは盛大にずっこけた。

「おかえりなさい、フィエン。お疲れ様です」

「ただいま……っとセレナ?!」

フィエンの帰宅を迎えに出たセレナはとっと走り出したのだが、ふらふらつと前へ倒れそうになってしまった。そこをフィエンがぎりぎりのところで受け止めた。

「大丈夫ですか?! また無理をしたんですね? ドクターめ……、好き勝手を……!」

「やめてください。これは私の意志です。それに今はつまづいただけですから」

そう言つてセレナは平常を装つたが、顔色は良くない。

「何もありませんが、何につまづいたんです?」

「え……? ああ、愛ですかね……」
ぺちっ。

「痛い」

「ええ? 力いれてませんよ?」

「くすつ、冗談です」

そう言つて無邪気に笑つてセレナの顔を見てフィエンは苦笑する。この子は何を言つても結局無理をする。そしてそれはこの子なりの戦いなんだ。だから、私は見守っていよう。いや、そんなのは綺麗事で、本当はただ逃げてるだけなのかもしれない。それでも、絶対にこの笑顔だけは守る。これはあの方からの命令だからではなく、真正銘私の意志だから。

僕たちは、恐れている

知ることを、出会うことを、触れ合うことを

それでもこの胸に掲げた一つの剣

これだけは絶対に折らせない

第七話：Megid - メギド -

クーと地球を見に行つてからしばらくが過ぎた。あの日のクーの言葉が今も俺の胸に残っている。

俺は、地球を大切だと思えていないのだろうか。それでも、日々は悪戯に過ぎていく。

新衛星に関する事も少しずつ分かつてきた。そして、ついた名称は「NOAH」。人類の乗せる箱舟の意味からとつたらしい。もつとも地球の神話の話ではあるが。

俺たち開発部も活動が活発になってきた。シンラン先生は、授業を休んで他の人に任せることが多くなつたし、レオと会う日も少なくなつてきた。

みんなが、なにを考えて動いてるのは俺には分からないし、俺が何を考えて動いているのかももちろん誰にも分からない。それでもみんな生きている。

「おはよう、リク！」

「ああ、おはようレオ」

俺は開発部の研修室へ向かう途中でレオに会つた。もつとも、この間までの研修とは違って現場で働くための実践的な研修だ。しかし、なんだかんだ言つて、こいつに会うのも久しぶりだ。この前の帰省の時はユーリと二人だけだったし。

「レオ、この間なんで一緒に帰らなかつたんだよ？おかげでユーリとふたりきりで帰つたんだぞ！」

「ああ、ごめん。僕にも色々あつてね。まあ、二人きりっていうのも悪くないでしょ？」

「む。どういう意味だよ？俺はあいつのことなんとも思つちやいな

「ぞ」

「どうかな？案外、気づいたら……ってのもアリだと思うけど」

「なんだよ。朝から茶化しに来たのかよ」

「冗談冗談。実は今日君に紹介したいものがあってね」

俺がムツとして言うと、レオは笑って俺をなだめるように言った。

「紹介したいもの？人じゃなくて？」

「まあ、どっちもかな。僕たちが今お世話になっていて、これから君も外で働く上でお世話になるものだよ」

「ふーん……」

レオ達、開発部の現場組がお世話になっていて、俺がこれからお世話になるもの……。何も検討はつかなかったが、興味は少しあった。今までの俺にない刺激がありそうだったから。

「ま、いいからついてきてよ。君も驚くと思うから」

「分かったよ。ただ、研修室には言いに行かないと」

「ああ、その件は大丈夫。今日行くところが研修場所になるし、なにより部長からの命令だから」

「シンラン先生？」

「そうだよ。ていうか、そろそろ先生って呼ぶの辞めたら？もう生徒じゃなくなるし、いつまでも学生気分は駄目だよ」

「うっ、うるせーよ。そろそろ辞めようと思ってたんだよ」

レオが俺を馬鹿にしたように言ったので、つい適当なことを言ってしまったが、実は全然意識していなかった。先生はいつまでも先生だし、いきなり部長ってのもなんかしっくりこないと思ったからだ。レオが部長って呼ぶのはなんかしっくりくるから余計に悔しい。

「ところで、レオ」

「なに？」

「さっき、ユーリの話してたけど、お前はどうなんだよ？」

「僕？ユーリは幼馴染の大切な友達だけど？」

「はぐらかすなよ！女として見てるかかって聞いているんだ」

「僕は考えたことないよ？さっきの気にしてるんだ？冗談なのに」

「お前の冗談は時々冗談に聞こえない……」

「火星が爆発する」

「それは冗談だろ」

俺が突っ込むと、おかしいねと言ってレオは笑った。親友ながら、相変わらず何考えているかよく分からん。時々、こいつにはもう一人のレオがいるんじゃないかって思う。もちろんそのままの意味じゃなくて俺やユーリの知らないレオがいる。火星政府開発部のレオじゃないレオがいるかもしれないって思うんだ。明確な根拠は何もないし、言ったらまた馬鹿にされるだけだから言わないけどさ。

「さあ、ここだよ。部長も待つてるはずさ」

そう言っただけでレオは部屋に入ってしまった。俺もそれに続いて部屋に入っていく。

暗く狭い部屋に小さな明かりが灯っていた。そこに二人の男がいた。

「どうしたんですか、隊長？ 嬉しそうな顔しちゃって」

「隊長は辞めるといつも言っているだろう。いや、まだ私たちの希望は途絶えていない」

「と、いうと？」

「まだ、地球も火星も人類も未来があるということだ」

「ふーん、だから？ 活動を辞めて解散なさるおつもりですか？」

「そうは言わん。その未来の為に私たちは動いておるのだ。出来ることは全てやっておきたい」

「ああ、そうそう。フィエンがもうすぐこちらにやってくるそうです。地球難民、すごい造り上げたそう。いい交渉ができたといエンも言っていたので期待していいんじゃないですか？」

その問いに男はすぐに答えない。

「隊長……？」

もう一人の男が問いかけてもしばらく反応はなかったが、やがてこ

う答えた。

「セレナは？元気であると言っていたか？」

「ああ、はい。少し無茶もしますが元気だそうですよ」

「そうか」

そう呟くと男はまた黙りこんだ。その様子を見たもう一人の男はやれやれといった仕草を見せてから部屋を後にした。部屋には、黙りこみ何かを思案する風な男、一人だけが残った。

「お、あんたがリクいうんか？レオの親友やいうてる」

「ああそうだ。もつともレオの方が何倍も優秀だがな。くくく」

部屋には、見知らぬ少女とシンラン先生がいた。そしていきなり二人して笑い合っている。俺は訳が分からず戸惑っていたので、レオが二人に挨拶をしてから俺に向き直り言った。

「紹介するよ、リク。彼女はハルカ・コウザキ。防衛部の若手エースだ。歳は僕やリク、それにユーリとも一緒だね。話し方に特徴はあるけど……」

「ああええ、レオ！あとはうちが自分で言うさかい。はじめましてーやな。リク。おない歳みたいやし、敬語は言わんで？」

「いや、お前私にすらほとんど敬語使ってないだろう」

と、シンラン先生が途中で突っ込んだ。が、あまり気にも留めずハルカという少女は話し続ける。

「まあまあ、気にしなさんなや、シンラン部長。レオもさっき言うてたけど、これ地球のある国の古語やねん。なんかうちの母さんがこんな話し方やったらしく、うちにも移ってるんや。ああ、らしいっていうのはうちの母さん地球に残された人やから、あんまり記憶に残ってへんねん。父さんは普通の話し方や。もうすぐ会える思うけどな」

と、息つく暇のないくらいの勢いで言い切った。

見た目は、栗色の短い髪に茶色の瞳、体格はユーリと同じくらいでパイロットスーツを着ている。俺はそのままあまりの勢いに圧倒されていると、レオが俺を小突いて耳打ちした。

（初めてのタイプでしょ？ユーリとも違うし。ひとまず自己紹介して）

こういうことなら初めからちゃんと言っとけと俺はレオを恨んだが、どうせわざとだろうから俺は諦めひとまず自己紹介を行った。

「名前知ってるみたいだが、一応言っとくぞ？俺はリク＝セブンス。歳はあんたと同じだが、まだ現場に立って仕事したことはない。あんたはエースみたいだな」

「ああ、エースいうても防衛部自体、きちんと成立したんは最近やからな。まだそんな主だった活動はしてへんねんけど」

なんだ、そうなのか。そういえば、防衛部っていう言葉自体聞いたことなかったな。つまり、経験は俺とそんなに変わらないということか。と、強気になる。

そこにシンラン先生が釘を刺しに来る。

「ふふ、リク。俺とそんなに経験は変わらないと思ってないか？防衛部という名前自体は最近出来たものだが、彼女はそれ以前は開発部で活動していたんだよ。もちろん現場でな。だから、自分と一緒とは思わないことだな」

「……？どういうことだよ」

「うちらは今まで開発部の中であるものに乗って開発部の危険を守る仕事をしてたんや。それが最近、きな臭いやろ？それで正式に防衛部っちゅうんが設立されたんや」

「ある物ってなんだよ」

「おっと、リク。それは見てのお楽しみだよ。後々、君にも動かしてもらおうからね。あ、シンラン部長。リクへのメギド指導、ハルカにお願ひしたらどうです？歳も同じですし。」

「そうだな。ハルカなら技術は問題ないし……、コウザキ部長にも

そう報告しておこう」

コウザキ部長？こいつの同じ名字だが……と考えていると、

「うちの父さん、防衛部の部長やねん」とハルカが教えてくれた。

「じゃあ、レオ、ハルカ。お前なら大丈夫と思うから格納庫へのパスワードカードは渡しておくよ。コウザキ部長の所へは私が行っておくから、あとは任せる」

「分かりました」

シンラン先生の言葉に二人は揃って返事をした。何気ないやり取りだけど、今までの緩い空気が一瞬で締まる。この瞬間だけは上司と部下の関係を感じさせた。

「じゃあ、リク、ハルカ行こうか」

「せやな」

「おし」

そうして俺だけまだよく分かっていない状況の中、格納庫なるものの所へ歩き出した。

この辺りを歩くの初めてなので、周りのものに興味津々である。道中は、俺が今まで研修を続けていたような所より、より機械的で冷たい空間だった。人間の生活感というようなものから乖離していて、普段もあまり使われないような空気がする。

「リク、この辺は初めてだよな」

「ああ、そうだな。こんなところまでは来たことねえ」

「あら、そうなん？まあ、別に快適な所でもないし、うちかて、好きできーひんわ」

「ハルカと言ったよな？なんであなたは防衛部なんかに？親父さんの影響か？」

俺は少し、疑問だったことをハルカに問う。今の自分にも問うているのかもしれない。なんで俺はここにいるのだろうって。

「ん。それもあるし、みんなを守りたいっていうんもあるけど、やっぱりうちが思うんは生きることば戦うことやから」

「戦うこと？」

「せや。人間はご飯も食べず、なんもせえへんかったら死んでくやる？だから生きていくことってだけで何かに抗ってるんやと思う。それが、楽な訳がないやん。うちも父さんに人間が地球から火星に来た過程は聞いている。それ聞いて更に思ったんや。生きていくのは綺麗事でもなんでもない、戦いやつて。だからって弱者が駆逐されていい訳やない。地球に残された人たちだって絶対に助ける。それがうちの決めた生き方やねん」

生きていくことは戦うこと。

それは俺が今まで当たり前のように考えてきた。いや、考えていたと、そう信じていた。しかし、揺らいでいた。

何か信じられず揺らいでいた。だから、このハルカの言葉を聞いてハッとする。

俺は、前を向いてきたわけじゃない。後ろを見なかったわけでもない。ただ、目を背けていただけだと。

「ハルカらしいね」

レオがいつもの微笑を浮かべて言う。

「何か信じ続けられるものがあるというのすごいと思うよ。僕には、まだ迷いがあるから」

「それでもええねん。別にうちの言うてることが正しいなんて思ったことはないし、押し付ける気もない。人の数だけ思いはあるんやから」

ハルカは二つと無邪気に笑って言った。

「ハルカ、レオ。俺も、今まで迷っていた。いや、迷ってないと思つてた。俺がそんな風に考える訳ないって思つてた。ずっと前だけ見据えて歩いているって思った。でも、違つたんだ。ただ、目を背けていただけなんだ。それでもレオも迷っているって言った。ハルカはそれでいいって言った。俺も、そんな考えもありなのかなあ」

「うん、もちろんや！」

「リクらしくないなあ。どんな考えにだって自信を持ってたじゃない。と、まあ僕が偉そうない。」

口は叩けないけど」

二人の言葉に俺は安堵する。こんな俺らしくないかもしれない。それでも、いいと思った。たまには、言葉を形にしてみるのも悪くない。

ここで前を歩いていて二人が立ち止った。目の前には、大きな壁と一人が入りできそうな小さな扉。

「さ、ここだよ。リクも驚くと思うな」

最初は目を疑った。漫画やアニメの世界から飛び出してきたと言っても信じるかもしれない。そこには黒く大きな人型をしたロボットがあつた。

「メギド。地球のある場所からとられたんだ。僕たち開発部の大きな手助けとなつているんだよ。もちろん、防衛部も使っているけどね。数はまだそんなにいらしいけど」

「ああ、ちなみにこれ人が乗り込んで操縦するタイプやから。リク、あなたにもはよう覚えてもらわなあかねん。開発部も忙しそうやから」

「マジかよ……。これ、10mはあるよな？こんなのを動かせるのか……」

俺は茫然としていた。開発部で現場に立つといつても宇宙服を着て外で活動が主だと思つていたのに。ハルカがパイロットスーツを着ているのもうなずける。これに乗るなんて。

「おもしろそうじゃねえか……」

俺は呟く。

「ふふ、さすがリク。そこなくっちゃ！」
「うちは物怖じする思てんねんけど、意外と見込みありそうやな！
みっちりしごくからな？」

深い。

なんて深いんだろう。

遠い。

なんて遠いんだろう。

この螺旋の先になにがあるんだろう。

第八話：Like a rose in the mars

「せや！上手いで！」

「うん、悪くないね。ここまで上達が早いとは思わなかったよ」

「へへっ！」

インカムからレオとハルカの声が聞こえ、それが賛辞を送るものであったので俺は思わず笑みを漏らす。自分より大きなものを動かす、それは初めての体験だった。俺は別に支配欲はないと思うし、暴力的でもない。それでもなんだか気持よかった。今はまだ、言われた通り手や足を動かしているだけだが、いつかこれで宇宙を駆り、開発をすることができたら。胸の高鳴りはやまない。迷いを受け入れた俺は、また一つ成長することができたのかもしれない。

「どや、レオ？これならうちの提案通りいけそうやろ？」

「うーん、そうだね。まさかここまでとは思わなかったな。早速呼びに行ってくるよ。ハルカも準備をしておいて。一応聞いておくけど……」

「なんや？」

「君は必要ないよね？」

「ぶっ、くくく、冗談きついわ、レオ！」

「はは、了解」

インカムから二人の会話内容が断片的に聞こえる。ひとまず、これで終了といったところだろうか？

折角、いいところだったのと思いつながら俺は問いかける。

「どうするんだ？今日はお終いか？」

「いやいや、これからが本番だよ。今から僕たちは準備に取り掛かるから、リク、君はそこで待っていて。通信は切っておくけど、何かあったら呼び出してくれればいいから」

「そうか、分かった」

本番？今までの練習だったっていうのはわかるけど、何をやるんだろうか？いきなり宇宙へ出ることはないだろうし、準備というほど大それたことをするのだろうか？

何にせよ、少し手持無沙汰になってしまった。俺はおもむろにポケットから端末を取り出す。これは、火星内で使える通信機器で主に仕事の通達や家族との連絡などに使われる。

「ん？クーからメッセージがあるな」
「どれどれ……」。

『兄ちゃんへ。お仕事がんばってる？お話があります。時間ができたら帰ってきてね』

お話……？この前帰ったばかりなのに、何かあったのか？あいつから端末に連絡が来ることは珍しい。普段連絡を取り合う事柄もないし、あいつはなにかあっても俺をあまり頼ろうとはしないからだ。時間ができたらと書いてあるが、気がかりだな。なるべく早く帰ろう。

「リク、出てきて下に降りてきてよ」

耳につけたインカムからレオの声が聞こえた。どうやら準備は終わったらしい。

「あれ？ユーリ？どうしたんだ？」

「リク？！レオ、一体これはどういうことなの？」

そこには俺とハルカと同じパイロットスーツを着た、ユーリの姿があった。

ユーリも事態を飲みこめならしく、レオに説明を求めた。

「まあまあ、落ち着いてよ。ハルカ、紹介も兼ねて君から説明した方がいいんじゃないかな？」

「せやな。といっても、ユーリはうちのこと知ってるで？なあ、ユーリ？」

「ハルカ」コウザキ……あなたがここにいてるってことは……なるほどね。私が呼ばれた理由も含めて分かったわ。だったら、協力はしたくないわね。リクには……メギドに乗って欲しくはないわ」

「ユーリはハルカのこと知ってたんだ。それもそうか、お互いにそれぞれの部の期待の星だもんね。ところで、ユーリはなんで協力したくないと？」

レオはユーリに問いかける。

「大方、リクとハルカ」コウザキの戦闘演習でもするつもりでしょ？それで、私がリクのメギドに乗ってサポートしろと、そういう訳でしょう？なら、お断りね。リクを戦いに巻き込みたくないわ」

「さすが、噂に聞いた通り頭の回転は速いな。まさにその通りや。

しかし、ちょっと早とちりすぎるんちゃう？まずはリクの意見を聞いてみると」

俺はいきなりのこと頭が混乱していた。ユーリはいきなりあらわれてもう状況を把握したらしいが。どうやら、俺とハルカが戦闘演習を行い、その為にユーリが俺のメギドに乗ってサポートしてくれるとか何とか言ってたな。で、それをユーリは嫌と……、つまりはそういうことらしい。

「なあ、ユーリ？俺は早くメギドを自由に動かせるようになりたいだけだ。その為の演習で、実際に俺たち開発部が戦場に出る必要はないだろ？だから、俺が戦いに赴く可能性っていうのは考えなくてもいいんじゃないか？」

俺のその言葉を聞くと、ユーリはため息をついて首を振った後、俺に向き直り言う。

「そうね、普通に考えればそうよ。でもね、今がどんな状況かはあなたも分かっているはずよ。NOAHの発見は嬉しいけど、マーズ・アレインが活動を活発化させてるって話したわよね？戦争になったら、使えるものは全て戦争に使うにきまっているでしょう？実際に戦うハルカ」コウザキの前でこんなことを言うのは酷だし最低かもしれない。でも、私はあなたに武器を持ってほしくない」

「ユーリ……」

俺はユーリの話聞いて思い留まる。俺が戦争に行く可能性が増える……。俺は、別にいつ死んでも……いやダメだっ！俺にはクーがいる。親が当てに出来ない以上、そして戦争が始まるのなら尚更、一人には出来ない……！

「なるほど……、確かに一理はあるわ。だけどな……」

ここで、ハルカが再び口を開いた。

「戦争が始まったら、逃げ場がないのは誰にだって同じや！戦いに出る者だけが死ぬとは限らへん。相手がテロリストである以上、死の危険性は誰にだってある。それなら、誰かを守るだけの力をうちはリクに持つてほしい！せやからあんたも、情報部の中のメギドパイロットメンバーに志願したんとちゃうんか？」

その言葉を聞いてユーリは一步下がった。

「そっそれは……確かにそうだけど……」

俺は一步踏み出して、自分の言いたいことを言おうと思った。

「ユーリ、俺だってクーやお前やみんなを守りたいんだよ。守られるだけでいいはずないだろ……？お前がみんなを守りたいのと同じように俺だってみんなを守りたいんだ」

「リク……」

俺だって、別に戦争がしたい訳じゃない。人を殴りたい訳じゃない。それでも、誰かを守るためならば必要な戦いだってある。そのためならば俺は剣をとることもいとわない。

「それよか水臭いぜ。お前もメギドに乗ることになってるなんてな」

「おっと、リクそれは少し語弊があるよ」

ここで先ほどまで黙っていたレオが話に入る。

「ユーリは既にメギドに乗っていて、情報部の中ではかなり優秀なおペレーターなのさ」

「さすがにレオは知っていた訳ね。まあ、そういうことなら手伝いましょう。その代わり手は抜かないわよ？」

「ふふん。ちなみにうちにはおペレーターいらんで？ハンデってこ

「とやな」

「ここで、ユーリとハル力が睨みを利かせあう。ってか、論点ずれてるんじゃない？これって俺の訓練のはずだったんじゃない……。 」

「なあ、これって俺の訓練のはずだったよな？」

「ああ、もちろんや！な？」

「ええ、もちろんね」

「いやお前ら二人完全に俺を無視して盛り上がったたる！」

「まあまあいいじゃない」

俺の突っ込み空しく、簡単にレオに場の主導権を奪われてしまう。

「じゃあ、ルールを説明するね。さすがに希少なメギドを傷つける訳にはいかないから、武器は本物は使わないよ、あくまでモデルの剣。そしてコックピット、つまりお互いの頭に設置された風船を先に割った方が勝ちということにする。もちろん割る手段は剣に問わず、パンチでもキックでもなんでもオツケーさ。これでどうかな？」

「うちはもう了承してる」

「私もそれで構わないわ」

「俺もよくわからんがそれで」

その時、ユーリから、おいおい……と言いたげな視線が送られてきたが気にしない。

「それともしもの時のお互いの通信は常に使えるようにしておくこと。僕は監視室から様子を見て、勝負が決まったら三人に連絡を入れるから。それではみんな移動しよう」

レオの一声でそれぞれが持ち場に移動する。パイロットスーツを着ているユーリは俺と同じメギドに乗り込んでオペレーターをしてくれるらしい。

「ユーリ、オペレーターって主に何をするんだ？情報部と関係あるのか？」

「ああ、そうね。その辺から説明しないと駄目ね。まず、メギドを動かすのはリク、あなたよ、もちろん。私は相手の行動、空間の乱れなどから情報を読み取り、あなたに最適のプログラムを送るわ。」

あなたがそれを認識した後どう使おうが自由だけどね」

「なるほど……、ハルカにはオペレータが乗らないが、それでも出来るのか？」

「彼女は、父親譲りの抜群の反応スピードと格闘センスがあるからね。あなたは初心者。これで丁度いいぐらいよ。もっとも私がオペレーターをする以上負けは許さないけどね！」

そう言っつて、俺に笑顔を向けたが、どう考えても目は笑ってない。

……頑張ろつと思っつ。

「さて、うちの準備は出来たで？そつちはどうや？」

「俺とユーリも大丈夫だ。レオに合図を頼んでもいいか？」

「ええで、任せるわ」

俺とユーリはそれぞれ所定の位置に着いた。二人の距離が離れては
いないが、お互いの意思疎通が完全にできるように、二人ともイン
カムをつけた。メギドに備え付けの通信装置でハルカとレオとはい
つでも連絡が取れるようにもなつてゐる。

「レオ、準備できたから合図を頼む」

「了解」

そう言っつて、一旦レオとの通信は切る。

辺りの張りつめた空気や静かな空間が心地よい。今まで、こんなに
緊張感を味わつたことなんてなかつた。命の危険はないにしてもだ。
ピー！！！！

張りつめた空気を、甲高い機械音が切り裂く。レオが放つた開始の
合図だ。

「いくよ、ユーリ！」

「ええ！」

まずは、ハルカのメギドが距離を詰めてくる。お互いにモデルソー
ドを持っているとはいえ、射程はそう長くはない。近づかないこと

にはどうにもならないと判断したようだ。

「リク！、相手の左足の空間に若干の歪み！恐らく蹴ってくるわ！プログラムは既に組んであるからひとまずその通りに動いて！」

「お、おお！」

俺は画面上にある、ユーリのプログラムを読み、それをメギドに適用する。後はタイミング勝負だ。

ユーリのメギドの動きをよく見て……。

「いまだっ！」

ガキツ！と鈍い金属音が響く。

俺はユーリのメギドの左足を剣で弾いた。これは避けてバランスを崩したところに、すぐに攻撃が来て不利になると読んだユーリの案だった。

「リク！続いて右腕で殴ってくるわ。プログラムも送ったから！」

「助かるぜ！」

ユーリの予想通り、右腕が俺のメギドを狙い、それが空を切った。

ここで相手のメギドが少しバランスを崩す。

「今よ！相手が風船をかばったら、剣で足を払って！」

「了解っ！！！」

そして、ユーリの攻撃プログラムを適用して、ハルカのメギドに攻撃を加えようとした。

しかし……。

「くすつ、左足の蹴りは読んでたか！さすがや！じゃあ、これならどうする？」

ハルカにとって最初の蹴りは牽制だった。その後の二撃、三撃で仕留められればいいのだから。そして次に右腕で相手を殴ろうとする。

「バックステップ？！これも避けたか！次はどうする？！」

ここで少し、バランスを崩したが特に気にはしなかった。相手はこ

のまま間合いを測ってくると思ったからだ。そのまま体制を立て直し追撃を行おうとした、その時だった。

「な、向かってくる！？攻撃か？どこ狙うんや、風船か？！」

いや、違う！

ハルカはとっさに左手に持っていた剣で足をかばった。

ガキツ！とした重く鈍い金属音の後、自然と二機のメギドの距離が開いた。

「さすがやな……、いきなり風船は狙ってこんか……、でもうちでもそうしたからな。この勝負相手に膝をつかしたら勝ちや！」

ハルカもユーリも同じことを考えていた。お互いが万全の状態で頭に装着されている風船を割ることは難しい。だから、まずは相手の体勢を崩す。それからゆっくり割ればいいのだ。

「くそつ、防がれたか！」

俺の一撃はハルカによって防がれた。初めてユーリの読みと計算が外れた。

「さすがね、そうやすやすと勝たしてはくれない訳ね……」

「次はどうくる？」

「まだなんとも言えないわね。一旦、相手の様子を見ましょう。さっきの流れるにこの勝負は後手後手に回っても不利とは言えないわ」「ああ、わかった」

一手交えてみて分かった。やはり、俺とユーリやハルカでは経験値が違う。この演習をしておいてよかったと思える日が必ず来るだろう。

「！来るわ……、剣を突き立てて来る！？他に歪みは見られない！突進してくるわ！」

「突っ込んでくるのかよ！避けるか！？」

「このスピードなら無理よ！話してる余裕もない！このプログラム

を使って！」

「ああ！」

な、なんだと……これは……！いや、いくしかないっ！

「うらああっ！」

俺は剣を相手めがけて猛スピードで投げた。

次はこの手やな。

……相手からはやっぱり動いて来ーへんみたいやな。

「いくで！」

うちは剣を突き立て相手めがけて突進する。この姿勢からなら、四肢の周りの空間は歪まへんし、動きは読みづらい！そして、ギリギリのところから相手めがけて剣を投げつける！これで、うちの手に武器はなくなるけど関係あらへん。剣がたとえ風船に当たたらへんでも、相手は一瞬の間ができる。そこに突っ込んで腕でも足でも使って割ればええだけや。

「なっ！」

うちが剣を投げつけたのとはほぼ同時に相手もうちめがけて剣を投げてくるやて！？

パンッパンッ！

ほぼ同時に2機のメギドに装着された風船は割れた。

「うーん、引き分けだな」

レオは呟き、三人に連絡を送ろうとする。その時だった。

「なるほど、これはこれはおもしろかった」

「まさか、ハルカとここまで渡り合えるとはね」

「シンラン部長！コウザキ部長！」

後ろには、シンラン部長とコウザキ部長の姿があった。

「コウザキよ、うちのもなかなかやるだろう?」

「いや、うちのとうりより、やはり情報部の彼女がすごいな。最後のあのスピードで突っ込んでくるメギドに、寸分違わず剣を命中させるプログラムだったよ。ハルカは完全に感覚だろうがな、相変わらず」

そう言つて二人は笑い合っている。二人とも、いつから後ろにいたのだろうか。まったく気配は感じられなかった。僕に気を使って気配を絶つていたのだろうか。

「ふ、まあ、だが彼らを戦場には立たせたくないものだな、コウザキ」

「無論だ、だから俺たちが守つていかねばならん。暴力などに頼らなくてもいいようにな」

僕たちはなんだかんだいつて、大人に守られているんだ。

でも、僕たちだつていつか大人になる。その時に、多くじゃなくていい、自分の大切なものを守る力をつけておきたい、それだけなんだ。

「引き分け、風船は同時に割れたよ!」

僕は通信マイクに向かって叫んだ。

強くなりたい

強くなりたい

何の為に?

じぶんのために

だれかのために

理由なんかなくたっていい

いま

第九話：宵闇シンフォニー (前書き)

読んでくれる方々、更新遅くてすみません。

第九話：宵闇シンフォニー

「戻ったか、フィエン」

「ただ今戻りました、カレンさん」

「隊長も報告を心待ちにしている、早速部屋へ」

「はい、わかりました」

久しぶりの火星だった。地球へ残してきたセレナのこと少し不安であるが、火星政府のやつらだつて無茶はするまい。念のために、レータさんとリンさんに頼んでおいたし。

火星保護団体　今はマーゼ・アレインと改名したらしい　の本部に戻ってきた私を出迎えたのは同僚の女性、カレンだった。黒く長い髪を後ろに長し無表情であることが多い彼女だが、能力は一流である。彼女も私と同じで、火星政府へのスパイが主な任務である。もともと、私と違って地球ではなく月に派遣されているのだが、月にも、小さいが火星政府の基地があり、もちろんそこから地球の観察も行っている。

今回は私とレータさん達との契約の報告だけであつたので、その旨を話し協力を要請したら、すぐに帰る予定であつた。この時までには……。

「失礼します、隊長」

「フィエンか、よく戻った。お疲れだったな」

私は少し暗い、本部の中の隊長の部屋に入った。ここはいつも冷たく、そして暗い。そうしなければいけない訳ではないのだが、隊長がそうしたいそうだ。お互いに一言一言ねぎらいの言葉をかけ合ったあと、私は真剣な顔になる。

「早速ですが、任務の報告を。あ、その前に……セレナは元気です

よ。少々無茶をすることはありますが、大丈夫です。優しい子に育つてます。後で、火星政府のデータも渡します。それで本題ですが……地球難民の造ったメシアはメギドにも劣らない性能かと思いません。細かいデータも後で渡しますが、これだけのものをつくるのは正直予想外でした。さすがに人数も足りませんし、大量生産には至ってないのですが……」

「なるほど……、大まかな説明は既に聞いている。向こうが出した条件は人材と材料の提供、そして地球難民の火星への移住の交渉を政府と行う……だったな？」

「そうですね、全くそのままの条件でした。こちらとしては美味しすぎる条件かと思いますが」

「裏がないと……、お前はそう思うか？」

「最初は彼らを疑いました。でも今は……信じています。彼らも我等と何ら変わりのない、ただ平和を求める人たちなのです。是非、条件を飲みましょう」

私は全て本音で話していた。実際、彼らを疑ったこともあったが、今は信じている。彼らも私たちと同じなのだ。ならば、協力するに越したことはない。

「そうだな。私はお前を信頼している。向こう側の条件を飲もう。早速手配をする。それともう一つ、お前に仕事を頼みたい」

「私に、……ですか？地球で？それとも火星で？」

「火星でだ。お前と、……カレン！」
隊長が大きな声でそう呼ぶと入り口で控えていたカレンが入ってくる。

「お呼びですか？」

「ああ、お前たち二人にしか出来ないことだ。火星で子供たちを集めてフォーラムを開きたい」

「フォーラム……、ですか？」

私とカレンは声を揃えて、聞き返す。少し、ピンとこない。

「ああ、もしこのまま私たちの計画が成功しても、歴史が再び繰り返

返しては意味がない。だから、今火星に住んでいる子供たちに分かっておいてもらいたいことがある。その為には、火星政府の人間である、お前たち二人が必要だ。私や他のものがやってもテロリストの戯言だと考えるだろう。もちろん、私たちの思想を理解してくれる者もいる。しかし、今は火星政府に睨まれている。派手な行動を起こすべきではない」

「おっしゃる通りです。私とカレンが主催ということにすれば、人々も興味がわくでしょうし、政府に目をつけられることもないでしょう」

「うむ。大体の準備はこちらでやっておくが、細かい打ち合わせは二人でやってくれ。もう既に部配属前の子供たち何人かには招待状を送ってあるからな」

「分かりました」

私とカレンは揃って返事をする。私は、はいはいと隊長の言葉を聞いて返事をしていたが、何も考えてはいなかった。地球にいた時からマーゼ・アレインに入るまでこのような催しなどやったこともない。

何の検討もついていたはいなかったのである。ただ、カレンは仕事に忠実であるし、なんでもそつなくこなせそうではある。それに女性であるから、こういう仕事は楽しんでやってくれらると思っていた。

「カレンさん、私はこういったものには自信がないんだが、頼ってもいいかな？」

私は隊長の部屋を出てから、カレンに声をかけてみる。すると、意外な答えが返ってきた。

「いや、私もこのような経験はない。故に、フィエン、お前に頼もうと思っていた」

「え、でもカレンさん、さっき返事していたし……それにこういうの得意だと思っていた」

「それはお前も同じではないのか。それに私がこういったものを得意と言ったことは一度もない。私ができるのはスパイと戦うことだ

「けだ」

カレンさんは、顔色を変えずにさらりと言い切った。
ま、まずい……、このままでは……。なんとかしなくては……。

「久しぶりの三人だね」

「そうだなあ……」

レオの問いかけに、俺は生返事で答える。俺たちは家に帰省するために、モジュールの中を歩いてきた。前はユーリと二人だけだったが今回はレオも一緒だ。もっとも、レオは家に親も誰もいないだろうとは言っているが……。

俺は数日前のハルカとの戦闘演習から、急に現実に戻されたことに少しギャップを感じていた。平和なのは悪くない、もちろんいいことである。ただ、あの胸の高鳴りが忘れられない。

「なによ、リク。ぼーっとしちゃって」

「だってさ、数日前に俺とお前は巨大なロボットを動かして戦ってたんだぜ？あれは現実なのかどうかも、疑わしくなってくるよ」

俺の言葉にレオはくすりと笑って答える。

「何言ってるんだい、あれはほんの演習だよ。戦うことは多分ないだろうけど、外で開発を行う上でメギドは必須なんだから。これからもつと乗ることになるよ」

「そうよ、私だって乗ったのあれが初めてじゃないんだからね。あんたも早く慣れなさい」

う……、そういえばこいつらはもう何回も乗ってるんだったな。あれぐらいで舞い上がってちゃ、こいつらに追いつくなんてまだまだ無理か。

「分かってるよ、だから最近、訓練してるんじゃないか。それにしても、シンラン部長メギド乗るの上手いよなあ」

俺のその言葉に、ユーリとレオは顔を見合わせる。そしてその直後、

大きな溜息を吐いた。

「あんだねえ、なんでシンランさんが部長なのか知らなかったの？」

「え……、それは一番開発に関する知識とか能力とかリーダーシップとかが高かったからじゃないの」

「まあ、それもある。けれど、それだけなら別に他の人でもいい。

男女差別をする訳じゃないけど、シンラン部長が女性に関わらず部長になれたのは、卓越した操縦技術があるからなんだ」

「卓越した操縦技術？それってメギドを動かすのが誰よりも上手いってことだよな？」

「そうだね。メギドに限らず、たいていのメカならシンラン部長はそつなく動かせるんだよ。つまり、逆にいえば、それだけメギドを自由に操れなければ上には立てない。いまや、開発部になくてはならない存在なんだよ、メギドは」

「そうだったのか……」

「あんたも開発部のはしくれならそれぐらい覚えておきなさい。多分、シンラン部長が本気出したら、ハル力だって敵わないわ。コウザキ部長とも渡り合える」

そうだったのか。今までシンラン部長はとにかくすげえって感じだったけど、本当はもつと凄かったのか。一度乗ったことある俺だからわかる。あれを自由に動かすのは並大抵のことじゃない。もしかしたら、地球にいた時に誰かから手ほどきを受けたのかもしれない……。人の過去を探るのは趣味じゃないけど気になってしまっ

そろそろ、俺の家が近付いてくる。

「レオもユーリも一旦俺の家寄ってくだろ？」

「そうね、お邪魔するわ」

「僕もそうさせてもらうよ。家に帰っても誰もいないと思うしね」

「で、どうしましょうか？カレンさん」

「そうだな。しかし、我々で考えるといつても日時も場所もテーマも指定されている。特別に考えることもないんじゃないのか？」

「テーマ……って指定されているんですか？」

「ああ、『地球と火星の今までとこれから』だ。抽象的すぎて、ここから考えるのも一苦労だとは思うが」

「そうか、地球と火星については当たり前でしたね。そこから、どう発展させていくか……ですね」

「ふむ」

私とカレンさんは場所を移してフォーラムについて話しあっていた。私はソファに座っているがカレンさんは、立って腕を組んで一人考え事をしているようだった。フォーラムではもちろん、私たちの考えを伝えることが最重要目的である。それでも、招待されてくるのは十五歳前の少年少女たちだ。分かりやすい様に、かつ深刻な問題であると示さなければならぬ。

「昔の地球と今の地球、そして火星の写真の展示というのはどうだろうか？」

「なるほど。確かに、写真は分かりやすく、かつ的確に伝えることができますね。それと、私たちの質問コーナーというのはどうでしょう？月と地球に実際派遣されているということを利用するんです」

「そうだな。その二つの方向から考えていこうか」

「あれ、カレンさん、楽しそうですね」

普段あまり表情を変えないカレンさんが少し顔に笑みを浮かべていた。

「ふっ、たまにはこういうのもいい息抜きになる。もちろん仕事だとわかってはいても」

「確かに……そうですね」

カレンさんも、マーゼ・アレインに入っただけで活動は続けているが、まだ20を超えたばかりの女性である。何故、“この場所”に来たのかは分からないし、聞くつもりもない。けれど、こうやっ

て普通に年相応のこと（なのかどうかちょっと自信ないけれど）をやるのも楽しいのかもしれない。私も、“ここ”に来てからは自分を捨てたつもりだったけど……セレナ 私には君がいてくれた。ただ、君が笑って平和を祈るのなら、その為なら少しは頑張ろうと思えた。だから、その誓った未来の為に、誰もが平和に暮らせる明日の為にこのフォーラムは、必ず成功させる。

「カレンさん……」

「なんだ？」

「必ず成功させましょう」

「無論だ」

「地球と火星を考えるフォーラム？」

「うん」

クーが俺に相談したいこととは、フォーラムへの参加についてだった。

「僕、前に兄ちゃんと地球を見た時改めて思ったんだ。もう二度と地球の悲劇を繰り返しちゃいけないって。だから、それから地球の過去にも興味があったし、地球から火星へ行くことになった過程とかも色々知りたいと思ってた」

「なるほど、クー君らしいわね」

「そ、そうかな？」

ユーリに褒められて（？）クーは照れ笑いをする。

「でも、ちょっと変だよな……」

「ん、何か気になったことでもあるのか？レオ」

「今、火星政府はNOAH発見で、人々の目をそちらに向けさせたはずだ。それを火星政府の人間が、わざわざ今更、地球と火星についてのフォーラムなんて開くかな……？」

「だからこそ……じゃないか？」

「どういふことかしら？リク」

「人々の目がNOAHに向いて、浮足立っている時だからこそ、同じ過ちは繰り返さないように……過去を見つめなおすってことじゃないか？」

「そうだ。ちよつと前の俺のように、少し刺激的なことがあると、目はそちらに向けられてしまう。その瞬間、過去はなかったことにされる。だから、俺たちには時々立ち止まって、過去を見つめなおす機会が必要なんだと思う。レオの考えも確かにもっともだが、こう考えれば合点がいく。」

「なるほど、あんたにしてはまともな意見ね……」

「一言多いと思いますが、ユーリさん」

「気のせいよ」

「むっ」

「まあまあ」

クーが俺とユーリをなだめる。勿論、俺とユーリも本気で口論している訳ではないのだが。ここでいつも仲介に入るレオが、入っていないことに気づく。

「どうした、レオ？やっぱりまだ疑問か？」

「考え込むようにしていたレオが言う。」

「そうだね……。一見、リクの考えが正しいようにも思えるけど……それは、あくまで僕らの意見だ。火星政府がそこまで考えているとは思わない」

「ありがとう、レオさん」

ここでクーが口を開いた。

「心配してくれているのは分かります。それでも、僕行きます。さつき、最近の兄ちゃん達の話聞いて思ったんです。僕も……今何がしたいって。これから僕のやろうとしていることは無駄かもしれないし、何も生まないかもしれない。それでも、今動くことに意味があると思うから」

しっかりとクーは言葉を刻む。

「そうだね。クー君ならしっかりしてるから大丈夫だね。それでも、なにかおかしいと思ったことがあったら、すぐにリクが僕たちに知らせるんだ」

「分かりました。有難うございます」

「レオ、随分気にかけてくれるんだな」

俺はレオがここまでクーのことを心配してくれるとは思わなかったので、すこし意外だったのだ。

「同じ過ちを繰り返したくない……ただだよ。あの日、妹が地球に連れて行かれることが決まった日。あの日の後悔が止む時はない。だから、クー君を重ねているのかもしれないね。もちろん、杞憂だと思っけれど」

「そうだった…な、悪い」

「いや、リクが謝る必要なんてどこにもない、これは僕らの問題なんだから」

そう言って、レオは静かに目を閉じる。

(セレナ。今でも君の無事を祈っている)

響いていく

交わっていく

重なっていく

絶望へと収束していく

第九話：宵闇シンフォニー （後書き）

次で十話です。文の書き方は完全独学ですが、なにかおかしいところがありましたら指摘ください。

第十話：鳥かこの夢

「ただいま帰りました。お疲れ様です」

様々なコンピュータが大量に置かれている情報部。ここは火星での情報を司る最高機関であり、最高のセキュリティを誇る場所でもある。その扉が開かれ一人の女性が入ってくる。肩まで伸ばした茶色い髪、誰かを思わせる生意気そうな顔は、歳を感じさせない若さを感じさせる。

「部長、お疲れさまでした！」

「お疲れ様です！」

口々にねぎらいの言葉をかける。部長と呼ばれた彼女はコンピュータと向かい合っている一人の女性の席まで歩き声をかける。

「ユーリ、お疲れ様。リクとクーがお世話になっっているわね」

この時、初めてユーリは部長の帰還に気付いた。目を見開いて驚きを表した後に、口から言葉が出てきた。

「セブンス部長！！！」

一人で初めての所に外出することは珍しかった。初めてかもしれない。今まではいつも、自分を抑えてきたと思う。でも、それが苦痛だと思ったことはないし、それが普通だと思ってきた。兄ちゃんは自由で前を向いて好きなきことをやるから、僕はお母さんと同じ情報部に入る。もしくはお父さんと同じ医療部か。どちらにしても、僕の本当の意志ではないことに違いはない。だけど、僕の本当の意志って？

特に胸を張って言えることはないけれど……それでもずっと憧れてきたものがある。

僕はフォーラム会場の入り口まで来ていた。ここまで来て躊躇しているのだろうか？そんなことはないと思うけど、ここに入ったら多分、今までの僕とは変わってしまうだろう。今までの僕がいて、それで円滑に僕の周りが回っているのならそれでいいんじゃないのか。そんな思いも胸をよぎる。そんな時だった。

「中、入らねーの？」

「え？」

「なんだ、もしかして入り方知らないの？ほら、こうするんだよ、端末をここの部分にピツッと……」

ピー！

無機質な高い機械音の後、僕の目の前の扉は開いた。そのまま突然現れた少年は僕の手を引いて中へ強引に連れて行ってしまふ。僕はなされるがまま会場の中まで入ってしまった。

「ちよつと！勝手に何してんのさ！」

「何？ここに来たんじゃないの？この扉の前にいたからてっきり……」

少年は悪びれることもなく言う。

「別に……そういうわけじゃないけど。ちよつと迷ってただけ」

「迷う？ここまで来て何を迷うってんだよ」

「怖くて……」

「え？」

「変わってしまうのが怖いんだよ、自分が」

僕は初めて会う、しかもちよつと無神経な人間に何を言ってるんだろうと思った。こんなことを言っても何も意味なんてないのに。何を期待しているんだろう。

「何で？変わってしまうことが怖い？変わることは成長することだろ？俺は自分が成長出来たら嬉しいけど」

そう言つて、再び少年は無邪気に笑う。

「ところでお前名前は？俺はリキィテイスタ！リキって呼んでくれよー」

「クー……クー＝セブンス。クーでいいよ」
僕は少し不審な顔をしつつもそう言った。なんかペース崩される奴
だけど、悪い奴じゃない……かな。

僕と同じ……より少し赤みがかかった茶色の髪。身長は僕より少し
低いくらいの彼、リキは、初めて会った僕になんのためらいもせず
に話しかけて、中に連れてきた。歳は僕より一つ下の十二だと言う。
ということは、僕と同年代の人たちにはみんな、このフォーラムの
紹介状が送られてきたのだろうか。僕たちの周りにいるのも僕と同
じ年くらいの少年少女だ。何の為だろう？そういえば考えたことが
なかったな。

「おい、クー何ポーっとしてんだよ。主催者きたぞ」

「え……あ、うん」

リキに言われて僕ははっとして前を見る。広い部屋の前に20歳ぐ
らいの男の人と女の人が揃って出てきた。

兄ちゃんやユーリさんたちより少し年上かなあ、とか思ったりした。
「みなさん、今日はお集まりいただきありがとうございます。本日、
フォーラムを主催させていただきましたフィエンとカレンです。私
たちは普段、それぞれ地球と月でお仕事をしています。普段、火星
で過ごす君たちに、興味の湧く話を聞かせられるかと思えます。今
日一日、楽しんでいってください」

フィエンと名乗った男はそう言っただけで礼をした。相手は僕たち子ども
たちなのにごく丁寧な対応だと思った。

「まずは私、フィエンが地球の過去と実態をお話ししたいと思いま
す。ただ、見ても分かる通り私もまだ若い身。それほど昔の地球を
知る訳でもないのですから。とは言っても、本当の“地球”を
知る人物など、もう生きてないと思います」

ここで会場は少し笑いに包まれた。僕は真剣に耳を傾ける。ちらり
と横に目をやるとリキも真顔だったのが少し意外だった。

「みなさんの中には、興味を持って調べた方がいるかもしれませ

ですが、その全てを知ることには不可能です。火星政府によって隠蔽された歴史もありますし、それを大人たちは誰も話そうとはしないからです。ですから、私もここで全てを語りはしません。ただ、昔の地球はとても美しかった……と聞いています。緑と青に包まれた、まさに人間が住むに適した世界だったと。いや、人間に限らず、あらゆる生物が共存できていたと。しかし、人間がそれを壊してしまっただ。もちろん、故意ではない部分の方が圧倒的に多い。でも、それでも、事実が変わらない。――

この後もフィエンさんの話は続いた。人間が地球にどれだけのことをしてきたか、勿論本人も言った通り全てを語った訳ではないだろうけど。その中で、僕がずっと憧れてきた地球の“季節”の話もあった。

「地球には、一部の地域を除いて“四季”と呼ばれるものが存在します。これはその時々によって、気候や昼夜の長さ、咲く花の種類、活動する動物の違い、見える星の違いなど様々な変化を人間にもたらしてきたものです。火星のモジュールで暮らす君たちには想像のつかないことだと思います。ただ、今の地球ではほとんどそれを感じることは出来なくなっています。いや、それを感じる余裕もないのだとは思いますが。――」

ずっと環境の変わらないモジュール内で暮らす僕には、言葉通り想像のつかないことだった。時期によって周りの環境が変わる。それは時に人間を苦しめることもあっただろう。でも、人間に恩恵をもたらすことも多々あったはずだ。

「すっげー……」

この時、隣のリキも感嘆の声を漏らしていた。カレンさんからは人間が月も利用するだけして捨ててしまい、今では荒れた大地になっていること、数少ない月面都市も放っておかれていることなどの話を聞いた。

そうしてひとまず、最初の話は終わり写真展示や質問会などの自由時間に移行した。

自由時間になったら周りの子達はみんなフィエンさんのもとへ駆け寄って行く。やっぱり、地球に普段いるというのは相当興味深い対象になるのだろう。僕はどうしても見たいものがあったので、もう一人の主催者カレンさんのもとへと向かう。リキも僕にひよこひよこついてくる。

「あの……カレンさんですよ？」

「ああ、そうだが。何か用か？」

「あ、あの地球の四季がよく分かる写真とかつてありますか？昔の写真でも構いません」

「地球の写真か……そうだな。少し待て」

そう言っただけでカレンさんはたくさんアルバムの山をさがさそと漁りだした。これ全てを今日の為に用意したのだろうか。量は凄いことになっていたので、探すのも一苦労な様だった。

（地球の四季の写真だと……？分からん。そもそもこれを用意したのもほとんどフィエンだしな……！）

と、カレンが内心焦っていたことなど、この時の二人には知る由もない。

「本当にあの姉ちゃん、分かってんのかな」

リキが不安気に僕に尋ねる。

「大丈夫だよ。……多分ね」

ここでカレンさんは動きを止めると、フィエンさんの下へ歩き出し、何かを聞いているようだった。まさか、本当に知らなかったのかなあと僕は思いを巡らせていた。

「さあ、君達これだ」

フィエンさんの所から戻ったカレンさんは、そう言っただけで一冊のアルバムを僕たちによこした。

「なあ、姉ちゃんどれだか分からなかったんだろ？」

「そ、そんなことはない。少し迷っていただけだ」

「それを知らないって言うんじゃない？」

「くっ、黙れ。そもそもこんなこと私の仕事外なのだ！」

「逆切れかよー……、まあいいやリク見ようぜ！……ってもう見てるのかよ」

二人の言い争いをよそに僕はアルバムのページを既にめくっていた。『THE EARTH』、そう表紙に書かれたアルバムの中には遙か昔、美しかった頃の地球の姿があった。と言っても今の地球の姿も知らないんだけど。

「すごい……」

「これは確か、日本という国じゃねーか？」

「日本？リキ何でそんなこと分かるの？」

「へへへ、俺の父ちゃん環境部で働いててさ、こういうの結構詳しいんだよ。俺も将来父ちゃんみたいに、みんなの住む環境を考える仕事が見たいんだ」

「ふむ、お前の父は環境部で働いているのか」
カレンさんが興味深げに、リキに問う。

「ああ！俺たちの住んでいる住居モジュールの管理や、新しいモジュールの建設なんかも環境部でやっているんだ！いつか、俺も……父ちゃんみたいになりたいんだ」

「そうか……、それは素晴らしいな。私には何かを創造することなど出来ないからな……」

「へへっ、姉ちゃん、物探すことも出来ないからな！」

「だから違うと言っている！あれは少し、その迷っただけだ」

「冗談だつて。ところでクーの夢はなんなんだ？」

「僕の夢……」

僕の夢？なんだろう？情報部へ入ることじゃないのか？それでお母さんを喜ばせるんじゃないのか？兄ちゃんが開発部へ入った時、お母さん悲しい顔をした。だから、僕が……でも、これは……僕の夢？

僕の本当の気持ち？

僕が本当に夢に見たのは……。

「僕は、僕たちが住む火星を素敵な惑星ほしにしたい。昔の地球のように四季があつて、春が来て、夏が来て、秋が来て、冬が来て、その季節に応じた花を咲かすんだ。別にモジュールから外に出て生活したいとか、そんなんじゃない。ただ、僕らの暮らしが今より良くなるような、そんな色彩が欲しいんだ」

堰を切つたように、言葉は口から溢れていく。今まで抑えていたものが流れていく。静かな慟哭は小さな胸をかきむしる。夢が翼を持つて飛ばたくように、閉じ込めていた想いは開かれた。

「ところでユーリ、家にクーがいなかったんだけど知ってる？あの子が家空けるなんて珍しいのよね」

「今日は、地球と火星を考えるとかのフォーラムに行っていると思いますよ。この前、家に伺つたときに聞きましたから」

「フォーラム……？私は聞いていない話ね。詳しく聞かせて」

「あ、はい」

情報部の個室に移つて話をしていた二人だったが、クーとフォーラムの話になつた時、部長の顔つきが変わる。なにか不信めいたものを感じたのだろうかとユーリは思ったが、ひとまず自分の知っていること　と言つてもほとんどなかったが　を全て話した。

「なるほど……、火星政府の人が開催しているのね。それならば、……いや、でも少し違和感を感じるわね」

「レオもそんなことを言っていました」

「そう……、あの子昔から鋭かつたからね。んー……アルト君、いや Kouzaiki 部長に連絡してみましょう。彼なら何か知ってるだろうし」

そう言つて部長は端末をインカムにつなぎ、連絡を取ろうとする。Kouzaiki 部長は防衛部の部長だったはずだけど、もしかしてこの二人親交あるのだろうかとユーリは思った。

「こちら、サクラ。アルト君？ああごめん、癖で。コウザキ部長？ん、今日帰ってきたのよ。ところでフォーラムの話って聞いてる？あ、こっちに向かっているの？了解」

「コウザキ部長も情報部に向かっているんですか？」

「そうみたいね。これなら、伝えやすいわね」

「ところで、部長はコウザキ部長と仲がいいんですか？」

「ああ、聞こえちゃったかな。私たち同級生だからね。つい癖で下の名前で呼んじゃうのよ」

「私と、リク、レオみたいなものですね」

「そうね」

そう言って部長は楽しそうに笑った。

しばらくして、コウザキ部長が到着した。

「無事帰ったか、久しぶりだなサクラ、いやセブンス部長」

「ふふ、無理せず下の名前で呼んだら？私もついつい呼んじゃうから。私の出張報告は後で確認してもらえればいいわ。ひとまず、フォーラムよ。何か臭わない？」

コウザキ部長の言葉に最初は笑って冗談めかして返していたセブンス部長だが、話の最後は真剣な瞳になった。

「それならば行ってみればいいだけだ。行くぞ。お前なら言う必要もないと思うが、どんな細かい情報でも入手しろ」

「そう言うと思ったわ。それと私のこと信頼しなさいよ。何年組んでると思ってるのよ」

先ほどまでの喧騒が嘘のように、静まり返った部屋で二人の人影が散らかった部屋の片づけをしている。

「なあ、フィエン？」

「どうしました、カレンさん？」

片づけをしていた僕らだったが、カレンさんが手を止め私を呼んだので、私も手を止めて返事をする。

普段寡黙なカレンさんの方から話しかけることは珍しいなと思った。「私は実を言うと、昨日まで今日という日が憂鬱だった。今まで子供の相手をしたことなどなかったし、どう接すればいいか分からなかった。隊長の言う、未来は子供たちが担うと言う意味もあまり良く分からなかったのだ。でも、今日のフォーラムを通じてなんとなくだが分かった気がする。彼らの未来を守ってやりたい。そう思う」

カレンさんは目を閉じて祈るように言った。今日の出来事を、頭の中で再び描いているのだろうか。私が今まで見たカレンさんの顔の中で一番優しい顔だった。

「私もそう思いますよ、カレンさん。子供たちは未来であり、光だ。……もっとも私たちもまだ子どもみたいなものですけどね。変に老獪になりすぎているのかもしれないなあ……」

そうやって私は苦笑いをした後、遠い目をする。

しかし、突如としてその静寂は破られた。

「失礼する」

入口の扉が開き、背の高い中年の男性と、こちらも歳は同じくらいだろうが、まだ若さが伺える女性が入ってきた。見たことある、間違いない。防衛部部長のアルトとコウザキと情報部部長のサ

クラとセブンスだ。まさか、私たちのことがばれた……?! いや、そんなはずはない。しかし、警戒するに越したことはない。

「これは、コウザキ部長と、セブンス部長ではないですか。フォーラムの見学にお越しいただいたなら

残念。もう終わってしまったんですよ。次もありますから是非……」

「君達が火星政府の人間であるということはこちらで確認は取れている。どうしてこのような催しをしたのかを訪ねに来ただけだ」

「そうよ、そんなに警戒しないで。それとも何？ 後ろめたいことで

もあるのかしら？」

私の話を切って、アルト「コウザキが私に問う。話の内容からして疑っている訳ではないらしい。サクラ「セブンスの言うとおり、変に身構えると逆に怪しまれる……か。

私はカレンさんに目配せする。ここは私に任せろという意味を込めて。

「ええ。私とカレンさんがそれぞれ火星外で働いていることは、ご存知のはず。そして、新惑星NOAHの発見も言うまでもなく。私とカレンさんは、未来を生きる子供たちに伝えたかったですよ。地球や、月の悲劇を繰り返してはならないと」

「なるほど。そういうことならばいい。私たちはその理由が聞きたかっただけだからな」

「まだ若いのにそこまで考えてくれているのね。ありがとう」

部長二人はそれぞれそう言い残した後、踵を返して部屋を出て行った。完全に部屋を出たのを確認した後も、私たち二人はそれぞれしばらく動けないでいた。数刻の後、私は大きな溜息を吐きカレンさんに話しかける。

「ふうー。カレンさん、あぶな」

「黙れ！」

え……？突然のカレンさんの怒号に僕はたじろぐ。突然、カレンさんは端末を取り出し、それに文字を打ち込んでいく。そして、それを私に見せる。

『黙って部屋を出ろ。ひとまず、本部まで戻る』

それを見た私は黙ってうなずき、部屋もそのままに退出した。カレンさんもそれに続く。私たちはお互い黙しつつ、マーゼ・アレインの本部までの道を急ぐ。

本部の一室に着いた私は早速、カレンさんに質問をぶつける。

「一体、どうしたというんだ？カレンさん」

「あいつらを舐めるな。来た際に、盗聴器及びその類を設置してい

った可能性もある。不用意にあそこで発言するべきではない。彼らが本当に私たちを信じているかどうかなど分からないのだからな」
「そ……そうでしたね。ごめんなさい。油断してました」
「いや、私もいきなり怒鳴ってすまなかつたな。私の杞憂に終わることを願っておこう」
そう言つて、カレンさんは天を仰いだ。私は、彼らの言葉に嘘があるとは思えないが、それこそ、カレンさんの言う通り、用心しておくべきだった。

私たちは決して、世間に認められた立場ではないのだから。

一羽の幼い白い鳥がいました

僕は餌をあげたり、世話をしたりしました
早く飛び立って欲しかったのです

でも、同じことを思った他の人は、僕のやり方では駄目だと言い
僕の邪魔をして、自分達の無理を通そうとしました
僕も意地になって、相手の邪魔をしました

結局、あの白い鳥はどうなったのでしょうか

第十一話：フラインド・スパイラル（前書き）

今回は五千字程度にまとめられました。今更ですが、これは1部、2部に分ける予定です。五場面です、ころころ変わります。1部の最終局面に向かっていくそれぞれです。

第十一話：ブラインド・スパイラル

夜風が頬をなでる。決してそれは、慰みの風でも癒しの風でもなく、ただ身体に害をもたらすものだとは分かっている。それに身体を預けたい時もある。

レータは、メシアの製造を行っている工場に目をやってから頭上を仰ぐ。そこには瞬く星などなく、漆黒の夜空が広がっているだけである。

レータは少し迷っていた。メシアを造り続けることが本当の平和につながるのだろうか、僕たちは、戦争の道具を造っているのではないだろうか、歴史を繰り返そうとしているのではないだろうか、と。

「どうしたの、レータ君？あんまり外にいると身体に悪いよ？」

「リン……、ありがとう、気を使ってくれて。それでも今はこうしていたい……気分なんだよ」

いつものもの軍服から、室内着に着替えたリンがやって来て、心配したように僕に声をかけた。僕も今は軍服ではなく動きやすい室内着を着ている。よって、あまり外にいるのは好ましくなかった。今の地球の環境はお世辞にも人間にとって暮らしやすいと言えるものではないのだ。

「ねえ、リン。僕たちのしていることは本当に正しいのかな？このままメシアを造り続けて本当に、僕たちは幸せになれるのかな」

「どうしたの？急に。私たちが助かる為にはこれしかないって、みんなで決めたことだよ。もし何かあってもレータ君だけの責任じゃない。私も含めてここに住むみんなの責任だよ」

そう言っってリンは笑う。ここにいるみんなとは一緒に住んでいる子供たちや、おばさん、おじさん達のことを言っているのだろうか。なんだかおかしくなって、レータもくすりと笑みを漏らす。

「そうだね、ありがとう、リン。おかしなことを言っでごめんね」

「全くよね！レータ君は火星にいる愛しの人に会いにかなきゃなら

ないんでしょ！ああもう、妬いちゃうなあ」

そう言ってリンはふくれた顔をしてそっぽを向いた。

「何言ってるんだい。リンだって可愛いんだから、普通の暮らしに戻ったら、きつと素敵な人が見つかるよ」

そう言って僕は、リンに笑いかける。別に機嫌を取ろうと思ってる訳でもなく、本当のことだ。リンはシンランとよく似ていると思う。自分一人で何でも出来そうなりして、本当は寂しがり。人のことは心配する癖に自分のことは後回し。こういうった女性が一番放っておけないのだ。その癖、並はずれた能力があるってんだから。「始末に負えないよね」

「なにがっ?!」

「なんでもない」

リン。今まで、君がいてくれたから僕も頑張ってこれた部分も多いと思う。だから、君も君の幸せを見つけて欲しい。僕にはシンランがいてくれたように、君にもきつと……。

「……………」

レータは誰にも聞こえない声で祈りの言葉を呟き、広い宇宙を見上げた。

『でね、でね！新しい友達もできたんだよ！兄ちゃんにも紹介したいな。なんか少し似てるし…………』

「へえー、そりゃあ良かったな！俺に似てるって所が気になるけど」
『地球の四季って凄い綺麗で』

「うんうん」

その話はさっき聞いたよという言葉を飲み込んでクーの言葉に相槌を打つ。珍しく端末で通信を入れてきたクーと俺は話をしていった。俺たちの心配もよそにクーは随分楽しんできたみたいだった。こんな

に明るい声を聞いたのも久しぶりだと思う。その原因に俺が絡んでないのは寂しいと感じるのは傲慢だろうか。でも、過去に戻ることはいらない。だから、これからはクーの夢を応援してやろうと思う。羽ばたき始めたクーの新しい夢物語を。

『僕、環境部に入るんだ！そして、火星を今よりもっともっと住みやすい星にするんだ！もう決めたことだからね』

最初に聞いた時は少し驚いたけど、それでもよく考えたら当然のことかもしれない。クーが情報部に入るだのなんだの言ってたのは知ってたけど、その理由までは聞いてなかったから。でも、これからは違う。自分の目標と夢を見つけたから。母さん悲しむかなあとか思ったりもしたけど、まあ、俺は偉そうに言えた口じゃねーよな。

「あ、リク！部屋にいるのね！」

馴染みの声が玄関口の方から聞こえる。前まではチャイムは鳴らしていたんだが、ついにはチャイムすら鳴らさなくなったのか。

『あれ？兄ちゃんお客さん？』

「ああ、ユーリが来たみたいだ。悪いが、また今度な。フォーラムも、またあるんだろ？」

『うん！今度も行ってくる！』

「そうか、分かった。俺もそのうち帰るよ。じゃあな」
そう言っただけで静かに端末の電源を切った。

「で、どうしたんだよ、ユーリ？」

俺はユーリの方を向き直って尋ねた。

「ああ、クー君と話してたのかしら。ごめんね！それより、セブンス部長が火星に帰って来てるわよ！連絡来てる？」

「な……！？」

母さんが！？帰って来てるだつて？さっきの電話ぶりからしてクーは会ってないみたいだったし、家には帰ってないのか。俺に連絡が来ないことはまあいいとして、クーには会いに行つてやれよと少し憤る。

「俺にはなんも連絡来てねーよ。クーも会ってないみたいだったぞ

「何してるんだよ」

「やっぱり部長もフォーラムのこと不審に感じたみたいで、防衛部のコウザキ部長と調査に向かっているのよ、忙しくてまだ帰っていないのかしら」

「え？でもクーは何もそんなことは言っていなかったぞ？普通に楽しんでたみたいだったしな」

「そうなの？それならいいんだけどね。私も明日になれば詳しいこと分かると思うし、あんたも明日、情報部まで来なさいよ。部長と話したい事もあるでしょ」

「そうだなあ。あるある、あるよ。色々言いたいことがな」

「言いたいことというより、言っていきたいことだよなあとか思ったりもしたが別に口にも出さない。俺が言えたことでもない気がするから。」

「どうみる、アルト？」

「うむ……。まだ何とも言えないが、怪しいことは確かだ。しかし、あの女出来るな……」

「カレンさん、あ……」 『黙れ！』

アルト「コウザキが手元のパネルを操作すると、無機質な機械音で男性と女性の声が再生された。フィエンとカレンのものである。」

「あの男が何か言いかけたが、それを制したからな。我々が盗聴器を仕掛けることは予測済みだということだな。その後は何も聞こえないことから、黙って退出したと考えていい」

アルトがそう言うと、サクラ「セブンスは腕を組んで考え込む。カレンの予測通り、サクラは一瞬の隙を突いて、盗聴器をあの部屋に仕掛けたのである。しかし、カレンに見抜かれ、大した情報を得ることはできなかったのだ。だが、カレンは一つ墓穴を掘っていた。」

「声を張り上げてまで男を制した女。やはり、後ろめたいことが何

かあるはずだ。もっとも、証拠にも何にもならんがな」

「そうね。でも、看過は出来ないわ。もし彼らがマーゼ・アレインとの繋がりがあるとすれば大問題よ」

「サクラ。私は、以後、このフォーラムの監視を行うことを提案するが」

「私も賛成ね」

サクラも同調して言う。この件が放っておけないのは、マーゼ・アレインが関わっている可能性があることもあるが、なにより息子が関係しているのだ。見過ごすなんてできない。もし、彼らが黒ならば、必ず捕えなければならぬ。

「じゃあ、ひとまず防衛部、情報部はこのフォーラムの監視に入るということでもいいかしら？少し疲れたから休ませてもらうわ」

「ああ、お疲れだ」

サクラはアルトに手を振ると、部屋を後にした。サクラは、そういえば、火星に戻って来てから息子達に全く会ってないなあなんて思っていた。本当なら、息子たちと一緒に過ごしたい、成長を見届けたい。それが親としてのサクラの本音だった。でも、それは出来ない、やらなければならないことがあるから。情報部部长として、私の一歩一歩のしていることが間接的にも子供たちの為になっているのなら

、その信念がサクラを支えていた。少し感傷に浸った後、サクラは前を見据える。休んでなんかいられない。

ここで、サクラの端末に連絡が入る。情報部のオペレーターからだ。つた。

「セブンス部長！地球に調査に行った際のデータ解析の結果が出ました。やはり、あれはメギドと類似しています！地球にあんなものが……何故」

茫然とした声で、一人の情報部のオペレーターの男が言った。時はもう遅いが、情報部の活動が止まることはない。火星中の情報を把握、統治するために24時間交代で活動を続けている。

「まさか……本当に？……なんであんなものが地球に？あり得ない

わ……」

サクラも声を失いかける。

「そして、それを聞きつけたシンラン開発部部长が、単身地球に捜査に向かいました！」

「なんですって？そんな……もし本当なら危険すぎるわ！」

「しかし、周りの制止も振り切り……彼女なら安心と、上層部も最終的には折れたようです」

「確かに……彼女の力なら、そうやすやすとやられやしないでしょうけど……それでもまだ何も地球の機体について分かってない以上は危険よ。コウザキ防衛部部长には？」

「報告がいつていると思います！」

サクラは追憶の中に在った。地球にいたころの、戦いの記憶の中に。それから、それがすぐに現在の思考へと切り替わる。そして、結論にたどりつく。火星政府の地球研究所に内通者がいる可能性は極めて高いのではないかと。

「今すぐに、地球の研究所のメンバーのデータを纏めておいて。私もすぐに向かうから」

サクラは、端末に向かって言った。

地球にメギドに類似した機体が見つかった。

そう聞いた時、シンランははっとした。メギドは火星政府が独自に開発していたもので、地球にはそのデータも材料も、それを開発できるような人材だってそういないはず。そんなことできる技術者は限られているのだから。

「レータ……、おまえなのか……？」

レータ。シンランが地球で別れを告げた恋人である。レータは、技術者として卓越した能力を持ちながら、敢えて地球に残った数少ない人間の一人であった。もし彼なら、例え地球でもメギドクラスの

機体を作ることが可能かもしれない。それでもシンランは、それを信じたくなかった。

「なんで、戦いの道具を生み出そうとするんだ……？」

シンランもメギドの開発自体を、あまり快く思っていなかった。開発の幅が広がるのはもちろん嬉しいことだったが、強大な力は使い方を誤れば、直ちに凶器へと変貌する。メギドは、人型ということもあって、武器を持たせれば戦争にすぐ運用できる形である。火星政府もそのことを認識していたはずであるのに、何故……？

「初めから、戦いになることが分かっていたとでもいうのか？」

シンランは、メシアがメギドのデータをもとに作られたことを知らない。だから、メシアは無から造られたものであり、それを予め予測していた火星政府が、メギドの開発を始めたのではないかと考えた。

だがそれなら火星政府は、地球を相手に戦うことを想定していることになる。だが、ただ単にマーゼ・アレインのようなテロリスト対策かもしれない。

「確かめれば、分かることだ……！」

念のために、メギドを一機、開発部専用船に乗せたシンランは、地球へと向かう。

「隊長、やはりクーセブンスは情報部部长、サクラセブンスの子供のようです」

「なるほど……、やはりか」

カタカタとコンピュータを打つ一人の男が、冷たい機械的な声で言う。彼が参照しているのは、彼が火星政府からハッキングした一部のデータだった。そこには、火星内で一般人が閲覧できないデータが含まれている。

「フィエンとカレンから参加者名簿を渡された時、まさかとは思っ

だが、やはりそうか。では、あの時の少年……なのか？……聞き間違いなどではなかったようだ」

「これ、使えますよね？」

コンピュータを打つ男は、先程と同じように冷たく言い放った。

「な、なんだと……？子供を利用しようというのか……？」

隊長と呼ばれる男は動揺したように言う。

「そんなこと言ってる場合なんですか？何も殺す訳じゃありません。しかし、このままでは地球の民は死にます。みんな、死にます。私が作戦プランを考えます。一考を」

隊長呼ばれる男は、言い淀む。何も言い返すことができないから。男の言っていることは、真実だから。でも、迷っていた。マーズ・アレインを統べる男は、完全な悪になりきれていなかったのだ。

僕は視えない

一人では何も視えない

第十一話：ブラインド・スパイラル（後書き）

次回『第十二話：黒白に狂い咲いて』

私は私の正義を貫くまで。

第十二話：黒白に狂い咲いて

「久しぶりの地球だな……」

シンランはそう呟き、開発部専用船を降りる。メギドは中に積んだままである。本来なら船の操縦は、専任の船長がいるのだが、任務の危険から、今回はシンラン自ら船を地球まで操縦してきた。よつて、今シンランの周りにはだれもない。

地球に降り立ったシンランは、その空気に顔を歪ませ、思わず口を覆ってしまふ。

「くっ……、昔より大気の汚れも酷い。あまり、生身のまま動きまわらない方がいいな」

そして、地球でのもう一つの大きな問題は重力である。普段トレーニングを欠かさずこなしているシンランでも、やはり多少の違和感を覚える。また地球には、火星に移住した者を忌み嫌い、襲いかかつて来る者もいる。それはしょうがない感情だとシンランは思う。

いつか、地球の人間全てを火星へ移住させる。火星政府はそう謳っているが、実現するのはいつになるのか分からない。私が報いを受けるのも仕方のないことなのかもしれない、ともシンランは思った。それでも彼女は……、今はまだ倒れる訳にはいかなかった。

「ひとまず、情報部がメギドに類似した機体を見つけたというポイントまで向かわなければ」

シンランは、船に格納してあるメギドを地上に出すと、それに乗り込んだ。メギドならば、大気の汚染は気にせず移動できるし、急な襲撃があっても難を逃れることができる。でもそれは、シンランにとって気持ちの悪い行いではない。火星移住者が、強大な“力”を誇示しつつ地球を歩くのだ。地球に住む難民の人たちにとって、それは間違いなく嫌悪の対象となる。しかし、地球にもメギドと同タイプの機体が存在する可能性がある以上、決して油断は出来な

った。シンランは覚悟を決めて、メギドを操り、ポイントへ向かう。情報部の示したポイントはすぐに見つかった。何故なら、それはあまりにも目立っていたから。

寒々しい、荒涼とした荒れ地にそれはあった。工場と形容するには、いささか粗末で簡素な、しかしそれは明らかに、何か大きなものを作るための建物だった。

「あの中に、あれが……」

シンランは自身の乗るメギドのコックピットから建物を眺めながら、情報部から提供された映像を思い出した。

「レータ……」

そして、想い人の姿が頭をよぎる。彼がこの件に関わっているかは定かではないが、その可能性もある。

「あれは……？」

シンランは、その工場の近くに、民家と呼ぶにはいささか大きすぎる別の建造物を見つけた。もし使用するならば、人が明らかに十数人で暮らすことが出来そうである。目を凝らすと、近くに植物を育てているようでもある。つまり、誰かが生活をしているということだ。

シンランは、自然にそちらの方角へ、メギドの脚を向けていた。行ってどうなるというものでもない。それでも、あそこに関係者が暮らしているのならば、話が聞きたかった。もちろん、何故あんなものをと、問い詰めるつもりではない。ただ、聞きたいのだ、それを造ったことへの真意を。

「なるほど。ここか」

「……！？誰だっ！？」

突如、メギドのスピーカーから声が聞こえた。メギドの通信は開放してあったが、この地球で、このスピーカーから声が聞こえてくることなど、彼女はまるで想定していなかった。シンランは思わず声を上げ、辺りを見渡した。

「火星政府直属の特務部隊『ユグドラシル』隊長、ヴェクト＝ホルムと申します。そちらは、シンラン開発部部长とお見受けしますが」
「……！」

シンランは、声とともにその声の主も視認する。いや、正確には恐らくそれだと推定した。彼女の背後には、メギドのようであり、メギドではない、多少チューニングされているそれが五機、大地に立っていた。その中の一機が前に一歩出ていたので、先程の声はこれのパイロットであると、彼女は推定したのだ。ただ、その話の内容は彼女には全く理解が出来なかつたので、返答すべき都合のよい言葉も見つからない。

「特務部隊、ユグドラシル……？私は聞いたこともない……！それは確かにメギドのようだが、お前らが火星政府の人間だという証拠を示せ！」

「申し訳ありません。私たち自身の存在は公にはされていないのです。そして、私たちが火星政府の人間であるという証拠を示す必要性も感じません。私達は、火星政府から特命を受けて地球に参りました。それを遂行せねばなりません」

「なんだと……？それなら、なぜ火星政府は私の地球への調査を許可した？おまえたちがもし本当にその特務部隊だとして、お前たちを地球へ寄越すなら、私を地球へ向かわせたりはしないはずだ」

「それは私が知り得ることではありません。それに私たちに与えられし任務は、シンラン部長……、あなたと同じとは限りません」

この男、口調は丁寧だが私に対して、何も話すつもりがないどころか、見下してさえいると、シンランは思った。だが、もし彼らが地球の人間か、テロリストであるならば、とっくに私を攻撃しているはずだ……とも、彼女は考えた。

（一体こいつらは何なんだ……！？何の目的があつてここに……？）

「なるほど……。話さなければ納得できないようですね。いずれ分かることですし、我々の請け負った任務をお話しましょう。我々の

任務はメギドに類似した機体の確認とその破壊。そして、それに関係する人物を火星へ連行すること」

「なんだと……！？それが火星政府が、お前らに与えて任務だと？馬鹿な、横暴すぎる！」

シンランは憤慨した。それが、ただそこにあるだけでそれを破壊するなど、勝手だ。

「しかし、あなたも分かっているはずだ。メギドは戦いの道具にもなるということも、それが地球側に存在することの脅威も。本来ならば、地球にメギドなど必要ないはず。では、必要な人間は？マーゼ・アレインではないのですか？ただいま火星でも、火星政府内にスパイがいないか、洗っている最中です。ご安心ください。誰も傷つけるなど、きつく言われております。私だって戦争がしたい訳ではないのです」

それは、正論だった。シンランは、それに何かを言い返そうとするが、言葉が見つからない。

「……！？」

何か言葉を出そうとしたその刹那だった。例の工場の大きなシャッターが開いたのだ。もちろん、ただ開いただけではない。そこから出てきたのは、先程までの話題のメギド類似機体が二機。これが、メシアという名を持つことなど、シンランもヴェクトも知らない。

「まさか、見つかってしまうなんてね。そちら火星政府の人間ですよ。地球に何のご用でしょうか？そんな機体もの持ち出して我々に支援でしょうか」

（この声は……）

スピーカーから聞こえる声に、シンランははっとする。その声を最後に聞いたのはいつだったか。幾年もの時を重ねても、それは変わることなくそこにあった。記憶を、想いを呼び覚ます、懐かしい声。「それが、地球で開発していた機体か。何の為に？」

シンランのそんな動揺など露も知らない特務部隊長は、冷静に答える。まるで、こうなることが分かっていたかのよう。

「救世主メシアです。僕たちの未来の為です。地球に住む人間が火星に移住する為にはそちらと対等にならなくてはいけない！」

「戦争がしたいのか！？それは戦いの道具だ！我々が全て破壊する！」

「どの口が！僕たちは僕たちの暮らしを守る！行くよ、リン！」

「了解！」

もう一機のメシアのパイロットと思われる女性の声が、スピーカーを通して、レータ以外のパイロットにも聞こえた。

二機のメシアの脚部から煙が噴き出る。そして、それは猛烈なスピードで五機のメギドへ向かっていく。

「総員、二機の機体を鹵獲せよ。但し、絶対に殺すな。機体は多少傷つけても構わぬ」

「了解」

四機のメギドも二機のメシアを迎え撃とうと構え始めた。ヴェクトの機体は後方で待機している。

シンランは、声を振り絞って叫んだ。それは、二人が望んだ再会ではなかったかもしれない。それでも、二人は再び出会ってしまったのだ。

「レータあああああああ！！」

地球で、誰も望まない戦いが始まった。

私はカレンさんと共に次回のフォーラムの内容などを調べる為に、資料などが置いてある部屋へ行こうと歩いていた。昨日のフォーラムは最後に苦い思いをする事となったが、内容自体は成功であったと言っていいと思う。カレンさんも手ごたえを感じているみたいだった。私がそんなことを考えながら歩を進めている時だった。前方から二つの人影。

「また会ったわね、こんにちは。もつともわざわざ出向いてきたのだけれど」

「サクラセブンスと、アルトコウザキ！何故、こんなところにいる……。私たちの何かがバレたというのか……？」

「フィエンリーシャ。あなた、火星政府地球研究所で働いているわね？そして、地球に住む難民とも時々コンタクトを取っていたそうじゃない？ちょっと確認したいことがあるから、来てもらえるかしら？」

「別に、任意同行だ。無理にとは言わん。ただ、時期が早くなるか遅くなるかだけの違いだけだと思うが」

「サクラセブンスとアルトコウザキは勝ち誇ったように言った。何故、私が地球研究所で働いていたことが問題となっている？地球の人々……。レータさん、リンさん……。私は思考を張り巡らす。そして、一つの答えに辿り着く。」

「メシアか！」

「そうか、私がメギドのデータを彼らに渡したことが彼らにバレているのか……。いや、バレていなくても、時間の問題だ。もしそうなれば、芋づる式に私たちの組織のことまで漏れてしまう可能性もある。どうすれば……！？」

「ふっ、ばれてしまつてはしょうがないな！」

「……！？ぶがっ……」

「カレンさんは急に私の首を締めるように片腕をかけ、もうひとつの腕で銃を抜き、私のこめかみに当てた。」

「（カレンさん、何を……！？）」

「私はそう言いたげな目でカレンさんを見た。何を考えているんだ……！？」

「（いいから、黙っている）」

「カレンさんは私の耳元で、静かにそう呟く。」

「まさか、ここまでバレるとは思わなかったな。私たちがこいつを使って、地球のやつらと手を組んでいたことなど」

「……！？どういうこと？あなたもクロだって、自分から告白するつもりかしら？」

サクラ「セブンスは困惑したように言う。自分たちの思惑通りに事が進まなくなってきたようだ。

「私も？いいや、違うな。クロは私だけだ。私はこいつを利用したに過ぎない。だから、今となってはもう用済みなんだよ。組織のことをべらべら話す前にむしろ殺したいくらいだ」

……！？カレンさん、何でそんな嘘をついているんだ？そんなことして、この場が乗り切れるのか……！？

「ただ、私がこいつを今ここで撃ち抜いた瞬間、あんたたちは私を捕えるだろう。それでは、私も困る。取引と行かないか？」

「取引？」

「ああ、そうだ」

カレンさんは、相変わらず表情を変えずに言う。私には、その目論みを読み取ることができなかった。もつとも、今の姿勢ではまともに顔を見ることすら厳しかったのだが。

「私はこいつを解放したくはないが、さすがにそんなにうまい話はないようだ。私はこいつ、フィエンを解放しよう。その代わりに、お前たちは宇宙で私と闘え。私は自分のメギドを用意してある」

（何だって……！？部長二人相手に闘う？無茶だ、そんなの！）

私は、必死に訴えるような瞳でカレンさんを見る。否定の言葉も口から出かかりそうだった。

「……！」

しかし、カレンさんは更に強い眼光で、私を睨みつけた。『口を出すな』と、瞳が言っている。

何か、策でもあるというのか……！？

「なるほど、私たち二人を相手に勝てる自信があるというのだな？」
アルト「コウザキが、舐められたものだとも言いたげに凄む。

「待って、アルト。そんな言葉信じられないわよ。そのまま逃げるかもしれないんだから。それに、そんなことしなくても、ここで捕

えればいいじゃない。別に人質が一人いても、いくらでも手段はあるでしょ？」

サクラ「セブンスがそう言ってるアルト」コウザキを制した。さすがに、落ち着いてる。これで、カレンさんの策も通用しなくなったのか？私是不安げに、私を捕まえたままのカレンさんを見る。

(え……?)

驚いたことに、カレンさんは口の端を持ち上げて、微かな笑みを浮かべていた。まるで、勝ったとでもいわんばかりに。

彼女の思い通りに事が進んでいる……？今の私には何も分からない。

ポフツ！！！！！！

「え……？」

突如、大きな音とともに私は煙に包まれた。私を捕まえていたカレンさんの感触もなくなった。

すぐに振り向こうとしたが、突如意識が飛んでいきそうな衝動に襲われてしまい、身体に力が入らない。

「カレンさん……？」

薄れ行く意識の中で、フィエンが無意識に発した仲間への声、それがカレンに届くことはなかった。

こんな強引なやり方で済まない、フィエン。

カレンは、自分のメギドが置いてある出口に向かって走りながら、ここにはいない仲間に謝った。

でも、作戦は成功した。これで、フィエンに疑いの目が向けられることは恐らくない。いや、あるかもしれないが、あいつは賢い。私がか用意したピエロを演じきるだろう。私とあいつがつながっている

証拠など何もないのだから。

最後に放った煙幕弾は、ほんの一時的に意識を失わせる効果がある。意識を失っているフィエンを確認した彼らは、応援を頼んで私を追っているはずだ。しかし、応援が部屋に到着するまでには、フィエンは目を覚まして、逃げることができるだろう。もしそうでなくても、あいつならうまく立ち回る。私に適当に罪を押し付けて、被害者ぶればいいのだから。

ただ、この場合自分が逃げ切れることは計算に入れていない。この道が宇宙空間に通じる一本道であることなど、彼らは当然知っているだろう。だから、すぐに防衛部に連絡を入れて、防衛部の乗ったメギドを、出口に向かわせているはずだ。私がメギドに乗れば勝算はあるかもしれないが、もしメギドまで向こうの支配下にあったならば、私の完全な負けだ。いや、もし乗れても、後から追ってくる、部長二人の乗るメギドに勝たなくてはいけない。

「それは問題ない……」
私がメギドに乗れば　いや乗れなくても　例え誰だろうが必ず倒す。私は私の正義を貫くまで。

カレンは昨日のフォーラムでの子供達とのやり取りを思い出していた。

フィエンとカレンが、サクラとアルトに呼びとめられた直後のマーゼ・アレインの本基地では、マーゼ・アレインを統べる男、隊長が迷っていた。確かに、そろそろ行動に移さなくては……、地球の民だつて限界が近いはず。それにNOAHの開発へ向かうかもしれない火星政府への牽制にもなる。しかし、一度動くことへのリスクも大きい。そんな葛藤の中にある時だった。一人の男が、慌てて報告に部屋に入ってきた。ちなみに、今隊長と呼ばれる男がいる部屋は、マーゼ・アレインのオペレータールーム。火星政府の情報部には到

底及ばないが、いくつものコンピュータが置かれている。

その男は、いかにも緊急の報告であるかのような仕草を言う。

「隊長、ただ今地球から連絡が入りました！といっても、地球からの連絡であるので、ラグが認められるのですが……！」

「地球からだ？ファイエンが関わっている、メシアの開発者たちか？」

地球から自分達の所へ連絡を寄越すなど他に考えられないが、念のために聞き返す。

「ええ。メシアの工場が火星政府に発見され、戦闘が開始されたようです。至急、応援が欲しいということですよ！」

「もう、迷っている暇ありません。隊長、英断を！」

コンピュータの前に座っている男が、隊長と呼ばれる男を振り返り鋭い声で問う。今回のマーゼ・アレインのプランの考案を行ったのも彼である。

その時、また別のインカムをつけた男が、振り返って叫ぶ。

「隊長、大変です！ファイエンさんとカレンさんが、アルト「コウザキ防衛部部长と、サクラ「セブンス情報部部长に、呼び止められ、近くの部屋へ連れて行かれたと報告が！」

「なんだと！？あの二人が？何故だ……！？」

隊長と呼ばれる男は一瞬動揺したが、ファイエンと同じように理解する。

（メシアの製造が彼らの知るところとなり、地球で働いているファイエンが疑われているのか……！）

それは彼にとつて、うかつだった。火星での製造は、もちろんすぐに発見されることは分かっていた。しかし、火星政府が地球の監視を行っていないという事実の確認のしようがない。だから、見つからないことを祈っていたのだ。

「隊長！彼らを助けるためにも……いや、違う……。彼ら二人は作戦には必須……！そんな……、彼らを助ける為に彼らが必要だなんて……、酷い矛盾じゃないか……！」

コンピュータの前に座っている男は、頭を抱えて唸る。

「大丈夫だ、私が行く。私は彼とは顔見知りだから。私が、私とフイエーン、カレンは仲間だとも言えば信じるであろう。それに実行するのはお前たちだ……すまないが」

隊長と呼ばれる男は、毅然として言った。申し訳なさそうに、最後に謝罪の言葉を述べたが、声色に先程までの迷いはない。

「それは構いませんが……隊長と、あの子供が？」

「ああ、以前少しだけ話したことがあってな。それは任せてもらおう。それと、もう一つの方も私に任せてくれ、当てがある。情報部と防衛部を同時に無効化する作戦『ラビリンス』を開始する。火星政府を抜けださせないさ」

マーゼ・アレインを統べる男、オーベルト「アケルトは決意する。今ここが動く時だと。」

カレンが逃走したあとの部屋には、意識を失ったフイエーンと、アルト「コウザキ、サクラ」セブンスが残された。部長二人は落ち着いて状況を整理する。そして、意識を失っているフイエーンは後から来る応援に任せて、二人でカレンを追うということになった。それはカレンの思い通りの展開なのだが、それを二人は知る由もない。アルトが、防衛部に応援を頼もうと端末に触れようとした時だった。その端末から、アルトに通信が入った。

「コウザキ部長ですか！？こちら防衛部！」

「ああ、今こちらから連絡しようとしたところだ！そっちの連絡はなんだ！？」

焦るようにアルト「コウザキが端末に向かって問う。

「はっ、それが……数機のメギドを盗まれました！」

「な……メギドを盗まれただ！？馬鹿な！裏切り者でも出たのか！？」

アルトが、端末に向かつてそう叫ぶのを聞き、サクラ＝セブンスも驚いたように、アルトを見る。

「はい、カメラなどを確認したところ、開発部のレオ＝アケルト他数名かと思われます！」

「開発部のレオ＝アケルト……だと？優秀な人材と聞いているが。で、そいつはどこにいる！？」

「それが……、情報部にも連絡をしているのですが、いまだに発見できておりません」

「メギドを数機も持ったまま、姿を消せる訳ないだろう！いや、他数名と言ったな？まさか、仲間共々もうメギドに乗って宇宙空間に出ているということはない？」

「有り得なくはありません……。ただ、目下捜索中ですので、連絡が入り次第そちらにも伝えます。ところで、そちらからの連絡は？」

「ああ、しようと思っただが色々狂ってきた。確かハルカは今、パトリールに行っているな？」

「ええ、その時間です」

「ならいい。引き続き報告を頼む。それとなんとか人員を割いて、至急『ポイントD 37』へ向かわせてくれ。そこに一人男が意識を失っているはずだから、確保を頼む」

そう言つて、アルトは端末の電源を一旦切ると、再びどこかへ連絡をかけているようだった。

「ハルカか？どこにいる？うむ、把握した。『ポイントC 15』へ向かえ。そこにメギドが一機あるはずだ。誰も乗っていないければそれを鹵獲しろ。もし乗っていれば、しばらく足止めを頼む。私もすぐに向かう。無理はするな、頼んだぞ」

「ハルカちゃんを向かわせたの？」

心配したように、サクラが問う。

「仕方ない。メギドが他に数使えなく、防衛部がてんでこ舞いの今は。それに私はあいつを信頼しているからな。あいつならオペレーターなしでも闘えるはずだ。もっとも、私たちも今からすぐに向か

う。私のメギドは別の所に置いてあるから、無事なはずだ。行くぞ、サクラ」
「ええ！」
二人の部長は、決意を瞳に宿らせ覚悟を決める。やっと掴んだ平和を脅かす者共の尻尾。絶対に逃さない。未来を生きる子供たちの為に、今自分達に出来る事は全て行う。

ああ、父さん？何？連絡はしないでと念を押したはずだけど？
え……？そんな……、そんなこと信じられる訳がない。信じられる訳がないだろ。

だってあいつは火星政府の研究所にいるんだろ？一番安全じゃないか。

戦争……。そんな大げさな……。でも……。

なら、僕はどうすればいい？

そんな！？そんなこと……！

くっ……。仕方ない。もし本当なら悪いのは僕らだ。馬鹿だね、なんで歴史を繰り返すんだっ……！

でも、勘違いしないで。父さんの思想に賛同する訳じゃない。僕は確かめただけだ、真実を。そして、助けただけだ、妹を。

第十二話：黒白に狂い咲いて（後書き）

13話で1部終わる予定だったのですが、終わりそうにありませんね。

次回『第十二話：僕らの命の詩』たたかい

生きるとは戦うこと。戦うことは生きること。
いくつもの空に命煌めく。
ありがとう、ごめん。さよなら。

第十三話・僕らの命・たたかい・の詩・前篇（前書き）

間空きすぎましたね。それと、予定より少し長引きそうです。あり
ゃりゃ……。。

第十三話：僕らの命 - たたかい - の詩：前篇

「戦いが始まってしまったようですな」

研究所の展望室から外を眺めている少女は、憂いを帯びた声で言った。

何故人は争うのか、そんなことは彼女には分からないし、分かることは許されない。だって、それを求めて人は争うのだから。以前、よく面倒を見てくれた彼に聞いたことがある。

「フィエン、何故地球はこんな姿をしているのですか？昔の写真はあんなにも綺麗なのに」

「セレナ。それは私にも分からない。ただなるべくしてなつたと私は思う。でも、同じことは繰り返させないよ、だって私達は後悔してそこから学ぶことが出来るのだから」

何でも知っていると思っていた彼でも知らなかったこと。それが私に分かるはずもないけれど、これだけは確信を持って言える。

戦いは哀しい。

だから

「誰も死なないでください」

少女は天に向かって祈りを捧げた。

長い逃避行の果て、カレンはようやく出口に辿り着いた。急いで、メギドの有無を確認する。

「無事か……」

まだ、メギドは捕られていないようだとかカレンは安堵する。だが、ここからが本当の勝負であることも彼女は分かっている。自分の貫く正義の為、彼女が守りたいものの為、彼女は、まだ死ぬわけにはいかなかった。

急いでメギドに乗り込み、宇宙空間へと飛び出す。このままマーゼ・アレインの基地へ向かい、現在の状況や、ファイエンの事なども色々確認しなくてはいけない。ただ、部長二人は間違いないで自分を追ってくるだろうし、他の防衛部の人員がメギドに乗って追ってくることも考慮に入れなければいけない。

「お、あんたか？平和を脅かすテロリストっていうんは」

突如、カレンのメギドのスピーカーから女と思われる声が聞こえた。「誰だ？」

そう問いかけつつカレンは辺りを見渡し、恐らくその声の主だと思われるメギドを見つけた。ただ、それは一機だけだったので、いささか違和感を覚える。編隊を組んで、数機が現れるものと思っていたからだ。カレンはその可能性を思案する。

（私のことを甘く見ているのか、それとも部長たち二人が来るまでの時間稼ぎか、それとも防衛部に何らかの問題が発生している……？）

いや、この際どちらでも構わないと思った。これはチャンスだからである。

「私は開発部のハルカ！コウザキ！そっちも名乗ったらどうや？」
スピーカーからは快活な少女の声が聞こえる。年はまだ若い、とカレンは判断する。そして別に名乗る義務はないが、ここにやってきた勇氣に敬服しこちらにも名乗ることにした。

「カレン。私の前に立ちただかる以上覚悟はしてもらおう！」

そう言った直後、カレンはメギドの左手に装備したマシンガン状の射出機から荷電粒子を圧縮した粒子ビームを連射した。

しかしハルカの乗ったメギドは宇宙空間を舞うようにそれを避ける。そしてハルカも同様に左手に装備したハンドガン型の射出機から粒子ビームを撃ち出す。

「くっ……なかなかやるな」

ハルカが避けたのと同様に、カレンもハルカの攻撃をかわしていく。ハルカは防衛部に配属され訓練を受ける前　幼いころ父に手ほど

きを受けた時　より、射撃はあまり好きではなかった。その事を父に話すと、始めは笑って頭を叩かれたが、すぐに向き直って真面目な顔でこう言われた事を思い出した。

『誰だつて苦手なことはあるさ。だがそれで済まされないのが父さん達、戦うものなんだよ。誰かを護れなかった時、その時後悔しても遅いのさ』

あの時は反発して分かるうとしなかった自分がたまらなく憎い、とハルカは自分を責めた。

「全くやな、父さん。うちももつと訓練しとくべきやったわ……くっ！」

カレンの撃った弾がハルカのメギドの肩部をかすめた。お互い宇宙空間を駆けての銃撃戦となっており、どちらの弾もクリーンヒットとはいかなかったが、カレンの攻撃は少しずつハルカを捉えていていた。

このままでは、いずれやられてしまうとハルカは思った。銃撃戦だと向こうに分があるのは火を見るより明らかだ。もつとも、このままやられてやるつもりはない。自分が得意な戦いへ持ち込めばいいのだ。

「調子に乗るんはここまでやで！」

ハルカのメギドの脚部と背部のブースターから、宇宙空間へ煙が吹き、それは機体にスピードを与える。そのスピードを落とすことなく、機体は右手に握った剣を振りかぶりカレンの乗るメギドへ突っ込んでいく。

！！！！

宇宙空間では音を伝えないが、大きな衝撃が空間を揺るがした。カレンの乗るメギドも同じく右手に携えた剣で斬撃を受け止めたのだ。ギリギリと膠着状態が続く、ハルカはその隙を見逃さない。

「はあっ！！！」

ハルカはメギドの右脚でカレンの機体のマシンガンを蹴り落とした。

「なんだとっ！？？」

カレンはその変則的な攻撃に驚きの声を上げたが、すぐに距離をとり体制を立て直した。

しかし休む暇など与えるかとも言うように、ハルカも銃を捨て、両手で剣を握りカレンへと振りかぶる。

「くっ！くあっ！」

かろうじて剣を盾にしてメギドへの直接の攻撃は防いだが、弱くはない振動がカレンのいるコックピットを襲っていた。

（疾い！そして重い！）

それからハルカは、先程までのキレのない狙撃とは打って変わって積極的に多彩な攻めを見せた。カレンはひるむことなく応戦していたが、少しずつハルカが押し始めた。……と第三者がいたなら思い始める頃であろう時、……カレンの姿が消えた。いや、正確にはハルカの視界から消えた。

（背後　　！）

「んあっ！」

ハルカはとっさに反応し後ろを向こうとしたが、間に合わず背中を蹴り飛ばされてしまった。コックピットへ大きな振動が伝わる。

「私が格闘戦を苦手だと言った覚えはないが……？」

ハルカのコックピットのスピーカーから無機質な女の声が届く。

「ふっ……上等！」

体制を立て直しながらハルカもそう宣言し、真っ向から格闘戦を行うことを承諾した。

二機のメギドは剣を交わらせながら宇宙空間を駆け巡る。スピードは、ほぼ互角のように見えた。

「お前に聞きたいことがある！」

「なんや!？」

突如スピーカーから相手のパイロットと思われる女性の声が聞こえ、戦いの最中だというのに余裕があるんやなと舌打ちながらも、ハルカは答えた。

「お前は何故戦う？そういう命令を受けたからか？」

カレンは、何故自分がこんなことを聞いているのか分からなかった。聞いてどうする？納得できる答えだったら、おとなしく捕まるのか？有り得ない。ただの興味本位、そう自己完結させた。

「それももちろんある！けれど、あんたらみたいに平和を脅かそうとするやつらは、許せへん……！うちはみんなを守るて決めたんや！」

「その平和がまやかしのものとしてもか！？お前達の幸せが数多の犠牲の上に成り立っているものだとしても？」

スピーカーからさつきまでの無機質な声とは打って変わった、激昂した声がハルカのコックピットに響いた。少し怯みながらもハルカは、言い返す。

「そんなこと言われても、うちには分からへん！どんな犠牲があったのかも、今も苦しんでいる人がどれだけいるのかも！」

事実、歴史の黒い部分は政府によって隠蔽されている部分も多く、ハルカが詳しく知らないのも無理のないことだった。もともと政府も悪戯に隠蔽している訳でもなく、情報倒錯が起こらないよう、火星のネットワークが完全になり、ある程度落ち着いてから徐々に明るみだすつもりだったのだが。それが正しいことなのか、悪い事なのかは分からないが。

「自分だけが幸せならいいのか！」

「そうは言っていない！ただ、あんたたちみたいに力づくで解決すればええ問題でもないと思うんか！？」

「みんなそう言って問題を先延ばしにした！そうして結局、我慢した方が馬鹿を見るのは納得がいかない！」

二機のメギドは宇宙空間を飛び交い、激しく剣を、機体をぶつけ合っていた。それぞれのパイロット同士もメギド同士の戦いをそのまま取り込んだように、熾烈に主張し合っていた。どちらが正しいかなんて誰にも分からなかったし、お互いに相手を認めさせようとも思っていない。

勝利を以つての主張

。それが最善の手段だった。

「やはり、無駄だったか」

カレンは、これ以上話しても詮無いことだと諦めた。誰もが、自分達のようにある訳ではない。でも、もしかしたら相手のパイロットも自分達のような思想を少しでも抱いているかもしれない、無駄な殺生を行わなくてもいいかもしれないと少しでも、希望を持ったみたのだ。だが、これで決心はついた。

「お前は決して弱くはない。ただ、相手が悪かったのだ。せめて、向こうでは戦いのない暮らしを」

カレンはそうスピーカーに向かって呟くと、機体を旋回させ相手の背後を取った。相手のメギドの左脚が無残にも破壊されているのが見える。カレンが執拗に攻撃し続けた部分がついに崩壊したのである。これで相手はまともに動くことは出来ない。そして、相手が動揺しているであろうにも構わず、背部のブースターを剣で叩き割る。「ぐあっ!!」

ハルカの乗るメギドは、大きな衝撃を受けて吹っ飛んだが、唯一残った右脚のブースターで踏みとどまった。だがそれで、満足な戦いなど出来るはずもない。

「なっ、そんな……、うちが……負けるやて……!？」

「動けっ!動けっ!」

ハルカは動かなくなつたメギドの中で、操縦席を無意識に叩いていた。その行動に何の意味があるのかは分からないし、それでメギドが復旧する訳でもないのに、ひたすら叩いていた。

「無駄だ。」

望みを潰やすかのような冷たい声。

彼女には私に対する同情も、見逃してやるなどという甘さもないとハルカは確信した。

（私、死ぬんだ……お父さん……ごめんね……?それと『うちが守る』なんて偉そうに言うたけど、うちは何も出来ひんかった……）
ハルカの目から一筋の涙が零れた。それは死に対する恐怖などではなくて、何も出来なかった自分の情けなさ、悔しさだった。

(リク、レオ、ユーリ……平和な世界を……)

ハルカが死を甘受したその刹那、ハルカのメギドとカレンのメギドの間を粒子ビームが突き抜けた。

「誰だ!？」

カレンが声を張り上げ、振り向くがそこには誰もいない。いや、正確に言えば目視できる範囲ではいなかった。カレンは、手元のコンピュータを操作し敵の範囲を確認する。

「あんな遠くから、狙撃した……だと？」

「良くやったな、ハルカ。それからそっちのパイロットさんよ、娘が世話になつたみたいだな。悪いがここからは選手交代だ」

「父さん……？」

「アルト!! コウザキ……!」

「まったく、なんで俺には連絡が来てないんだよ」

リキが独りごちた。彼は自分に連絡がこなかったことを少し不満に思っているようだ。僕はそのことを向こう側のミスだよと窺めたが、あまり気分を良くしてくれないようだった。

「あのカレンとかいう姉ちゃんの嫌がらせなんだよ!俺がちよっといじめたからって大人げないよなー、そうだろ?クー」

「はは、そうだね」

僕は苦笑して答える。今日、僕の端末にフォーラムに関する集まりがあると連絡が来たのは、数時間前のことだった。急な話だと思っただが、気になるのでリキにも聞いてみたところ、リキには連絡がきてないらしい。昨日の今日で同じようなフォーラムが開かれるとは考えにくいのだが、ひとまずリキを誘って指定されたポイントへ向かう。

「ところで、リキ」

「ん?何だ?」

「僕も……その……、環境部に……入ることに決めたんだ」

僕のその言葉に一瞬リキは驚いた表情を見せたが、すぐにおどけて言った。

「なんだよー、俺の真似かよ。いいけどさ、クーの方が一年上だから俺の先輩になる訳だ。クー先輩、くくく、変なのー」

「なんだよー、ていうか環境部に入る為にはちゃんと選抜テストがあるんだよ？リキは勉強してるの？」

「あー…そういえばあったような…」

「あるんだよ！しょうがないなー、勉強は僕が見てあげるよ」

ちよつとお兄さんぶつて言ってみる。自慢じゃないけど、火星内のモジュールごとの学校では僕は成績が優秀な方だったから。もつとも僕は勉強が優秀だっただけで、リキから教えられたことの方がすごく大事なこと……だと思っから。口には出さないけどね。

「ここ……だね」

「へえ、昨日とは違う場所なんだな」

僕が指定されたポイントは昨日とは別の部屋だった。やっぱり、普通の集まりではないのかなと少し訝しがってみる。しかし、ここで立ち往生している訳にもいかない。

「うん、ひとまず中に入ろうよ」

僕はひとまず中に入ることを促した。

ピ。ピッ！

端末を入り口にかざし、扉を開ける。中の眩い光が眼前に広がる。

そこで僕は、思いもよらない人物と再会を果たすこととなった。

「あなたは……」

「久しぶりだね、クーセブンス君」

僕の目の前に現れた初老の男性は、柔らかな笑みを浮かべながら優しげに言った。

「オーベルトさん……？」

「覚えていてくれたかね。実は昨日フォーラムを開催したフィエンとカレンは私の仲間なんだよ。私達は地球と火星の環境などについ

て研究しているんだよ」

微笑んだままで、オーベルトさんは続けた。

ここで、くいくいとリキが僕の腕を引っ張るので顔を近づけて話を聞くことにする。

（どうしたの？）

（知り合いなの？なんか怪しいぜ？）

（ちょっと前に一回話したことがあってね。フィエンさんとカレンさんのことも知ってるみたいだし、大丈夫だよ）

僕のその言葉にリキはあまり納得していないようだったが、一旦引つ込んだ。でも実際、僕もオーベルトさんのことは何も知らないし、話したのもあの時一言二言交わしたきりだ。フィエンさんとカレンさんのことは知っているみたいだが、フィエンさん達がオーベルトさんのことを知っているとは限らない。少しは、警戒した方がいい……かな？

「ところで、今回僕を呼び出したのは？」

「ああ、実は昨日君がフォーラムに参加していたということを二人から聞いてね、以前会ったことを思い出して、少し君と話してみたいと思っただよ。だから、呼び出したのは君だけ……のつもりだったんだけどね。彼は？」

オーベルトさんはリキの方について顔を向けながら僕に問う。

「彼は昨日知りあった僕の友達です。一緒に来ようと思って僕から連絡したんです。彼もここにいちや駄目ですか……？」

「いや、構わないさ。君の友達だというのなら歓迎しよう。早速、君達を私達の研究所に案内したいのだが、今からでも大丈夫かな？昨日よりもっとたくさんさんの写真があるよ」

「本当？」

オーベルトの誘いに、リキはさつきまでの嫌疑の眼差しに光が差してきた。昨日より多くの写真を見られるという事に反応しているんだと思う。

「行こうぜ、クー」

「うん、そつだね」

僕は賛成の意を表しながらも、内心は若干の疑念を払拭できないでいた。少しの違和感……、を覚えたけど、やっぱり僕も行ってみたいという欲の方が勝ってしまい、行くことに決めた。

「それでは行こうか。ここからそんなに遠いところではないよ」
僕達二人は、オーベルトさんのもとを歩いて歩き出した。

「こちら、オーベルト。フェーズ1終了。フェーズ2へ移行する。
他の状況を端末に暗号化して送信してくれ」

オーベルトは端末に向かって、周囲には聞こえない声でそう言った。

「シンラン!?」

レータは声のもとを振り返って叫ぶ。まさか……と思ったが自分が彼女の声を間違えるはずがないと思い、確信する。そして、同時にいくつもの疑問が彼の頭に浮かんだ。

(何故、彼女がここに……? 彼らの仲間なのか!? 彼女に限って、そんなことは……?)

「くっ!」

ガキーン!と鈍い金属音が響く。

敵のメギドの放った斬撃を右手に持った剣で受け止めたのだ。考えている暇はない。

「リンツ!あの五機のメギドから離れたところに、タイプの違うメギドがあるだろ?あれは攻撃するな!」

「了解っ!」

リンは二つ返事で了承してくれた。シンランのことは後で聞けばいい、今はこの場を乗り切らねばならないからだ。

レータの乗るメシアは、斬撃を放ったメギドから距離を置き、左手に持ったピストル型の射出機のトリガーを引き、荷電粒子を圧縮し

た粒子ビームを撃つ。しかし相手もメギドを巧みに操り、粒子ビームをかわしていく。そして、腰部に納めてあるメシアと同様のハンドガン型の射出機を左手で抜き、粒子ビームを放った。

「武装はほとんど同じか……」

レータは粒子ビームを避けつつ状況を冷静に分析する。今はレータ、リンともに一対二の状況だ。数の点では不利。武装はほとんど同じようである。リンのことは心配ない、僕よりメシアの操縦は上手いから。

「ならば……！」

レータは、メシアを限りなく鋭角に、そして軌道を読まれないように、いや反応すらさせないように動かす。それはまるで、重力など介してないように、空中を滑った。

「ぐうっ！」

メギドのパイロットが呻く。お互いにミドルレンジから粒子ビームを撃ちあってはいるのだが、こちらの攻撃はまるで当たらない、そして向こうの粒子ビームはおもしろいようにこちらの機体を射止めてくる。

「なんだ……あの軌道は……」

異常な早さ、そして軌道。何故、重力のある地球で、あのような動きが……！

「あれは地球で造られた機体だからだな」

「ヴェクト隊長！」

メギドのパイロット四人にヴェクトからの通信が入った。

「こちらの機体ももちろん、地球の重力に対応できるように造られてはいるが、やはり地球で作られた機体とは適応力が段違いということか、そして重力はパイロットの大きな負担にもなる……！」

火星より大きな重力。それが四人とその機体に大きな影響力を及ぼしていた。メギド内なら多少の重力は緩和されるが、激しい戦闘となると話は別だ。確実に、パイロットの疲労は蓄積していく。

「くそっ！」

どれだけ咆哮しようとも、状況は変わらない。レータの相手をしていた一機のメギドの脚部が、スパークを帯び爆発した。それはバランスを崩し、地上へと落下していく。

(やれやれ……人のことは言えないなこりゃ)

レータは心の中で、溜息をついた。あれだけ火星保護団体の人に戦いはするなつて念を押したくせに、先に剣を抜いたのは僕達の方じゃないか。罰を……受ける覚悟は出来てる。ただ、僕にも譲れないことはある！

僕の判断は間違ってたよな……？

そうだろ、リク、ユーリ？

だから、どうか君たちを裏切る僕を……許してくれとは言わないけど、止めないで欲しい。

僕は君たちと戦いたくはないから。

第十三話：僕らの命 - たたかい - の詩：前篇（後書き）

次回『第十四話：僕らの命の詩：後篇』
たたかい

この先に見つかるものがあると信じて、僕達は歩いていく。

第十四話：僕らの命 - たたかい - の詩：後篇（前書き）

今回、稚拙ですが少し挿絵を入れてみました。

第十四話：僕らの命 - たたかい - の詩：後篇

> i 4 5 6 7 — 7 8 1 <

作者欄

僕の落書きですが、少しキャラのイメージ画像を。

ちなみにリクとユーリとオーベルトとヴェクトはいません。それ以外の名前有りキャラはいるのではないでしょうか。セリフも服装も体型も適当ですので、あくまで（仮）として考えてください（笑）
誰が誰だか全員分かってもらえるでしょうか。

以下本編。

「後はお前だけだ」

レータは静かに呟いた。その声がヴェクトに届いたかどうかは分からない。ただそこには墮ちたメギドが四機という、冷然とした事実があった。どれも全壊はしておらず、中のパイロットも恐らくは存命しているだろう。レータもリンも敵といえ人を殺すつもりなど毛頭なかったし、そんなことはしたくなかった。偽善かもしれない、甘えかもしれない、それでも二人はそれで良かった。二人が今守りたいものは全て守ることが出来たのだ。

「全員、生きているはずだ。火星へ連れて帰れ。そして伝えろ、僕達の我慢も限界だと」

「ふっ……」

それはレータには嘲笑のように聞こえた。ヴェクトのそれは、まるで赤子に呆れかえるような態度だった。

「何がおかしい！……くっ！？」

レータは冷静さを失い、激昂して叫んだ。それに対する答えは言葉でなく暴力だった。一筋の粒子ビームがレータの乗るメシアの持つハンドガンを撃ち落としたのだ。

「どついつつもりだ!？」

「何故勝ったつもりでいるのか!? お前達が墮とした四機はいずれも急増メンバーだ、私の比ではない!」

ヴェクトの乗るメギドは右手に携えた剣を振りかぶり、レータの乗るメシアにそれを振り下ろした。

「ふんっ!」

「はっ!」

それをレータも右手の剣で受け止め、弾き返す。

「それがお前の答えなんだな! そっちがそのつもりなら!」

レータは再び戦闘態勢に入り、メギドの周りを弧を描いて攪乱する。それはやはり、地球の環境下では凄まじい速さだった。

だが、異変を感じたリンが声を張って叫ぶ。

「レータ君!」

ガンッ! ガンッ! !

「ぐっ……!? 何だと!？」

リンの声に反応するより早く、衝撃がレータを襲った。先程まではかすりもしなかった粒子ビームが、メシアを射抜いたのだ。

「確かに速い、とてつもなく。但し、動きが単調すぎる。機体の性能に頼りすぎている」

ヴェクトは独り言のようにそう言葉を紡ぐと、粒子ビームによる追撃を加えようとした。

その刹那だった。ヴェクトのメギドが持った銃が、大きな衝撃を受けて吹き飛び、それを受け止めきれずメギド自身も地を滑り後退した。

「……ッ!？」

ヴェクトが事態を飲み込もうと周りを見渡そうとした直後、再び大きな衝撃がメギドの背部を襲う。その機体が宙に浮き、近くの小さな丘に衝突するまで吹き飛んだ。

「ぐあっ! !」

ヴェクトは思わず苦痛の悲鳴を漏らした。メギドは勿論、ヴェクト

が受けたダメージも小さなものではなかった。コックピットの中は衝撃が緩和されるとはいえ限度がある。

「レータ君が帰れって言うてるんだから、ここは素直に帰ろうよ？
ね？」

いつの間にかベクトの乗るメギドを足蹴にして、踏みつけるような姿勢をとっていたリンが言い放った。先程までの連続攻撃を行ったのはリンだったのだ。その口調は優しく穏やかだったが、声色はこれ以上抵抗するなという強い脅迫が込められていた。

「なっ……なるほど……私の負けだ。今回っ……はおとなしく退散しよ……っ」

言葉切れ切れにベクトはそう言うと、リンの乗るメシアを押しつけ、堕ちたメギドのもとへ飛んで行った。

「レータ君、大丈夫？」

リンの乗るメシアがレータの乗るメシアに駆け寄り、心配そうに言った。

「ああ、ありがとう、大丈夫だよ。やっぱり、君を敵に回したくないね」

レータは、苦笑しながら答えた。

「アルト、データ解析完了。送信するわ」

「了解」

果てない宇宙空間で、二機のメギドがせめぎ合っていた。一機に乗るはカレン。もう一機に乗るは、防衛部部长アルト。コウザキ、情報部部长サクラ。セブンス。瀕死の状態のハルカの乗るメギドを他の防衛部員に任せて、アルトとサクラはカレンを捕えることに集中していた。

最初は防御に徹して、カレンの様子を見つつ情報収集していた二人

だったが、遂にサクラが、カレンのメギドを掌握した。相手にサクラのようなオペレーターが乗っているのかどうかを、二人は知らないが、たとえ相手が一人であっても自分達は卑怯だと彼らは思っていないかった。相手をここで捕えること、それが今二人が、もつとも優先すべきことであり、そもそもこれはクリーンファイトでもなんでもない。純粹な“戦い”なのだ。自分達が主張せんべきことを貫くために、自分達の正義を貫くために、勝利は絶対の条件なのである。

「さて、反撃させてもらうぞ！」

アルトはそう宣言すると、メギドの右手に装備したライフルから粒子ビームを乱射した。それは第三者からしたら闇雲に放っているようにも見えるが、綿密な計算に基づいて行われている攻撃である。カレンの速さをもってしても、そのすべてを完全に避けきけることは出来ない。幾重にも重なった粒子ビームがカレンのメギドの装甲を剥がしていく。

「なんて無駄のない動きをつ……………！」

カレンは、敵でありながら称賛せすにはいられなかった。オペレーターとしてサクラ「セブンス」がいることは確実であろうが、操作するのはパイロット本人だ。ここまで洗練された動きは、カレンには出来ない。

「だが、私はここで引く訳にはいかない。技術で勝てないのであれば、私自身を削るまで……………！」

カレンはそう言うと、コックピット内のレバーを引いた。

（義父さん……………恩は返します……………！）

カレンのメギドは、先程より数倍のスピードで宇宙を駆けた。流星のように光を放ちながら、漆黒の宇宙を染め上げていく。無数の帯を描いて、アルトたちの乗るメギドの周りを纏うと、剣を構えながら、多角度に波状攻撃を行っていく。一撃、一撃は軽いものでも、それが数度繰り返されれば大きなダメージとなる。

「あの動きは……………っ！速すぎる！」

「落ち着け、サクラ。このスピードならばまだ、耐えられる！あんな動き、そういつまでも出来るものではない」

アルトとサクラはそれに驚きながらも冷静に状況を分析し、チャンスを待った。カレンの波状攻撃にも、剣と機体を翻して、重大な損害にならないように防御していく。

「ぐっ……………がはっ！さすが、部長クラス……………ッ！一筋縄ではないかな……………い！」

カレンも身を削って攻撃を行うが、それもいつまでも続けられるものではなかった。それでも彼女には並々ならぬ決意があった。ここで負ける訳にはいかない。だがそれは、部長二人も同じである。

「我々はここで朽ちてはならん……………！」

そして二機が交錯した刹那、アルトのメギドの剣が鈍り始めたカレンのメギドの脚部を捕えた。機体の勢いは殺され、脚部はスパークを発し出した。

「まだだ！」

カレンはそう叫ぶと、残りの力で最高スピードを持ち直し、アルトたちの乗るメギドへ迫って行く。

「私の切り札だ。ここで私と宇宙の塵となろう」

カレンの乗るメギドの、崩壊を始めた脚部の一部が開き、中から無数ものミサイル型機雷が拡散した。それは宇宙空間で一拍置いた後、周りを黄色い閃光が瞬き、爆発四散した。その爆発に巻き込まれたあとは塵すら残らないだろう、といった規模だった。

カレンはこの攻撃で、自らの命をも賭けていた。つまり、今のこの状況が信じられなかった。

「馬鹿なっ……………、私は……………何故生きている!？」

「分かっていたさ。お前の切り札など……………。サクラが感知できない訳ないだろう」

「何!？」

カレンは、スピーカーから聞こえる不遜な男の声に反発して、問い返した。

「分かっていたというのか、アルト＝コウザキ、サクラ＝セブンス……ッ！」

「ええ……、脚部の装甲が明らかにおかしかったからよ。恐らく、ミサイルとかそんなものじゃないかと思っていたわ」

今、カレンのメギドはアルトたちの乗るメギドに抱きかかえられるようにして宇宙空間を飛んでいた。背部のブースターも破壊されており、脚部も完全にはない状態であるので、身動きすることは全く出来なかった。

「殺さないのか……私を……っ！」

「帰ってから聞きたいことがたくさんあるからね。答えてもらっわよ」

「くっ……」

カレンは悔しさと無念さを噛み殺して耐えた。今は現実を受け入れ、対処するしかない。まだ彼女たちの戦いは終わっていない。

そこは暗い独房のようなものだった。もっともそんなものを生涯見たことなどなくて、あくまで想像するだけの産物だったのだけど、いざ自分が押し込まれることになるとは思ってもみなかった。

僕とリキはその後オーベルトさんについて歩いていき、その途中で意識を失い、気付くところへ連れられていたのだ。ここに僕達が連れられたこととオーベルトさんとどういう関係があるのだろう。オーベルトさんは無事なのだろうか。とリキに話すと、『何言ってるだよ、あいつが犯人に決まってるじゃねーか！やっぱ簡単に信じろべきじゃなかったんだよ』と愚痴っていたが、彼が犯人だなんて信じたくなかった。いや、彼等が……犯人だなんて思いたくなかった。

「何考えてるんだよっ！」

「え……？」

「どうせ、あいつのせいなんだよ！俺達を騙して何か企んでるんだっ！」

その言葉は正論であるように思えたし、僕だってそこまで馬鹿じゃない。それでも……

「じゃあ、フィエンさんも、カレンさんもみんな悪い奴だって言うの？僕は……そう思いたくはない！僕達は昨日一度会っただけだし、交わした言葉も少ない。……でも、それでも二人が悪い人じゃないこと位は分かるよ……」

「……っ」

僕その裏付けのない、無茶な意見に、リキは罰が悪そうにうつむく。彼も分かってくれてはいるはず

だ、昨日の想い出を汚したいなんて思っているはずはない。

「おい」

「わああっ！」

僕達は声を出して驚いた。その声は独房の入り口から聞こえたものだった。

「お前達に言っておく。今回のことは隊長の意思であって、フィエンもカレンも関係ないからな。それに俺たちだって、お前たちを傷付けるつもりなんてない。分かってくれとは言わないが、隊長のメソツの為に言っておく」

「そんなこと信じられるか！いつになったら俺達を解放してくれるんだよ！？」

リキが反発して叫ぶ。

「信じようが信じまいがこれは事実だ。それにそんなに長い間拘束しておくつもりはない」

そう吐き捨てて、男は僕達のいる所から離れていった。彼の言っていることを信じたい。彼等がどんな目的で行動しているかなんてわからないけれど、それでも何かあるはずなんだ……！

「くっそお……これからどうする、クー？」

「こうなったのは連れてきてしまった僕の責任だ。君は必ず家に帰してあげるから心配……しないで」

「何言ってるんだよ！？二人で帰るんだろ？早くここから抜け出す方法を考えようぜ？」

「うん……そうだね」

僕は力なく頷いた。ここから抜け出す方法なんてあるのだろうか……。でも、リキだけは何としてでも脱出させて上げたい。恐らく、彼らの目的は僕だろうから。僕を使って、お母さんを利用するつもりなんだ……。でも、何の為に？どうしても手に入りたい情報がある？……分からない……。

「リキ、そういえば端末は……？」

「え？ああ……ねーよ。盗られてる。クーの方は？」

「僕のもないみたいだ。こっちから連絡を取るのは無理みたいだね」「抜け目のない奴らだっ……！」

うん、これで僕達からの連絡は事実上不可能となった訳か……。何か方法……方法は……。僕は暗中模索した。

「……くっつ」

「……？どうしたんだ？何かおかしいのか？」

「いやさ……僕って今まで生きてきてこんな状況に出くわしちゃったことなんてないから、なんていうかな、楽しいって言うのは不謹慎だけど、少しドキドキしてる」

不思議な高揚感だった。幼少より火星で暮らす僕にとって、生死を分ける　　というのは大げさかもしれないけれど　　といっ

た場面に遭遇したことなんてなかった。だから、今のこの瞬間がどうしようもなく貴重な時間に思えるのだった。

「はあ……呑気だなあ、でもなんとなくは分かるっ。これが一人だつたらきつと寂しかっただろうけど」

リキが苦笑して答えた。でも、その通りだ。僕だって一人なら、今笑うことなんて出来なかっただろう。

だから、僕は初めて理解する、友達というものを。

「カレンとファイエンの状況は？」

「ファイエンから先程連絡が入った！無事のように、今こちらに向かっているようだ。カレンは現在、アルトⅡ「コウザキとサクラ」セブンスと交戦中の可能性が高いということだ」

「なるほど……情報部に連絡を入れてください。息子を返して欲しい、そちらもカレンから手を引けと。」

「……………」

「どうしました？」

「本当に隊長は、……このプランを？」

「ええ、提案したのは私ですが、認証くださったのは隊長です。何か？」

「いや……いい。ただ、あまり気持ちのいいプランじゃないと思っ
てな」

「甘い……ですよ。もうこれは話し合いなどというものじゃない。

“戦争”なんです。覚悟を決めてください」

「……………分かったよ」

居住区や研究所、各部の本部、政府の根幹がある部分を火星の表だ
としたら、ここはまさに火星の裏だった。通常誰も足を踏み入れな
い領域、そこに二機のメギドが向かい合って浮遊していた。

「君たちが……やっぱり来たんだね」

「当たり前だ。どういうことか説明してもらっぞ、レオ！」

「君達に説明しても理解してもらえないだろう。お願いだから、こ
こは引いてくれ。僕は君達と戦うつもりはない」

その声に偽りは感じられなかった。いや、俺がそんなことを勝手に決め付けていいものなのかは分からないけれど、それでも親友の一人としてそれくらいは言わせて欲しい。俺だって、こいつとここで戦うつもりなんてないのだから。

「レオ。あなたは許されなことをしたわ。私とリクだってあなたと戦うつもりはない。それでもあなたが何も言わないのであれば、その時は……」

俺と同じ機体に乗っているユーリがスピーカーを通して言った。

「強気だね、ユーリ。僕は君のそういうところが好きだった」

「茶化さないで！」

ユーリが真剣な声でレオを制した。

「レオ。俺達には理由を話してくれてもいいだろ。一体何があったんだ？」

「ごめん、今は何を話してもいい訳になる。それでもいつか君達も気付く、何が正しいのか」

「はっ、何だ？まるでお前が完全な神みたいな言い方だな。どんな理由であれ、お前のやったことは立派な裏切りだ！」

俺は、気に食わない。こんなの、俺達の知るレオじゃない。俺は抵抗する、目の前にある現実。

「ああ、理解しているさ！なるほど、やはりタダで帰してもらえほど甘くはないようだね」

レオはその言葉ともに、メギドで腰に滞納してあったハンドガンを抜いた。それは恐ろしく自然な動作で、まるでそうなることが当然の様だった。まるで、この瞬間の為に今の俺達がここに配置されたようだった。

「ユーリ、覚悟決めろよ……」

「こつなるしかなかったのね……」

俺の言葉に、悲哀を込めた声色でユーリが応じる。それでもユーリだって分かっているはずだ。だから、俺と来たのだから。

俺達はここで

決別する。

第十四話：僕らの命 - たたかい - の詩：後篇（後書き）

「今まで俺達は、一緒に歩んできたと思ってた。ずっと同じ未来を目指すと思っていた。全部偽りだったっていうのか？」

「そうじゃない。今まで僕らが歩んだ軌跡は間違いじゃない。でも、それは過去のことだから。だからこれからは、……未来は、違う道を、……お互いが信じる道を歩んでいこう」

次回、『第十五話：同じ道を歩いて』

「ありがとう、俺はお前を」

「ありがとう、僕は君を」

『忘れない』

第十五話：同じ道を歩いて（前書き）

かなり間空きましたね。すいません。

これで第一部完了です。最後にも作者コメントあるのでご覧ください。

第十五話：同じ道を歩いて

作者コメント。

今回も稚拙ながら、挿絵を淹れてみました。3Dモデリングというのを少しかじりましたので。

一応、メギドをイメージしてみたのですが……精進します（汗）。

> i5871—781<

以下本編。

気付いたら、そこにいた。

気付いたら、一緒だった。

それは当たり前で、当たり前でなかったと知るには俺達はまだ幼すぎたのかもしれない。

俺が今まで享受してきた時間が、とてつもなく尊いものだと知るの
は、全てそれが現実として目の前で踊り狂ってからだ。

俺達はいつまでも子供でいる訳にはいかない。大人になるというのはどうということだろう。

身体が成長すること？

自分で生活できるようになること？

後悔しない毎日を送れること？

自分に自信が持てる事？

俺には分からない。でも、きっと、その為
に越えなければならぬものがあるのだとしたら、それは
きっと、とても残酷で哀しい。

「リク、レオのパターンを分析して送ったから！
そっちで確認して
」

「ああ……………！」
俺は何の為に引き金を引くのだろう。何の為に剣を振るうのだろう。
この痛い程の黒の世界で俺が手にしたいものは何なんだろう。

鮮やかな粒子ビームが暗闇を彩り、擦りあう金属が音のない筈の空
間に響いていく。それは切な過ぎる程美しい旋律だった。絶え間な
く波がたゆたう様に、俺達は変わっていく。それはどうしようもな
い事実で、そして俺が望んでいたことでもあつたはずなのに、今は

「どうした？君の腕はそんなものではない筈だ？僕に遠慮している
のかい？」

「違う……………！」

「それともなにか、ユーリがいるからかい？手加減のつもりなら愚
かだね」

「違うっ！レオ、どうしてこうなってしまったんだよ！俺達は同じ
道をつ……………歩いてきたんじゃないのかっ！？」

俺の問いにすぐにレオは答えない。言い淀んでいるはずはない。言
葉を選んでいる、恐らく丁寧に。

「そうだね。僕達は同じ道を歩いてきた。それは間違いない、事実
だ。でも、道は一本道ではなかった、それだけだ。違うかい？」

「ああ、そうさ。いつだって人生は選択の連続だ！お前が何を選ぼ
うとそれはお前に自由かもしれない、だけどそれは、よく考えた結
果なのか！？自分を偽ってるんじゃないのかよ？」

俺がそう言った刹那、レオの放った粒子ビームが、俺のメギドに数
発着弾した。機体が大きく揺れて、一瞬の間だったが、操縦が効か
なくなった。

「リク！戦いに集中して！もう、私達は戻れないのよ」

「くっ……………そう……………みたいだな」

ユーリの叱責に、俺は目を覚ました。いつだって俺はこうだ。現実
として目前に迫られないと腹を括れない。だから、大切なモノを失

つてからでない気付けない。

「うおおおおお！！！」

乱射した粒子ビームが空間を裂いて、レオの乗るメギドへと襲いかかる。しかし、機体は華麗なステップを踏むように全てを回避した。

「覚悟を決めたようだね！でも、それだけでは僕には勝てないよ！」

「そうみたいだな、だから俺も本気でいかせてもらおう！ユーリ！」

「分かってるわよ！データ再集計中！それまでは既存の物でなんとかして！」

俺は宇宙を駆け、攪乱させようと試みる。レオには大して効果がないかもしれない。それでも、今出来ることを行動しなければ始まらない。

「テイラナ副隊長、マーゼ・アレインの基地を思われる建造物を発見しました」

「今はヴェクトいないんだから、隊長でもいいのよ？ふふ、フィエンとか言っただけ？あの子泳がしといて正解だったわねえ……。さて、どうしましょうか」

「政府からは我々に一任するということですが、隊長もいない状況ですし、無茶をするのは得策ではないかと思えますが……」

「そうねえ……。確かに相手の戦力が分からずに突撃するのはお馬鹿さんだわ。でも、ここで一旦戻って……。なんてことしてる余裕はないわ。人質なんて面倒臭い物を……！」

「まずは内部構造の把握が必要ですね。円滑に人質を救出して、迅速に、なるべく多くの構成員を拘束したいですからね」

「ああもう、本当に面倒だわ。ひとまず、そのあたりの指揮はあなたに任せるわ」

「了解しました」

（人質なんていざとなったらなんとでも言訳が聞く……。ただ、構

成員の拘束……。これだけは必ず成功させなければならぬわね……)

「それで、情報部から連絡は？」

「どうやら、情報部もサクラⅡセブンス、アルトⅡコウザキ、カレンの動向を把握しきれないようです。火星施設内にいないのは確定。問題は、どこまで飛び出しているかのようですね」

(ふむ……。これは真実なのか、それとも情報部側からの作戦か。いずれにしても、まだこちらに手札^{カード}はある……。動かずに様子を見るのが得策か」

隊長ことオーベルトⅡアケルトの居所も分からない現在^{いま}、全ての指揮系統は自分に任されている。下手なことは出来ないが、慎重に動きすぎてもここまで踏み込んだ意味がなくなる。この作戦の立案者である彼は、思考を止めず、あらゆる可能性を思案してはそれを練り上げていった。

そもそもこの作戦自体、賛同者がそれほどいた訳ではない。カレン、フィエンの拘束情報の勢いに乗じて自分が認めさせたようなものであった。それでも、もう始まってしまったのだ。全ての責任を背負う覚悟はある。必ず、成功させて見せる、そして誰も死なせはしない。もちろん、あの人質の二人も事が終われば帰すつもりだ。「サクラⅡセブンス、アルトⅡコウザキと連絡が取れ次第、こちらに連絡するように伝えてくれ。もちろん子供を二人預かっていることも併せてな。危害を加えていないことも付け加える」

「了解しました」

後は、カレンが生きていることを祈るのみか、無力だな私達は。

「はあはあ……さすがにやるね、リク。ここまでとは思っていなかったよ」

「……お前もな、こっちにはユーリがいる分有利だっていうのに。一対一ならば、もう勝負はついていただろうさ」

「それは、違うよ。今、ユーリが君といること。それも君の力なんだから」

自嘲気味に笑いつつ、レオは静かにそう言った。

「どうということだ……!？」

レオの言葉の意味が分からず、俺は聞き返す。この時、どちらのメギドも動くことなく空間を漂っていた。

「そのままの意味だよ。ユーリが君といて、そして僕と戦っている。こうなったのは偶然でもなんでもなくて、君の力なんだよ。でも、僕にだって意地がある。抗ってやる、全てに」

レオは、自分自身にも言い聞かせるように、ゆっくりと言葉を紡いでいく。

「地球が壊れていく……としたら君たちならどうする？僕は、許せない。そんなこと……許せない。妹がいるということもあるけれど、それでも人間がそこまで身勝手に振る舞う権利なんてない筈だ。違うかい？」

「地球が!？どうということだ？」

「リクっ!!!」

ユーリの呼び声のおかげで、すんでの所でレオの放つ粒子ビームをかかわすことが出来た。しかし、息つく暇もないまま、粒子ビームが雨のように降り注いだ。俺は両手の得物も使い、致命傷にならないように攻撃を防いでいく。

「悪い、ユーリ……!油断した……!」

「謝るのは最後にして!まだ、終わった訳じゃない……!」

そうだ。レオの話していることが本当であれ嘘であれ、あいつは俺達と戦うことに躊躇がない……、いや違う、戸惑いがあるにせよ、腹は括っているんだ……!俺が半端な覚悟でこいつとやり合える訳

がない。そもそも、昔から俺の考えていることなんて、いつもレオにはお見通しだったつけ。あいつの投げかける言葉全てに疑いを持たなければ、対等に渡り合えない！

「俺は、開発部にするよ！新しい世界を拓くんだ！」

「リク。あんた、そんなこと言つて、開発部は学科の試験が簡単だからじゃないの？配属されてからは、どうせ勉強しなければならぬのよ」

「そういつお前はどつするんだよ、ユーリ？」

「私は情報部かなあ。レオは？」

「僕も開発部にするよ。リクと一緒にだね」

「ええ、お前が開発部？意外だなあ、なんか。頭も良いのに。何でだよ？」

「秘密」

『なんでだよー！？（なんでよー！？）』

「あの時の答え、聞きたいかい？」

「戦いながら、おしゃべりか？もうその手には乗らないぞ！」

「つれないなあ……僕が開発部を選んだ理由だよ」

呑気な声でレオが言う。しかし、今度は膠着状態ではなく、どちらの機体も激しく宇宙空間を駆っていたので、それはとても奇妙に思えた。実際、俺は上手く話そうとしても舌がもつれそうになる。

（まだ余裕ってことなのか……！）

本当に敵わない。

「ただの反抗だよ。父親に対する、子供の、普通の、そして幼い……。下らないだろ？それでも結局最後には、あいつの思惑通りさ。ざまあないね！」

剣と剣が激しく交錯する。レオの攻撃は相変わらず、猛攻と呼ぶに

等しいものであったし、突くところなんて見当たらないと思った。しかし、隣でコンピュータを叩いていたユーリが言った。

「リク！レオの動きに少し異変が……！単調に、粗くなってきたわ。ここしか攻めどころはないわ！」

「え？……ああ」

俺には見えない僅かな変化をユーリは見抜いていた。これが、唯一の最後のチャンスかもしれない。

俺を、ユーリを、レオを救う最後の

「まったく、まだなのかしら……」

イライラした様子でティラナは地団太を踏んだ。折角敵の本丸を見つけて、しかもいつもうるさいヴェクトがないというのにすぐに行動に移せなくてもどかしいのである。この任務、最重要項目は人質の救出、次いで敵要人の拘束となっているが、彼女にとっては逆であった。すぐにでも、テロリストの確保に力を尽くしたい。彼女もヴェクト同様、己の正義心からこの部隊に請願したのである。ただ、それが少しずれたものであることは、彼女の考えから明らかであったが。

「ティラナ副隊長！人質のおおよその居場所が端末の情報から分かりました！」

情報収集の指揮を任せた部隊員からの報告が届いた。ここからは、ティラナの仕事である。人質を救い、かつ敵要人の拘束。敵の戦力が分からない以上、この二つを完璧にこなすのは非常にギャンブル性が高い任務となる。勿論、味方の誰も失う訳にはいかない。

「部隊を二つに分けるわ！陽動班と救出班。陽動班は、人質の捕えられた方角とは別の方向で爆弾を作動させて気をそらさせる。もちろん殺傷能力の低いものね。誰一人として殺してはならないわよ」

「副隊長、それでは要人の確保は……」

「私達だけでは無理……よ。増援が来るのを待ちましょう。私達は
今、出来る事をするの」

本当ならば、真っ先に戦いに出て、悪人どもをひつとらえたい。それが、彼女の正義だった。でも、この状況でそれが最善手でないことぐらいは分かっていた。

但し、彼女達は一つ大きな見落としをしていた。端末から居場所を割り出したのだが、それは本人達が端末を持っている前提の話である。クーとリキが端末を奪われていたならば……。

「作戦開始！」

彼女の声が、こだました。

静かすぎる火星の端で、紅蓮の爆炎が上がった。

それは当初予定されていた規模より遥かに大きなものとなってしまった。

その爆弾自体の威力は大したことないのだが、要因というものは常にそこかしらにあるものである。

俺は朦朧とする意識と、所々痛む身体を無理やり起こした。何が起こったのか、全く分からなかった。

どこから思い出せばいいのか、どこからが夢でどこからが現実だったのか。そもそもここはどこだっけ？

「クー……！」

思考するより早く、言葉が今の状況を正確に伝えた。そこには幾重にももの瓦礫の下敷きになった親友の姿があった。そうだ……！何か知らないけど、大きな音がして、爆発して、崩れそうになった壁の

間にいた俺を !

「おい、大丈夫か!? しつかりしろよ! 何で俺を庇ってんだよつ」
声にならない嗚咽を抑えて、必死にクーに呼び掛ける。意識がないのか、なんの反応も示さない。血も服に紅く滲んでいる。詳しいことは分からないけれど、それでもかなりの出血量だ……! なんとかしないとやばい!

「……………う………ちゃ……………あ」

意識があるかは定かではないけれど、クーの口から呻き声が漏れた。
「ん、どうした?」

「に……………い……………ちゃ……………」

「兄ちゃんか……………? お前兄ちゃんがいるのか?」

「う……………ん……………」

俺を俺と認識しているかは分からないが、返答は出来るみたいだった。

それでも一刻も早くこの瓦礫をどけて、クーを助けないといけない。だけど、俺一人の力では絶対無理だ……。誰か助けを呼ばないといけない。

「クー。俺、助けを呼んでくるから! 絶対、助かるから!」

そう言葉を残して、瓦礫の山を超えて駆けだそうとした、その時だった。

突如死角から現れた人影。それが誰かも分からない。助けを乞わなければいけない。親友を救わなくてはいけない。それなのに……

気に入らなかつた。その瞳が。

そして、見ず知らずの相手に俺は咆哮した。許せなくて。こんなことになった理不尽が許せなくて。

誰のせいかも分からない、誰に当たっていいかも分からない状況で、むき出しの敵意は、その場に現れた『そいつ』にぶつけるしかなかったのだ。

「お前らなのかあつ!!!!」

長時間に及ぶ戦闘に俺達三人は疲弊していた。いや、レオのことは正確には分からないが、間違いなくそうだろう。俺達は二人で戦っているのに、あいつは一人だから。それでもあいつが倒れないのは、背負うものの重み故なのか。

「僕は負けない……。負けられないっ！」

「レオ……」

ユーリが心配そうな声を上げる。レオのことが気にかかるのだろう、それは俺も同じだ。でも、もうどんな手だつて通用しない。力づくでねじ伏せて、それからだ。今のあいつにはどんな言葉もどんな思いも届かない。

「ユーリ、あいつが心配なのは分かるが、俺達が今とれる手段は一つだけだ……」

「うん、分かっている。躊躇なんかしてやらない」

そうだ。戸惑い、躊躇、迷い。これらは俺達三人をまとめて陥れる。もう、道は違えたんだ。

「俺達はここで……決別するっ！！！！！！！！」

二機の黒き機体が振った剣が宙を裂き

第一部完。

作者コメント。

長々と期間を使いましたが、第一部はこれで閉幕となります。

なんていうか、もう少しプロットを組むべきだったなと……（苦笑）

第二部では、ほったらかした伏線や、登場人物の過去なんかにも迫って参りたいと思います。

もちろん、火星政府とマーゼ・アレインの動向や、リク達三人の行方。クー君とリキ君の安否、シンランさんとレータ君は無事再会できるのか、と書きたい部分はたくさんありますので、どうぞ暖かい目で見守ってやってください。

第二部のプロットをちゃんと（笑）組み次第、引き続き、投稿していく所存であります。

では、ここまでお読みいただき誠にありがとうございます。ありがとうございました。
もし宜しければ、もうしばらくお付き合いください。

再開です。今回は完全に一人のお話。

そこは、暗闇だった。

視界が奪われるという意味でもそうだったが、何よりもそこには光がなかった。私にとつての光は理由だった。存在の証明であった。それなのに……。

初めて任務を失敗した。屈辱でもあり、不甲斐なくもあつた。静かな、それでも熱を帯びた慟哭が身体中を駆け巡つた。期待に応えようと思つた。

恩を返そうと思つた。

あの人の為になりたかつた。

私を私としてくれた、その全てに報いようと思つた。

出来なかつた。

光なき闇が私を覆い、全てを無に帰していく。体中から、心から、大切なものが抜け落ちていく感覚。

私はそれを初めて知つた。しかし、それで皮肉にも、私にもかげがえのない物が芽生えていたことに初めて気づいたのだ。

それでも、もう遅い。何もかもが遅い。恐らく、私達の希望は全て削がれて灰になつただらう。

終焉

それは、私の光が消え失せることも意味していた。私は理由を欲した、生きる為の。それを月にいた仲間と話すと、『そんなの誰だつてそうだ』と笑い飛ばされたこともある。そうかもしれない。私だけが苦しんでいると、そんなことを主張するのは、ただの我儘で傲慢なのかもしれない。それでも、私が他の誰より理由を欲するのはそれなりの要因がある。

今から二十余年前、私は地球で生まれた。いや、正確には“造られた”。今となれば、その詳細を知る由はない。けれども、私は激

化する戦争を終わらせる為にこの世に産み落とされた。オブライートを包まずに言うなれば、私は戦いの道具として、その理由を伴い、その存在を許されたのだ。私とその事を知ったのは、いくつだったか。それでも物心つくころに私は自分の使命を感じ、そしてそれを遂行することで、何かを満たしていたんだと思う。けれどそれは、小さな穴のあいた容器に水を汲み続ける作業のように、いつかは枯れ果ていった。

身も心も壊れていく……、それを辛いとは微塵も感じなかった。今思い返すと、やはりこの時の私は、どこかおかしかったのだと思う。心が壊れるとは奇妙な表現なのかもしれない。しかし、私が完全に壊れることはなかった。それが幸か不幸かは別の問題として、私は生き延びる事が出来たのだ。

私は、義父さん、つまりオーベルト＝アケルト隊長によって救い出された。

月でのスパイ生活は、悪くなかった。再び、途切れる事のない緊張の連続の毎日だったけれど、それでも私は壊れてはいかなかった。義父さんは、マーゼ・アレインは、私にとって、何だったのだろう。冬の日の陽だまりのように、求めるべきもので、自ら向かうような綺麗なものではなかったかもしれないけれど、それでも私にとって生まれて初めての“居場所”であったことはまぎれもない事実だ。

「お疲れ様です、カレンさん」

「？、大丈夫だ、疲れてなどいない」

「まあ、そんなこと言わずに。お着替えお手伝いするっす」

「結構だ。私に構わなくていい」

「ううー……」

月での基地の任務中、随分と私の後ろをついてきた少女がいた。快活で、明朗、それでいて素直な少女で、何故私達の仲間になったのか、当初は疑問に思っていた。私達が、世間一般に受け入れられていないことぐらいは私にも分かっていた。もちろん、自分達の行いに

確信と信念があつたのも事実だが、それが全ての人々の認識であるはずもなかった。彼女を鬱陶しく思い始めた頃、一度聞いてみたことがある。

「ねえねえ、カレンさん！。何かすることないっすかー？」

「何も無いと言っているだろう！……ふう、ところでお前に一つ聞きたいことがある」

「お！私に質問なんて珍しいっすね！何すか？」

その少女は目を輝かせて私の問いを待った。

「何故、私達の仲間になつた？お前の求める世界とはなんだ？」

「決まつてるじゃないっすか。戦争のない、平和な世界っす」

「抽象的だな。では、その為にしなければならぬこととはなんだと思つ？」

「今日はまた、熱心っすね！」

「茶化すな。真面目な話をしている」

「そういう所好きっすよ。そうですね、一人でもたくさんの人に笑顔になつてもらふことっすかね。だから私はここに來たんすよ。」

そう言つて彼女は、はにかんだ。意外と言えば意外な答えだった。

彼女の価値観に？倫理観に？もつと漠然とした、茫洋としたものだった。

私はその日から、彼女のことを『ユウ』と呼び、少しずつであつたが会話を交わすようになった。彼女の言葉に感心し、親しくしようと思つたとかそういうものではなかった。むしろ、その日から今までの摩擦が嘘のように滑らかに彼女と付き合ふことが出来たのだ。せき止められていた川の流れが、一つの大きな岩を除去した後のように、私達の交流は深まつた。

彼女に私のことはカレンでいいと言つても彼女はカレンさんと呼び続けた。私はよく分からなかつたが、何かしら憧憬の念を抱いていたのだろうか。今となつてはもう分からない。

それでもそんなささやかな二人の関係は無残にも引き裂かれることとなつてしまふのだった。

丁度その頃は、地球より火星への移住も停滞し始めた時分で、政府への不満が各地で出だし始めていた。月もその例外にもれず、いくらか暴動のようなものも起きていたのだ。私は火星政府にスパイとして入りこんでいた為、その生々しさも脳裏に焼き付いている。もちろんマーゼ・アレインも、その活動に先陣切って参加していたし、それを上手くコントロールしようとも画策していた。これはチャンスであった。いくら政府といえども、大きな人民の動きがあれば、態度を改めなくてはいけない。私達にも希望の光が差し込んできたか……と感じたその刹那、事件は起こった。

暴力に依る一斉鎮圧

月という、火星より距離を置いた環境のせいだったのかもしれない。とにかく、政府は強硬手段に出たのだ。

彼女は、凶弾に倒れた。そこからはあまり覚えていない。両方入り乱れての乱闘騒ぎであった。

火星では、過激派を鎮圧するために、やむなく武器を使用したとしても、報道されているのだろう。詳しいことを知ろうともしなかったが、そこから私達の活動は、急激に収縮していった。

彼女は、望んでいなかった戦いでその若い命を散らしてしまった。私は彼女を守ることが出来なかったのだ。あの日は今でも夢に見る戦う為に生まれた自分が、戦うことで誰かを救えない矛盾。失いそうになる、自分の存在理由。それでも、そんな私が自暴自棄にならず、自らを傷付けなかったのは、彼女の言葉が私を繋ぎ留めておいてくれたからだ。挫けそうになると、その言葉を思い出す。

『生きてるだけで辛いなんて当たり前です。だから、人は笑顔を探しますよ。自分が不幸だなんて認めたくないから。でもそれは何もみつともないことじゃない。とても素敵なことだと思っつす』
彼女の見せた笑顔も私が幸せになる為に見つけた一つの笑顔なのだろうか。

私にはまだ分からない

ここは恐らく火星政府の牢獄。本当ならばそろそろ尋問が始まってもおかしくないのだが、一向にその様子はない。防衛部部长アルト「コウザキによってここに連れられてから、どれくらいだったのだろうか。時折食事を無言で置いていかれるのだが、食欲があるはずもなかった。その内に無理矢理にでも点滴を受けさせられるのだろうか。途方もない考えが浮かんで消えていった。

「……？」

いつもと違う気配が漂い、半開きだった瞳を上げた。足音も食事を置きに来る衛兵のそれではなかった。もつと激しく、感情的な、大雑把に例えるならば獣のような……。

やがてそれは徐々に大きくなり、ここに近づいていることは明らかであった。気にならないと言えば嘘になるが、それ程注意を払うことでもないだろう。もつとも、そんな気力も今はない。

殺気立ったその気配は、実態を伴い私の前に現れた。十五、六ぐらいの少年と青年の中間ぐらいの男。

鬼気迫る表情で、私を睨みつけている。その視線が矢のように私を射抜いたが、今の私の心は凧いでいた。

「お前か……お前が……ッを！」

雄叫びを上げて、その少年は牢の鉄柵にしがみついてそれを揺らした。小さくない音が閉鎖された空間に響いた。

「お前らのせいぞろい！お前らのような、犯罪者たちのせいぞろい！」むき出しの感情的な言葉が、雨のように私を打った。

私は責められている。

私には何の弁解も出来ず、またそのつもりもなかった。いつかは、その罪を背負うつもりでいたし、どんな目に遭おうともそれを受け入れる覚悟もあった。でも、まだ何も成し遂げてはいない、その一点で、私の悔恨で塗られた心は陰った。ここで、朽ち果てるべきなのか、それとも……。

「クーが死んだらっ！……お前もっ……お前もっ……！」

その少年は、嗚咽を漏らしながら、言葉を絞り出していく。

私は、無責任にも胸が痛んだ。そして、聞き覚えのある名前に、貫いていた沈黙を破ってしまう。

「クー……？クー…セブンスのことか……？」

一度だけ開いたフォーラムでの記憶。まだ、遠い昔の話ではないのに、私の中ではすっかり色褪せてしまっていた。マーゼ・アレインが私に居場所を与えたのならば、あのフォーラムは、その居場所に新たな色彩を与えてくれた。鮮やかに変わりつつあった私の世界は、再びモノクロに戻りつつあることに気付かされてしまう。

「ああ！？クーの名前を……お前が呼ぶんじゃない！！」

「クー、いや、あの少年に何かあったのか！？」

激昂する少年を前にして、私の口からは言葉がこぼれていく。自制が効かない、体が震える。記憶の覚醒を肌で感じる。あの日の、フォーラムのシーンが、ユウが死んだ夜の追憶が、螺旋のように私を取り囲む。

「何かあったとお！？白々しいこと言うんじゃない！クーはな……」

……、弟は……お前らに殺されかけたんだぞ！……いや、もしかしたら……いや！死なせない！あいつは絶対、死なせない！」

少年の声が過ぎ去りし日の私の声と同調して響いた。

『ユウは絶対に死なせないっ！』

私はかぶりを振って、それを打ち消そうとする。

「君は……あの少年の兄なのか……？」

「ああ……そうだよ！たった一人の弟すら守れないクソ兄貴だよ！」「たった一人の弟すら……」。

人を一人救うことがどれだけ大変で、辛くて、血反吐を吐いても成し遂げられるかすら分からない事だなんて信じたくはなかった。

それでも、事実はいつも目の前にあって、過去はいつだって私を取り巻く。逃げられない、永遠に。

どうして、人はこんなに無力なんだろう。

どうして、守ると決めたものを一つも守れないのだろう。

どうして、失うことの痛みには耐えられないのだろう。

「そうだ、私もっ、何も……っ……守れない……！誓いも……仲間も……未来も！」

押し殺して震えた声が漏れる。

誰に向けた言葉でもなく、それはあてもなく虚空に漂い続けた。誰も受け取ってくれる人は、ここにはいなかった。

その少年はいつの間にか、眼前から消え失せていた。クーセブンスの兄だという彼も、私と同じような道を辿ってしまうのだろうか。話によると、まだその命が消えてしまった訳ではないらしい。こうやって祈る資格がないのは、分かっている。

私になん力がないことも、分かっている。

それでも……助かって欲しい。未来を紡いで欲しい。これも、私の自己満足なのだろうか……。

私は自由の効かない身体を冷たい壁に預けて、瞳を閉じた。祈りは、本当に届かないのだろうか。

私はこの時、この壁が微妙に揺れたことに全く気付かなかった。

次回、『side:Vect.』Justice』

誰の為に剣を振るう？

s i d e : V e c t . & q u o t ; J u s t i c e & q u o t ; ; (前 書 ぎ)

今回も一人の(二人の)お話。二部がこの形式でずっと続いていく訳ではありません。一応、念のため。

ピッピッピッ……という無機質な機械音が、まだそこに一つに生命が息づいているということの証だった。冷たく暗いその空間に、それは恐ろしいほど調和していた。

生きていることの証、普通ならばそれは、何によつて表現されるだろうか。

食事をするかどうか。

歩くことであろうか。

笑顔で他愛無い会話を交わすことであろうか。

確かに誰かに見える光を、放ち続ける事であろうか。

それは多々あるだろうが、果てしない時を刻むこの機械音だとは思いたくなかった。

透明な窓ガラス越しに横たわっている少年に目をやる。いくつものチューブに繋がれて、かるうじて生かされているその姿は、とても痛々しかった。何故年端も行かぬ少年が、このような目に遭わなければいけないのか。そう考えると、哀しみが少しずつ怒りに変換されていった。まるで、高い所から低い所に流れる水のように、淡々と、自然に私の中で感情がシフトしていった。

気配を感じ振り向くと、花瓶を持った一人の女性がいつの間にかそこに佇んでいた。女性にしてはやや高い身長で、いつもはウエーブのかかった長めの青髪を流し、軍人に似合わぬ紅を唇に塗っていたその面影は、どこにも見つける事が出来ない。ボサボサの髪に、カサカサの唇。いつもは生意気なその表情が、いまや憔悴しきっていた。

「ティラナか……」

その女性は答えない。まるで石膏で塗り固められてしまったかのよう、黙って立ち尽くしていた。

「何度も言う、今回のことは君の責任ではない……！だから自分を責めるのはもうよすんだ……」

私は、彼女の肩を持ち、瞳を見つめながら言った。自分にも言い聞かせているようで、少し自嘲気味になってしまった。

「それに本当に彼にすまないと思っっているならば、今の君に出来る事は決まっているだろう」

「分かっているわよ、そんなこと！」

電池を入れられたロボットのようになり、彼女は急に身を乗り出して叫んだ。

「それでも私があの時！判断を誤っていなければ！こんなことには……！」

彼女の瞳から一筋の涙が零れた。それは、何度も流れたであろう涙の紅い跡の上を塗り重ねるように淡く光った。

「私がこの子を基地で見つけた時、一緒にいた少年が言ったのよ、曇りのない眼で私を睨みつけて。始めはこの子は何も分かってないって思ってたわ。それでも、違うの……。何も分かってないのは私達の方だったのよ……」

「私達を守ろうとしたものは、一体何なの……。？私達が行ったことは、結局何なの……。？分からない、何も分からないっ……！」

「あの時の君の選択は間違っていないかったさ。私でもそうしただろう。そうしてこの結末を迎えたのなら、運命を呪うしかない」

その少し大きめな背丈とは対照的な、折れそうな細い体をそっと抱きしめながら、私は静かに呟いた。私の言葉が、彼女に届くかは分からない。それでも、鐘は鳴らさなければ響かないから。

「あの日の私に……。誓ったはずだったのに。もう間違いは犯さないって……！」

今の彼女は、あの日の彼女に戻っていた。あの日……。私とティラナを変えた、忌まわしき日に。

ティラナと私は、俗に言う名家の生まれで、家は代々政府に關与

する職に就いてきた。幼少の頃より、勉学に励み、体を鍛え、人を使うことを学んできた。私は、それらが当然のことのように、それらをこなしていった。私達の両家は互いに親交も深く、その延長線上で私とテイラナが出会ったことも必然だった。互いに特殊な状況下に置かれた私達は、通じ合えることも多く、会う度に会話を重ねていった。彼女は私をヴェク兄と呼び、私は彼女をテイラと呼び、親しい関係を続けた。もっとも、それはあくまで友人としてのものであり、恋愛関係に発展することはなかったのだが。

ある日、私達の年齢が十代の半ば頃であつただろうか。私達がまだ地球にいた時分、彼女の家を訪れた時の話だ。その頃には、私達の関係は親友にまで昇華され、親には話しづらいことも、相談し合える仲であつたと思う。

「私ね……正直言つと辛いんだ……」

和室の縁側に座り、足を無造作にふりながら、エメラルドグリーンの瞳で遠くを眺めるように彼女は言った。この地は、地球上でもほとんど汚染されていない数少ない地であつたので、空は透き通るように澄んでいた。

「辛い……？」

「うん。私には人の上に立つ器はないのよ、ヴェク兄と違って……ね。だから辛い。勿論勉強は好きだし、体を鍛えるのも楽しい。けれど、それだけはどうしても好きになれないのよ」

彼女は、ひきつった笑みを浮かべながら私に向かってぼつり、ぼつりと言葉を並べていった。まるで、子供が石を庭に際限なく置いていくように、それは先の見えない話だった。

「人間は……チエスの駒じゃないわ。生きているのよ？私のお父様や、ヴェク兄のお父様が間違っているって言っている訳じゃない。政府に代々仕えているということは、誇りよ。けれど私には……」
柔らかな風が、彼女の頬を撫でた。その横顔は、どこか儚げで危うかった。そのまま一迅の風となつて消えてしまふような、そんな危

うさを私に思わせた。

あの時の私に、彼女の言葉は響かなかった、届かなかった。若さを言い訳にはしたくないが、それでも当時の私はまだ青かったのだ。

彼女がそんな迷いを抱えている時、事件は起こった。私達は合同の任務だったのだが、テイラナのミスにより、私が深手を負ってしまったのだ。

「ひぐつ……つご……ごめんね……？私があの時、迷ったりしていなかったら……躊躇いもなく任務を遂行出来ていたのならば、ヴェク兄が傷付くことはなかったのに。私があの時……」

はらはらと涙を流して、それを腕でぐいと拭う。まるでそうあるべきだと躡けられてるかのように、彼女は淡々とその行為を繰り返した。

私は何も言えなかった。彼女に対する怒り、というものが多少はあったのかもしれない。それは確かに否定できない。任務を全うすることが我々のあるべき姿だと信じて疑わなかった、かつての私にはテイラナの行いは許し難かったのだと思う。だが何より、言葉が何も浮かばなかった。彼女が任務に真剣に取り組み、それでいてのミスならば、慰めたり、励ましたりしようがあったのだろう。しかし今回のそれはそれと違い、彼女の感情的な問題なのだ。排除するべき対象に対して、同情の念を抱いてしまったのだ。私は、君の行動は間違っていないかったと肩を叩いてやる優しさも、なんであんなことをしたと恫喝する厳しさも持ち合わせていなくなった。

私は……、私達は中途半端だったのだ。

その事件より、彼女は私をヴェクトと呼ぶようになり、以前のようにならぬに甘えて来ることもなくなった。

心を閉ざしたかのように任務に没頭し、それに併走するように笑顔を失くしていった。同時に私も、そんな彼女を受け入れていった。それで……いいと思った。それが……私達の運命で、あるべき姿な

らば。でもそれは、私が彼女から目を背けていただけなのだったのだ。一番彼女を思いやらなければいけない立場の私が、彼女を暗闇から救いだせなかった。

彼女は、彼女のままだった。私の知る幼き日の“テイラ”のまま何も変わってはいなかった。

私が目を背けた彼女が、私の知らない所で壊れていく。それを悲観する権利など、私にはあるはずもない……。

気が付くと、私の胸に抱かれていたテイラナが、嗚咽をこらえながら言葉を紡いでいた。

「ありがとう……ヴェク兄……。ここはとても暖かい。それでもいつまでもこうしている訳にはいかないの……」

先程のように、震えた声ではない。ゆっくりだが確かな言葉を、一つ一つカタチにしていく。

「この子の兄と名乗る人物が私に会いに来たの……。私はてっきり罵られると思ったわ。その子なんて言ったと思う？」

『ありがとう、弟を助けてくれて』

「真っ赤に目を腫らして、肩を震わせながら、私を見据えてそういったのよ。その視線を私は逸らすことが出来なかった。確かに、彼らを見つけて保護したのは私よ？それでもその原因を招いたのも私なのに……」

私は何も言わない。彼女の言葉を縫うように相槌を打つだけだ。

「自分のすべきことが分かった。自分がどれだけ頼りにされていて、どれだけのことを為さねばならないのか。もう私は甘える側じゃない」

「ああ……」

「ヴェク兄、私……。もう涙は流さない、今日で最後にする。そして私は、私の正義を貫く。誰にも文句は言わせない」

「それでこそ、“ユグドラシルのテイラナ副隊長”だな、テイラ」

悪かった、訂正するよ。君は昔の“テイラ”のままではなかったな。と、一人胸の内ですら謝罪をする。言葉にはしない。

「これからは、それぞれの正義を……！」

私達はそう言ってお互いの手を握り締めた。これは、始まりの……誓いの為の握手だ。お互いがお互いの正義を貫く為の。

正義なんて言葉は、限りなく曖昧で不安定な言葉だと、嫌ったこともある。

人によって、場面によって、場所によって、ころころと形を変えるそれに焦がれたことも。

そんなの当たり前のことだったのだ。

私たち人間ほど、脆弱で、信頼のおけないものはないと嘆いた夜もあったけれど、それもここに到達するための寄り道であったならば……。

「ところでヴェクト、この子と一緒に保護された少年の行方は？」顔を上げたテイラナが私に問う。

「分からない……、いまだ搜索中だ。無事であるといいのだが」「そう……」

テイラナは心配そうに俯いた。私もあの少年は記憶に新しい。少し面会しただけであったが、いつの間にか我らの保護下から消えてしまっていた。リキ「テイスタと名乗る少年の行方。」

突如、その場に似つかわしくない足音が、聞こえた。現れた姿はテイラナの隊の兵士だった。病室に少し目をやって沈痛な表情を浮かべた後、テイラナに向き直って彼は言った。

「テイラナ隊長！報告があります。行方が分からなかった彼、クー「セブンスの実の父、セブンス医学部部长が地球にいらるとのことです！詳しいことは分かりませんが、情報部の方で足取りは掴んだとか……！目下、捜査中だということです！セブンス部長ならば……」

…少年を救えるかもしれません」

ティラナは驚きに目を見開いたが、徐々にその瞳に光が差ししていく。

「セブンス部長ならば……救えるのね？彼を……！」

「分かりません……、ですが、一番可能性のある人物です」

「ヴェクト……！地球へ行くわよ、私は！」

ティラナは私に向き直って言った。

「止めても聞かぬのだろう、ならば必ず見つけて来るんだ、彼が唯

一の希望ならば。火星は私に任せてもらおう」

「私がない間に、誰か一人でも傷付いたら、許さないから……！」

彼女のうつろだった瞳には光が宿り、よろついていた脚は確かに地を踏みしめていた。

勿論、私にだって地球には借りがあつた。あの敗戦による体の傷は癒えたが、あの時の地球のパイロットの声は脳裏から離れない。そして、ある意味で正しいのは多分彼らなのだろう。それでも、兵器を量産することが正しいとは思えなかつた。

……もどかしい。何故、私達はこうも無力なのだろうか。それでも、いつまでもふさぎこんで考え込んでいる訳にはいかない。ティラナのように私も前を向いて、私の正義を示さねばならない。

思うに、戦いを終結させることなど恐らくは出来ぬのだろう。彼女はああ言ったが、誰も傷つかずにすむ世界なんて有り得ないのだ。

それでも、一人でも涙を流す人が減ってくれるのなら……。

私達の戦いは続いていく。

次回、『side: Letta・Promise』

あの日誓いを結んだ桜の木は、今年も薄紅の花びらを散らしていません。

薄紅の花びらが、まだ冷たい春風に舞い踊った。もつとも、今の季節が春かどうかも僕には分からないけれど、この桜の木がそう証明してくれていた。ここには、彼女の残り香が漂っている気がした。

「あれから、何度目の春を迎えたのだろう。君はまだあの日の約束を覚えているのだろうか」

心なしか細くなった木の幹を撫でながら、君を想って言葉を投げかける。

春風が、容赦なく生身の僕の身体を打ちつけた。ひんやりとした肌触りが気持ちよかったけれど、あまり外に長居するのも良くない。

「この木は、今も変わらずここに在り続けるのに……、空はあの日からこんなに変わってしまったよ」

最後に君と見た空は、あんなに素敵な青のグラデーションに、白い雲が艶やかなコントラストを魅せて拡がっていたのに。今は、薄い灰がかつた空に、雲が無粋に馴染んで境界線も分からない。吹きすさぶ風は、優しさをどこかに忘れてきたように狂っていたし、木々から漏れる柔らかかった日の光は、荒々しく僕を刺している。

本当に、あれは君だったのだろうか。もしそうなら、どうしてあの場にあんなものに乗って現れたんだろう。やはり、火星政府の刺客として僕達を襲撃させるため……？それならば、何故戦闘には参加して来なかつたんだろうか。考えは取りとめもなく巡り、終着地点すら見えない。

それでも、……君を信じたい。

「地球に残るだと？何故だ？お前が、選考に漏れるはずがないだろ！」

激昂して、シンランは叫んだ。

「これは……僕の意志だよ。なんだか嫌な予感がするんだ。地球をこのまま忘れ去られてしまいそう……そんな予感が」
視線を外して、遠くを見るようにして僕は言った。

「だからって、お前が犠牲になることはないだろう！？いつ火星に来れるようになるかも分からないし、いつまで地球が住めるような惑星であり続けるか、分からないんだぞ！？」

「そうだね……、でも僕はまだ地球に残っている人がいるのに見捨てる事は出来ないよ……。自惚れている訳じゃないけれど、僕が残ることで少しは残された人たちの役にも立てると思うんだ」

桜の花びらが風に舞って、螺旋のように僕らを取り巻いた。

そのせいで、まっすぐに見つめているはずのシンランの顔が、僕の瞳に映っては消えていく。

僕が割と頑固なのは、彼女も知っていたので、説得するのは無理だろうと悟ったようだった。

「それじゃ約束して。必ず、火星に来るって。」

「約束する」

シンランの真摯な言葉に、僕も心えた。あの言葉には嘘はない、勿論今も変わらず、生き続ける。

別れ際に、僕は彼女と最後の抱擁を交わして、手を握り合った。

何故だろうか？鮮明だった、あの日の記憶が少しずつ色褪せているような気がする。酸にアルカリを混ぜて中和していくように、記憶に時間が溶け込んでいったのだろうか。

言葉に出来ない不安が、さざ波のように緩やかに押し寄せては、引いていく。

あの日から、幾ばくの月日をこの地球で重ねてきたのだろうか。

「レータ兄ちゃん！」

「ん？ああ、ユミちゃんじゃないか。外に出たら駄目だよ。どうしたんだい？」

声を聞き振り向くと、そこには同じ施設で生活を送っている少女の

姿があつた。まだ齡十四かそこらだというのに、彼女もまた身寄りを失くして、共に生活を送っている家族の一人なのだ。

「リンお姉ちゃんが、倒れたの！早く来て！」

「え……？」

絶対零度の戦慄が、僕の背に走つた

。

「もう！レータ君達心配し過ぎよ。ユミちゃんも、わざわざありがとうね？」

熱で少し火照つた顔で、笑いながらリンは言った。

彼女は部屋でベッドに横たわっていた。そばには、看病していたであろうおばさんが立っていた。彼女もまた、身寄りを失くして共に生活を送っている家族の一人である。

「本当に……大丈夫なの？明日、政府の診療所に行こう。僕が連れていくから」

「あそこは……嫌」

リンは、かぶりを振って僕の提案を拒絶した。

「そんなこと言っている場合じゃないだろう！もし疫病が何かだったら、どうするんだ？」

「嫌なの！」

駄々をこねる子供のようにそう言うと、ぷいとそっぽを向いてしまった。彼女のこういう態度を見るのは珍しいが、驚きはしなかった。何故なら、彼女も政府に恨みを持っているから。だから、僕もこれ以上強く言うのは辞めておいた。

「分かったよ。その代わり、良くなるまではおとなしくしているんだよ？」

「……うん」

こつちを向いて、納得していないようにほっぺを膨らませて言った。やっぱり、熱に少し浮かされているらしい。

あとは僕が見ているから休んで来てくださいとおばさんに伝えて、

近くの木で出来た椅子に腰をおろした。彼女に目をやると、眠っているらしかった。

安らかな寝息を立てている彼女の、汗で額にはりついた髪をそつと撫でた。いつもは後ろで結んでいる髪を、今日はほどいていた。

僕は、どれだけ君に救われたのだろう。僕は、一生かかっても返しきれない恩を君から受け取っている。それでも、君は自分のことを何も言わない。僕は、君の幸せを祈ってやることしか出来ないのだろうか。彼女との出会いがふつと脳裏をよぎり、その奇妙さに笑みが零れた。いや、今だからこそ、そう感じる事が出来るのだ。あの時は、お互いに必死だった。そんな過去の僕らのことを笑うべきではないのかもしれない。

一触即発で殺し合いになってもおかしくなかった、そんな出会いだった。

シンランや、他の同僚が火星に向かってから、しばらくの月日が過ぎた。

僕は研究室に籠り、自分のすべき事を悶々と考えていた。息巻いて地球に残ったのに、これといった当てもなかったのである。非常に情けないと思うが、これが僕の当時の姿だった。

そんな折だった。僕は久しぶりに地上に出て、外を散歩していた。荒れ果てていた大地を一人歩く僕は、途方もない運命に惑わされている人類の象徴のようだった。そこに道という道はないのに、歩き続けなければいけない。

何故、綺麗な道を選ぶことが出来ないのだろうか。これは、今の自分にも言えることだった。何故、己に越えるべき壁を課すのだろうか。答えのない答えを探そうと、空を見上げていた。真昼の月のように、そこにはあるのに、それを認められない。

そんな漠然とした思想にふけっている時だった。僕の前に、薄桃色

がかかった髪を後ろで結んでいる、黄土色のコートに身を包んだ彼女が現れた。

「その制服は……！！国連軍の……！！」

彼女は僕を見るなり、眼を見開き、そう言って獣のような殺気を放った。僕にはこの時、この殺気の意味が分からなかった。恥ずかしい話ではあるが、僕はどうしようもなく鈍かったのだ。確かに僕は、国連軍の軍服を身に纏っていた。国連軍それそのものは、地球に存在していないようなものだったのだけれど、丈夫であったし、地上を歩くにはもってこいのつくりだったので、良く考えずにそれを着用していた。

「うらあああああああ」

「なっ!?!」

彼女の拳が、弧を描き僕めがけて振りぬかれるのを、左手でなんとか防いだ。

「いきなり、何をするんだ?」

茫然として、僕は叫んだ。

「しらばっくれないで!今更のこのこと、何をしに現れたのよ!? また、私達の暮らしを壊そうというの!もうたくさんよ……、もうたくさん……」

彼女は、瞳に涙を浮かべながら、そう言葉を吐き捨てた。その瞳には、涙と共に憎悪の色が混じっていた。

そして、彼女が放ち続けていた殺気が、加速度的に増幅した。彼女は腰に下げていた銃を抜いていた。

この刹那、僕は初めて命のやり取りというものをしたのだと思う。僕も研究所配属とはいえ、多少の訓練は受けていたので、咄嗟に腰に納めてあった銃を抜いてしまったのだ。

無慈悲な銃声が鳴り響き、彼女は人形のように、力なくばたりと倒れた。

はっと我にかえると、僕は彼女のもとへと駆けだしていた。幸い、弾はかすっただけのようだが、彼女は気を失っていた。迷っている

暇はなかった、こんなところに女性一人放っておくなんて、命の保証も何もない。

僕は彼女を背負って研究所へと運び込んだ。

その時初めて、現実を視た。

僕は守られていた存在なのだと、初めて気付いた。

そして、そんな自分がどうしようもなく愚かだと痛感した。

僕は、眼を覚まして落ち着いた彼女から、国連軍の行いを聞いた。

そして最後に、ベッドに横たわった彼女は蔑む様な目で僕を見て、こう結んだ。

「君は国連軍の一員なのに、本当に何も知らないのね……」

「情けない話だけだね。僕はひたすら研究に没頭していたから、外で何があつたかなんてまるで知らなかつたよ」

エンジニアで研究室に籠って仕事をする事の多かつた僕には、とても受け入れる事の出来ない現実だった。もともと、彼女の言葉をそのまま鵜呑みにした訳ではなかつたのだけれど、もし話していることが嘘であるならば、ただ歩いている僕に喧嘩を売る理由はないし、その言葉には、不思議な真実味があつたのだ。その後、リン以外の人々からも詳しい話を聞いた。

実行隊のシンランはこれに気付いていたのだろうか。これは、僕が地球で時々、一人議論する当てのない題目である。

「僕は、自分が生み出す兵器が、何の為に使われていたかも知らないなかつたんだな……」

自分達が、世の為、人のために働いているという自負があつた。全て崩れていった。お笑い草だった。

信じると言うことは、疑うという前提条件のもとで浮かび上がる思想である。

この時に、シンランを信じると思った僕は、多少の疑いの念を抱い

ていたのだろうか。

同時に、非難の声を浴びても、自分の信念を曲げずに行動した彼女を想った。それは、即ち彼女を信じることだった。

僕の中で、信じることに疑うことが信号機のように点滅を繰り返した。ただ、それは全くのイコールではなかった。疑うことは簡単だった。一つでも綻びが見つかれば、そこからは泥沼のように沈んでいくだけなのだから。信じることは難しかった。その全てを、完膚なきまでに信じ続けなければいけないのだから。

それでも僕には、彼女を信じ続けた。不思議なことに、これには彼女を恨むべき立場であるはずのリンの言葉が記憶に残っている。

僕達が出会って、シンランのことを彼女に初めて話した夜だった。いつものように、夜に浮かぶ青白い月を見上げていた僕に、彼女は言った。風が心地良い夜だった。

「シンランさんのこと、信じているんでしょ？ いや……違うか、信じたいんでしょ？」

「うん……君がどう言おうと信じているつもりだよ」

「ならば、信じてあげなさいよ」

「え……？」

「信じているつもりじゃなくて信じてあげて。例え私に何を言われなくても、それを突き放して彼女を信じなさいよ。そして、あなた達の信念と誇りを私に見せつけて。それが私にとっても希望になるから」そう言って彼女は、僕と初めて出会った時のように、鋭い視線を地平線に向けてから、こつちを見て微笑んだ。苦笑いのような、そんなことを口に出した自分に戸惑っているようなそんな笑顔だった。その時、僕がここに残った意味を一つ見つけたような気がした。地球に残っている全ての人の為になるなんて果てのない思いじゃなくて……そんなことじゃなくて、せめて自分の周りにいる人達

だけは何が何でも守り通して、そして火星に連れて行こうと。

それは、贖罪なんて言葉で終わらせたくなかった。

僕のただの我儘だとも思う。ただ、絶対に叶えると決めた最強の我

儘だ。

僕にその力があるのかも分からないし、今の道筋が本当に理想なのかも分からないけれど。

良く考えると、殺し合いになってもおかしくなかったじゃなくて、殺し合いそのものだよなあとか思ったりして、追憶の旅はおかしな終幕を迎えてしまった。

ふと、リンを見ると目を覚ましていたようで、視線を宙に泳がせていた。

「起きたんだね、気分はどう？」

「大分、落ち着いたかな。ところで……レータ君……、今何考えてたの？」

「初めて君と出会った日のことをね。あの時はびっくりしたなあ、いきなり殴りかかってくるんだから」

「くすつ、そんなこと言ったら、レータ君も私を撃つたじゃない、もつとも、あの時先に銃を抜いたのは私だけどね」

リンは、片目でウインクすると悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「あの時のことは本当に済まないと思っっているよ」

「……一つ、聞かせて」

少し、言い淀んでいるような気配を漂わせてから、彼女は尋ねた。

「君らしくないね、何？」

「今、レータ君が私達と暮らしているのは、いや私達を助けてくれているのは、あの時の償いのつもり？」

意外な言葉に少し驚いた。

僕は無言で首を振った。そして、こう言葉を続けた。

「そんなんじゃない。それに、助けてもらっているのは僕の方だよ。僕が君達に感謝してる。急にどうしたんだい？」

「確かめないと、……不安だったの。レータ君が急に消えてしまったりしないかって。レータ君には、ここに残る理由も何も無いもの」

泣きそうな顔で、リンは言った。

「本気でそう言ってるんなら、哀しいな。ここに残る理由がないなんて……そんな訳ないじゃないか」

何も分からなかったあの頃とは違う。今は、心からこう言える。

『君を必ず、幸せにする』

複雑な、背景とか事情とか理論とか言葉とか立場とか、そんなものはどうでもいい。

彼女が幸せになれない世界なんて、あつていいはずがないから。

いずれ、僕達には別れが来るのかもしれない。でも、その時に彼女に映える顔は笑顔じゃないといけないから。

だから、そんな遠い明日が、果てない明日が来るまで、僕はここに
いるよ。

リンは思っていた。

レータ君には、シンランさんがいる。レータ君は彼女を絶対に忘れない。それを少し悔しいと思う時もあったけれど、今はそんなこと
どうでも良かった。いつか、私達から、私から離れる時が来ても、
それを私は受け入れよう。だって、それが当然なんだから。

私が一番欲しかったのは、一緒にいてくれる家族だから。だから、
レータ君を含めて今の生活がとても楽しいの。これ以上は何もいら
ない。私は、もう幸せです。

レータはリンの幸せを、リンはレータの幸せを祈っていた。

壊れていく地球で、それは粉雪のような儚さと優しさを持って光り
続けた。容赦なく灼熱を与える太陽に、負けることなく降り注
いでいた。

明日は来ないかもしれない、待ち望み、焦がれた未来は、残酷な結
末を見せるのかもしれない。

ただし、彼らは、そんなことで打ちのめされたりはしない。

誰かの幸せを祈るといふのは、砂糖菓子のように甘くないことを既

に知っているから。

次回、『第十六話：The pain of desire』

それは、代償。望んだが故の代償。

兄妹が再会を果たす。

第十六話：The pain of desire

長い銀髪をツインテールにして、ゆったりとしたローブに身を包んだ少女は、憂えていた。

『すぐに帰る』という言葉だけを残し、火星に去っていった彼のことを心配していたからである。

「何で心配ばかりかけさせるのですか……、フィエン」
少女は、ひとりごちた。

研究所の窓から見える風景は、別れたあの日と何も変わらずにそこにあるのに、彼女の心は絶え間なく揺れ動いていた。

(……一体彼は何の用事で、火星に行ったのだろう。いや、そもそも何故地球にいて、時々ではあるが、私の世話を焼いてくれるのだろう。今更だけれど、私は彼のことを何も知らない。

今まではそれを特に何も思わなかったけど、今回は無性に悔しい……。

地球で戦いが始まったことは知っている。研究所の職員達が慌ただしく噂しているのを聞いたし、ここからも少しは望遠鏡に映ったから。彼が火星に行った時期から考えて、関連性がないとは言にくい。それなら、彼が怪我を負っている可能性もある……) 考えれば考える程、不安は募っていくばかりだった。でもそれは、どうしようもなく彼女の手に余る問題だった。

「お兄様も、お父様も……無事なのでしょうか……」

そして、その目は火星にいる肉親へと向けられた。当てなく流れる雲のように無数に形を変えながら、不安は彼女の心を覆っていった。

「フィエンさん……セレナのこと……感謝します」

「私は、隊長の任務を受けて、それを遂行しただけだ。君の為では

ないよ、レオ君」

レオの方を振り返るでもなく、顔色を変えるでもなく、そっけなくフィエンは言った。

しかし、それも仕方のないことなのである。カレンの行方が未だ分かっていないのだから。レオは彼の胸中を察して、これ以上は話しかけないことにした。

二人は、マーゼ・アレインのパイロットスーツを着込んで、地球へ向かう宇宙船に乗っていた。地球で戦闘が行われていて、レータとリンから連絡が入っていたものの、火星でも色々問題が起きてしまっていたので、結局救助に向かえなかったのだ。現在の地球の様子が見えない以上、メギドに乗り込んでいくべきだと、レオは提案したが、父、オーベルト・アケルトによって却下された。余計な火種を増やすべきではないというのだ。

「レータさん、リンさん、カレンさん。みんな無事であるといいのだが……、そしてセレナ、君も……」

黒々とした宇宙を切り裂きながら、青い星へ向かう船で、フィエンは状況を悲観しない訳にはいかなかった。みな、自分よりも手練であり、簡単にくたばるはずはないと、自らを納得させようとしていたが、周囲を渦巻く暗黒がそれを許しはしなかった。

「セレナ……、久しぶりだね」

「お兄様……、なのですか？」

セレナは目を点にして驚きを表現した。長い間姿を消していたフィエンが、ようやく帰って来たと思っただら、まさか兄にも会えるとは全く予期していなかった。

幾年ぶりの再会なのだろう、どれだけの月日による隔たりが二人の間にはあったのだろうか。

「まさか……こうやって会えるだなんて……」

セレナは口を手で押さえて、感嘆の声を漏らした。瞳が、まだ現実を信じられないとでも言うように揺らめいていた。

「フィエンさんが、こうして手引きしてくれなかったら叶わなかった再会だよ。彼には感謝しなくちゃ」

レオは親指でくいくいとフィエンの方を指した。

「フィエンが……ですか？」

「無事で良かったよ、セレナ……」

兄弟の再開に水を差すまいと思って距離を置いていたフィエンが静かに言った。

「また……無茶をしたんでしょね」

セレナの小言に、フィエンは苦笑いを禁じ得なかった。

しかし事実、レオは火星政府からは、既に裏切り者として手配されていたので、地球といえどセレナに会う為に研究所に入ることは賢明とは言えないだろう。そこで、フィエンがセレナを迎えに研究所を訪れたのだった。フィエンは、カレンのおかげでマーゼ・アレインとは無関係であると思われるので、何事もなく完遂出来たのだった。

「カレンのおかげだよ……これも」

と、フィエンが、目を閉じて、今度は誰にも聞こえないような声で囁いた。

（だから、勝手にどこかへ行くことは許さない。必ず、連れ帰るか……）

私が一人で助かって、それで喜ぶなんて思ってるのか。フィエンは、尽きる事のない文句をカレンに浴びせたかった。

「ところで……セレナ。火星へ帰ろう、父さんも待ってる」

「レオ君、それはっ……！」

レオの想定外の発言に、フィエンは身を乗り出して制した。隊長であるオーベルトからは、そのような命令は下っていないからだ。時期が時期だけに、あまり手荒な真似をすると摩擦が生まれる。それ

が連鎖して、大きなうねりを生んでしまう可能性もある。

「いいえ、お兄様。それは出来ません」

「えっ……？」

予想もしていなかった返答にレオは驚いた。

「そう、あの時。私が火星に住む子供の中から地球での実験体にならざるうと選ばれた時、私はとても悲しかったし辛かった。何故、私なのだろうと枕を濡らす夜もあった。自分の運命を呪って、全てを投げだして、逃げ出したいと思ったりもした……。でも今は……違います」

小さく息をつき、セレナは言葉を続ける。

「これが、私の戦いの場なのだと、今なら自信を持って言える。だから……、私はまだ、ここを離れる訳にはゆきません」

「セレナ……」

「自分勝手なことを言っているのは分かっています。危険を顧みず、迎えに来てくれたお兄様には、感謝をしてもしきれません。でも、私だけが安寧を享受することは出来ません……。いつか、争いのない世界になったら、その時はみんなで暮らし……たいですね」

セレナはそう言って、ふわりと笑った。綿菓子のような、白くて柔らかい笑みだった。彼女だって、地球が好きな訳ではない。火星で家族と暮らしたいに決まっている。それでも、彼女は自ら選んだのだ、自分の歩む道を。

「そうか……」

レオは残念そうにため息をついた。どうせフィエンから止められるだろうとは思っていたが、まさかセレナから断られることになるうとは思わなかった。フィエンだけならば、無理に説得して連れて行くこともできたろうに、本人が拒否するならばどうしようもない。

しかし、反対に自分の知らない所で、強く優しく成長していた妹を、嬉しくも思った。

二人は、絶対に無理をしないようにと念を押して、そこを後にした。ただ、セレナにも、「フィエンとお兄様こそ、無理はしないでくだ

「さいね？」と言われてしまったので二人は苦笑せずにはいられなかった。

フィエンとレオは、続けてレータとリンの住む施設へ訪れた。見かけ上は、幸いにも特に被害を受けている様子はなかった。フィエンの最悪の不安は回避された。だが、まだ内部の様子も分からない。悪い方へと考えてしまうのは、彼の癖だった。

「誰だ!？」

突如、施設とはあさつての方向から詰問の声が聞こえたので、二人は恐縮した。

「わ、私です。お久しぶりです、レータさん……」

「フィエンさんか……、ひとまず中に入りなよ」

レータも、フィエンの出現に一瞬目を丸くして驚いたようだったが、敵でないことにほっとしているようだった。

「あの……リンさんは？」

「今は、体調を崩して休んでいる。だから、僕が一人で対応しよう。いいかな？」

フィエンは少し安心した。リンの姿が見えなかったので、何かあったのでは……と邪推していたのだ。

「はい」

と、フィエンは、眼鏡をくいと上にあげて答えた。

ここで、レオはレータという名前がどこかで聞いたことのある名前だなとは思ったのだが、シンランの口から出た名前だという所までは辿り着かなかった。

「ところで……君は初めて見る顔だけれど、新しく入ったメンバーかな？」

レータは、レオの方を向いて訊いた。

「違います。彼は、隊長の実息。今までは火星政府側だったのだけれど、訳あって今は行動を共にしています。レオ君、ご挨拶を」

レオのに向けられた問いだったが、フィエンが応えた。

「レオ」アケルトです。セレナがお世話になりました」

レオはそう言って、頭を下げた。

「ふむ……、なるほど」

「レータさん、まずは謝らせてください。私達のせいで危険な目に遭わせてしまったのに、助けに来ることも出来ずに……っ！」

フィエンは俯いて、肩を震わせて言った。その声には、悔恨の色が滲んでいた。

「頭を上げてよ、フィエンさん。そういうことならお互い様さ。僕らのせいで君達にも被害が出てしまったようだし」

レータは、微笑んで言った。

「そっ、そのことは私達が根源ですから、レータさんが謝ることじやっ……！」

フィエンが、まだ納得していないように続けようとしたので、レータは両手でなだめて話を他の方へもっていった。

「本題に入ろうか。火星は今どうなっている？」

「え……あっ荒れています……。いえ、これから荒れていくと思われま。間違いなく。それで、レータさん達もこれからこの場所の安全は保障できませんので、どうかこの住民たちだけでも火星か月に避難させたいのですが……」

レータはこれを聞くと、ふむと頷いて若干考えるような仕草をしてから、きつぱりと言った。

「いや、……いいよ、ありがと。今は、リンが動ける状態じゃないし、僕達だけ先に行く訳には行かない。それに火星や月だって安全な訳じゃない。それなら、地球の方が僕達に地の利があるからね。政府に上手く話がついたのなら、その時に……ね」

「お言葉ですが、政府と話し合いで解決できるような状況ではないかもしれません……。その場合、最悪戦うことになるかもしれないのです」

フィエンは語尾を強めていう。実際に、火星で彼は、政府側とぎり

ぎり駆け引きの場に立たされたのだ。

「分かつてるよ。メシアで戦うかもしれないと言っただろ？僕だってそこまで穏やかな心境じゃあない。もしもの場合は……許可する。その代わり、人は……殺さないことを約束して貰おう」

「ありがとうございます。勿論、私達だって戦争がしたい訳ではないのですから、人殺しなど……行いたい筈ありません。ただやはり……大切なものを……守りたい」

「そうだよ。大切なものを守る為には剣を握らなくてはいけない場面もある。ただ、狂気に犯されないようしなくては……」

レータは、リンと共に火星政府の刺客と戦ったを思い出した。あの選択は、間違っていないかっただろうと彼は思っていた。ただ同時に、無闇に力を行使用することの危険も彼は識っている。

「それでは、メシアを月に運びます」

「月？火星ではないのかい？」

「はい、火星の基地はとも使える状態ではなくて、今は月の裏と、その近くの衛星を拠点にしています。そこになんとか、持ち込みたい。火星政府に知られるのは最初から覚悟の上です。宇宙空間に出してしまえば、上手くくまらせることが出来るので」

「なるほど……、その辺りは君達に任せるよ。後は、君達を信じるだけだ。僕らに出来るのは……」

「はい、必ず……」

「あの……」

そこまで沈黙を貫いていたレオが初めて口を開いた。

「レータさんつてもしかして、シンラン……という名前に聞き覚えはありませんか？」

その名前を聞き、レータは雷に打たれたような衝撃を受けた。再会の約束をした、かつての恋人。その名前を突然現れた少年の口から聞くことになるとは思わなかった。

「シンラン……君は、彼女を知っているのかい？」

それを聞き、レオは疑念が確信に変わった。そして、自分がシンランについて知っていることを全てレータに話した。もっとも、その多くを彼は知っている訳ではないのであるが。

「なるほど……開発部の部長。そして……そうか地球のことを考えるよう指導してくれているのか……彼女らしい」

シンランの現在の様子を聞いたレータは、安堵のため息を漏らした。彼女は、彼女なりの方法で戦っている。地球のことを見捨てた訳じゃない。僕が永い間寄せた信頼は裏切られなかったと、彼は胸をなでおろした。

『出来ることをやればいいんだよ、……焦らずにな。共に頑張ろう』
レオもまた、シンランにかけられた言葉を思い出し、きりりと胸が痛んだ。どんな理由があれ、彼女を裏切ったことには変わりないのだ。シンランが、リクのメギド鍛錬をする時、レオ預けたカードキ―。それを人知れず複製し、マーゼ・アレインの為に利用した。その事実、変わらない。

（僕は多くの犠牲の上に、僕の望みを果たした。それを背負わなければならない）

施設を後にした二人は、地球に名残惜しむ暇なく、宇宙船へ乗り込んだ。

「さて、それでは火星に戻ろうか、レオ君」

「はい、フィエンさん」

「本当は……君に感謝をしている」

ぼそりと独り言を呟くように、フィエンが言った。

「え？」

「君の助けなくして、カレン救出作戦を練り上げることは不可能だつただろう。それなのに、冷たく当たってしまったって済まない」

「いえ……、それにその言葉は作戦が成功するまで、とっておきましょう」

レオは、照れ臭くなつてほほをかいて言った。

「成功……させるんだよ、私達の手で！」

ファイエンは、握りこぶしを作つて、レオに掲げた。

傾きかけた夕日が、二人の顔に反射して、茜色に煌めいた。

意を理解したレオは、同様に握りこぶしを作つて、互いの腕を交差させるように重ねた。

「はいっ！」

「おかえりなさい、シンラン」

「サクラさん……」

地球から帰還したシンランは重い足取りで、情報部へと向かつて歩いてきた。すると、申し合わせたように、情報部部长であるサクラはセブンスが、そこに現れた。

見知った優しい顔に、シンランは無性に泣きたくなった。

「どうだった？細かい報告は後でいいわ。シンラン……あなたの探していた答えは見つかったの？」

問い詰めるようでもなく、語りかけるような優しい声色で、サクラはシンランに訊いた。

「分からない……何も……！地球に行けば、答えが見つかる……！そう思っていたのに！迷宮の出口に新たな迷宮の入り口があったかのように！レータのこと、ユグドラシルとかいう訳の分からない部隊のこと、地球に在った機体のこと……私の知らない所で何が始まるうとしているんだ……」

視線を床に落として唇を噛み締めながら、シンランは言った。

「そう……。何も上手くいかないわね……」

サクラは天を仰いで、ため息交じりに心象を吐露した。

「サクラさん……？」

お互いに少しずつ、ここ最近にあったことを話し合った。それは本

当に、こんな短期間に起こったことなのだろうかと思うほど、たくさんのことだった。それは、形式上は報告という形だったかもしれない。それでも二人の間に、そんな義務めいた雰囲気は漂っていなかった。彼女達は、部長同士という間柄、共有できる感情も多く、度々会っては相談し合っていた仲だったのだ。

「そんな……クー君が……」

シンランは、茫然として言った。

「心配しないで。クーのことは、私が必ず助ける。それが親としての当然の務めだもの。当てはあるから。これも私の報いなよ、この道を選んだが故の」

「報い……」

「ええ……私は、遠回りでも私のやっていることが子供たちを守ることへと繋がると思っていた。寂しい思いをさせてでも、それが私のなすべきことだと信じた。それが、こんなことになるなんて皮肉ね……」

サクラは遠くを眺めるようにして言った。

「私の、選んだ道も……間違っていたと……いうのだろうか」

「それは分からない、まだ、最後まで。私だって、何もかも諦めた訳じゃない。この道を選んだ責任を

最後まで果たす。だから、下を向くのはこれではばらくはお預けにしましょう？お互いにね」

サクラは、シンランの肩に手を置くと、片目でウィンクをした。

「ああ……そうだな」

二人は、今だけ一度だけ、後悔をした、泣き言を言った、弱音を吐いた、涙を浮かべた……それは普段は絶対に見せる事のない弱さだった。いや、曝け出す事の出来ない、弱さだった。部長という立場上、どんなに辛いことがあっても、虚勢を張って振る舞わなければいけない。それでも、人間はそこまで強くはなれないから。だから、時々是这样やって誰かに頼りたいのだ。

彼女達は、もう前を向いていた

次回、『第十七話：救出作戦』

図らずも、これが運命か、戦いはまた繰り返す

「駄目よっ、ハルカツ

」！

。

第十七話・救出作戦（前書き）

すみません、次回予告詐欺です。

第十七話：救出作戦

「以上だっ！今回の作戦は戦闘の恐れもあり、非常にリスクな任務となる。故に、少数精鋭で主に活動をする。レオ・アケルトから提供を受けたマップをもとに進行することになるが、臨機応変に対応して貰いたい。例えば……マップと構造が違っていたり……」

「エクスルツ！」

淡々と言葉を並べるエクスルと呼ばれた男に、矢のような怒声が浴びせられた。

「何でしょう、フィエン？」

エクスルは意に介する様子もなく、落ち着いた声でフィエンに訊いた。

「レオ君は、私達の仲間です。貴方の気持ちも分からなくはないですが、迷いが生まれれば、このミッションは失敗します。彼を信じましょう」

流れるような動作で眼鏡の淵を持ち上げると、先程の怒声とは打って変わって、落ち着いた声でフィエンは言った。

「ふむ……。カレンは君と共に行動中に、火星軍のやつらによって捕われたのです。君だって……」

「その辺にしとけよ、エクスル。そんなことを言ったら、先のラビリス計画を練ったのもほとんどがお前だったろ？」

「ハヤブサ……」

エクスルは、近くに控えていた長身の男を見上げて苦々しげに言った。ラビリス計画、そしてその後の処理のプランを練ったのもほとんどがエクスルだった。しかし、その作戦は成功したとは言い難い。故に、彼自身ももちろんその責任を感じていた。それだけに彼のこの作戦に対する執念は強い。だからこそ、再びオーベルトはこの作戦の指揮を命じたのだ。軍隊でもなんでもない、この同盟において彼は、もつとも頭の切れる存在であることは確かであった。

「ふっ……、エクスル、俺もお前を信頼してるよ。それにもしものことがあったら、俺がその場でなんとかしてやっから！だからお前も俺を信じやがれ」

ハヤブサと呼ばれた男は、手ぶりを交えながら、自分の胸に親指を当て、そう断言した。彼は、軽薄そうではあるが、マーゼ・アレイン内での信頼は厚く、頼りがいのある男として慕われていた。

「そういうことだ、エクスル……。もしレオが裏切ったら、私を刺そうが撃とうが好きにするがいい。勿論、エクスルに限らず、誰でも構わんがな」

先程まで黙っていたオーベルトが、自嘲気味に笑いつつそう言った。オーベルトにとってもこの作戦を執行するのは、少なくとも決断力を試されることとなった。カレンを救いたいのは当然、これからの活動にカレンを欠くことは出来るはずもない、しかし、その為に多くの人員を危機に晒さなければならないのだ。悩むオーベルトであったが、マーゼ・アレイン内の空気は、完全に作戦執行派だった。動かない対政府との局面にいら立ちを隠せず、強硬策に出たいという者もいたが、ほとんどはカレンの身を案じてのことだった。それならば、隊長である自分自身が、怖じ気づいている場合ではなかった。

「っていうか、レオさんが裏切る前提になってませんか？それ」

まだ幼さの残る少女のその一言で、部隊の緊迫していた雰囲気は解かれ、笑いに包まれることになった。

「くっははは……、全くシアルの言うとおりだよ。お父様ぐらい、信じて上げましょうよ、ねえレオ君？」

「はあ……」

ハヤブサは、レオの肩に腕を回してあっさりと言った。だがレオは、なんて言ったらいいかわからないのか、困ったような笑みを浮かべるだけだった。

「でも、本当にいいんだな？シアル。この作戦、どんな目に遭うかわからないぞ？怖いなら、怖いって言えよ？」

「うん……、怖くないって言ったら嘘になる……。でも、この任務は私に適任だから……」

ハヤブサの問いにシアルと呼ばれる少女は、俯いて一瞬怯えたような表情を見せたが、すぐに顔を上げて握りこぶしを作って見せた。

「いい覚悟だ」

ハヤブサはにっと笑った。

作戦の概要はこうだった。

エクスル、ハヤブサの乗るメシアが情報部の網にかかるように、火星空域に躍り出る。その間に、レオ、フィエン、シアルの乗るメギドが火星の裏に回り、カレンを救出に向かう。言葉にすれば簡単だが、細い細い綱渡りな作戦だった。まず、囿のメシアはそう長い間効果を有しないだろう。二人は戦闘を行うべきではないので、うまく情報部 出来れば防衛部も を出し抜ければいいが、

そうでないならば、さっさと退場するということになっていた。フィエン、レオ、シアル組は、フィエン、レオの両者が救出に侵入し、カレン救出を試みる。ここで問題とされるのが、救出後の脱出だった。侵入に用いたメギドを帰還まで守らなくてはならない。この為にシアルが“人質”として演技をするのである。あくまで、テロリストによって捕われ閉じ込められた可哀そうな少女を振る舞えれば、闇雲にメギドは攻撃を受けないだろう。内側からロツクを掛けていき、シアルが解除方法を分からないと言えば、鹵獲、保護される心配もない。勿論何かあれば、ハヤブサ、エクスル機がシアルの元へ向かう手筈になっている。

当初、これの初期プランをエクスルから受け取った時、オーベルトは苦悩した。確かにメギドが攻撃を受けず、鹵獲もされない方法としては適切であろう。しかし、ここに一人残る役を誰が引き受けるだろう。いくら人質をアピールしても、攻撃を受けない保証はないのだ。死と隣合わせのこの役割を、誰が

好んでやるだろう。エクスル自身も少し負い目があるようだったが、

やはりどんなに手を尽くしても危険のないプランなど存在しないことを、彼も、そしてオーベルトも分かっていた。そんな折だった。まだ発表もしていないこのプランがどこから漏れたのか分からないが、シアルがこの役を志願したのだ。

「この役割は私が適任です……。メギドの操縦も出来ますから、いざとなつたらなんとでもなりますしね。」

「シアル……駄目だ。君には危険すぎる……。」

「ふふつ、これは誰がやっても危険な任務だと思えますよ？こう見えても私、女優になるうと思つて演技の勉強をしていたこともあるんですから。顔を作るのは得意ですよ？」

「だが……。」

オーベルトは、苦い顔をした。シアルが演技の手ほどきを受けたことがあるというのは初耳だった。もつともそれが本当かどうかも分からないし、この際それがどれほど結果を左右させるかは分からない。「任せましようよ、隊長」

「ハヤブサか……。」

いつの間にか、ハヤブサが入口に立っていた。

「こいつが演技の勉強をしていたというのは本当です。俺が保証しますから」

「そういえば、君とシアルは長い付き合いだったな」

「ええ。こいつは今まで、散々な目に遭つてきました。それこそ言葉で形容も出来ないくらい。生まれた時代を恨み、自分の人生を呪つて生きてきました。ここは、マーゼ・アレインは、こいつにとつて最後の居場所なんですよ」

「ありがとう、ハヤブサ。後は自分で言うから」

ハヤブサの言葉を遮り、シアルは先の言葉を紡いだ。

「今まで私はここでたくさん幸せをもらいました。それまでの哀しみを打ち消すくらい強く、大きな。恩を返したいんです」

はつきりとした声で、シアルは言い切った。その瞳には陰りは見え

ず、煌々とした決意の強さを表していた。

オーベルトは二の句が継げなかった。今まで、人の後ろに隠れる事が多かった気弱そうな少女にはこんな一面があったのかと思った。

オーベルトは、立案時のことを思い出していた。ここまできたら、迷い、悩み、心配するのは皆に失礼である。

「それでは、カレン救出作戦を開始する　　！」

深緑のパイロットスーツ身を包んだマーゼ・アレインの面々は敬礼で応えた。

「センサーに反応？いや、まさか……？サクラ部長！」

「どうしたの……？」

情報部部長のサクラ「セブンスが、怪訝そうに訊いた。

「センサーに大きな物質反応が……、しかも相対速度が岩石等のスペースデブリでは、考えられない値を出しています。機器の故障でしょうか……？」

モニターを監視していた情報部員の管制担当の男は、呑気な声で言った。火星宙域には、情報部の衛星センサーが張り巡らされているが、目的はスペースデブリ等の衝突から火星の施設を守る為である。故に、それ以外を映すことはほとんどない。しかしサクラは、心当たりがあった。マーゼ・アレインである。

「映像出しなさい！」

「はっ……はいいい！」

サクラに気圧されて、男は慌ててモニターに映像を出した。そこには、明らかに自然ではないものが映し出されていた。それは、メギドと酷似した形状ながら、そのカラーリングはメギドの黒と対照的に、純白にコーティングされて、よりスマートになっていた。

「え……なんだこれは……？」

「解析急いで！早く！」

茫然として、モニターを見やる男を尻目に、サクラは直ぐに待機していたオペレータに指示を出した。

そして自分は、端末に勢いよく番号を入力すると、インカムに向かって叫んだ。

「アルト！？未確認の機体を確認したわ。敵の可能性が高い……いや、そうとしか考えられないわ。貴方にはまだ渡してなかったけれど、シンラン部長の報告にあった、地球で量産された機体と思われる……！直ちににそちらでも、メギドに出撃準備をして！」

サクラは、息つく間もなく一気にそれを話した。アルトは、一瞬驚いたような声を出したが、すぐに状況を？み込み、了解の旨を伝えた。

それは、お互いの信頼関係がなければ出来ない芸当であった。

作戦通り、フィエンとレオ、そしてシアルの乗ったメギドは、火星の裏側に回り込んだ。そして建物内に進入するのに都合のいい場所を見つけ、そこにメギドを留めた。

「シアルさん……」

不安そうにレオは、シアルに声をかけた。

「ふふっ、レオさんは何の心配も要りませんよ。私もメギドの操縦は出来ますから。もしもの時は、戦います！」

シアルは努めて笑顔を作ると、心配するレオに笑いかけた。怖くないと言ったら、嘘になる。それでも、今は心配させる訳にはいかない。シアルはそう思っていた。

「シアル」

「は、はい……冗談ですよ」

フィエンの制する様なきつく低い声に、シアルは押し黙った。

「作戦通りにするんだ。そうすれば君に危険が及ぶことはない。間

違っても、武器を抜いてはいけないよ？」

あくまでシアルは、被害者を装うことが大切だった。テロリストに捕われた、可哀そうな少女。それが、シアルが演じるべき道化だった。例え本音でないとは言え、大切な仲間を貶めるようなことは言いたくなかったけれど、今回の任務にはそれが必要だった。万が一、ハンドガンを使ってもしたら命の保証はないだろう。この間の出来事で、火星政府がピリピリしているのは、誰にでも容易に想像できた。

「それでは……。なるべく早く戻るようにするから」

そう言つて、フィエンはシアルに笑顔を見せて、その頭に手を置いてからレオと共に歩み出した。

フィエンとレオは、素早くそして気付かれぬよう隠密に移動した。細かなマップは一応所持しているが、ほとんどは二人の頭の中に入っていた。これといった障害もなく、カレンが閉じ込められていると思われる棟まですんなりと来ることが出来た。囚役がうまくやってくれているのか、しかしこのまま何事もなくいくとも二人は到底思えなかった。

「なるほど……。私の読みは間違つてなかったようだ」

低く重い声と共に、通路の影からコツコツという歩く音が、二人の耳に聞こえた。重力を発生させている地域の為である。

二人の期待は悪い意味で裏切られる結果となつてしまった。

「やはり、目的は捕虜か……。！テロリスト共が……。！」

レオとフィエンの前に立ちはだかるように、白いコートを羽織つた長身の男が現れた。長く白い髪を後ろで束ねている。その眼光は鋭く、そのまま敵を射んとしているかのようだった。

「くっ……。待ち伏せされていたかっ！」

フィエンは、吐き捨てるようにそう言つと、腰のホルスターに下げている煙幕弾を激しく地面に叩きつけた。みるみるうちに辺りは煙に包まれ、三人の視界を覆つていった。

「レオ君！ここから先は、君に地の利がある！先に、ぐあつ……！！」
言い終わらぬうちに、粒子ビームが煙を突き抜け、フィエンの肩をかすめた。

「無駄なあがきを……、貴様達は逃さない！」

男の精悍な声が聞こえ、距離を詰めて来る足音が響く。

「行け！レオ！」

「はい！」

フィエンは簡潔に、用件だけを叫んだ。レオはそれに戸惑うことなく、返事をする横の通路に駆けていった。

大した奴だとフィエンは思った。こういう時、普通は躊躇するか、足がすくんで動けなくなるものだ。にもかかわらず、あいつは颯爽と去っていった。自分には、それが出来なかった。あの時、カレンに救われなかったら、絶対に逃げきれなかっただろう。それを、一時は責めたが、今では同じことを自分がやっている。皮肉なものだなど、苦笑した。しかし、それも束の間、煙を切り裂いて粒子ソードがフィエンに襲いかかった。

「くっ……！！」

なんとか、銃を盾にして持ちこたえたものの、接近戦ではどう考えても銃は剣に敵わない。しかも敵は相当のやり手に見える。さて、どうやりすごそうかと、フィエンは思った。

「ここで貴様達を逃すと、ティラナに合わす顔がないな……」

ユグドラシル隊長、ヴェクトル・ホムラは、そう呟き粒子ソードを翻すと再び振りかざし、フィエンの持つ銃を吹き飛ばした。

火星の空域に、一つの巨大な影が浮かんでいた。それは無機質にまばゆい光を反射しながら、極めて自然な動きで空間を漂っていた。それを見て何であるかを知るものは畏怖の念を抱き、知らないもの

は恐れおののくだらう。

「座標軸確認、データをパイロットに転送……完了。ハルカツ！」

「ああ！」

その掛け声とともに、メギドは宇宙を駆け、その右手に携えたハン
ドガンから粒子ビームを放っていく。

それは、意図されて配置したように、幾何学模様を描いて彷徨つて
いた幾つもの小型の岩石を砕いていった。

「一つ外したっ、ユーリ！座標ポイントの修正を！」

「了解！」

ハルカの言うことが、予め分かっていたかのように、ユーリは手元
のコンソールパネルを既に打ちつけていた。

そして、数刻後そこには粉々に砕かれた岩石の欠片と、一機のメギ
ドが存在しているだけだった。

「ふう……、大分精度が上がってきたわね、ハルカ」

ため息を漏らしながら、ユーリはハルカに労いの言葉をかけた。狙
撃の訓練をやりたいと言い出したのはハルカであった。それは要す
るに戦いの訓練とでもいうことで、軍人でもないユーリは少しだけ
ためらったが、メギドのオペレータを志願したのは事実なので、そ
の責務を果たそうと思った。また、レオとの生々しい戦闘の記憶が
彼女の脳裏をかすめたせいでもあった。

「いや……こんなんやまだまだあかん……、もっともっと強くなる
んや……」

ハルカの、その瞳はどこか別の遠い場所へ向けられていた。

ユーリは、今のハルカを少し怖いと思った。時々見せる憤怒の形相
のせいかもしれないが、まだ彼女の底を知りえないせいでもあるの
かもしれない。ハルカが先の戦闘で敗北し、メギドを大破させてい
たことは聞いていた。アルト部長と、サクラ部長が危機一髪助けた
とのことだったが、普通そんな体験をしたのなら、恐怖で二度と
戦線に立ちたいとは思わない筈である。当初は、へこたれずに前を
向いているハルカを、ユーリは尊敬の眼差しで見つめたが、少し常

軌を逸しているような気もするとも感じていた。

「ユーリ……何やあの機体は……？」

ハル力は、モニターに映った不自然に放置されたメギドに目をやった。

「ん……。確かにちよつと妙ね。解析してみる」

ユーリはモニターを一瞥すると、手元のコンソールパネルを操作し始めた。慣れた手つきで、ユーリは作業を進めていく。そして辿り着いたのは、意外な
いやむしろ妥当なものと言った方が正しいのかもしれない
結論だった。

「えっ？これは……まさか……、……盗まれた機体……ですって……？」

ユーリは困惑して自分に問いかけるように言った。そして、自分たちのもとから去っていった親友のことを想った。

あれは……レオ……なの？それとも……。

複雑な気持ちだった。彼とは、あどきに決別したはずだった。リクと共に死闘を尽くして戦って、それで終わりのはずだった。もう二度と戻れないと、そう腹を括ったはずなのに……。一度はレオに剣を向けた、それでも再び同じ機会が訪れたら私は剣を振れるだろうか？

今はまだ分からない。

「ひとまず、情報部に連絡をとってみるわ。サクラ部長なら、なにか分かるかもしれないから」

「了解や」

ハル力は、険しい表情を崩さずに頷いた。

次回、『第十八話：禍根刻む光の風』

君を守ると誓ったから。

第十八話：禍根刻む光の風

月は、火星が本格的に人間の住む地として整えられる前から、居住区としての役割を果たしていたので、火星が栄えてからも、寂れることなく在り続けた。もともと火星で暮らすか、月で暮らすかは各々の自由で、ある意味ではより閉鎖的であり、ある意味では底抜けに自由であるというのが、月の特徴であった。つまり、世間の風習に馴染めぬはみ出し者が、多く流れ着くのが月であったりしたのである。

故に、マーゼ・アレインは月の出身者が多い。俺、ハヤブサと、シアルが出会ったのも月だったのだ。

3年前、俺は

月にいた。

「食い逃げだーっ！あつ、その兄ちゃん！そいつ捕まえておくれよお！」

「ああ！？」

でっぷりとした身体でエプロンをつけている、いかにもメシ屋の主人といった風体のオヤジが、恐らく俺に向かって叫んでいる。ギャンプルに負けて苛々としていた俺は、不機嫌な声を発すると、“そいつ”と思われる姿を睨みつけた。

“そいつ”は見たところ、帽子を目深にかぶっていたので顔まではよく分からなかったが、背丈からしてどう考えても子供だった。

「ふん……………」

あんな年端もいかぬ子供が食い逃げをしなくてはいけない世を呪ったが、それとこれとは話が別だ。叫びながら必死に走っているあのオヤジにも、あいつの生活があるだろう。いや、重力が地球の六分の一であるので、走ってという言葉は適切でないかもしれないが。

「恨むなら、この時代を恨みな……………」

わざとらしく気障っぽい言葉を呟くと、多少心得があった体術を用

いて、食い逃げ犯に組みかかろうとした。足を絡ませ、相手の身体を浮かして、そのまま地面に叩きつけるつもりだった。六分の一Gの元では大した怪我はしないだろう。

「……何!?」

そいつは、見事な身のこなしで宙をくるりと周ると、そのまま俺を組み倒そうとした。

「だが、まだ甘いな」

俺は相手の腕を掴んだまま、倒れ込んだ。

「……捕まえたつと。まだ、月の六分の一のGに慣れてないな。地球からあがってきたばかりか?」

勝ち誇った顔で俺はそいつに訊いたが、そいつは何も答えなかった。すぐ後ろから例のオヤジが駆け寄ってきた。

「すまん、兄ちゃん! あー……観念するんだな坊主!」

俺に笑って会釈すると、すぐに厳しい表情になり、オヤジは食い逃げ犯の帽子を吹き飛ばした。

「ほら、何か言ったらどうなんだ!?!」

オヤジは問い詰めるように唸った。

「……あつう……ぐすつ……ひぐつ……つぐ、つ……ごめんなさい」
肩を震わせ、顔を俯けその“少女”は嗚咽を漏らしていた。

「女の子……だったのか……」

ふう、と俺はため息をついた。なんだか、無性に気の毒に思えてきた。よくよく見ると、まだ十二、十三かそれぐらいの少女である。

「なつ、泣けば許してもらえと思うなよ!」

オヤジの横顔から同情の一片が読み取れるが、だからといって許してやることは出来ないだろう。彼にも生活がかかっているのだから。

「あーっ! オヤジ! 俺が払うから、ここは見逃してやってくれ」

柄にもなく面倒なことに関わっちまったと、独りごちながらも、俺は金をオヤジに渡した。

「ったく! 物好きだねえ……。いいか、お嬢ちゃん。今日はこの男

に免じて許してやるが、次はないと思えよ？」

偉そうに講釈を垂れているが、垣間見せたほつとしたような表情を俺は見逃さない。オヤジも、こんな少女相手に手荒な真似はしたくないのだろう。俺はふとしたところで感じた良心に、知らず口元が綻んだ。

「分かってるさ。こんな子供が盗みを働かなきゃ生きていけない世の中が間違ってるってな」

無念そうに天を仰ぐと、オヤジは静かに言った。

「そうだな……、こいつは俺がなんとかするよ。もう二度と同じことを繰り返させないためにな」

「ああ……頼むよ。それが俺達大人の使命だ」

少し含むところを感じさせる言葉を、オヤジは残していった。なるほど、鈍感そうに見えて気付いていたのか。

「えへへ……ありがとうございます」

オヤジが去ると、先程の泣き顔からは想像できないほどの眩しい笑顔で少女は見せた。

「あれ、お前泣いてたんじゃ……っ!？」

「嘘泣きです。あの場合しようがなかったんです……。あのっお金は必ず払いますからっ……」

「俺とオヤジを……騙したんだな？」

「だっ、騙したただなんて……そんなつもりじゃ……」

「でも、泣けば……いや、泣いているところを見せれば、なんとかなると思っただら？」

少女は言葉を失くして、再び俯いている。俺は踵を返すと、少女の元から去ろうとした。

(胸糞悪いことしやがって……!)

「あのっ……待ってください。行くところがなくて……」

「それも……演技なんだから？」

追いすがって懇願する少女に、俺が考えうる限り最大限の冷たい声

で返した。

「あ、あの……」

少女はそれ以上言葉が見つからないようだった。少々大人気ないと思っただが、これくらいは教育上許されてもいいだろう。

「ふんっ……地球に狼少年て話があるんだが、聞きたいか……？」

「え……？」

少女は困惑して、首を傾げた。

俺は、一応は自分の住処ということになっている所へ、少女を連れて行った。

「もう……嘘は吐くなよ？それくらい、俺なら分かる」

入口を端末認証で開けると、振り返って俺的に凄みを利かせた声で言った。もつとも、あんまり様になってないとは思うのだが。

「え、でもさつきは……」

「へっ、ガキだねえ。お前の三文芝居に突き合ってやったんだよ。

俺もあのオヤジも」

俺は少女を見やると、ニヤリと笑った。

部屋の内装は質素なものだった。ここに長居するつもりはなく、仮住まいのつもりで借りたものだったからだ。なんだかんだと、半年程ここに滞在していることになる。

初期家具として置かれていたソファにその少女を座らせると、俺は近くのパイプ椅子に腰をおろした。

「さて……それじゃあ話を聞かせてもらおうかな。嫌だっつてんなら構わないが」

シアルと名乗ったその少女は、俺の予想に反して、自分の生い立ちを事細かに話した。それは、確かに耳も塞ぎたくなるような悲惨な人生だった。ただ、その表情に変化は見られず、淡々と事実を述べているだけだった。そして、その言葉に嘘がないことも明らかだった。

この時は、抗うこともせず状況を甘受している俺に似ていると……

そう思っていた。

「ふーん……それで月にねえ……」

俺は一呼吸置いてから、続けて言った。

「何でそうまでして生きたいんだ？これから生きていて何か良いことでもあるのか？正直に言ってみよう。お前の前に、綺麗な夢を見せてくれる王子様は現れねーよ。この世界はくそつまらねえだ。」

俺は苦々しげに吐き捨てた。

「夢があるから……どうしても叶えたい夢があるから」

しかし、動揺する素振りを見せる事もなく、少女はさらりと言った。

「夢……だと……？」

シアルは、くすりと笑うと瞳を輝かせて、自分の夢を語った。それは、俺がいつの間にか失いかけていた光だったのかもしれない。

俺は、随分な思い違いをしていたことを気付かされる。この少女は、現状を甘受して諦めている訳ではない。彼女はただ、揺らぐことのない自分を持っていただけだ。どんな状況であれ、悲観することも逃げ出すこともせず、巡る時代の中で、ただ自分の信じる道を歩んでいるだけだったのだ。

「参ったね、こりゃあ……」

その後、俺達はマーゼ・アレインに入ることになる。

なってやろうと思った、お前の王子様に。お前の夢を叶えてやりたいたいと思った。こんなくそつまらねえ世界で、終わっちゃうてる世界で、女優になって映画に出たいなんて甘ったるい夢を、何の疑いもせずほんとうに語るお前を笑顔にさせたいと思った。偽りの笑顔じゃなくて、ほんとう真実の笑顔に。初めて誰かの為に生きてやろうと思った。

俺は記憶の旅路から、現実へとかえる。時間を確認すると、オペレータ席に座っているエクスルへと確認をとった。

「エクスル。これで第一フェイスは、完了だろ？そろそろシアルの方へ、向かうぞ」

「了解です。悟られないように頼みます」

「敵機の可能性あり……ちゅうことやな？」

「ええ……。こちらでも別のポイントで未確認機体を確認している。そちらの詳しいこともまだ分かっていないのだけれど。少し様子を見てみましょう」

ハルカとユーリの耳に、冷静であろうと努めるサクラの声が聞こえた。

「ええんか、そんなんで？何かあってからや、遅いんやで！？」

「ハルカ、落ち着いて。どうしたのよ」

「あれが、敵かもしれないのやる？落ち着いてられへんわ！」

ユーリの宥める言葉も、ハルカの耳には入らない様子だった。

ピー……ガガガ……

「あ、あの……、防衛部の方ですか？」

突如、開いてあった回線より入った音声通信により、二人ははっとなった。

「誰や！？どこにおる？」

「こちら、そちらの位置から見える機体の内部にいるのですが……」
ハルカの獣の様な鬼気迫る尋問に、悲壮感を漂わせる女性の声で返事がかえってきた。まだ幼さの残る、甲高いその声の持ち主は、まだ私やハルカより年下だろうと、ユーリは推測した。

「通信を受理しました。貴方は誰ですか？何故、その機体に乗っているのでしょうか？」

ユーリが落ち着いた声で、見知らぬ少女に問うた。この際に、サクラにも聞こえるように回線の音量を上げておいた。

（サクラ部長……！）

そしてユーリは、相手に気取られないように小声でサクラに合図を送った。

「わ、私……マーゼ・アレインの人に捕まってしまつて……ここに閉じ込められているの……。開け方も分からないし……私どうすれば……」

「落ち着いて聞いてください。まず、貴方の名前を教えてください。そして、そのマーゼ・アレインの人達の特徴と様子を教えてください」

ユーリの声が緊張で少し強張った。

「は、はい……」

その少女は、震えた声でゆっくりと話し始めた。もつともこれも、シアルにとつては作戦の内である。時間は稼げれば稼げるほどいいのだから。その全てを話し終える頃には、かなりの時間が経過していた。

「つまり、シアルさん。貴方は、歩いているところを捕えられその機体に乗せられた。そしていつの間にか、意識が失い気が付くところ閉じ込められていたと……そういうことですね？」

「はい……」

「相手は、一人だった？」

「はい」

一人と答えたのもシアルのブラフだった。情報は可能である限り、攪乱させられるだけ異なる方がいい。

「それにしても酷いやっちゃな……。か弱い女の子搔っ攫つて人質にしようなんてな……」

「ハルカ、やつらはテロリストよ。普通の思考能力を適用させては駄目よ」

シアルは、歯ぎしりして悔しがった。何でこんなことを言われなければならぬのだろう。フィエンさんも、レオさんも、エクスルさんも、カレンさんも……ハヤブサも、みんなとっても良い人だ。分かっていただけけれど、耐えるのは辛い。でもそれが私の任務だと、シアルは我慢した。

「そつやな……あいつらには、人間の心なんてあれへんのやろな」

この一言で、シアルの中の押さえていた気持ち溢れだした。それは止めどなく激情となって、心と身体を支配していく。

「違うっ！あの人たちはそんなんじゃない！！みんな……すごく優しくして……」

二人は黙って、シアルの絞り出す声を聞いていた。

「ね、かまかけて正解だったでしょ」

「ユーリの考えることは、未恐ろしいなあ。敵には回したないわ」
ハルカは、苦笑した。

「お互い様……、あら、気をつけて！動いて来るわよ！」

突如、シアルの乗るメギドが動きだした。腰に据えられたハンドガンを抜くと、闇雲に撃ち始めた。その一つが、ハルカとユーリの乗るメギドの胴体をかすめた。

「くっ、正体を現したな！やっぱりさっきまで、うちらを騙してたんやな！」

ハルカの乗るメギドは同様にハンドガン抜くと、容易くシアルの乗るメギドの持つハンドガンを撃ち落とした。

「いやああっ！来ないでっ！来ないでっ！」

シアルは、我を忘れて叫んでいた。

今度は実体剣を抜きスラスターを吹かすと、ハルカ達目がけて突進を開始した。

「サクラ部長！どうしましょうか!？」

ユーリがサクラに指示を仰いだ。

「うまく捕縛出来ない!？もうすぐ増援も行くと思っから！」

「やってみます！出来るわね、ハルカ!？」

「当たり前や！」

ハルカは同様にスラスターを吹かし距離を保つと、ハンドガンでシアル機の剣も撃ち落とした。正確無比で無駄のない射撃だった。思わず、ユーリも息を呑むほどだった。武装は、これで全て解いた、そうハルカは、確信した。

「まだよ！この反応は……腰背部に……、粒子ソードを持っている

「!?気をつけて!」

「ホンマか……!?粒子ソードなんて、メギドへの実用化は公式にはなされてないはずや……」

「でも、この反応は……。マーゼ・アレインは私達の知らない未知の力を持っているとの話もあるし、用心して!」

「てめえらあああつ!その機体から離れろつ!」

ユーリ、ハルカ機の音声通信に無理矢理男の声が割り込んだ。ハヤブサである。

ハヤブサは、焦っていた。嫌な予感があった。でもまさか、戦闘になっっているなどとは思ってもよらなかった。状況は最悪だった。

「なっ……敵の増援!?ハルカツ、九時の方角から、敵機接近!サブモニターに出す!」

サブモニターを見て、ユーリは一瞬目を奪われた。その機体の美しさに。

(え……?この機体は……地球の新型……!?性能も詳しく分かってないのに……)

ユーリは音声通信を受けると、その位置から敵機の座標を割り出し、サブモニターに映した。それは、サクラ部長がシンラン部長から聞いたという新型そのものだった。盗まれたメギドが粒子ソードを装備していたことを考えるとなら不思議ではない。彼等は、マーゼ・アレインは、新しい力を持っていたのだ。

「え?ちよつと……!?ハルカ?」

ユーリ、ハルカ機は、構えたハンドガンから無数の粒子ビームを撃ちだし、シアル機の装甲を次々に剥がしていった。相手は粒子ソードを振り回すが、こちらの機体をかすめもしなかった。そうしている間にも相手の機体は、その各部がスパークを帯びて、誘爆をおこしていた。

「ハルカツ!?相手を殺すつもり?やり過ぎよっ!」

「ああ……そのつもりやけど?」

「え……？」

ユーリの背筋がゾクリと震えて、見渡す景色が反転した。にべもなくハルカは言い切ったのだ。

いつの間にか、サクラ部長との通信は途絶えていた。ここは、自分の意思で動かなければいけない。

「そうはさせねーよ！」

音声通信共に、ユーリ、ハルカ機とシアル機の間にもう一機純白の機体が割り込んできていた。ユーリが先程モニターで見た機体であった。

「新型っ！？もう来たっつていうの？早すぎる」

「ユーリ！相対速度を！」

「え……ええ……」

ハルカに言われてはっとして、ユーリはコンソールパネルに手を伸ばした。確かに、自分達が生き残ることが最優先である。余計な雑念は、私達を殺す刃にも成り得る。

今度の敵機は先程までのメギドとは段違いの動きを見せた。機体の性能もそうだろうが、なによりパイロットの腕が違う。生半可な覚悟で剣を交えては、足元をすくわれるとユーリは思った。

機体と機体がすれ違う刹那、メシアの携える粒子ソードが、ユーリ、ハルカ機のハンドガンを叩き斬った。その手元の爆発から回避するため、ハルカはすぐに機体をバックさせると、実体剣を抜いた。

「うちに剣を抜かせたことを……後悔させたる」

ハルカの瞳はえもものを狩る、狩人の様にギラついていた。

ユーリの瞳に映るレーダーには、複数の機影。それは待ち望んだものだった。

「こちらの増援が来たわ！」

編隊を組んで三機のメギドが戦闘に介入した。防衛部からの増援であった。

見事なコンビネーションで、三機のメギドはエクスル、ハヤブサの

駆るメシアに粒子ビームを浴びせていく。銃撃と銃撃の合間を縫うように、休む余裕など与えないかのように、容赦のない攻撃だった。ユーリ、ハルカ機も含めれば事実上の四対一の構図であった。

「くっ……エクスル！こんないつまでも続けられるものじゃねーぞ！」

「分かっていますっ！……ただ、こんな状況どうすれば……」
エクスルも必死にコンソールパネルを叩いて、幾つもの計算式を構築しては破棄していく。シアル機を庇いつつ、被弾しないように戦闘を続ける。戦い慣れたハヤブサであっても、それは、相当な消耗を強いた。

「やばっ……！」

粒子ビームがメシアに直撃し、機体を大きく揺らした。一度、制御が効かなくなった機体に、あとは面白いように攻撃が当たった。粒子ビームは、メシアの純白のボディを抉っていった。

「これで……終わりや！」

ユーリ、ハルカ機は実体剣を大きく後ろに引くと、メシアの前に躍り出た。後は、完全に動きの止まった獲物を狩るだけだ。コックピット目がけて、勢いよく実体剣を突き刺した。

ユーリは言葉なくそれを見つめていた。これが、ハルカの答えなら責めるべきではないのかもしれない。もう覚悟は決めたではないか。ここはやるか、やられるかの世界なのだ。

「えっ……」

予期しない事態に、ユーリは言葉を失くした。

ハヤブサとエクスルの乗るメシアは、太刀を受けてはいなかった。純白のそれに覆いかぶさるように、黒き機体が、両手を広げて仁王立ちの姿で浮かんでいた。機体の各部分がスパークを帯び、無数の火花を散らしている。

原形を留めないほどに破壊され尽くしたその機体のコックピット部分は、ユーリ、ハルカ機の実体剣に深々と貫かれていた。

「は……ヤ……ぶ……サ……にゲ……」

俺は、消えゆくようにか細いその声に聞き入っていた。良く通る彼女のソプラノボイス。女優になるより、歌手を目指した方がいいんじゃないのと褒めると、子供の様に喜んで歌を歌った彼女。いや、俺から見たらあいつなんてまだ子供で……、だから俺が守らなきゃいけない……。

「シア……ル……？」

ハヤブサは、散りゆく光の粒を茫然と眺めていた。それは絶え間なく雨の様に降り注いだ。

なんて美しいんだろう。漆黒に塗りつぶされた宇宙にそれは、狂ったように舞っていた。光の風が、一筋、二筋、ああ……数え切れないほどのそれは、永遠にも感じられる一瞬を通り過ぎていった。もう二度と戻らない光景を、それはスクリーンのように映し出した。そして最後には、メギドの黒々とした装甲の欠片が、当てもなく宇宙を揺らめいているだけだった。

あいつは……どこに……？

「シアル

ッ……!!……」

ハヤブサは、絶叫した。

シアルの乗ったメギドが爆散した後に、それは痛ましいほど響いた。

次回、『第十九話：邂逅の果て』

フィエン、レオ、ヴェクト、カレン、そして『彼』。

思惑は交錯し、この度の戦いは終結する。

第十九話：邂逅の果て

レオは必死に走っていた。早くカレンさんを救出して、フィエンさんの援護に向かわなければならぬ。あの相手の男、煙幕を張ったに関わらず、正確な射撃を行って見せた。フィエンさんを信じていない訳ではないが、心配である。カレンさんが囚われていると思われる場所は二ヶ所あった。今、向かっている場所は、その内のひとつ。どちらであるかは、現時点では分からない。運任せは好きでなかったが、どうしようもないとレオは諦めた。

「ここだ……」

妨害を受けることなく無事に目的地に辿り着くことが出来た。呼吸を整えると、偽造した端末でそのドアを開いた。

「なっ……ここは……?」

無機質で、機械的な火星施設内とは違い、そこは有機的で洞窟の様な造りになっていた。まさか、火星の地表をくりぬいて造ったのではないのだろうか、とレオは邪推した。彼も地図及びデータ上でしか、その場所を知らなかったので実際に目にしたの初めてだったのだ。

辺りは薄暗く、明りは申し訳程度に灯してある蜀台だけであった。明らかに、外界とは異色の空気を放っていた。そしてそこにはいくつもの牢屋が連なっていた。ライトで照らしながら周囲を見渡すと、すぐに人影を見つけることが出来た。

長い黒髪で、身長の高い女性。情報は少なかつたが、このような状況に置かれていて、かつ同じ特徴を持った者もそうはいないだろう。「あなたが……カレンさんですね……?」

その姿を認めると、半ば確信を持ってレオは問うた。

「……誰だ……お前は……!??」

その女性の、顔にかかっていた黒髪が揺れ、そこから氷の様な琥珀色の瞳があらわになった。レオは、視線を感じて背筋がぞくりと震

えた。その眼光に、知らず寒気すら覚えていた。しかし、それを表に出すのはこの場合都合が悪いと、自分をコントロールして穏やかな笑顔をつくった。

「レオと、申します。性がアケルトと名乗った方が早いでしょうか。貴方を助けに参りました。もうしばらくお待ちください」

「アケルト……だと？まさか……義父さんの……」

レオの言葉に、カレンの表情が変わった。無関心を貼りつけたように色のなかったそれは、徐々に感情に侵されていった。

「ええ、オーベルト」アケルトは、僕の父です」

レオは、粒子ソードで牢の柵を壊しながら言った。その牢は堅固な造りだったが、長らく使ってなかったのだろう、所々が脆くなっていた。加えて、まだ余り一般化していない粒子ソードでの破壊。自由に入りが出来るまで、そう時間はかからなかった。

「ふう……、あとは……」

檻の内に足を入れると、レオはそう呟き、カレンが繋がれている手錠に目をやった。牢が壊されることすら想定していないのだろう。それは簡素な造りであった。

妙だな、とレオは訝った。予め、政府側は待ち伏せまでしていたということとは、こちらの侵入を、ある程度は予想していたということになる。その割に、カレンの拘束がそれ程強いものでないのはおかしい。屈強な男性ならば、そのまま引き千切ってしまえばいいのである。（政府内でも、分裂している……のか？あれ、それに……カレンさんは確か……）

レオは、二つの謎に神妙な顔つきになり考え込んだ。

「やめる……！」

「え？」

カレンのか細い声を聞き取れず、レオは訊き返す。

「やめろ！私は……脱走などするつもりはない……っ！ここで、罪を滅ぼすまでは……！」

脂汗を額に滲ませ、苦しげにカレンは唸った。

レオは言葉を詰まらせた。全く想定のしていなかった事態である。冷静な頭脳を持ってしても、最良の答えを即座に導き出すことが出来なかった。

「しかし……、フィエンさんも共に来ています……！彼も、今戦っているのです……！一刻も早く戻らなくては……」

ここにきて思わぬ時間を食ってしまったことに気付き、レオは焦燥に駆られた。

「何、フィエンが……？」

カレンが再び顔を上げたその刹那、閃光が暗闇に瞬いた。

「ぐっ……！」

レオが、腰に手を当てうずくまった。マーゼ・アレインの深緑のパイロツトスーツが赤く染まっている。

「誰だ！？」

カレンは、未だ自由の効かない身体を捻じ曲げて、その攻撃者を探した。

「……やっぱり、来たのはお前か」

低く冷たい声が、牢獄内を反響した。それは、この場所に新たな介入者が来たことを如実に表していた。

その声を聞き、レオはくつくつと笑った。それは痛みから来る自嘲の笑いなどではなく、その状況を楽しんでいるかのようですらあった。第三者が見たら、狂っていると思うかもしれない。それでもレオはこの上なく正気であった。

「やっぱり、あの時に殺しておくべきだったようだね……リク！」

レオはそう叫ぶと、腰から銃を抜き粒子ビームを撃ち出した。リクは、それを転がって回避すると、死角となる入口の壁に隠れた。お互いに、お互いの姿を見ることが出来なくなった。

「それは俺の台詞だ……、あの時の俺には、確かに幾ばくかの迷いがったことを認める。でも今は違う……！クーが傷付いた今、裏切ったお前に対する情けも何もない！」

リクは、一気に口から言葉を、感情を吐き出した。二人の指すあの

時とは、双方メギドを駆り宇宙空間で剣を交えた時である。あの時は、どちらも戦闘不能になるまで戦ったが、結局決着はつかずお互いその姿を見失ってしまったのだ。

「……………クー君に何があったのか知らないけど、僕は……………そんな気持ちはずっと味わってきたんだよ」

一瞬押し黙った後、レオは動揺する素振りも見せず、淡々と言った。その言葉に、リクははっとなる。そして、レオのたった一人の妹セレナが地球に無理矢理連れ去られたという事実を思い出した。

「君は、時々僕を気遣うそぶりを見せてくれたけど、あれは……………本心だったのかな？ 体裁を取り繕うだけだったということは……………ないのかな？」

レオの言葉が、刃の様にリクの心を突き刺した。

……………違うっ！ そんなことはない！ いや、本当に？ 俺は、本当にレオの気持ちを分かってやってた？ 大切な家族が傷付いているなんて……………気持ちを分かってた？ そんなの……………分かる訳がない。実際に自分がその立場になって初めて気付いたというのに……………。

「相変わらず……………お前の言うことは筋が通ってるようで、何も言い返せないな。それは心の底から謝るよごめん」

リクの心からの謝罪であった。この時だけは、レオに対する憎悪も何もなかった。ただ自分の情けなさと、彼に対する申し訳なさだけが、心のダムを決壊させ止めどなく溢れだしてきた。

それに対しレオは黙ったまま、リクの次の言葉を待っている。

「でも……………、話をすり替えるんじゃないやねえ！ だからと言って、お前たちの行動を許せる訳ないだろ？ お前だって、自分のやってるのが正しいなんて思っていない筈だ」

リクは、きっぱりと言った。

カレンは黙って二人に話を傾けていた。突然現れた介入者は、以前もこの牢屋に来たことがある。確か、クーの兄であったと思う。今の話の内容からしても間違いはないだろう。そして、義父さんの息子を名乗る彼とは旧知の仲だと……………そういうことなのだろうか。

しかし、今は敵対している。なんとなく、状況が呑みこめた。しかし……、何故敵対してしまったのだろうか。カレンは、どこか物悲しい気分になった。

しかし、そんなカレンを無視するかのように閃光は薄暗い牢屋内を飛び交った。

「ここで、終わらせてやる……、それが俺の責任だ！」

「無理だよ……、リクじゃ、僕には勝てない！」

二人の殺気は勢いを増すばかりであった。このままやり合えば、どちらかは無事では済まないだろう。そんなことはカレンには余り関係のないことである……はずだった。

「ふっ！」

カレンはそう声を張り上げると、自らを縛っていた鎖を引き千切った。それは確かに脆く、屈強な男性ならば破壊出来たであろう。しかし、カレンは戦闘の為に生み出され、特殊な訓練を受けた女性である。腕力も、人並の女性のそれではなかった。

「全く……、おとなしくここに居る訳にもいかなかない……」

カレンは自分の身体を確かめるように、ゆっくりと立ち上がった。そして、手の平をみつめるとそれを固く握りしめる。その一瞬、二人の注意がカレンに逸れた隙を見逃さなかった。

しばらく拘束されていたとは思えぬように軽快な動きで速さを増すと、リクの前に瞬時に現れてその銃を手刀で叩き落とした。そしてあつけにとられるリクに息つく暇も与えず、すぐに後ろに回り込むと、再び手刀で正確に彼の後頭部を打った。

リクは、力無くぱたりと倒れた。軽い脳震盪を起こしたのである。すまない……、とカレンは瞳を伏せ小さな声で呟いた。

（いつか私は、罪の業火でこの身を焼かれるだろう。だが今は……まだ、やるべきことがある！）

「レオ……と言ったな。お前もその銃をさっさとしまえ、無駄な殺生をするな！怪我は大丈夫だな。急ぐぞ！」

今度ははレオの方を向き直って、カレンは若干声を荒げて言った。

「……………はい！」

レオは、カレンの動きにしばらく茫然と立ち尽くしていたが、我に返るとさっと行動に移した。そして場を立ち去る際にリクを一瞥した。意識を失って倒れているようで、今心臓を撃ち抜けば必ず命を絶たせることが出来るだろう。しかし、レオにはそんなつもりは毛頭なかった。もっとも、それは今に始まったことではなくて、最初からリクを殺すことなど考えもしていない。リクもきつと同じであると、レオは思っていたが、先程の立ち振る舞いからするといささか怪しい気がしないでもないなと感じていた。

「どつちにしろ、僕は君には負けないよ。君が僕を追うならば、逃げ切ってみせるから」

レオは、意識のないリクに向かって言った。それは自分に対して言い聞かせているようにも聞こえた。

「ぐ……………」

フィエンは右手で肩を押さえると、荒い息を吐いて顔をしかめた。足元はおぼつかず、膝に手をつき肩で息をする格好になっている。左手には、粒子ソードを携えているが、身体の至る所からは出血が見られパイロットスーツが朱色に滲んでいる。眼鏡を上げる動作にも、いつもの滑らかさは見られなかった。

そして、それを睨むようにヴェクトが立ちはだかっていた。粒子ソードを持ってはいるが、フィエンとは違い息も切れていなければ、怪我を負っている様子も皆無だった。

「その程度か……………、温い」

「ふつ……………生憎、私は戦闘は苦手だね。そちらさんと違って……………」

暴力は何の解決にもなりやしない」

フィエンは苦笑しつつ言った。彼なりに皮肉も込めてみた。それを分かってか分からずか、ヴェクトも口の端を釣りあげて笑った。も

つとも、その瞳は一切の妥協を許さないともいうように揺らめいていた。

「貴様たちがそれを言うのか……」

「テロリストの戯言と取ってもらって、構いませんよ」

フィエンも負けず、薄ら笑いを浮かべる。もつとも、ヴェクトに勝てる算段など思い付きもしないので、余裕などあるはずもなかった。しかし彼も様々な人に出会い、その影響を少なからず受けてきた。それが彼を境地でも笑えるほど強くしていた。そして、彼は言葉を継ぐ。

「ただね……、貴方達が薙ぎ倒してきた人々の思いを知ってみることも、大切だと思いますよ。分かれとは言いやしない。まず知ることなんです。それすら諦めて、解決はなんてありはしないんです」

「ふむ……偉そうなことをべらべらと……。貴様に説教される筋合いもなければ、そんな言葉になんの説得力も込められぬ！」

ヴェクトは咆哮し、手元の端末を操作してから投げ捨て、剣を振りかぶって跳躍した。フィエンは身体が宙に浮き、その異変によく気が付いた。

（地面が……ない!?!）

抑制の効かない身体は宙に舞い、一瞬の隙を生む。そしてヴェクトはその隙を逃さない。無防備なフィエンの身体に、容赦なく粒子ソードを振り下ろそうとした。

そこに一筋の青い光線が、散った。

小さくない音と共に、粒子ソードは吹き飛ばされていた。ヴェクトは腕を押さえて呻いている。

まだ空間を情けなく漂っているフィエンの瞳には、銃を構える懐かしい姿が映った。

「重力発生装置の解除……と言ったところか」

その彼女は、めったに見せることのない雰囲気纏い
一目
見てその消耗が分かるほどやつれてはいたのだが
鬼神の様
に直立していた。

「カレン……なのか？」

身体の自由を幾ばくか取り戻し、体制を立て直してフィエンは言った。

「ああ……足はあるだろう？お前に殿しんがりが務まると思ったのか。さっさと逃げるぞ」

カレンは冗談めかして渴いた声で笑った。ただ、それが強がりであることはフィエンにはすぐに分かった。いくら彼女が強かろうと、一人の人間なのだから。

「増援かつ……」

ヴェクトは、苛々しげに毒づく腰のホルスターから予備の銃を取り出した。

しかし、右手を負傷したので指に力が入らない。三人の去る姿を不甲斐なく見送ることしかできなかった。

「くっ……必ず、必ず追いつめて見せる！」

ヴェクトの視線は、遠ざかっていくフィエンの背中に注がれていた。そこには、彼が戦闘中に貼りつけた小型の発信器が点滅を繰り返していた。

カレン救出作戦決行の3日前

「テイラナ副隊長、お気をつけて！」

「副隊長ならば、何も心配することがないと思いますが……無事を祈っています」

テイラナの周りを、複数の男たちが取り囲んでいた。みんな、ユグドラシルのテイラナ隊隊員である。テイラナはセブンス医学部部长の行方を探すために単身地球に向かおうとしていた。たった今、その為の船に食糧や機体を詰め込み終えたところだった。

「お前達……私がない間火星を任せたぞ」

テイラナは隊員たちに向き直って凜とした声で言った。それに隊員

たちは敬礼で応えた。隊員たちみな、ティラナの変化に気づいていた。副隊長といえど、ティラナはまだ若い。しかし家柄上、形としてその地位を任せられている。ヴェクトも同じような立場だったが、彼の場合は既にその風格が備わっていたので別である。ティラナは、人を使うことを当然の様に振る舞っていたが、本当は心の中で苦しんでいたことを隊員たちは薄々感じていた。だが……今は違う。ヴェクト程ではないが、風格というか覚悟の様なものがティラナの姿に認めることが出来た。

彼等は、ティラナの乗った船が見えなくなるまで、敬礼を続けていた。

「ふう……ようやく出発かあ……」
呑気な声が、船内に響いた。

「……誰だっ！」
自分の他に船には誰も乗っていない筈である。ティラナはすぐに銃を抜くとその声の主を探した。

「わわっ！待ってって、俺だって。何もしないから！」
振り向くと、どこかで見た少年が恐れおののき両手を上げて後ずさるところだった。

「お前は確か……あの時の……」
出来ればあまり思い出さたくない記憶だった。瓦礫の下敷きになった少年を救出したあの日。その側にいた少年。
「そう、俺はリキィテイスタ。クーの友達だよ」
リキは、屈託なく笑った。

次回、『第二十話：ボーイ・ミーツ・アースwithガール』

第二十話・Boy meets the Earth with girl

タイトル、英語に置き換えました。どうも収まりが悪かったので。

作者注　今回も稚拙ながら挿絵を描かせていただきました。えつと、ちよつと今までにない展開かもです。はい、すみませんm(

—)m

また、恐らく過去最長です。八千字越えてるので、携帯の方はご注意ください。

以下本編をお楽しみください。

「ひとまず、どういうことなのか聞かせてもらおうかしら？」

ティラナは、なるべく優しい女性を装って言った。もう船は出発してしまつたが、まだ今なら戻ることが出来るだろう。それでも、何故彼がこの船に乗っているのか。まずはその理由を知りたかつた。彼女は、彼を一度危険に晒してしまつたことから、少なからず負い目を感じていたのだ。

「クーを助ける為に、地球に行くんだろ？話は聞いてたから、誤魔化しても無駄だぞ。それなら俺も連れてけ。俺だってあいつの為に何かをしたいんだっ」

リキは真面目な顔で言った。その瞳は真剣で、以前のティラナならそれから自分の瞳を逸らしていただろう。だが今は、それに向き合う強さを身に付けていた。

「なるほど……、貴方も清々しいくらいに馬鹿ね。地球がどんなところか分かっているの？」

ティラナはため息をつくど、肩をすくめた。

「馬鹿でもなんでも構わねー！俺は、あいつを助けるって決めただ！お前には、俺を連れていく義務がある！」

リキは、小さな体を目一杯使って必死に主張した。一瞬の沈黙が二

人の間を流れた。視線は絡み合い、どちらも外そうとはしない。

テイラナは考えるそぶりを見せると、落ち着き払って答えた。

「そうね……いいでしょう。その代わり、これからは私の指示に従ってもらわね。でなければ、この船に軟禁するからね」

その言葉を聞いて、リキは驚いたような顔をした。

「何よ、嬉しくないの？」

「いや……てつきり怒られると思ったから。拍子抜けというか……」

「へえ、怒って欲しいの」

「いやいや、違う！へへっ、ありがと。ねーちゃん！」

リキは慌てて訂正すると、顔いっぱい笑顔を広げた。

彼がどこまで考えているのかはテイラナには分からなかったが、それでも彼を連れていくべきだと思った。友の為に何かをしたいと言うのは当たり前前の感情であり、それを私が阻害するべきではない。

何かあったら、私が守ればいい。守るなんて軽く口にはしたくはなかった、それがどんなに難しいことか彼女も既に知っていたから。だが、それを覚悟を持って言えないようでは、彼を守ることなんて出来はしないだろう、とも思った。もう、誰も失いたくはない。

二人を乗せた船は黒々とした宇宙を切り裂き、地球への航路を進行していた。

二人の目指す先は、地球にある火星政府の医療研究所だった。一時姿をくらましていたセブンス医学部部長が、実はそこで一人研究を進めているとの情報が入ったのだ。もっとも本当かどうかは分からないので、それを確かめに行くんだけど、とテイラナはリキに説明した。船が地球に到着するまでもうしばらくの時間を要する。

「なあ、そいつってクーの父ちゃんなんだよな？」

「ええ、そう聞いているわ」

「なんで、自分の子供が一大事だつて言うのに助けに来ないんだ？」
リキは、腕を組むと不思議そうにテイラナに訊いた。

「私にだって分からないわよ。もっとも、自分の子供がそんな危険

な状態だということすら知らないんだらうけれど。家族を捨ててま
で、研究に没頭しているのでしょうかね」

「ふーん……」

リキは口を尖らせると、不機嫌な声で呟いた。彼にとって父親とは、
子供にとっては尊敬の対象であり、そして何より子供のことを一番
に考えてくれる存在だった。

（そりゃ、仕事で忙しいと帰ってこないこともあったけどさ……）
同時に、ティラナも自分の父の記憶を掘り返していた。いつも厳格
で、自分を叱ってばかりだった父。今考えると、あれも愛情の裏返
しだったのだらうなと思ひ巡らしていた。当時の幼い自分は、そん
な風に振り返ることも出来なかった、最近会ってないけれど、親孝
行したいなとしみじみ感じていた。

二人は、火星政府地球支部医療研究所の前に立っていた。研究所
は、荒れ果てた大地に場違いなほど仰々しくそびえ立っていた。こ
こは、数少ない地球に存在する火星政府の施設である。施設では、
選ばれた極少数の研究員が“地球”という環境下において有益な研
究を日夜行っている。ここに、セブンス医学部長がいるとのことだ。
二人は、恐る恐るドアを開けると中に滑り込むようにして入ってい
った。

「ティラナ、イチジョウ様ですね。お話は伺っております、詳しい
ことは中で。ところで、この少年は……？」

入るとそこは受付になっており、白衣を羽織り眼鏡をかけた女性が
二人を丁寧に対応した。しかしリキの姿を認めると、眼鏡の奥の眼
光が鋭くなり舐めるように全身を見回した。

「私の部下よ。まだ若いので色々教えたいと思ってるの。構わない
でしょう？」

ティラナは動じる様子もなく、さらりと言った。

「ふむ……、そうですね。テイラナ様がそうおっしゃるんですから結構です。客人として丁重にもてなしましょう」

受付の女性は愛想笑いのようなものを浮かべると、二人を先導するよう歩き始めた。

こちらのことを完全に信用している訳ではないなとテイラナは思った。幼い頃より、たくさんの大人たちに囲まれ、そしてその扱いの手ほどきを受けてきた彼女は、自然と他人の顔色を伺うのが癖になっていた。それが、彼女が将来手にするであろう莫大な富を狙う賊などからも身を守る為に、彼女自身が身に付けた術だった。

リキは受付の女性、そしてテイラナに追従する形で歩いていった。内装はシアンカラーを基調とした色に塗られていた。火星のモジュール内と酷似した造りであったた為、火星にいと錯覚してしまいそうだった。もつとも、身体を地面に縫いとめる重力が今は地球にいるということを見せてくれる。それが何だか嬉しくて意味もなく足踏みしてしまう。

「ん？」

ふと半びらきのドアから少女の姿が見えたので、リキは、立ち止まってしまった。こんなところに子供が……？と、人のことを言える立場ではなかったが、不自然に感じた。覗き込もうとしたが、いつの間にか回り込んでいた受付の女性に阻まれてしまった。

「申し訳ありません。お客様でもこちらをご覧くださいになることは出来ません」

「ちえっー」

女性の淡々とした態度に、リキは不貞腐れたように舌打ちした。

「リキ！失礼なことすると、船に連れ戻すわよ？」

「あうう……ごめんなさい」

テイラナの甲高い声に、リキはうなだれた。

しかし、その部屋からはまだ幼さの残る少女の声が聞こえてきたので、三人は一斉に振り向いた。

「火星からのお客様……ですか？珍しいですね。私、挨拶してきま

す」

「駄目ですよっ、セレナッ！貴方のことは、極秘なんですからっ」
無邪気そうな少女の声と、ややしわがれた女性の声が、その場にいる三人の耳に自然に入ってきていた。受付の女性は面倒くさそうにため息をつくくと、勢いよくそのドアを開け似つかわしくない声で怒鳴った。

「セレナ！おとなしくしていなさい！………え？」

セレナと呼ばれた少女はパタパタとスリッパの音をたて、開いたドアから廊下に飛び出して来ていた。

「貴方達が、お客様ですね？私はセレナ＝アケルト、と申します。」
いきなりの登場に驚く三人に構うことなく、セレナと名乗るその少女は、ツインにしている長い銀髪を優雅にかきあげると、滑らかにお辞儀した。

その様子を呆けてみていたリキに、ティラナがからかうように言った。

「どうしたの？顔が紅くなっているようだけど？」

「な、なに言ってるんだよ！そんな訳ないだろ」

しかし実際にティラナの指摘通り、リキは赤面していたのでその反論も空しく響くだけであった。しかしそんな彼の必死さを気遣うこともなく、ティラナはセレナに向かって挨拶を済ませていた。そして貴方も早くするのよと、リキを急かした。

「リキ＝テイスタ……、ティラナねーちゃんの部下です」

不服そうにリキは自分の立場を明かした。当然、これは二人の間で執り為された仮の関係である。リキが怪しまれない為にはそれが一番都合がよいとティラナは判断したのだ。

セレナは興味深そうにリキをまじまじと見つめた。

「へえー、リキ君何歳なのですか？あつ、地球と火星だと一年の長さが違うから参考になりませんか。でも、見たところ私よりは年下ですね」

「えっ……ええ多分そうだと思います」

リキはセレナにつられて普段滅多に使わない敬語になっていた。

「じゃあ、貴方がテイラナさんと呼ぶように、私のこともセレナお姉ちゃんと呼んでくれますか？」

「は、はい……」

リキが、頷くとセレナは嬉しそうににっこりと笑った。リキは、その顔に一瞬見惚れてしまった。

「それでは、私と少しお話しませんか？構いませんよね？」

セレナは、テイラナの方を振り向くと瞳を輝かせて訊いた。

「え……ええ……」

テイラナも気圧されたように肯定した。

「ありがとうございますっ」

セレナはうるたえるリキに構わず、その手を引っ張って消えていった。

二人が去った後には、大人二人がぼつりと残された。

「あの……よかったのかしら？」

茫然と、去りゆく二つの影を見送ったテイラナは、物問いた気な視線を受付の女性に投げかけた。

「テイラナ様、貴方は彼女をご存じないでしょうか。セレナは……いつも同年代の友達と過ごすことすら許されておりません。あのようにはつらつとした彼女を見るのは久しぶりです。考えを改めました。たまには息抜きも必要でしょう」

受付の女性は、テイラナの前で初めて固い表情を崩すと、口元を緩めて微笑んだ。

「リキ君は、まだ各部に配属されてないんですよ？どこにきたいのですか？」

「環境部……。父さんも、そうなんだ」

まだ緊張が解けぬ様子で、ほほをかきながら照れ臭そうにリキは言

った。

二人は、長い通路を手持無沙汰な様子で歩いてきた。どこかに向かうという当てがある訳ではなかった。ただ、久しぶりの同じくらいの年の子との会話をセレナは楽しみたかった。

「へえ……すごいですね！地球や火星の環境のことはフィエンによく聞いていましたわ……、っと貴方は知らないですよ。すみませ

ん」

え
リキの周りで時間が一瞬止まった。世界の色が反転して、目が回りそうになる。嫌な冷や汗が、額から滴った。

え……？フィエン……？ってあのフォーラムの場にいたにーちゃんの名前も……、フィエンだったよな？

偶然？たまたま？でも、そんなによくある名前じゃねーよな？聞いてみたら、はつきりする。でも、もし同一人物だったら？と、リキの頭に幾重もの感情が折り重なり、同じような言葉を反芻する。

「フィエンというのは、私の大切な友人なのです。色々な事を教えてもらったり、遊んでくれたりしたんです。最近は余り会うこともないのですけれど」

様子が変わったリキに気付くこともなく、セレナは言葉を続けた。

そこまで言い終えると、彼女は憂うように瞳を伏せた。また、その様子にリキも気づかない。

「元氣だといいのですが」

「なあ……、そのフィエンって人って」

セレナの声を遮り、震える声でリキはセレナに、その“フィエン”の特徴を訊いた。まさかと思った。ただの偶然だと、そうであって欲しかった。

しかし
そのセレナの口から飛び出す言葉一つ一つが、リキを苛む棘だった。真実は冷徹で残酷であると、リキは若くして気付いたのだった。

「あいつは……あいつは……クーを……っ」

無意識に喉の奥から、声を絞り出していた。この時、リキは既に足を止めていた。セレナもようやくリキの様子がおかしいことに気付く。

『今回のことは隊長の意思であって、フィエンもカレンも関係ないからな』

そうだ、あの時の男も言っていたじゃないか。フィエンは関係ない。やめる……、やめて……それ以上言わない……俺……っ

リキは、必死に自制をかけようとする。今から自分が吐く言葉は最低の言葉だ。

「クーをっ……騙してたんだ！そして、クーを傷付けた！あんなやつのことを友達とか言うなっ！」

肩を震わせて、嗚咽をこらえながらリキは叫んだ。そしてセレナを放って、一人走り出していた。

俺は……最低だっ！あいつはっ……あいつはなんも関係ないのに……っ！それでも……それでもクーはっ……

『クー……クー!! セブンス。クーでいいよ』

『じゃあ、フィエンさんも、カレンさんもみんな悪い奴だって言うの？僕は……そう思いたくはない！』

『なんていうかな、楽しいって言うのは不謹慎だけど、少しドキドキしてる』

「うう……あああ……」

リキは、両膝と両手をつけて倒れ込んだ。見つめる地面は灰色で、どこまで来たのか分からない。一人になって、抑えていた涙が溢れだした。それは何に対する涙なのかさえ、分からない。それでも止

めどなく、それは激流となって押し寄せてきたのだった。

「あら、ファイリスさん。そういえば、二人は大丈夫かしら？もう夜も更けているというのに」

未だリキとセレナの姿が見当たらないことに気付いたティラナが訊いた。窓に映る空は、既に藍に染められている。ちなみに、ファイリスというのは受付の女性である。遺伝子工学の博士号を持っているということ、ただの受付役の女性ではないのである。あの後、二人は別室に移りセブンス医学部長についての話を展開していたのだった。

一度研究所に姿は見せたものの、またすぐにどこかへ行ってしまった、というのがファイリスがティラナに話した事実だった。そして、いつ戻ってくるかも分からないという。ティラナは、どうしたものかとファイリスに相談していたのだ。

「若い者同士、色々あるのでしょうか」
抑揚のない声で、ファイリスは言った。

何か知っているかのような彼女の表情に、ティラナは不思議そうに彼女の顔を見つめた。

ファイリスは、先程、一人で廊下を歩いていたときに交わした会話を思い出していた。

「あの……セレナさん……」
今日ここを訪れた少年が、息を切らしながら私に話しかけた。その少年の意図を素早く読みとった私は、最後まで話を聞かずに口早に言った。

「展望台へ向かいました」
展望台へ一人歩いているセレナを彼に会う前に見たのは事実だ。セレナの寂しげな背中と、焦っている少年、おおよその事情は掴めた。

知りたい情報を入手した少年は、お礼の辞すら述べず駆け足で去っていった。それを見送っていた私は、顔をしかめたが、やがて穏やかな気分になる。

「精々悩め、少年少女よ」

つつい、年長者の感傷に浸ってしまった。まだ私だって若いのに。

「さつきは……ごめんな……」

リキは、セレナの背に向かって謝罪の言葉を述べた。

セレナは一人ベランダで、ベンチに膝を抱えて座っていた。長い銀髪が風になびいている。そして、大きな毛布にくるまって星を眺めていた。昼間は燦々と陽が降り注いで暖かかったのに、夜になると急に風が冷たくなってきた。地球の気候をあまり知らないリキはそういうもんなんだと納得をしていた。

くるとセレナは振り返ると、笑ってぼんぼんと自分の隣を叩いた。
(座れて……ことなのか……?)

リキは不安を抱えながらも、とぼとぼとベンチに向かい隣に座った。セレナがふわりと毛布をリキの肩にかけた。大きな毛布だったので、二人が入ってもまだ余裕があった。時々風が、その生地を揺らした。

「先程のことでしたら、気にしておりません。むしろ、謝らなくてはいけないのは私の方です。考えが及びませんでした、すみません。ただ、私もフィエンのことを信じたいのです。その点において、私は貴方からどう罵られようと構いません」

セレナが静かに、ただ芯の強さを感じられるような、リキにそう思わせるような声で言った。

「うん、俺だって本当の所はよくわかってない。だから、ごめん」
重ねて、リキは謝った。それを見兼ねたのか、セレナは苦笑すると話題を変えた。

「今日は星が綺麗ですね……。ただ、いつも見られるという訳ではないのです。貴方は運がいいです」

リキはセレナの言葉を聞きつつも、黙って空に浮かぶ無数の星を眺めていた。火星からでも星を見ることはできるけれど、地球から見るそれはまた違った趣があった。つつい、魅入られてしまう。

(それに……)

ちらり、と隣に座る少女に目をやった。月と星の光に照らされたその横顔は息の呑むほど美しくてびっくりしてしまった。その一瞬少女からは幼さの面影が消えていた。

リキは自分の頬に一筋の涙が伝っているのに気付いた。

(俺……また泣いてるの……?)

「ど、どうしたのですか？」

セレナは慌てた様子でリキに声をかける。リキは、涙を毛布で拭くと困ったように笑った。

「わかんねーんだ、何も。でも俺は生きていて、あんたも生きていて……クーだって生きてる。何だかなーって」

リキは、自分でもなんで泣いているのか分からなかった。それでも涙は溢れて来て、戸惑いは増すばかりだった。自分の中に芽生えた感情を言葉に表すことが出来ない。そんな自分の不器用さが悔しかった。

その様子を見て、セレナも同じ困ったような笑みを浮かべると彼を無言で胸に抱きすくめた。少女の白く細い両手は、少年を優しく包んだ。

リキは、暖かい気分になって全身を委ねていた。そして、再び無意識のうちに口から言葉を並べていた。

「俺の友達に、クーってやつがいるんだ。知り合ってたまだ少ししかたつてないし、お互いのことなんてほとんど知らない。それでも……あいつは絶対俺の友達で……」

「……はい。それは……素敵ですね」

セレナは渴いた花に水をやるように、リキに柔らかく言葉を添えた。「でも、事故？事件？良く分かんねーけど……で怪我をしてやばい状態らしいんだ。だから、俺はここにあいつを助けられる医者を探しに来たんだ」

驚く程すらすらと言葉が口をついで出てきた。何でこんなことを話しているのだろう、とリキは思った。

「それで地球に……。でも……すみません。私にはその辺りのことは何一つ知らされてないのです。何か、協力したいのですが……」
無念そうにセレナは俯く。

「いいよ、大丈夫。俺が……絶対見つけるから。だから……」
「……だから？」

セレナは、言い淀んでいるリキを促すように言った。

「後少しだけ、このままでいさせて……」

「ええ、もちろん」

ありがとう、とリキは心の中で呟いた。声に出すのは今更ながら気恥かしかった。

「一つ……約束して欲しいのです、貴方の手で友人の復讐などしないよう。決して、力づくでの解決などを求めないよう」

「うん……分かってる」

クーが傷付いて、俺やいろんな人が悲しんだように、俺が誰かを傷付ければきつと誰かが悲しむ。そんなのは絶対に嫌だとリキは思っ

た。

しばらくの間、二人は身を寄せ合って瞬く星屑を眺めていた。風はいつの間にか優しくなっていて、地球に祝福されてるような、そんな錯覚を二人に起こさせた。

「俺たちで、作れるかな。誰も哀しまない、誰も傷つかない世界

」
天を仰いで、独り言のようにリキは希望を零^{こぼ}した。

「……大丈夫です、私たちならきつと

」
その希望は途方もなかったけれど、月と星々はその輝きを絶やすことなく、二人を照らし続けた。壊れていくこの世界で、二人はこの上なく小さくて、儂くて、脆い迷い子だった。どこに向かっているのか、どこに辿り着くのかさえ分からない。それでも彼等は

次回、「side:副部長達の憂鬱」

side：副部長達の憂鬱

ずずと、音を立ててコーヒーをすすると、青年はふうと小さなため息をついた。柔らかなプラチナブロンドの髪は癖があつたが、端正な顔立ちにそれは美しく映えていた。歳は、二十に差し掛かるかどうかといったように思えた。

辺りは、喧騒に包まれていた。ここは、火星政府の各部署が集結する施設内の談話室である。いつも慌しく時が流れている空間だが、最近それが更に顕著になっている。

火星が、浮き足立っている。もつとも、自分も最前線に送られ、生死の駆け引きを既に行っていたのだが、あまり実感は湧かなかつた。

鈍いのかな、と思う。生に執着してないだけかもしれない。でも、特別死にたいわけでもない。それに誰かに殺されるのは面白くないから、やられる前にやり返す。それを淡々と行っているだけだ。

そもそも人生なんて、そんなもんだ。自分は結局火星に来て、来られなかつたやつらは地球でやがて訪れる死に怯えながら暮らしている。究極的な問題が目の前にあるじゃないか。

青年はコーヒーを口に含みながら数日前の事を回想していた。

「ハルカ……よく頑張つたね。お疲れ様」

僕は出来る限りの笑顔を作つて、今回の戦闘の功労者をねぎらつた。ただ、ハルカは僕の言葉など聞こえないかのように、反応を示さなかつた。俯いたまま、唇をかみ締めている。

「どうしたの？敵機を一機落としたのに……、嬉しくないのかい？」
無言を貫くハルカに、僕は言葉を重ねた。

「副部長……、うちはホンマに間違つてないよな？」

「……何が？」

彼女の言っていることの意味が分からずに、僕は聞き返した。いや、本当は分かっていたのかもしれない。ただそうなることでも面倒な問題になってしまう。

「うちは、結果的に一人殺してしまった。戦つてるときは、なんも抵抗あらへんかったし、今でも後悔している訳やない……けどっ」
やはり。僕の悪い勘は、大抵当たってしまうなあと独りごちた。

僕は、神妙な顔つきになって言った。

「そのことなら……、大丈夫だよ。ハルカは間違つてなんかいないから。あのまま何もしなかったなら、ハルカが僕達がやられていた可能性もあるんだからね。極端な話、僕達が行っていなかったら、君達が殺されてたかもしれないんだよ」

あ、恩着せようとしている訳ではないからね、と冗談ぽく付け足しておいた。

それでもハルカの顔は晴れなかった。何かを押し殺しているかのよう、何かに怯えているかのよう、顔はひきつっていた。それなら……と、僕は顔を引き締めて言う。

「もう……、戦場には出ない方がいい。足手まといになられても困るんだ」

優しさを排除した冷徹さを身に纏って彼女を突き放す。

「なっ、うちが足手まといやて……!?!」

予想通りハルカは激昂する。プライドの高い彼女なら当然の反応だ。無論、だからこそ僕はそういう態度をとったんだけど。動揺する彼女に嘲笑を交えて更にけしかける。

「実際に戦った君なら分かってると思つてただけだね。あそこは命のやり取りをする場所だ。綺麗事なんて言つてられない。覚悟がない奴に背中なんて任せられる訳ないだろう?」

僕の言葉にハルカはたじろぐ。それでも、手は緩めない。

「僕はもちろん死にたくないし、他の部員だつてきつとそうだろう。僕には副部長として彼らを守る義務がある。君に迷いがあるなら、

アルト部長に進言してでもパイロットの資格を剥奪させてもらおう」

「……………」

「相談があるならいつでも聞くから。君の腕を疑うものなんて、誰もいやしないんだから」

一通り言った後、顔を緩めてフォローは入れておいた。

現実世界に戻った僕は、何気なしに虚空に視線を投げた。

フォローは入れた。だけど……………、アルト部長に本当に報告して
るのかなあ、と考えると気が重い。部長、ハルカのこととなると人
柄変わるからなあ。いやいや、それでも部長なんだからその辺の事
はしっかりやってくれてるだろう。

僕は、間違ったことはやってないんだから。下手な甘さは、彼女を
傷付けるだけだ。言葉通り物理的に。最悪、死に至らしめることだ
つてあるかもしれない。

ハルカは、いや僕達は、敵機を落としたんだ。これからあちら側が
どんな手を打ってくるか分かったもんじゃない。最悪、爆弾抱えて
特攻なんてことだつてあり得ない話じゃないんだ。

「あら、エルド副部長」

「ん？」

エルドと呼ばれた青年が顔を上げるとそこには二人組の男女がいた。
男の方は角刈り頭をきりりと立たせて、筋骨隆々の体を持て余すよ
うに立っている。男性と並ぶとかなり小さく映ってしまう女の方は、
丸縁の眼鏡をかけて三つ編にした髪を揺らせていた。二人ともまだ
若々しかったが、その腕にはエルドと同様に銀の腕章が輝いていた。
彼等は紙コップに淹れたコーヒーを持っていたのだが、その組み合
わせがシュールだったのでエルドは吹き出しそうになった。

「やあ、ツバル副部長にミサキ副部長。偶然だね。休憩かい？」

エルドが座っていたボックスにツバルとミサキも腰を下ろすと、まずは二人ともコーヒーで喉を湿らせた。熱さと苦味が、心地よく二人の体をほぐしていった。一息つくと、ツバルが口を開いた。

「ああ、ここの所忙しくてな。隙を見つけて休まなくては体が持たない」

「私もです……。といつても、泣き言を言っている場合じゃないのですが」

「何！？それじゃあ、まるで俺が泣き言を言っているように聞こえるぞ。俺は断じてそんなことは」

「ごめんなさい、ごめんなさい。そんなつもりじゃ……」

とても疲れている風には見えないんだけど、とエルドは思ったが面倒くさいことになりそうだったので敢えて言わなかった。

「二人ともその辺にしておきなよ。折角の安らげる時間なんだから」

「そうだな、済まない」

「ううう、ごめんなさい」

「いや、別に謝る必要はないんだけどさ。それより、君達の所はどうなっているんだい？情報交換しておこうじゃないか」

エルドはテーブルを人差し指でトントンと叩いて促すような仕草をした。もつとも部同士の連携は取れているので、エルドも重要な業務上の情報が欲しい訳ではなかった。要するに、情報交換という名の世間話である。

「そうだなあ……。じゃあシンラン部長もいないし……」

と、ツバルの方が先に話を始めた。

「シンラン部長、何か御用でしたか。わざわざ、俺をお呼びになるなんて」

開発部長室は、アルコールの臭いが充満していた。ツンとした臭いがツバルの鼻腔を刺激する。

「お酒も……程々にしないと……」

関係ないのにツバルは罰が悪そうに言った。

「ああー、ツバル来たか。リクが怪我したとかで入院してんだ。大したことはないそうだが、様子見てきてやれ。一応、お前の部下だろ？」

シンランは奥のデスクに突っ伏していたのだが、ツバルの声を聞いて顔を上げた。紅潮した顔を歪ませて、しゃっくりをさはみつつ陽気な様子で言った。むしろ、その振る舞いがツバルには痛々しかった。

「それなら、部長が行けばいいのではないですか。私が行くより、部長が行った方が喜びますよ」

顔を背けてツバルは言った。彼はこのとき、いつもの部長に早く戻って欲しいと願わずにはいられなかった。

「うるさい。部長命令だ。私は色々忙しいんだよ」

そんな思いを突っぱねるように、シンランは吐き捨てた。

「分かりました。そういうことなら、自分が行きます」

ツバルは鬱屈とした気分振り払うように重たい足取りを早めて、リクが入院している病棟モジュールへ向かった。

病室は、広くて清潔な個室だった。薄いグリーンに塗られた壁は、自然と心を落ち着かせる作用があるような気がする。ベッドの傍のテーブルには、花瓶が置かれていた。花瓶には地味だが淡く美しい花が生けられていた。

(サクラ部長かな……。あの方も忙しいのに)

ツバルは、少し暖かい気持ちになった。

リクはベッドに肘をつけて体を横たえらせ、雑誌を読んでいるところだった。頭に包帯が巻かれていたが、後遺症の様子もなく顔色も良さそうであった。

「よおリク。久しぶりだな、怪我の具合はどうだ？」

リクはむすっとした顔でツバルを一瞥すると、再び雑誌に目を落とした。

「そうか、頭でなくて耳がおかしくなったか」

「……傷心の俺の気持ちも理解してくれよ、副部長。そつとしておいてくれ」

「良い薬になっただろう？反省しろ。シンラン部長もお前を心配していたぞ」

「シンラン先生が？」

気だるそうにやりとりしていたリクの声のトーンが上がるのに気付いて、ツバルはにやりと笑う。

「いい加減、先生と呼ぶのを直せ。学校ごっこをやっているわけではないのだ。それより……、二度とこうやって独断で動くんじゃないぞ。今回はたまたま助かっただけだ」

「ああ……分かってる」

リクの生返事に、ツバルは急に不機嫌になった。

つかつかとベッドに歩み寄ると、リクの読んでいた雑誌を取り上げて近くのゴミ箱に投げ捨てた。

「ちよつと……っ」

「そんな無教養な本を読むんじゃない。ベッドの上でも勉強は出来るだろ？」

そう言つて、ツバルは持参していたバックから本を取り出すとリクに向かって放り投げた。本は綺麗な放物線を描いてリクの手元に収まった。リクは、しぶしぶとその本に視線を向ける。

「開発指南書……？俺、こんなの何十回も読んだよ」

「じゃあ、何百回でも読め。暗唱できるくらいにな。お前の役目を忘れるな。戦うことは……、それ専門のやつらがやってくれる」

リクは呆けた様子で、ツバルを見た。

「なんだ、その顔は」

「いやあ、副部長からそんなこと言われるとは思わなかったよ。むしろ、自分から戦いに行く人かと。シンラン部長みたいに」

「シンラン部長は……もう戦わない。だから開発部長に就いたんだ」

「それがおかしいんだよなあ。シンラン部長、どうして開発部にい

るんだろ？戦ったら、アルト部長と互角以上なんだろ？」

「そのことについては、シンラン部長は俺にも口を閉ざしている。

……とにかくつ、俺達は俺達の領分をわきまえて活動すればいいんだ！サクラ部長にも心配をかけさせるな」

「母さん……か……」

それを言われると、リクは胸が痛かった。ただでさえクーが重体で母さんも憔悴しているはずなのに、自分まで心配の種になってしまった。

父さんは、どうしてるんだろう。いや、あんなやついつだって帰って来なかったじゃないか。今更、当てに出来る存在じゃない。

「なあ……なんで母さんは、父さんと結婚したんだろう？」

「む……、そんなこと俺が知るかつ」

突如浮かんだ当てのない疑問を、リクは傍にいたツバルにぶつけた。だが、ツバルにも見当のつかない話であったので、適当に返すしかなかった。

「そうか……」

リクは、それきり口をつぐんだ。

「それでは……俺はもう行くが、安静にしているよ。人手はいつでも足りないんだから」

ツバルも、リクにフォローを入れた……という気になっていた。

「と、まあこんなところだ。俺がすっかりしないと、開発部の将来が心配だよ」

大げさに、首を横に振ってツバルはため息をついた。

「わ、私も結構大変なんですよ……!!」

今度は、ミサキが話を始めた。

「あ、あのサクラさん何を……」

ミサキが情報部のメインルームに入ると、サクラが仁王立ちともいえるようなオーラを放って立っており、多くの部員がコンピュータ

の前のキーボードを必死に打ちつけていた。

「あ、ミサキ。良い所に来たわね。ちよつと最近情報部もたるんでるみたいだから、気を引き締めようかと思つて。今回のことだつて“この子”がもつと早く報告してくれていたら良かったのよ」

そう言つて、近くでコンピュータと睨めっこしていた男の耳を掴んで捻つた。先日、襲撃があつたときにモニターを監視していたオペレータだ。断末魔の叫び声を上げながら、彼はもう涙目になつてい

る。

「ああ……つ、もうその辺で許してあげてください」

余りに痛々しかったので、ミサキは必死の懇願した。それに応じるようにサクラはやつと指を離すと辺りを見回した。

「そうね、ミサキも手伝つてくれるかしら？」

それを聞いて、ミサキはどきりとした。

「な……なにをでしようか……？」

「そんな嫌な顔しなくても大丈夫よ。貴方はいつも通りにすればいいんだから」

サクラはいつもと変わらない笑顔を浮かべた。

「はあ……」

戸惑うミサキを一つのコンピュータの前に案内すると、サクラも自分のコンピュータの前に座つて何かしら操作を始めた。それをミサキ含め、多くの情報部員が怪訝な様子で見つめている。

よしつ、と声を上げるとサクラは立ちあがり大声で叫んだ。

「今から出す課題のプログラムを、ミサキより先に解析できた人から今日は終わつていいから。じゃあ、スタート！」

「へ？」

突如、名指しで指名されミサキはきよとんとしてしまった。

「ええええええええ！？ミサキ副部長に！？」

それに対し、多くの情報部員は驚嘆とも悲鳴ともつかぬ声をあげた。それもそのはずである。情報部のナンバー2に勝つのが条件なのだ。最初から、終わらせるつもりなんてない

皆が落胆し

た。

「なるほど……、この課題なら二十分もあれば終わりますね。うおおおおお！」

ミサキは課題に一通り目を通すと、眼鏡の奥をキラリと光らせた。そして、奇声のような雄叫びを上げると、驚くべき速度でキーボードを叩き始めた。

「やっぱり副部长、二重人格だよな……」

「コンピュータの前に座ると人格変わるもんな……」
と、どこからかひそひそ声が聞こえてきた。

開始から十数分たったころ、澄んだ声が沈黙を破った。まだ、ミサキはキーボードを叩いている。

「終わりました」

「え……？」

皆が刮目して声の持ち主に視線を集めた。小さくないざわめきが徐々に広がっていく。

「ユーリ……ね。さすが……と言わざるを得ないわね」

サクラは感嘆したように、だが予め分かっていたような満足げな顔になった。

やはりここ最近の実戦経験がとんでもないものになっているのだとサクラは思った。自らの生死に関わることなんて、実際にその身に感じなければ分かる訳がない。その点においてユーリは、他の誰よりも勝っていた。

そしてそんなことにも気付かずに、ミサキは格闘を続けていたのだ。終わったのはユーリが終わってから五分後である。その時に、負けたことを知らされた。

「嘘……私が負けた……？」

「ええ……、でもミサキも相当な早さだったから気にすることはないわよ」

サクラは優しく声をかけてくれたが、ミサキは落ち込まざる得なか

った。

「なるほど……、みんな苦労してるんだね」

他人事のように、エルドは口笛を吹いた。

「それで、お前はどうかんだ？」

ツバルが今度はエルドを促すように親指を向けた。

「くすつ、まあ僕の事はいいじゃない」

エルドは肩をすくめると、視線を泳がせて誤魔化すように笑った。

「なっ、それは不公平だぞ！」

「そうですね。私達にだって、聞く権利がありますっ」

「また今度、機会があるときに……ってあれ。アルト部長から？」

ポケットの中に振動を感じて、エルドは端末を取り出した。どうやら、アルトからの連絡の様だった。

それと同時に他の二人も端末を取り出して、液晶に瞳を瞬いた。

「俺もシンラン部長からだ」

「私もサクラ部長からですね」

三人は顔を見合ると、吹き出した。

「やれやれ、監視されているかのようだね。残念だけど、今日はこの辺で失礼させてもらっよ」

「ああ……俺も行くか」

「私も行きます」

三人はすくつと立ちあがると、それぞれの道に分かれて歩き始めた。

「春に生まれたから、ハルカいうんはどうや？アルトは、どう思う？」

「リョウコさんらしくて、いいんじゃないかな。この子には、俺たちの様な思いをさせたくない」

「うちは……そうは思わんけどね」

次回、『第二十一話：悠遠の約束』

第二十一話：悠遠の約束

「リヨウコ＝シオン二佐ですね、こちらアルト＝コウザキ二佐です」
そう言つて、灰色の軍服に身を包んだ男は仰々しく敬礼して見せた。
「リヨウコ＝シオン。よろしゅう」

同じく軍服の女性は、愛想良く微笑んだ。
どこが陰のある笑顔だとアルト＝コウザキは思った。
それが、彼らの初めての出会いだった。

この時アルト＝コウザキ、リヨウコ＝シオン両二佐は地球である国の軍隊に所属しており、戦闘航空機乗りとして戦場を駆け巡っていた。

「ねえねえ、コウザキ二佐。転属してきた人、なかなか可愛くないですか？話し方は独特だけど、それもまたいいっていうか。なんかね、前の隊が全滅したらしいですよ」

「カシムか、不謹慎だぞ。そんなことを考えている暇があったら、訓練でもしておけ」

アルトの部隊員で軍内でも情報通のカシムが軽口を叩きに来た。どうも軍人としての心構えに欠けるようで、アルトは普段から口を酸っぱくしてくどくど忠告していた。

「お前、いつか命を落とすぞ」

「大丈夫ですよ、なんとつて二佐がいますからね」

そう言つて、カシムはへらっと笑った。その様子をアルトはやれやれといった様子で見っていた。

アルトが訓練を終えて、宿舎に戻ろうと歩いている時のことだった。

訓練等を行う軍の基地から宿舎まではそれなりの距離があったので、歩いて通わなくては行けなかった。基地も宿舎も海のそばに建てら

れていた。アルトは顔に粘つく潮風が、あまり好きではなかった。精密機器にとつてもいいとは思えなかったのだが、この地点は防衛上重要な意味を持つことは知っていたので、責任感も感じていた。港町はもともとが寒村だったこともあったが、住民はほとんど避難を余儀なくされていたので、夜になると明りがないといっても過言ではなかった。木々を縫うように作られた一本道が、基地と宿舎を結ぶ唯一の交通路であった。僅かな街灯を頼りに、暗闇を突き抜けていく。ふと見慣れぬものが目に飛び込んできた。

「明り……？」

自然発生的でない光を認め、アルトは足を止めた。ここは確か、軍の共同墓地のほずである。数多もの殉職した魂が眠っている。墓地といつても、墓石が並べられているわけではなくて、巨大な石碑がひとつどつしりと佇んでいるだけである。常時、墓前には誰かによって花が供えられていた。石碑には亡くなったものの名が刻まれている。

近づくそれは携行用のランプの明りであることが分かった。そして人一人分の影が、照らされた地に幾何学模様を作りだしていた。こんな時間に墓参りだろうか……、もつともここにいるのは軍関係者しかあり得ない。アルトは警戒心を持ちながらも、その内心多少の好奇心が湧いてきていた。恐る恐る声をかける。

「そこにいるのは誰だ？」

ビクツと、その影が震えた。

気付かなかったが、人影は石碑にもたれかかるようにしてうずくまっていた。その影は、ゆっくりと立ち上がりアルトの方を振り向いた。

「貴女は確か……シオン二佐。こんなところで何を……」

「コウザキ二佐やね。ちょっとびっくりしたわ」

リョウコの瞳は潤んでおり、目じりからは幾つもの涙の跡が見えたのでアルトは瞬時に状況を把握した。

「前の隊の弔いを……」

「あんた……、うちの隊がうちを除いて全滅したこと知ってるんや？」

「話は聞いていた……すまない」

触れられたくないこともかもしれないと、アルトは思った。人のプライベートに踏み込むのは趣味ではなかったし、そんなことをしたいとも思わなかった。罰が悪くなって、謝罪の言葉が口について出てしまった。

「ええんよ。まだな……気持ちの整理がつかれへんのよ……」

「軍人なら、殉職は必ずしも悪い結果ではない。立派だと……思う」
アルトは、リヨウコを励まそうとかけた言葉のつもりだった。しかし、その言葉でリヨウコの顔に動揺が走ったことにアルトは気付かない。

「へえ、あんた仲間を亡くしたことは？」

「まだないな……。俺たちの部隊の担当区域はそこまで戦闘が激化していない」

そか、それなら何よりやとリヨウコは微笑した。だが、ずっと表情を歪めると睨むようにアルトを見据えた。

「ほな、うちの気持ちは分らん。責めてるんと違うんよ？うちもこんなになるまでは、あんたみたいな考え持ってたしな」

突然のリヨウコの態度の豹変に、アルトは目を丸くして驚く。

「悪い、変な話したな。そろそろ帰るに。うちに付き合わせてえろ
う悪かったな」

そう言つて、リヨウコは闇の中に溶けるように去っていった。

アルトの胸に積もった霽もやのような不安は彼女が去った後も拭いきることが出来なかった。

。 転機は突然訪れる

「カシム！」

「に……にっ二佐あっ！うわああああっ！」

一瞬の出来事だった。危ないからやめると制止するのも振り切り、先陣を切っていたカシムが墜とされた。機体は空中で爆発四散して、粉塵と化した。

「アルトっ！何をしている！？動きを止めるな！」

上官からの叱責も耳に届かなかつた。いや、外界からの全ての因子がアルトに影響を及ぼさない。世界から隔離されている感覚。アルトの瞳に映るは空虚。あらゆる物事がフィルターを通すかのように第三者的にしか感じられなかった。アルトは、直面する現実打ちひしがれていた。

だから、目の前に接近する殺意に満ちた敵機にも気付かない。

「アルトっ！」

アルトははっとした。少しずつ、意識が世界と繋がっていく。それに従い、ようやく敵を視認した。しかし。

（間に合わない）

万事休すかと、そう思われた。

アルトの眼前にまで迫っていた敵機は爆炎を上げて墜落していった。上からの銃撃を受けたらしかった。

危機一髪。言葉にすれば一言で済んでしまいが、アルトは死を覚悟した。

（先程の声は……）

「シオン二佐か……」

しかし彼女は所属こそ同じであれ、部隊は別だ。何故俺を助けたんだ、とアルトは逡巡した。

しかし、今は戦場である。アルトはカシムの死を胸に抱き、機体を駆った。

「今日、俺の部下が一人死んだ。すまない……」

アルトは頭を垂れて、うなだれていた。シオン二佐がそんな謝罪を求めていないことなど分かっていたのではないのか。謝罪して、自分が楽になるうとしてしているのか。そう考えると、なんて自分が浅ま

しいのだろうという嫌悪感がアルトの胸に巢食っていった。

「二佐の……言うとおりでした。人の死は……こんなにも……」

「重い……か？」

リヨウコは、抑揚のない声で言い放った。

自分の言うことが見透かされているようで、アルトは若干身をすくめた。

「せや。人の死なんて、一番近くにあるように感じるけど、事実一番遠くにある。特にうちらみたいいな事してるとな」

アルトは応えるべき言葉が出てこない。それに対しリヨウコは淡々と話を続ける。

「せやろ？アルトだって、あの墓に花を供えたことぐらい一度や二度あるやろ？でもよう思い出してみ。その行為がどれだけあんに影響を与えた？いや、どれだけあんたを救った？名も知らぬ味方の軍人ですらそうなんや。敵兵の命の重みなんて分かるはずない」

ずしんと胸の奥に沈み込んでいくような言葉だった。もし心が湖の様なものならば、そこに一つの巨大な石を投げ込まれたかのようなそして、その水しぶきは湖の外まで飛び散って容赦なく辺り一面を濡らした。

「でも、うちらは違う。うちもあんなもその“死”を身近で感じた」

「二佐は今日俺を守る為に、人を殺した」

シオン二佐の言っていることは、分からなくはない。ただそれを受け入れるのは、何故かたまらなく苦痛だった。だから、意味のない反論をしてしまう。

「ああ、そうや。それはあんに死んで欲しないから。酷い矛盾やとも思う。でも、こんなの皆が気付いていることやねん。やけど目を背けてしまふ。こんな巨大なうねりは変えられず、やがてそれは常識へと昇華する」

アルトは押し黙るだけ。観念したように、リヨウコの言葉を聞いていた。

「うちも自分が戦ってることに、理由が欲しいだけなのかもしれん。

眠れない夜に襲いかかる背徳感から逃げたいだけなのかもしれへん。それでも構わん。うちは、こんな戦い早う終わらせるべきや思てる。それがうちの答えや」

綺麗事だと切り捨てたかった。死ぬのが恐いだけだろうと詰りたかった。だが、どの言葉も空しく響くだけだと分かっていた。今まで自分の信じていた地盤が揺らいで、どこに立っているのか、どうやって立てばいいのかすら分からなくなりそうになる。

「俺も……、こんな戦い早く終わらせるべきだと思う。だが、二佐の言葉が全て正しいとも思えない。今まで死んでいった奴らには死んでいった奴らの信念がある。カシムは、お前の為に死んだわけじゃない！二佐の言うことはもつともだ！だが、そうやって独りよがり考える奴が戦争を始めたんじゃないのか！？」

アルトは吠えた。たまらなくなつて声を張り上げた。

「じゃあうちは……じゃあうちはどうしたらええんよっ！うちはどうしたら……」

冷静を保っていたリヨウコもアルトにつられて叫び声を上げる。

「……二佐の言う、巨大なうねりを変えれば……いい」

考えて考え抜いて出た言葉じゃなかった。リヨウコの紡ぎ出した答えに比べればなんて稚拙で甘い、と心の中で苦笑してしまった。だが、これしか思いつかなかった。

「俺達だけでは、難しいかもしれない。すぐには難しいかもしれない。だけど、これから変えていこうと意思を持って動けばそれは必ずしも不可能ではないと……思う」

「リヨウコさん……つまりハルカの母さんは、この後どういう反応をしたと思う？」

「えー……笑った？うちなら呆れて笑いそうやなー」

「半分正解だな。笑って、そして泣いた」

「え、なんでや？」

アルトはふつと笑って誤魔化した。

「それで結局、俺は母さんと結婚することになるんだが……」
「え、そこまでのプロセスはどうなん？誤魔化さんと言ってや」
「まあ、それはいいだろう」

滅多に見せない父親の照れた表情にハルカは自然と笑みが零れた。
ハルカは、久しぶりに会う父の顔をぼんやりと眺めているだけで、不思議な安心感に包まれていた。

アルトから呼び出しを受けたのはエルドに忠告を受けた次の日のことだった。

「いや、今は上官と部下の立場でなく、父と娘として話そう」
父からそんなことを言われたのは、私が配属されてから　　つ
まり部下と上司の関係になってから　　は初めてじゃないだろ
うか、とハルカは驚いた。常に規律を重んじ人一倍責任感の強い父は、例え娘であろうと他の部員と同等にハルカを扱っていた。寂しくないと言えば嘘になるが、父のそういつたところも尊敬できる所
이었다し、いつか自分もそんな風になりたいとハルカは思っていた。

そして、母の話を切り出された。父から母の話は幾度となく聞いた事があったが、これ程事細かに、かつこれ程深遠に触れたことは今までになかった。母の言葉を丁寧に、滑らかに諳^{そら}んじる父にとって、やはり母は大きな存在だったのだと改めてハルカは思った。

「俺はその場にいなかったからハルカに対して何も言う権利がない。ただ、世界中を敵に回してもハルカの味方である……というのはいさかな」

アルトは、そう言って苦笑した。ハルカはその様子を見て目を細めた。

アルトは、ハルカに話さなかった事を一人回想していた。

「春に生まれたから、ハルカいうんはどうや？アルトは、どう思う？」

「リョウコさんらしくて、いいんじゃないかな。この子には、俺た

「ちの様な思いをさせたくない」

「うちは……そうは思わんけどね」

「どういうことだ？」

「別に？うちの都合でこの子の可能性を狭めとうないだけや。ハルカが、何を指そうと、何をやるうとうちはそれを応援してやりたい。だから、アルトもうちと約束。この子の未来はこの子が決める」

「本音を言つと、ちょっと不安だけどね。リョウコさんに言われると敵わないな」

「おおきにな。遙か遠い未来までの約束や」

「ハルカにもう一つ意味が込められたね」

「あはは。そうやな」

リョウコさんにはこうなることが分かってたのだろうか。大雑把に見えて、かなり繊細で思慮深い人だったから。ハルカが自分達と同じ道を選び、そして同じ悩みを抱える。それでも、この悩みは自分で解決するしかない。その手繰り寄せた答えの先が、俺達と同じとも限らない。だから、どんな道を選ぼうとも俺とリョウコさんはハルカの味方でいよう。例え命尽きようとも、この想いは涸れない。

これが、俺達の導きだした答えだ。

「シアル……」

俺は、掌に収められた写真を見つめていた。そこに映っている笑顔の少女はもういない。

「俺が殺したから」

そうだ。俺はあいつを守つてやることが出来なかった。どうしようもなく屑だった俺に希望を与えてくれたあいつを守つてやる事が出来なかった。あいつをマーゼ・アレインに入れたことは正しかった

たのか？無理強いをしたわけじゃないなんていうのは、体のいい免罪符だろ？俺の後ろをついてくることなんて分かっていたんだろ？いや、違う。

それを期待していたんだろ？

そんな俺の甘さが、あいつを殺したんだ……。

涙なんか流せなかった。そんなことが許されているわけなかった。だから、俺の取るべき道は決まっていた。

復讐。

そんなことをシアルが望んでいる訳はないと仲間が言った。そんなこと俺が分かっていないと思ったのか？と笑い飛ばした。当然だ、シアルがそんなこと望む訳ない。だが、それで構わない。このまま悲劇のヒーローを気取って一生を終えるつもりなんて毛頭ない。勿論、正義なんて振りかざすつもりもない馬鹿馬鹿しい。シアルはきっと天国で幸せに暮らしているだろう。好きだった歌も歌って演劇もやっておいしいものをたくさん食べて笑っているだろう。それを確かめることが出来ないのは惜しいけど、悔しいけど、それでも全然構わない。

俺は地獄に堕ちようと、世紀の大犯罪者として語り継がれようと、全然構わないんだ。

世話になったマーゼ・アレインに迷惑をかけることになるかもしれない。それはちよつと心苦しいかもしれない。でも、許してくれ。

俺は……あいつのなんだったんだろうか。というより、俺はあいつをどう思ってたんだろうな。好きだったとか？ありえねー。あんな餓鬼。同情？ああ、それが近いんじゃないの。……違うか。俺はあいつを羨んでいた。あいつの放つ光にただ見惚れていただけなのかもしれないな。

だから、許せないんだ。あいつを奪ったその事実が。

「ハヤブサ……」

「ああ、エクスルか。どうだ？あいつらは無事なのか？……そんな辛気臭そうな顔してんじゃねーよ。俺まで哀しくなるだろ」

「ああ、すまない。彼らはカレンの救出に成功し、施設内に潜伏しているとのことだ。つまりところまだ計画は完遂していない。それに」

「その先は言うんじゃねえ。まだ……言うんじゃねえ……」

「そうだったな……。では次のフェイスもお前に動いてもらっていないんだな？」

「みなまで聞くなよ、たりめーだ」

宜しく頼むと、そう言ってエクスルはハヤブサの前から去っていった。もうすぐ、計画の次段階へと移る。本来計画が成功していれば有り得なかったパターンだけに、エクスルもオーベルトも頭を抱えていた。それに、シアルの死がもたらした影響は大きかった。火星政府の所有する兵器を全て鹵獲ろかくないし、破壊せよという意見もあった。実際にそれを行うとすれば半々で成功するだろうとハヤブサは思っていた。地球で造られた機体の性能が政府のものより良いのは分かっていたし、なにより捨て身の俺達と守るべきもののある向こうでは、戦い方も変わってくるだろう。それでも、それを遂げてしまえば世論の支持なんてものは全て失ってしまうだろう。

「どっちにしろ俺には関係ないか……」

彼にとっては復讐を遂げられればそれで良かった。だから、計画が好戦的な方向に傾けば傾くほど都合が良かった。

「俺は………やる」

彼の願いは成就するのだろうか。しかしそれは彼も知っている通りシアルの願いではないのだろう。

次回、『第二十二話：マーゼ・アレイン』

抗う者たちが描くは、希望か絶望か。

第二十二話：マーゼ・アレイン

「どうだ、ファイエン。連絡はとれたのか？」

「ああ……、だけど『必ず、助けに行く。待ってる』としか言われなかった。何かしらシアルに問題があったことは確かなんだろうけど……」

ファイエンの言葉を聞いて、カレンもレオも顔を曇らせた。彼ら三人はヴェクトを振り切ったの逃走に成功したのだが、脱出用のメギドとそこにいるはずのシアルが合流ポイントから消えていたのだ。やむを得ず火星政府のモジュール内に潜伏しているが、そういつまでも隠れられるものでもないだろう。電波障害をくぐり抜けて、マーゼ・アレイン本部と連絡はついたが、詳しいことは分からなかった。「そのうち、本部から次のフェイズの指示がくるだろう。それまでは待機していよう」

ファイエンの言葉に、レオとカレンもうなずいた。

「それにしても電波障害とは厄介ですね……。こんなことが出来ただなんて……」

レオが憂鬱そうに顔を伏せた。彼も知らない技術であったのだ。

「そうだな。やはり私の脱走の件もあるが、他の様々な要因も絡み合って火星が荒れているのだろう」

「あちらも本気ってことですね」

「ま、なにかあると私は義父さんを信じているし、私の正義を貫くまでだ」

「僕もです……、父さんのことは信じ切っているとは言えませんが、そうやってレオは苦笑した。二人のやり取りを聞いていたファイエンが、口を覆ってぷるぷると震えていた。明らかに笑いをこらえているようだった。

「何がおかしい？」

「いやね。そうやって二人でとうさん、とうさん言っていると姉弟

みたいだなあなんて」

カレンの問いかけに、フィエンが笑いをこらえながら答えた。

「なるほど……それもそうだな……」

「あれ、『茶化すな!』とか言ってるかと思っただけれど」

「私は、そんなにいつもピリピリしているイメージなのか……」

フィエンの意外そうな顔を見てカレンは、呆れたようにため息をついた。

「ところでレオ。隊長は、何故マーゼ・アレインを立ち上げたのだろうか?」

長い髪をかき上げて、一転真面目な顔になったカレンが問う。

「父……ですか?ご存知かもしれませんが、僕は長い間父から離れて一人で生活してましたので、それまでのことでよろしければ……」

「なるほど。それは私も聞きたいな」

フィエンも身を乗り出して、レオを促した。レオは少し照れたように笑うと、宙を見つめて話を始めた。

「僕には、母の記憶はありません。事故で亡くなったとだけ、聞かされています。ですから、地球では父、妹、そして僕の三人で暮らしてました。平凡だけれど不満のない生活を送っていたと思います。この頃、父が何をしていたかは僕も知りません」

「そういえば、隊長がもともと何をなさっていたのかは私も知らないな」

フィエンが相槌を打つ。しかし、カレンが水を差すなど見咎め、フィエンは渋々と引きさがった。

「僕達三人は、火星へと上がります。今思い返せば、ある程度の役職が父に与えられていた……ということになるのでしょうか。その後、少しの間は三人で暮らしました。父は、火星に行く直前まで色々悩んでいたようで、一人隠れて苦悶の表情を浮かべながら頭を抱えていた日々も多くあったのですが、火星に来てからそのような行動はより顕著になったように思います」

「この時からマーゼ・アレインの構想はあったのだらう。そういえ

「ばフィエン、お前は私より古いと聞いているが、お前こそなんでもんなところだ？」

「私のことは……いいでしょう別に」

「フィエンは、苦い顔をしてカレンをはぐらかした。明らかに答えるのを避けていた。」

「話したくないなら、無理強いはしない。それが私達の“在り方”だからな」

カレンの言葉を聞いたレオが、瞳を閉じて何かを想うように唱えるように言葉をなぞる。

「過去のことはお互いに関係ない。ただ、現在^{いま}、そして未来^{これから}を大切に。それが父の考えだったんですよね」

「ああ……そうだ。話を止めてすまない。続けてくれ」

カレンは、話の続きをレオに促した。

「はい。三人の生活は、一見穏やかに見えていたかもしれませんが、張りつめた糸が日に日にその緊張を増していくのは僕にも分かりました。そして、その糸を裁断する決定的な事項が起きます。セレナの地球への強制的連行です」

辺りが重苦しい雰囲気に含まれる。みな分かつてはいることだが、言葉にすると改めてその悲痛さに言葉を失う。本人は、もはやそれを苦とは思っていないのかもしれない。それでも周りの人間の哀しみは消えない。傷は癒えない。

「当時は、運がない、理不尽だ、悔しい等、行き場のない哀しみ、そして怒りに震えました。しかし日が経るにつれ、父のことを良く思わなかった上層部が、わざとセレナを選んだのではないかと考えるようになりました」

「当時から、マーゼ・アレインの構想があつたのなら当然だな。隊長の思想を見抜いていたものの仕業と言えないこともない」

カレンが冷静に言葉を添える。

「父は、僕の知らない所での活動に精を出していました。セレナの為にも真面目に働くべきだと考えていた僕と衝突を繰り返し、遂に

僕は、父と離別し一人で住むことになります。寂しくなかつたと言えは嘘になります。けれど僕には大切な……二人の友人がいたんです。カレンさんはご存知ですよね？」

「あの時の青年……か」

カレンが脱走するときその場に現れた青年の顔がカレンの頭に思い浮かんだ。二人のやり取りがフラッシュバックし、沈痛な表情になる。

「はい。彼の名はリク。そしてもう一人の名はユーリ。二人は僕にとつて大切な友人です。きつと今でも」

レオは自然に表情が緩み、望郷の念に駆られる。しかしそれもすぐに引き締めて、話を続けた。

「僕とリクは開発部へ、ユーリは情報部で活動することを決めました。僕は必死に……勉強をし、訓練をこなしました。何の為に？誰の為に？当時はそれすら分からなかつた」

レオは大げさに首を振って肩をすくめた。一息を置いてから、再び口を開く。

「僕は父に認められなかつたのか、見返したかつたのか、妹を救いたかつたのか、それともただ自己満足の為なのか。がむしゃらに生きる毎日は悪いものでもありませんでした。自分で言うのも何ですが、その努力が認められて、僕はリクより早く……現場に立つことが出来ました。この時の喜びは、筆舌に尽くしがたい……！」

レオは瞳を見開いて、身体全体で達成感を表していた。それは、どれだけ時を重ねようと薄れることのない感動の証明でもあった。

「リクは、間違いなく気付いてなかつたといえます。表面上取り繕つてはいましたが、僕は彼に負けたくなかつたんです。優秀な父と母を持ち……自覚はしていませんが、彼の資質は僕にも勝つていることは分かりました。恐らく、シンラン部長も気付いていました」

「私には、そうは思えないけどな。お前の方が幾らか聡明で機転も利くし、信頼できる。お世辞ではないぞ」

カレンが照れを隠すように突っぱねた顔と言葉で応じる。彼女の内面を薄々感づいているレオは、嬉しそうに笑う。

「ありがとうございます。その言葉は素直に嬉しい。僕は、リクがただ羨ましかっただけなんだと思います。そういう意味で、僕は親友というでっち上げの幻想に甘えていただけなのかもしれません。分かれた立場になって初めてお互いに気付くことが出来たと……そう思います。彼もきつと分かってくれたと、いえ必ず分かってくれています」

レオも牢獄での彼との再会に馳せていた。彼はあの時初めてお互いに向かいあえたと思った。

親友でいるということは、それ以上にもそれ以下にもならない。それはとても素敵なこともかもしれない。但し、それはお互いの醜い部分も清い部分も覆い隠してしまう。仮初の関係。親友というのは聞こえがいいが、一歩間違えばそれは“死んだ”関係なのだ。レオはリクと離れてそれに気づくことが出来た。壊れるのを恐れて間違いに触れようとせず、嫉むのを嫌って優良な部分を認められない、そんな自分に。

「覚悟はあるのかい？ そんな大切な彼等と対峙する為の」
話を聞き終えたフィエンが鋭い視線をレオに投げた。レオもそれを逸らすことが出来ずに視線は空中で絡む。

「僕には、リクとユーリを……いや誰かを殺すことなんて出来ないでしょう。それでも、自分に出来ることがあるはずです……！ 今まで、必要なもの以外を削ぎ落してきました。そして最後に残ったものが、絶望だなんて信じたくないから。フィエンさんも、そしてカレンさんも……」

『何だ？』

二人の声が絶妙に重なった。

「いえ……何でも」

同じでしょう？

レオは最後の言葉を飲み込んだ。それでも、その場にいた三人とも

それを分かっていたかのように、口の端を少し釣りあげて笑った。彼らにはそれで十分だった。彼らの持つ覚悟は何かを奪う為の覚悟ではない。

オーベルト、ハヤブサ、エクスル、他多数のマーゼ・アレインの面々は月の都市部から離れた僻地に来ていた。彼らの月基地もこの近くにひっそりと建てられている。比較的クレーターの少ない都市部とは違い、ここは大小無数のクレーターが至るところにその存在感を放っていた。それは自然の摂理を感じさせ、人間のせんじやく繊弱さを教えているような気さえ起こさせる。その内の一つに、彼等は並んで佇んでいた。

ハヤブサが、鮮やかに彩られた造花を巨大な洞穴に放り投げた。重力に逆らって高く舞い上がったそれは、やがてゆらゆらとその穴に吸い込まれたいくように落下していった。

皆が目を閉じて黙祷を捧げた。息苦しいほどの沈黙が、ハヤブサのそして皆の胸に沁み込んでいった。

「ありがとうございます。これでシアルも安らげます」

やがて顔を上げたハヤブサが毅然とした表情で、オーベルトに向かって言った。

「こんなもの、残された我々の気持ちの整理に過ぎない。それでも彼女が喜んでくれるなら……何度やっただって構わないんだ」

オーベルトは苦々しげに言った。彼はこんなことでは到底シアルに申し訳が立たないと思っているのだろう。ハヤブサは、オーベルトがそこまでシアルの事を考えてくれているのが嬉しかった。

「ええ、きつと喜びますよ。だってあいつは俺達を家族だと……思ってたから」

「そうか……、それなら何よりだ。あいつがここに来てからその最期までにたくさんの喜びを見つけてくれたなら」

彼等は知らない。シアルの死を招いた最初の原因が仲間を侮辱された事に腹を立ててしまった、という事実を。それを知らないのは僥倖うごうなのだろうか。

しばらくの沈黙の後、オーベルトが再び口を開いた。

「エクスル。皆を連れて、先に基地に戻っていてくれないか？」

「ええ……分かりました」

オーベルトの言葉に、エクスルは少し戸惑いつつも、言葉に迷いは感じられなかった。彼は、その場に相応しくない感情は表に出さない。エクスルをはじめ、オーベルト以外の面々は基地の方へ引き揚げていった。

オーベルトもそこから、どこかへ向かって歩き始めた。広大な荒地を当てもなく彷徨っているようにも見えたが、彼には目的の場所があった。ほんの少し歩いたところで、オーベルトは足を止めた。そこには、ぼつんと忘れ去られたように石が佇んでいた。

彼は手に持っていた造花をそこに捧げた。その石には、彼の妻の名前つまりレオとセレナの母の名が刻まれていた。

当然、彼の妻の墓などではない。それは地球にあるのだから。だが、彼も一人の人間である。この石を妻の依り代として、時々造花を添えて、日々の出来事を報告していたのだ。

オーベルトは、その石にひざまずいた。

「シアルが死んだ。私のやってきたことは……本当に正しかったのだろうか。いや、違うな。そんな事を言っても彼女がつかばれる訳もない……。それでも……たまたま不安になるんだよ……。っ！」

オーベルトは誰にも話せない胸の内を吐露した。ここでだけ、彼は“隊長”ではなく“オーベルト”“アケルト”になれる。

「もうじき私は死ぬかもしれない。だが、ここに賭けようと思う。私のことはいいんだ。セレナと、レオと他のみんなを……守ってやつてくれ……頼む」

オーベルトは懇願するように墓石を両手で抱き、それに顔をうずめ

た。そして、呻くように声を絞り出した。

「地球で抗い、月で抗い、そして火星でも……。もつとも、先に手を出したのは私達なのか……。？それでも根本の原因は彼らだろう……。！？いつのまにか最初の目的すら薄れつつあるのだろうか……。？それでももう誰にも止められないんだ……。止める訳にはいかないんだ……。！」

オーベルトは立ちあがると、先程までの様子が嘘のように背筋を伸ばして基地に向かって歩き出した。その表情は険しく、瞳は灰に霞かすみがかかった空を睨んでいた。

「皆に次の作戦フェイズについて、話す。尚、この作戦における参加は個人の自由とする。死ぬ可能性も多分にあるからだ」

オーベルトは、丁寧にはしかし厳格さを持ち合わせた声ではっきりと言った。しかし、周りに動揺は広がらない。マーゼ・アレインの面々は基地のブリーフィングルームに集まっていた。

「何言ってるんですか、今に始まった事じゃないでしょ？俺達は今までだって好き勝手やってきてんだから」

ハヤブサが、皮肉まじりに詰なじるように言い、他の隊員もその言葉に賛同する。もつとも、ハヤブサにそんなつもりはないのだが場を和ませるためだ。彼はオーベルトのいつもと違う雰囲気^{なまじ}に気付いていた。

「そうか、すまなかつたな。では話そう。火星政府のメギド格納庫に一斉攻撃する。機体を全て鹵獲ろかくないし、破壊する」

この言葉に、一部の隊員はなおも表情を変えることなく黙し続けたが、多くの隊員は息の呑み、その後動揺が広がった。しかしそんな声など聞こえぬかのように、オーベルトは話を続ける。

「機体は地球から運んだメシアが十五機、防衛部から持ち出したメギドが五機の合計二十機。これで、作戦を決行する。故に、全員で参加することは元々出来ないのだが……。残った者たちも変わらず、我々の声が、存在が、果てぬように活動を続けてもらおう……。！」

オーベルトも分かっていた。こんなのは詭弁だ。逃げる為の口実に過ぎない。それでも良かった。今までもそうだったが、今回は危険度が段違いなのだ。無理強いなんてしたくない。

「俺はやるぜ？」

「自分も行きます」

ハヤブサと、エクスルが我一番にと声を上げる。

しかし、それを聞いたオーベルトは少し悩んだ後先程の発言を撤回させた。

「そうだな……エクスルは残ってくれ」

「な、何故です？」

信じられないとも言つように、エクスルは立ち尽くした。

「私にもしものことがあった時、指揮が執れるやつがのこってないといけないだろう？」

「しつ、しかし……」

「自惚れんなよ、エクスル。何も隊長はお前の身が可愛いんじゃない。隊長と、そして俺達の目的の為だ。………お前が必要なんだよ」

ハヤブサはエクスルを責めるように言い放つてから、表情を一変させて、悪戯がばれた子供の様に微笑した。それを見て、エクスルも観念したように引き下がった。

「分かりました……」

「宜しく頼む。フィエン達にも、彼らの意見を尊重させるつもりだ。」

オーベルトが、その場にいない三人にも話を振る。作戦自体は彼らの再救出が最優先して行われる。いや、正確にはほぼ同時に行われる。防衛部奇襲が成功すれば、彼等三人にわざわざ目を向ける余裕もないだろう。

「へっ、あいつらが、隊長から離れる訳ないでしょう？」

ハヤブサが言った。

「いや、フィエンだけは地球に戻す。地球への報復の恐れがあるか

らだ。それを地球にいる協力者たちに伝えに言ってもらおう」
「地球のメシア倉庫か……なるほど。そちらにも気をつけておきま
す」

既に頭を切り替えたかのようにエクスルは、データを自分の端末に
打ちこんだ。

結局、機体はカレンたちの分を除いても数機が余ることとなった。
参加人数が機体に満たなかったのだ。だが、それを咎める者は誰も
いない。残る者たちには残る者たちの戦いがあるのだ。それに機体
を残しておくことにも利点があるだろう。

「これで、準備は整ったな……！それでは作戦を開始するっ！」
「はいっ！」

次回、「第二十三話：明日に散りゆく色たちへ」
火星の空が濃い朱あけに染まっていく。
もう誰にも止められない。

第二十三話・明日に散りゆく色たちへ（前書き）

7500文字超えています。お気をつけください。

第二十三話：明日に散りゆく色たちへ

マーゼ・アレインが、防衛部への奇襲を行う数日前

……。

「クーがいなくなった!？」

「は、はい……。病室はもぬけの空だそうです……」

サクラはシヨックに動転する頭を冷やして、考えを巡らせた。

……命を取るなら、誘拐する必要なんてない。その場でチューブの一本でも外せば、クーは生き永らえれない……。それじゃあ、何の為？人質にして私の気を引くにはリスクが大きすぎる……。っ！専門の施設と医師がいなければ、人質にする前にあの子は死んでしまう……。

「そ、それで……。サクラさん宛てに一通手紙が残してあったそうです。こ、これです」

「えっ……。？それを早く言いなさいっ!」

サクラは報告に来た情報部員を叱責してから、ひったくる様に彼の手から手紙を取った。

サクラは恐る恐る封を開けて、中に目を通した。彼女の顔がみるみる色を失っていく。その内容は、彼女の想像を遥かに凌駕しているものだったからだ。リスクの大きさを見越しても、マーゼ・アレインの手だとそう思っていたのだ。

「ミサキに伝えて……」

「えっ?」

「しばらく留守にするから、ここを任せると!」

その後、サクラは情報部より姿を消すことになる。

クー失踪から、数日後

……。

「ツバル副部長、こういうときはどうすれば……?」
メギドに乗り込み、削岩機を手にしたリクが言った。

「ああそれはだな……」

近くで様子を見守っていたツバルはリクの問いに、手本を示そうと近づいていく。

彼らは、リクの申し出によって特別に訓練を行っていたのだった。

退院したリクは、考えを改めて“開発部”としての自分を磨くと誓ったのだ。シンランによつて、現場に立つことが許されてはいたが、諸々の事情により最近の訓練は休みがちになってしまっていたので、遅れを取り戻そうとリクも必死だった。

「なるほど……、ツバル副部長さすがだなっ！今まで気付かなかつたよ」

「何言ってるんだ。いずれはお前にも俺を超えてもらわねばならないんだ。未来はお前達が拓くものだからな」

ツバルは口調こそ厳しかったが、その内心リクや他の教え子たちに対する期待は隠せなかった。これからは彼らに間違いのない未来を築いていつて欲しかったから。

ツバルも、クー失踪次いでサクラ離脱を知ってはいたがリクに対しては口止めを命じられていた。サクラによる直々の命である。心配をかけまいと思つての事なのだろう。だが、ツバルはそこまでの心配をする必要もないんじゃないかと思つた。

「ああ……俺達が……これからをつくつていくんだ」

リクも、その言葉がどれだけの重みを持つのか、もう知らない顔は出来なかった。求めるだけの、待つだけの生き方はもう辞めるんだ……と。

「ああっ、通信？ミサキか。俺だ、ツバルだ。……え？何だと？分かった。すぐに行く」

ツバルは、突如情報部の方より緊急通信を受けた。その報せは到底

信じられるものでもなかったが、今は行動に移すのが先決だと判断する。

「どうしたんだよ、ツバル副部長」

「リクはここを動かさな！いいな！？」

機体の中で首を傾げるリクにツバルはそれだけ通信を残すと、ブースターを吹かして慌ただしく飛び去っていった。

後に残されたリクは、ただそこに立ち尽くすしかなかった。

「なんなんだ……？」

「隊長の動きを気取られないように派手にやるぞ」

「おおっ！」

ハヤブサたち、マーゼ・アレインの隊員は編隊を組んで、防衛部落格納庫へ向けて飛行していた。黒と白が混じったそれは、知らぬ人が見たらその異様さに身がすくむであろう。奇妙なコントラストが織り成すそれは、悪魔にもまた天使に見えないこともなかった。

オーベルトは別行動で、機体を積んだ貨物船でフィエンたちとの合流ポイントへ進路をとっている。彼らにすぐに機体を渡して、行動に移せるようにするためだ。その後のオーベルトの行動は誰も聞いていなかった。ハヤブサも、エクスルすら教えてもらっていない。だが、隊長のやることに間違いはないと彼らは信じていた。

「ミサキ副部長、敵機およそ二十数機程……ですね」

「そうね。思ったより多いわ。防衛部に待機している機体だけじゃ足りない……」

ユーリはモニターを見つめながら神秘的な顔を浮かべ、ミサキは爪を噛んで苦い顔になった。情報部も防衛部も、マーゼ・アレインの襲撃は予め認知していた。いや、むしろあれだけ活発に行動しておいて、無視など出来る訳もない。それでも今までは機体を申し訳程度

絡ませただけで、戦いという戦いはしていない。防衛部側が、すぐに戦闘態勢に入れるのは十数機がやっとだ。絶対的な機体も人員はこちらの方が間違いなく多いだろうが、それを全て即時に投入することは不可能である。

「大丈夫ですよ。アルト部長にエルド副部長、それにハルカも出撃準備済みです。むしろ、増援が行くまでに終わっているかもしれないせん」

ユーリは、率直な自分の意見を述べた。もともと、これには若干の不安要素が入る。防衛部の機体は全てメギドである。今までオールラウンドに活躍してきた火星政府側の優秀な機体だ。ただ、先の戦闘でユーリが戦った純白の機体はそれを上回るスペックだった。もし敵がこれを大量に投入してきたとなると、戦局はまるで見えない。リーダー上では、機体の種類までは判別できなかつた。

「私もオペレータとして乗り込みたかつたんですけど……」

「急な戦闘だし仕方ないわよ。こちらから出来るフォローをしましよ」

「はい……」

自ら戦闘に参加したがっている自分に気付き、ユーリははっとした。少し前の自分は戦いを憎み、忌み嫌っていたのではなかつたのか。寒気が背筋を通り抜けるのを感じる。それでも、ユーリは自分が間違っているとは思わなかつた。自分がそう変わったのはそう変わらざる得なかつたからで、それも別に罪を犯している訳でも、それを肯定している訳でもない。

ここ一番で迷わない強さ。それがユーリの武器だった。

リクは、その光景を信じられなかつた。

ツバルには動くなと言われたが、異様な気配を感じたので、それに従って来てみたのだ。

数十機に上るとみられる黒と白の機体が、互いに容赦なく傷付けあっていたのだ。粒子ビームを撃ち合い、剣を交わらせて、火星の空を乱舞していた。当然、機体は火を吹いて破壊され爆散していく。敵味方関係なく、命の鼓動が散っていった。距離はかなり離れているので、自分の身は安全である。それでも体の震えは止まらなかった。

「なんだよ……これ……？こんなのが、俺たちの求める景色なのか……？……？……お前はどうかだよ……レオ」

リクは分からなかった。同じ道を歩いてきた、初めてそれが違えた。殺したいほどの激情にも駆られた。そして心から謝罪したいほどの悔恨にも駆られた。そして、例え立場は違えど抱えている気持ちは同じだと、そう思ったのに。この現実をどう受け止めればいいのか分からない。

「父さん、ここはうちが！」

ハルカがアルトに向かって叫んだ。防衛部側も必死の戦闘だった。ユーリの悪い予感は当たってしまったのだ。マーゼ・アレインはハイスペックのメシアを戦闘に投入してきた。もっともその総数は多いとは言いが切れない。それでも奇襲としての戦力は十分だった。絶えず待ち伏せていた、防衛部のメギドの数を上回るのだから。

回線を通じて、ハヤブサもハルカの声を抑えていた。

ハヤブサは以前聞いた、シアルを討ったパイロット

ハルカ

の声を忘れてはいなかった。

「父さん……だとお……？」

狂気を帯びたハヤブサの顔が歪む。それはもはやシアルが、そして皆が大好きだった皮肉屋で頼れる兄貴分のハヤブサからは程遠い形相だった。そしてそれは表面上だけでなかった。彼の内面はもはや、怒りと哀しみ、そして溢れる復讐心でどろどろに濁りきっていた。それが無慈悲な、しかし彼にとっては最も理想的なアイデアを閃かせる。彼の中で何かが弾けた。

彼は機体を駆つて、一機のメギドにためらうことなく向かっていく。

「あの時の続きをしようぜエ!？」

「あんたはあの時のっ!？」

ハルカもまた取り逃がした敵の声を忘れてはいなかった。先の件を思い出すと、体が震えて頭が真っ白になりそうになる。それでも彼女を繋ぎとめてくれたのは父の声、そして存在だった。

「ハルカツ!」

ハルカの動向に気付いたアルトが声を張り上げる。無論、アルトはハルカの心配をしている訳ではない。

隊長として部下を鼓舞しているのだ。彼女もそれは分かっている。

「せや……！うちは何も怖くなんてない……っ!」

父の声を聞きハルカは自分に言い聞かせるように、言葉を噛み締めた。

ハルカのメギドと、そしてハヤブサのメシア。あの時の映像を再生しているかのように、二機は対峙する。しかしお互いにオペレータを欠き、そして互いの胸の内はあの時はまるで違う。

だからハルカは気付けない

ハヤブサの真意が。

「え?」

ハルカは素っ頓狂な声を上げる。

「ぐっ!!!??」

ハヤブサは、アルトの乗り込むメギドに向かって粒子ビームを放つたのだ。既に他の機体と交戦していたアルトは持ち前の反応力をみせるが、避けきれずに肩に被弾してしまう。ハルカも突然の事に身体が動かない。

「攻撃をとめるナアツ!」

ハヤブサが目を剥いて、激昂する。それはアルトと当初応戦していた仲間へ向けられた言葉だ。だが、もう既にハヤブサの中でそんな概念は消え失せてしまっていたかもしれぬ。

「オオオウツ!」

声を受けたマーゼ・アレインの隊員もハヤブサの狂気に怯えていた。

いつものあいつじゃ……ないと。それでも、戦うことは自分自身で納得して決めたことだ。自分の為、仲間の為、未来の為、彼は惑う来なく刃を振るう。

「舐めるなッ！」

手負いのアルトは、機体の肩から既にスパークを発し出していた。それでも、即座に粒子ビームで相手の粒子ソードを撃ち落とすと、躊躇うことなくその機体に刃を突き刺した。

「ハ……ヤブ……サツ……！」

その隊員は、断末魔を上げて宇宙の塵と化した。彼は最後までハヤブサを心配していた。しかし無情にも、その声がハヤブサに届くことはない。

「ひゃひゃひゃっ……隙ありだゼエ!？」

アルトが討った機体の爆炎に紛れて、ハヤブサが一気に距離を詰めてきた。我に返ったハルカも遠距離から粒子ビームを撃つが、煙に隠れて捉えることが出来ない。

「うらあああッ！」

「ひゃっはーッ！」

アルトとハヤブサの両機体の剣が大きな振動と共に交わった。その衝撃で辺りを覆っていた煙は真つ二つに裂かれて、見通しが晴れていく。

ハルカはそこで、剣と剣を交わらせて押し合いをしている二機を認めた。

「父さん、危ないッ！」

ハルカが、悲壮感を帯びた声で叫ぶ。

アルトは両手で剣を支えていたのだが、それに対しハヤブサは片手で粒子ソードを携えていたのだ。粒子ソードは通常の剣よりも、その強度が遥かに高い。もう片方の腕が腰からハンドガンを抜き、それでアルトが先程被弾した肩を狙い撃った。その衝撃が、機体内部のアルトにも伝わった。

「があっ……！」

アルトは唸り声を上げて、コックピット内部に激しく打ち付けられた。コックピット内部を舞う液晶の破片が彼の片目を切り裂いた。鮮血が飛び散り、彼の視界を奪う。

「くつくつく……！これで終わりだな」

ハヤブサが、崩壊を始めた機体を眺めてにたりと笑う。もっとも彼も余裕がある訳でない。額には汗を滲ませ、体の各部はぎしぎしと軋きしんでいた。それでも彼の精神力はとくに肉体を超越していた。彼の歪んだ狙い、それはアルトの命を奪うことで、ハルカに自分と同じ気持ち 大切な人を失う哀しみ を味わせることだったのだ。最後の1撃を浴びせようと、粒子ソードを振りかぶった。

アルトは、諦めてはいなかった。この間合いで相手の粒子ソードを避けられる道理はない。いくら反応していようと、機体はそれに応えない。だから、最善の手を取ることにする。それが瞬時に思いついたことにアルトは苦笑した。

(リョウゴ……。ありがとう。お前でもこうしただろう?)

アルトは腰背部からライフル型の射出機を抜きハヤブサに向けた。メギドの最後の武装だった。

「あかん、間に合わへん……っ！父さん……っ！」

ハルカも、機体の最大出力で絡み合う二機へ向かうが、とても間に合うとは思えなかった。

その刹那、二機の機体は爆炎と白煙に包まれて、その姿を一時ハルカの視界から消した。溢れる光の筋が彼女の目を刺激する。

やがて露わになったそこには、下半身の吹き飛んだ純白の機体と黒々としたメギドの“破片”のみが浮かんでいた。

ハヤブサの最後の攻撃でアルトの機体は完全に破壊され、誘爆が全体に広がって四散していた。

また、アルトの最後の攻撃はハヤブサのメシアを襲ったが、その全てを消し去ることは出来なかった。彼のもっとも得意とした射撃は、

失われた視力によって、至近距離のハヤブサすら完全に仕留めるまで至らなかったのだ。

「痛ッ……、俺はまだ生きているのか……？」

メシアのコックピットの中は破壊し尽くされており、ハヤブサの体も骨が折れているというレベルでは済まされないような怪我だった。身体の至る所から、血が滴っている。だが、確かに彼は生きていた。その“瞬間”までは。

「あ……？……ごぶっ……！」

満身創痍となったメシアのコックピット部分が、一機のメギドの持つ剣によってハヤブサもろとも貫かれた。

「よくも……アルト部長をおおっ……！」

その機体は剣を引き抜くと、誘爆に巻き込まれないように瞬時にその場から離脱した。残されたメシアの各部はスパークが激しい火花を散らしていた。そして、小さな爆発が白き機体を削っていく。徐々にその規模は膨れ上がり、最期の時を待つのみとなった。

「こ……れで、俺も……終わりか……」

薄れゆく意識の中で、彼の脳裏に失いかけた“少女”の面影が一瞬だけ通り過ぎていった。

（誰だ、お前は……？へっ、笑ってんじゃねーよ。なにがそんなに嬉しいんだよ……。どちらさんか知らないが、お前も糞みたいな人生だったんだろ……？そうさ……、誰だってそうなんだ）

ハヤブサの瞳から“最期”の時まで堪えていた涙が、一筋零れた。その滴が手元のレバーに落ちたのと同時に、呼応するように機体は爆炎に包まれて四散した。

ハルカの元に一機のメギドが駆け寄った。先程、ハヤブサに剣を突き刺した機体である。

「ハルカ、大丈夫だな！？まだ、戦いは終わっていない！生き延びる！」

「エルド……副部長？」

聞き覚えのある声に、ハルカが茫然として応えた。ハヤブサを討つたのはエルドだったのだ。だが、ハルカは既に戦意を完全に失ってしまったっていた。顔の筋肉がただれてしまったかのように表情は虚ろだった。父の死という目の前の現実を受け入れることが出来ない。

「!？」

ハヤブサとアルトの死に気付いた一機が、エルドとハルカに向かって最大出力の速さで殺気を放ちながら向かっていく。そう、“彼女”にしか出せない“速さ”である。アルトに次ぐ反応速度を誇るエルドですら、それを完全に目視できない。彼がその機体を捉えた時、それは既に眼前に迫り粒子ソードを振りかぶっていた。

「シアルのハヤブサの……、そして仲間たちの敵ッ！」

「なっ……!？」

その機体のパイロットと思われる女性の声がエルドの耳に響いた。対照的にエルドは言葉すら発せられない。そんな速さだった。だが、彼はこの後更なる事実に驚くことになる。眼前に暗き闇が舞い降り、彼の視界を覆ったのだ。

「ここまでだ！これ以上はお前たちの好きにさせないッ！」

エルドの耳には、今度は先程とは別の女性の声が届いた。

そして彼は自分の目を疑うかのように、なんども瞳を瞬いてその状況を理解しようとした。

彼の目の前には自分に向かって攻撃を行おうとした純白の機体と、それを防ぐように立ち塞がる漆黒の機体の二機があったのだ。

「いつの間に……!？そしてこの声は……?」

「大丈夫か、エルド、ハルカ!？」

『シンラン開発部長!？』

ハルカとエルドは声を揃えた。今まで戦いの場に立つことを嫌い、その実力を持ってしても防衛部には関わらなかつたシンランが機体に乗り込み、敵と対峙しているのだ。そして、彼女は彼らの想像を絶する速さだった。

「馬鹿なっ！私の速さと“同じ”だと!？」

メシアのパイロット　カレン　は、驚愕して声を上げた。今まで自分と同じ速さを出せるやつなどいなかった。アルトとサクラと戦った時も、持久戦で粘られて負けたのだ。速さで負けた訳じゃない。

「なるほど、サクラさんから聞いてたけどやっぱり驚いたな。お前、私と同じ存在だな……？」

シンランの言葉を聞いてカレンははっとした。考えてみれば不思議な話ではない。ただ、そのほとんどは地球での戦争で死んだ、もしくは存在を知られると都合がよくない連中によって消されたと思っていたのだ。

自分と同じ力を持つ存在。戦う為に産み落とされた存在。カレンは、ハルカとエルドの声でその名前を知った。

「シン＝ランというのか、貴様。同じ“デザイン”との出会いの記念だ。私の名を刻め……カ＝レンという名を！」

ヴェクトは、手に持ったレーダーをじっと見つめていた。

「この方角は……地球か？」

レーダーに映る点は最初点滅を繰り返しながら、規則的な速さで動いていたが、やがてそれも消え去り何も映らなくなった。発信器が、レーダーの範囲外に出たのだ。

「だが……何故だ？……敵の機体の工場か！？」

ヴェクトの発信器が指し示すのは、以前交戦したフィエンである。フィエンはオーベルトの命により地球へ向かっていたのだが、ヴェクトはその動きを見逃さなかった。もつとも、“何故”なのかを知る由はなかったのだが。ただ彼は一度地球へ降りているので、メシアの製造工場があることは既に確認してある。そこに関連しているのではないかと推測した。

「テイラナも地球にいるんだったか。私も向かわねばならんな……」

地球には、セブンスの行方を追ってテイラナも向かっている。彼女とはお互いがそれぞれの正義を貫き通すと約束をした。だから、心配をしているわけではない。彼も自らの正義を貫く為、つまり一度取り逃がした敵を追い詰めて捕えるために、再びの地球行きを決意した。

次回、「第二十四話：EVER BLACK」

「破壊しろ……、この世界の為に」

「はい……。それが貴方のお望みであるならば」

果てない闇の中で、誰もかれもが惑い、彷徨い、何かを求めて。

第二十四話：EVER BLACK

灰色の煙が空一面に拡がっていく。それは、元々の灰がかった空に帰化するように溶け込んでいった。暗く深い色合いが濃くなるにつれて、昼を無理矢理こじ開けて夜を織り込んだような不思議な景観へと変貌していった。

その煙は、地上より絶え間なく空へと供給されている。数多もの瓦礫の山は、未だに所々が赤燈色と熱を帯びていた。元々ここに場違いなほどに立派で荘厳な、火星政府の研究所があつたなど到底信じられなかった。

地球において政府の研究所は数多く置かれているのだが、これはその内の一つであつた。この惨状は“人の”為せる業ではない。まるで巨大な獣か何かが悪ふざけに弄んだかのように原形を留めていなかった。

それを近くにたたずんで、舐めるように全景を見渡している男がいた。

「ふふ……充分だ、アルファ。いやむしろ物足りないか、今のお前には……」

男は満足げにそう言うと、にやりと笑って自分の後方を見上げた。

そこには、その男の何倍もの背丈のある漆黒の乗り込み型ロボ

メギドの姿があつた。

男はヘッドセット型のマイクを装着していた。それとの交信先は、このメギドのコックピットである。

機体のコックピット内では、先程の男の言葉が少しのノイズもなく澄んで聴こえていた。パイロットは、少し逡巡してからはっきりとこう答えた。

「いえ……、僕は誰も殺したくはないですから……。こうやって事前に避難が済んだ状態だと助かります」

まだ幼さの残る甲高い声だった。また、返答までの間を感じさせな

い滑らかな口調だった。

「ほう……？それならば結構だ。まあ、いずれ……お前も……」

男は既に浮かんでいた奇妙な笑顔を更に捻じ曲げて、不気味な表情になった。

男の企みは、およそ人の人智を超えたものであったが、それは既に半分成功している。そして、彼には当時有り得ないとまでされた研究を成功させたという過去がある。それが生み出した功績は、必ずしも良いことづくめではなく、むしろ学会から追放させられるレベルと言えないこともなかった。そんな彼を人々は、天使、悪魔などと呼称して揶揄したが、そのどれも彼が意に介することはなかった。彼をそこまでさせたのは一体何なのか、狂気、執念、快樂……。彼自身もそれを分かっていなかった。

「ごぼつ……！……けほつ……けほつ……」

どす黒い血反吐が、真っ白な洗面台に飛び散った。常に清潔に保たれている、綺麗なそれは禍々しい朱に侵された。

リンは、自分の口から吐き出したそれを見つめて顔を歪めた。まだ荒い呼吸を続け、肩は上下に揺れており、右手が激しく胸を掻き毟っている。顔も紅潮していたが、唇だけが青紫に染まっている。瞳は憂いを帯びて翳^{かげ}っていた。

（やつぱり……、熱を出したあの日から周期が短くなってる……）
リンは、高熱を出して倒れてしまった日の事を思い出していた。それより以前から多少の吐血はあった。だがあの日より、それは更に体を蝕んでいる。

.....

そして、彼女にはその心当たりもある。

やがて落ち着くと、蛇口を勢いよく捻って水でその朱を洗い流した。

それは一瞬で排水溝へ吸い込まれていったが、リンは蛇口を緩めることはせず、ただ水が流れ続けるのをひたすら眺めていた。

彼女は忍び寄る予感に若干の恐怖を覚えずにはいられなかったが、それよりも肥大した心配事が頭を過り、切り替えようとした。

「リン……？どうかしたの？」

「あ！いやなんでもない！顔を洗っていただけよ。……で、何か用？」

良く知る声と姿が背後から現れたので、リンは慌てて平静を装った。彼にだけは知られる訳にはいかない。

レータモリンの様子を怪訝そうに見つめたが、すぐに口を開いて用件を伝えた。

「フィエンさんがやってきたんだ。何か大事な話らしいから、君も来れるかい？」

「フィエン君が？珍しいね。今、行くから待ってて」

リンは必死に笑顔を取り繕って応える。冷や汗が額を伝ったが、レータはそれに気付かなかった。

「らあつ！！……いいか！？一人も残すな！完全に殲滅しろ！」

エルドは雄叫びを上げて、味方に檄を飛ばした。それに応えるように、数多もの唸り声がエルドのコックピットに轟く。

火星政府側、マーゼ・アレイン側の残っている機体数は、およそ五分だった。パイロットの腕は正式な訓練を受けている政府側のが当然上だったが、メシアの性能がマーゼ・アレインを後押しした。その結果、均衡状態が続いているという訳である。いや、当初はマーゼ・アレインの方が数が多かったのだ。それが同数までもつれこんだということは政府側が押しているのか。それに政府側にはやがて増援が来る。勝負はもう見えているのかもしれない。

「くっ……、なんてやつ……シン＝ラン！」

「お互い様だ……カレン！」
シンランとカレンも、互いに一步も譲らなかつた。二機の機体が舞うように空間を滑れば、他の機体は一切の手出しを出来なかつた。出来たとしても、一瞬のうちに灰塵かいじんへと変えられてしまうだろう。つまり、どちらかがどちらかを討つということは、それは討たれた方の味方へと危険が及ぶことを意味するのである。二人は自分のプライド以上に、それを意識していた。仲間を守る為には、ここで相手を自由にさせてはいけないのだ。戦う為に存在を許された彼女達、戦う理由も分ならず、刃を振るつた過去の姿は忘却の彼方へと飛び、彼女達は“守る”為に戦っていた。

一機のメギドが、波をたゆたうようにゆっくりと空間を泳いでいく。何にも気取られないような、宇宙と同化するような、自然な動きだった。そこは政府とマーゼ・アレイン間の激しい戦闘地点からは、少し離れた場所だった。そして、マーゼ・アレインの最終目的地

防衛部メギド格納庫

に、彼は到達していた。マーゼ・

アレインの一員としてなのか、火星政府の一員としてなのか、それともただ一人の人間としてなのか、レオはアケルトとしてなのか

彼は武器すら抜かずに、格納庫を眺めていた。これが戦いの根源としての諸悪なら、全て始末するべきなのかもしれない。でも、不幸にもそうではないことを開発部に所属していた彼は知っている。人類の宇宙開発に大きく貢献してきたのも、またこのメギドなのだから。

「もう……やめろ。レオ」

「……っ!?」

ただ立ち尽くしていただけのレオの機体の後ろには、いつのまにかもう一つの黒き機体が同じように立っていた。気配を感じ取れず、そしてリーダーにも反応しなかつた機体の出現にレオは驚いた。だが一瞬の間、全てを悟つたようにため息をついて苦笑いと浮かべると、落ち着いた声で尋ねた。

「リク。……………何故、僕だと？機体のコードだって暗号化しているのに」

「一瞬ためらっただろ？お前じゃなかったら、きっとそんなことはしない」

レオの疑問は、一瞬でうち砕かれた。単純明快な、根拠ともいえないようなものに。そう、彼に隠し通せるはずがないのだ。

「……………なるほど。参ったね。やっぱり僕は、君に勝てないってことか」

「はっ、何の冗談だよ。俺こそ、お前には敵わない」

リクの言葉にも嘘はなかった。彼もまた、レオには一生敵わないなと思いつけているのだ。奇妙な図式ではあったが、それが今までの二人であったし、これからの二人であるのかもしれない。ただ違うのは、お互いがそれを自覚して、相手に素直になれることだ。

リクは牢獄内での邂逅の時、確かにレオを許せなかった。自分の罪を認めて謝罪し、それでもレオ達のやっっていることは間違っている」と指摘したかった。だが、先程の光景を見て初めて現実を直視した。レオ達のやっっていることは間違っていると俺は言えるかもしれない。だが、俺達のやっっていることは正しいと本当に言えるのだろうか？俺は何も知らないのに。だから、今は誰も死なせたくない。そして、レオも同じ気持ちであるのだろうかという確信めいたものもあった。

「で、どうするつもり？」

「茶化すなよ。お前だって、そのつもりなんだろ」

リクは生意気そうに笑い、レオはやれやれとでも言いたげに肩をすくめた。二人とも、懐かしい筈の感覚なのに、何故かとても新鮮でくすぐったい気持だった。初めて出会った日と何も変わらない二人と、見違えるように変わった二人が、様々な壁を越えてようやく辿り着いたのは、きつと奇跡でもなんでもなく必然なのだ。込み上げる感情は言葉にならないくらいに愛おしい。

「くすっ、そうだね。でも、どうやって？それまでは僕にも分からないよ」

「懇願して変わるなら、こんなことにはなっていない」

リクは冷静に現状を分析する。

「でも、僕達が介入して止めれるほど、戦場あそびは甘くない」

合わせるように、レオも現実を突き付ける。二人の間に痛い沈黙が流れた。それを破るのは、彼女しかない。

「はあー。やっぱり、私がいないと駄目ねえ……」

「ユーリ!?」

予期しない声に、二人の言葉が重なる。

「なんでお前が通信に入ってこれるんだよ……」

「そうか……、ここは防衛部の格納庫付近。十分情報部の衛星範囲内だ」

呆れかえるように呟いたリクに対し、レオは納得するように指をパチンと鳴らした。

「ってことは、さっきからいたりしたのか？」

「二人ともご名答ってね。まさか、あんたの機体コードが現れるとは思わなかったから驚いたわよ」

心底驚いてなさそうに、ユーリは言った。彼女は二人の破天荒ぶりに既に慣れ切ってしまったているからである。

「いいんだ、ユーリ。何か良いアイデアはないかい？」

レオがユーリに意見を求める。

「二人とも、頭が固いのよ。貴方達で答えはもう出してるじゃない。懇願するのも無理、戦闘に介入するのも無理。それなら……」

「……………ぶつ。なるほど。一本取られたね」

レオは吹き出しそうになるのを堪えて、ユーリを讚えた。

「な、なんなんだよ。まさか、戦闘に介入して懇願するとかじゃねーよな？」

リクの言葉を最後に、三人には再びの沈黙が訪れる。だが、その沈黙が何よりの答えを物語っていた。

元々、三人で出来ることなんて限られているのだ。彼らより長い時を生きた熟達者達が、己の背負う物を疑うことなく信じ続けて戦っ

ている。そんなものを終結させるなんて、そんな真似を易々成し遂げられるはずがないのだ。でも、彼らには“やめる”とか“にげる”なんて選択肢は残っていないから、そして取れる最善手なんてものを考えている時間もないから。だから、出来る事を今やるしかない。

「ふう……やるしかねーか」

「あれ、見ない間に弱気になったね」

「ベッドでずっと寝てたからかしらね」

「ああもう！俺は成長して考えるってことを覚えたんだよ！つてまあ……今はそんなことを言ってる場合じゃないか」

リクは大きく息を吸い込んで深呼吸する。新鮮な酸素が胸に満ちていく。そして、彼はもつとも信頼できる友二人に呼びかけた。

「俺達で戦いを止めるぞ！」

「ああ！」

「ええ！」

「シンラン部長！もうやめようぜ！こんなことしてもなんにもならないこと、分かってんでしょ！？」

「カレンさん！僕達は、守る為の戦いをしようとする決めたじゃないですか！こんなものは、ただの奪い合いです！何も生み出さないっ！」

リクとレオが、メギドを駆って戦いに割り込む。シンランとカレンのせめぎ合いの最中に、乱入するのは容易いことではなかったが、三人なら出来ないことなどないと信じていた。特別な処理を施したので、情報部にいるユーリからの通信が二人の耳には届く。ユーリもまた、戦況を固唾を呑んで見守っていた。

「どけ！リク！子供は家に帰って寝ている！」

「邪魔だレオ！お前にはお前のやるべき事があつたはずだ！」

リクの声も、レオの声も激戦を繰り広げる二人には届かない。いや、二人が冷静な状態でなお且つお互いの存在を知らなかったならば、答えは違っていたかもしれない。しかし、いまや二人は相手の存在を認めてしまっているのだ。自分だからこそわかる相手の強さ、そして危険度。今ここで、もう一人の自分を止めることは彼女たちにとって譲れない使命なのである。

「エルドさんも！もうやめましょう！」

リクは言葉の矛先を防衛部副部長エルドに向けた。

「ふざけるな！やつらはアルト部長を殺したんだっ！その死を持って償ってもらうしかないっ！」

「な……！？」

エルドの言葉に、リクは驚きを隠せなかった。

自分がアルトについて知っていることは少ない。それでも、母の歴戦のパートナーで火星政府防衛の要として今まで自分達の為に尽くして来てくれたことは知ってる。そして何より……ハルカの父なのだ。

だから、リクはこう言葉を絞り出すしかない。

「ハルカの……父さんが……？」

「そうだ！ハルカだって敵を許せるはずがないだろう？それとも君が、僕やハルカの前に立ちはだかるか！？」

エルドはリクに対してすら敵意を剥き出しにする。彼の瞳にも、もう当初の目的は映っていないのだ。尊敬する上司を失った怒り、悲しみ、憤り。そして、それに一番心を痛めているのはハルカだということを思うだけで、相手を許せるはずがなかった。

そして、リクも何も言い返せない。ハルカの立場になって考えることは出来る。でも、それで本当に相手の気持ちなんて分かる訳なくて、だからレオを傷付けた。表面上の同情なんて、何も救えない。

「くっ……」

だから、リクは悔しい。もう何も打つ手がなくて、最後に辿り着いたのが過去の自分を回想させる場面。

もう同じ轍は踏みたくない。だけど、このまま見過ごせない。

「リク……！」

レオと、ユーリが悪化する状況に心配そうな声を上げる。その声はただとどしく、活気づけるようなものではなかったが、リクは一人でないことに気づけた。

「ハルカが、敵を憎むのは当然だ！行き場のない、やり場のない思いをぶつきたいのも、エルドさんがそれを思いやるのも分かる……！だから……俺を攻撃しろ」

「……………！？」

リクその言葉にエルドは驚いて瞳を見開き、茫然と静観していたハルカは顔色を変えた。

「どつどつということだ……。お前はあいつらの為に犠牲になると言うのか」

明らかに動揺した様子で、エルドは尋ねる。

「そういうことだ。この身一つでお前らの気持ちが晴れるなら、安いものだからな……」

「ふざけるなっ！そんなもので、僕達の思いが晴らせる訳が……！」

「もう、やめて！」

沈黙を続けていたハルカの一声で、リクもエルドも言葉を失った。

いつの間にか、両軍とも完全に動きを止めていた。カレンもシンラも、互いに予断を許さないとでも言うように睨みあってはいたが、攻撃は中断していた。

「わかってる……リクの言うことは間違ってないん……。正論や。

そして、エルドさんがうちのこと気遣ってくれてるのも分かる。けどっ、せやからってこんな続けてもじゃあない……」

ハルカは涙を浮かべながら、視線を落として淡々と言った。自分でもあいつらを許せない、それは一生そうだろう。だが、それは相手とて同じなのだ。仲間を、家族を殺した私を、父を、エルドを誰もを許せずことなど出来ないのだ。

「ハルカ……………」

エルドもかける言葉が見つからないようで、沈痛そうな表情を浮かべるだけだった。

「ならば、リク、レオ。お前らはこの事態をどう收拾付ける気でいる？」

今度はシンランが、リクとレオに問い詰めるように声を走らせる。もつとも、そんな答えを教官が部下に求めるということ自体がおかしいのだが、リクとレオには答える責任があった。

「戦いをやめて、もう一度話し合いましょう。その為に、お互いに武力は放棄するべきです」

レオが、臆することなく凛として言う。嘘も裏もない、彼の真実の言葉だった。

「ああ、そうだ。誰だって、自分の大切な人がいなくなるのはもう見たくないだろ？」

リクも、自分の素直な気持ちを書直に述べる。この場で、自分を偽る必要などないのだから。

「ふっ、ならばそっちの連中はなにもせずには帰すのか？今回の問題はどうか考えてもそちらに非がある。レオ、無論お前もだ」

「何をっ！元はと言えば、そっちが武力による弾圧をしたんだらう？だから、ユウも……！」

挑むように言うシンランに対して、カレンも反論をする。再び険悪な雰囲気に入れようとしていた。

「僕が何かを言える立場にないのは承知の上です。確かに、僕達は罪を償わないといけない。でもその為に、互いが武器をとる必要はない」

「そうだ。何事も相手を疑って、攻撃して、自分の主張を通してじや……何も変わらないんだ」

レオとリクは真摯しんじに対応した。これが、二人が辿り着いた結論だったから。まだまだ自分達は幼くて、足りないものが多すぎるけど、それでも得てきたものもあるから。

「……………そうだな……………こんなところで、こいつを止めてい

ても……何も始まらないな……。私にはまだやるべきことがあったんだ」

一転トーンの下がった声で、シンランはぶつぶつと呟くように言葉を零した。その意味深な内容に、リクもレオもカレンも怪訝そうな表情を浮かべるが、シンランはそのままどこかへ飛び去ってしまった。

自分達の声が届いたとは思えないレオは、不安感を拭いきれないが、今はこの場をなんとかしなければいけない。

「カレンさん、基地に戻ればエクスルさんがいます。父の行動も気がかりですし、一旦戻りましょう」

「……………ああ……………」

シンランが去ったことにより、カレンも幾分落ち着きを取り戻したようだった。今、冷静に考えるならば生き残った仲間を帰すことが先決だ。戦いを続けても、尊い命を散らすだけになる。

当然政府軍のいくらかは、そのまま残ったマーゼ・アレインの機体を帰すことに抵抗を覚えたが、シンランが去った今カレンを敵に回すのはリスクが大きすぎるとみて、泣く泣く見送るようであった。

エルドも未だ納得がいつておらず歯ぎしりをして、悔しがる。

「なんだって、あいつらを見逃すんだ……………」

『もう、……………いいだろ。エルド』

「……………ミサキと、ツバルか」

ミサキとツバルがメギドに乗り込んで、やってきていた。彼らの当初の目的は情報収集だったが、エルドをなだめることが必要だと判断したのでらう。

「リク君と……………いったかな。君も現実を知らないから、そんなことが言えるんだよ……………」

「……………どういう意味だ？」

エルドの不審な態度に、ツバルははっとした。そして、声を張って制止しようとした。

「やめろ！言うな！」

「君、確かセブンス部長の子供だよ。君の弟と母さん、今行方知らずなんだよ」

「え……？」

リクは、予想だにしていなかった言葉に身を凍らせた。

次回、「第二十五話：浅き夢見し日々」

私は、彼を知って“人”となる。

そして彼を壊して、“デザイン偽人”へ戻ろう。

第二十五話：浅き夢見し日々

「ヴェクト……？なんで地球に？」

ティラナは目を丸くして驚いた。

ここは地球にある火星政府の研究所で、ティラナとリキが訪れた支部の一つである。セレナとファイリスと出会ったこの場所を拠点にして、二人はセブンス医学部長を捜索していたのであった。

ヴェクトは、自分が地球に来た理由を説明した。敵の組織の人間

フィエン

と接触したこと、戦闘を交えて捕えようと

したが逃がしてしまったこと、そいつが地球に行くのを追いかけてきたこと。

「とうわけだ……。地球には、敵の機体の製造工場もある。もし奴を見つけられなくても、そこを壊滅させれば、敵の戦力は半減するだろう……」

「そういうことだったのね。私達の元には、まだ何の情報も入ってきてないわ。そっちを手伝えたらいいんだけど……」

「いや、私の仕事は私が責任を持って行う。君にもやるべきことがあるのだろう？」

「……………うん」

ティラナは、ヴェクトの手伝いを出来ない事に少し哀しげな表情を浮かべたが、ヴェクトの言葉に力強く頷いた。彼女には、彼女のするべき事があるのだ。

そんな二人のやり取りを死角となる壁に隠れて眺める二つの影があった。

「ふーん……。ティラナ姉ちゃんの知り合いみたいだな……」

「あの空気は恋人同士のそれですね……………」

「えーっ！？それってつまり、あの男がティラナ姉ちゃんの彼氏！？」

突如響いた大声に、ティラナとヴェクトはそちらを振り向かざる得

なかった。二人の視線を受けて、リキは、必死に自分の口を抑え
が時既に遅しであった。セレナも、やれやれという風に肩をすくめ
て溜息を吐くことしか出来なかった。

恋をすると、世界が鮮やかに見えると誰かが言っていたがそれはと
んだ嘘だ。恋をすると、何もかもが色褪せて色彩を失ってゆく。
彼の輝きばかりが、私の中で存在感を放ち一際輝くのに、それ以外
のものはモノクロのレースに透かしたかのように何も与えない。た
だの憧れにすぎないかもしれないも思った。ただの羨望の眼差し
が極端に昇華してしまっただけではないのかと。自分に嘘はつけな
いとはよく言ったもので、本当にそうだと感じた。どんなに合理的
で、理屈的な言葉でも自分を納得させることは出来なかった。焦が
れて、求めて、奪われて、どれ程苦しんでもそれは私を許してはく
れない。永遠の拷問。ああ、そうか……これが人間として生きる為
の罪なんだと、私は理解した。
愛してるなんて言葉で済ませたくなかった。好きだなんて、なんて
陳腐な言葉なのかとすら思う。

そんな想いが憎しみに変わっていくのを私は止められなかった
。

ここに訪れるのは二度目だった。ただ、どうすればいいか分からな
かったあの時は違って、今は明確な目的がある。私が、この世に生
を受けた理由。薄れかけていた本能が、彼女と出会ったことと呼び
覚まされたようだった。暴力による屈服。粗暴で、道徳心を徹底的
に排除したそれは、時としてもっとも理想的な解決へと導く。

私もかつては、このような思想を当然のように抱いていた。もつとも、これはそうやってあるべきと教育されたからであり、それは私にとって当たり前のことだったのだ。しかし、それを根底から覆すようなやつと出会ってしまった。“私”を知っても、なんの偏屈も持つことなく接しようとした彼。彼の瞳に映る私は“ただの人間”だったのだ。

彼は当初、私にとっての毒のようなものだった。私と決して交わることのない思想を抱き、それでいて無視することが出来ない。拒むことの出来ない存在に嫌悪感すら抱いた。じわじわと私を侵して、私という概念を否定するかのようになつた。

そうして私は“人”となつた。それでも、やはり私は“デザイン偽人”なのだ。

私は、ライフル型の粒子ビーム射出機を構えた。ここで、殲滅しよう。戦いの理由と、私の生きる理由を。全ての役目を終え、ここで果てよう。

.....

未来を拓くのは私でなくていい。まだまだひよっこばかりだが、多少の期待を持たせるくらいには、生徒は成長してくれた。きつと、私達のような間違いはもう起こらない。だから、ここで歴史の上から消えよう。

ふと気配を感じ、視線を向ける。

「やはり……出てきたか……」

格納庫となつている部分のハッチが開き、そこから一機の純白の機体　メシア　が姿を現した。地球で造られた、ハイスペックな機体である。

「その声は……シンラン……？」

メシアに乗り込んだレータは、メギドのパイロットの声を聞き、確かめるように尋ねた。

「やはり、レータ………だったんだな。もう語ることはない。そ

これらの機体を生み出したのはお前だな……？」

“デザイン”として再び覚醒したシンランに、レータの存在や記憶は露ほどの動揺も与えなかった。それに対し、突然のシンランとの十数年ぶりの再会にレータは言葉を失いそうになった。必死に言葉を探して、シンランの問いに応えようと試みる。

「ああ……そうだけど」

「何故？何の為に？」

レータの答えに対して、考える時間すら取らずに矢継ぎ早にシンランは問いをぶつけた。その様子のおかしさにレータも、少なくとも戦慄を覚える。また、長すぎる隔たりが彼らを初対面の様な状況にさせてしまった。

「僕たち……正確には地球に残された人々が、政府と対等に立つて話し合えるようにだよ」

「それが、戦いの火種になっているとしたら？」

まるで、自分が尋問を受けているかのような対応にレータはムツとした。

レータの中で少なからず燻^{くす}っていたシンランへの疑惑。実行部隊として、彼女が行っていたことの是非。本当に武力による弾圧を彼女が行っていたのか。信頼と疑惑のジレンマは、彼の中で信頼が勝っていたはずだった。粒の様だった疑惑のそれが、徐々に風船のように膨らんでいく。彼が悠久の時を寄せた、彼女への信頼は砂上の楼閣のように崩れ去る。本当は、些細なすれ違いなのかもしれない。それでも高ぶる感情が二人を争いの舞台へと押しあげる。

「君は、火星に行くまで地球で何をしていた……？」

「戦争だ。その為に私が生まれたのだから。そして、その為の兵器を作っていたのがお前だ」

「くっ……言うなああああっ！！」

痛いところを突かれてレータは否定する。自分がしていたことを知ったのは、シンランが火星に行ってからだ。リンや、他の地球難民の人々から聞いた話なのである。レータとシンランが属していた地

球軍、つまり現火星政府が行った武力による制圧。

「もう話し合うことはない。私はお前の造ったそれを全て破壊に
来たのだから」

「邪魔するって言ったら……!?!?」

「……………お前ごと消す!」

「はっ……………上等!」

レータ、シンランがそれぞれ乗りこむ機体は互いに剣を握り締め、
相手に向かって突っ込んでいった。黒と白の機体が空を走って、空
間に亀裂が入った。

十数年前、地球軍第十二基地

私は、地球軍実行部隊として各地へ赴き武力による介入を行って
いた。そのどれもに私の意志は介在していなかったが、そんなことは
どうでも良かった。それが、私のあるべき姿だと思っていたからだ。
実行部隊は、何も私達の様な存在のみで構成されていた訳ではない。
普通の人間もたくさんいたし、私達もそうだった存在であるという
事を言いふらしてはいなかった。明確な区切りもなかった。た
だ、普通の人間はどうしようもなく脆かった。彼らは、なんて儂く
弱い存在なのかとは常々思っていたことだった。

そんな営みの中で、私とレータとの出会いも運命的でもなんでもな
くて、至極普通のものだった。

その日、いつものように任務の為に、メギドの前身である人型機
械に乗り込もうとしていた時だった。

「む……………?」

私は、いつもと様子が違うことに気付く。どうやら、機器のどこか
が故障しているらしかった。既に他の部隊員は出向しているらしく、
途方に暮れていると一人の男が通信を送ってきた。

「機体ナンバー29403、何か問題が生じたか？」

「ああ……、どうやら座標軸がずれているらしい。お前メカニックか？」

「ええ……。これは担当ではないですが、大丈夫だと思います」

そうして、その男ことレータはひよいひよいと修理してしまった。その手際の良さには感嘆したが、その人柄は好きそうになれなかった。彼は、玩具を与えられた子供の様に無邪気だった。勝手だとは思ふ。私が、彼に修理を依頼したのは間違いないし、そうしないとどうしようもなかったのも事実だ。だけど、私はきつと知って欲しかったのだと思う。貴方が今それを触る意味を、私達が行っていることの意味を。

「へえー、これ凄いね。こんな風にこの技術が応用されるんだなあ……」

彼は瞳を輝かせて感心したように、ほうとため息をつく。私はそんな彼をどんな瞳で見つめていたのだろうか。

「十年……！長いとは思わなかったよ。いつか、地球での為すべき事を終えた時、君に会えると信じていたから！」

「私だって、過去も、現在も、未来もお前を忘れたことはない！ただ、その感情がお前を殺すのだ！」

レータもシンランも吹きすさぶ砂塵を切り裂くように機体を走らせた。粒子ビームを互いに打ちあうが、そのどれも機体を捕えることが出来ない。剣と剣が交わる時、大きな振動が空気を揺らして空間を割っても、それが機体に届くことはない。両者、互いに一步も譲らなかった。機体性能、そして地球慣れの時点でレータは勝っていたが、身体能力ではシンランが圧倒的に勝っている。持久力の点でも同様なのだから、戦闘が長引けば、レータは不利になる。だが、レータは焦ることはなかった。彼が普段乗りこんでいる機体には様

々なギミックを仕込んであるからだ。

「シンラン……」

ただ、彼のシンランを想う心はまだ完全に死んでいなかった。

「あつ、君はこないだの！あれから、機体の調子はどう？」

レータと再び出逢ったのは、あれから数日後の施設の談話室であった。木枯らしが吹きつける寒い冬の事だったと思う。私はソファに腰掛けて、静かに燃え続ける暖炉を何気なしに見つめ続けていた。

「悪くない。あの時は助かった、ありがとう」

私はそもそも友達という存在自体そんなに多いものではなかったが、特に男の人となるとどう接していいか分からず、素っ気なく返事した。

「そつか。あ、これ間違えて買ったんだけど飲む？」

彼はそう言っ隣に座ると、缶を一つ私に差し出した。

「何だ、これは……？」

「嫌だなあ。コーヒーだよ、僕苦手だね」

彼は苦笑して、それを私の手の中に無理やり押し込んだ。遠慮でもするなというように。コーヒーというのは嗜好品の一つであるという事は知っているが、今の今まで飲んだこともなかったので、どうすればいいのかと困惑してしまった。ただ、その缶の暖かさはかじかんでいた私の手のひらをほぐしていった。

「あの機体は凄いや。今の地球の科学力が惜しむことなく注ぎ込まれている」

「そうなのか……。そんなこと全く知らなかったな」

「僕は噂に聞く程度だけれど、今もなんか凄い化学の研究をしているらしいんだ」

彼は嬉しそうにそう話したが、私は別段興味もない話だったので耳を傾けているだけだった。私はその後も適当に相槌を打っただけだっ

だが、彼は尽きる事を知らない海の水の様に、ひたすらに口を動かして話を続けた。

何で、私なんかになんかに話をしてくるんだろう。面白い返答も、貴方の興味を引くような話題も何もないのに。そんな疑問を感じて、少し顔が翳る。何でそんなに笑えるの？何でそんなに前を向いていられるの？

ただ、私が反応を示さなくても彼は嫌な顔一つせずに笑顔を振りまいた。

そんな風にして日々を過ごす、徐々に彼の話を聞くのは悪い事ではなくなっていく。私は彼に染められていったのかもしれない。私が当初感じた彼への嫌悪感、ただの嫉みそねだったのだろうか。私は“楽しく生きる”なんてことを考えもしなかったし、そんな術も知らなかったから。楽しそうな彼が理解出来なかったのだ。

「はっ！」

レータの駆るメシアの背部ポットから無数のミサイルが飛びだし、シンランの駆るメギドへ襲いかかった。多方向同時攻撃である。

「方向を認識、角度、到達時間を計算。関数化してデータベースに入力……」

シンランの手は手元のコンソールパネルを踊るように跳ね、次々に情報を処理していった。次いで、モニターを視認すると、構えたライフルでミサイルめがけて粒子ビームを連射する。

「駄目だ、間に合わないっ……………だがっ！」

シンランは撃ち落とし損ねた幾つかのミサイルをバックステップで交わした。常人ならその負荷で、心肺に損害を与えそうな動きもシンランなら可能だ。その事実を知らないレータは、シンランの動きに目をみは瞠る。

「馬鹿な……」

「どうだ。何の自慢にもならないがこれが私なんだ。戦う為に特化した生物。人ならざる存在……お前とは違うんだ」
レータは啞然として言葉を絞り出し、シンランは毅然として言い切った。まるで自分にも言い聞かせるかのように、しっかりと。

「あ、また会ったね。随分、久しぶりになるけど」

私がコーヒーのぬくもりを知ってから、彼とは何度も姿を交わした。機体のパイロットとメカニックという立場なのだから、当たり前と言えは当たり前前かもしれない。知り合う前から、きつと何度も私達はすれ違っていたのだろう。

「最近随分と暖かくなってきたね。もうすぐ春だよ」

彼は伸びをして嬉しそうに私に笑いかけた。私も、照れ笑いを返す。未だに、どうすれば彼が喜ぶ顔が出来るのか分からない。

「そうだな……。私も暖かい方が好きだ」

「それなのに、まだホットコーヒー飲んでるの？」

「べ、別にいいだろう！？これが好きなのだから」

「いやまー、別にいいけどさ」

私は少し感情的になってしまったことを恥じ、彼に背を向けて俯いた。

どうしてしまったのだろうか？以前は、こんな感情すら知らなかった。最近、胸の中に色々な想いが湧いて来て、でもそんな自分を知らなくて戸惑っている。そんな感じだった。

「表情が……豊かになったね。最初の頃は、ロボットみたいに同じ顔だったから」

レータは冗談ぽく言った。背を向けていたので、彼の顔を見ることはかなわなかったが、恐らく優しい顔をしているのだろう。

私は……変わってきているのだ。様々な感情を知って、デザインから人間へ生まれ変わろうとしているのかもしれない。そんなこと許

されるのだろうか。

.....

私が生き延びて、人間になって許されるのだろうか。

今までに死んでいった仲間はそのような私をどう思うだろう。デザインとして生き、デザインとして死んだ同胞はどう思うだろう。

「春が来たら、桜が咲くんだ。この近くにも木があるから。その時は一緒に見に行こう」

レータは言った。

だがその桜を二人で見る時、それが二人にとって別れの時になるなんて、この時は思いもしなかった。

人間にとって、いや生物にとって有害な放射線を撒き散らす兵器。それが、地球崩壊への最後の扉だった。月、火星が人類にとって第二の地球として必要だと謳われたのは、なにも最近になって急にという訳じゃない。発達する科学技術に比例するように荒れていく大地は、人類の歩みと抱き合わせの様なものだった。

ただ、もう限界になってしまったのだ。皮肉な話であると思う。火星行きへのチケットを巡る争いが、地球を壊す最大の原因になってしまったのだから。

私の任務も段々と少なくなってきた。私達が、わざわざ機体に乗り込んで戦う必要がなくなってきたからだ。非人道的で冷酷な兵器の登場は、人間の役割を減らしていった。私はその事に対しても特に思う事がなかったが、その兵器の犠牲になる人間を思うと多少なりとも心が痛んだ。ある意味では、彼らも私と同じなのだ。進み過ぎた科学の犠牲になった被害者。

「シンラン……かい？最近、よく見かけるけど、お仕事は？」

「レータ……。私の役割も徐々に失われつつあるんだ。もう……戦いに出なくても済むかもしれない。だが、それは他の誰かが私の代わりに……っ」

私は、戦いに行かなくていい事を素直に喜べなかった。私が戦わな

くても、人は死ぬ。

「シンランは、今まで無理しすぎてたんだよ。そんなにたくさん
苦しみを背負わなくてもいいじゃない」

「なっ、お前に……何がっ……!? ……いや、何でもない」

私は今一瞬自分の中に沸き上がった感情を抑えつけた。怒りという
感情は知っていた。だがそれを、レータにぶつけたくなかった。レ
ータにそれをぶつけて嫌われたくなかった。だから抑え込んだ。
だがこの時、彼に対して怒りをぶつけていたのなら、全てを彼に話
していたのなら、その後の私達の巡り合わせも変わってきていたの
ではないだろうか。

私のレータに対しての依存はますます強くなっていった。彼に会い
たい、彼が恋しい。もっともそれは私が後に受けることになる人間
の代償の序章に過ぎなかったのだ。

桜の花びらが散り始める頃、私とレータは桜の木の下で最後の会話
を交わした。それは表面上、互いの為の誓いだった。私はあの日を
何度回想しては、後悔に胸を掻きまわったことだろう。何故、一緒に
地球に残らなかつたのか。何故、無理にでも火星に連れて行かなか
つたのかと。

私はレータと別れて、人間として生きる為の苦しみを受けることにな
る。彼への想いが果てることなく、それは私の身を焼き続けた。

「私は……全てを無に帰すことを選ぶ！」

「なんで……だっ……」

シンランの猛攻は勢いを増し、レータを追い詰めていった。レータ
もあらゆる手を尽くし、応戦するが地力の差がじわじわと出始めて
きた。そして呼応するように、レータは戦意を失っていく。自分が

今何しているのかわからない。こんなことをしてなんになるというのか。

何かが弾けた
。 レータは全ての武装を解除して、そこに立ち尽くした。

「もう……いい。僕は君にこれ以上刃を向けられない」

レータは、ゆっくりと呟いた。

「覚悟が……出来たのか……？」

シンランは剣の切っ先をメシアのコックピットに突き付けて言い放つ。その言葉尻は当初より、刺々しさが失われていた。彼女もまた、彼との再会により少しずつ心が揺らいでいるのだ。

初めて受けた優しさ、初めて抱いた愛しさ。

「シンランは、戦うことしか出来たくないよ。僕は会ったんだから君の教え子に」

レータは淡々と言った。思いもよらないレータからの言葉により、シンランの顔に動揺が走った。

「どっどっということだ……？」

「確かレオ君と言ったかな。色々と訳ありみたいだったけど。それでも君の事を話す時、彼は楽しそうだった。そして、君に対して悔いている様子でもあった」

「だから……どうだと……」

「僕たちも悔いてやり直せばいい。僕は知ってる、どんな状況でも幸せを見つけることが出来た人を。ささやかな毎日を一生懸命生きていく人を……！シンラン、僕たちの十年間は空白じゃないだろう？」

シンランは反論できなかった。綺麗事だと切り捨てて、このままレータを否定して、終わらせればいい。だが、それも出来ない。

今にも溢れ出しそうな感情は、あの時に似ていた。そして、巡る記憶は在りし火星で過ごした日々。

『シンラン先生ー、またその話かよ聞き飽きたよ』

リクは生意気だったが、私を見るその瞳はいつも煌めいていた。
『シンラン部長。僕たちの選ぶ未来は本当に正しいのでしょうか』
レオは聡明で機転も効いたが、色々思いつめていたのだな。気付いてやれなくて本当に済まない。

『お前は部長としての責任をだな……』

アルト部長は、厳しかったけれど父の様な包容力があつた。

『いいのよ、弱音を吐いても。じゃないと、私たちだって折れちゃうでしょ』

サクラ部長は、親身に相談に乗ってくれた。感謝しても尽きない。

『部長。いい加減、俺に面倒事押し付けるのやめてくださいよ』

ツバルには迷惑をかけたな。だが本当に信頼していた。

「私は………っ」

止めどない激情が涙になつて溢れる。自分はいつだって一人じゃなかつた。

「ごほっ、ごほっ……誰よあんたたち……!?!」

リンは咳き込みつつも、突如現れた見知らぬ連中を見据えていた。

「くつくつく……お前らさっさとここから逃げた方が良いぜ? 今から、この辺り一帯は灰の海と化すからよお! ああ……この辺りって言うのは地球全部の事だけどなあ!?! はっはっは逃げられる訳ねえよなあ? 逃げれるんなら、俺達とつくに火星や月に行ってるはずだもんなあ!」

次回、『第二十六話：狂おしきこの世界で』

ありがとう、この世界。

どうか、出来れば、忘れないで。

この世界を、あの日々を……そして
私を。

第二十六話：狂おしきこの世界で

「さて……そろそろ邪魔が入るころだろうな……。サクラが何も伝えず来たならば、話は別だが……。いずれにせよ、そろそろお前の出番も来るだろう？なァ、アルファ」

「はい……」

一人の長身の男がぶつぶつ呟きながら、荒野を歩いている。そしてそれに追従するように一機のメギドが大地を揺らしながら歩を進めていた。アルファと呼ばれたパイロットは、機体内から細かい声で通信を返す。

それを聞いて、男は気分を良くしたように鼻歌を鳴らした。

「よしよし、良い子だ。そろそろ………墮ちたな」

彼らの目指す遙か前方には、火星政府研究所地球支部の一つの姿が、うつすらと曇り空に映っていた。

「はぁ……？ごほつ………どういうことよ？意味分かんないわよ」

リンは眩暈も悪い、立っているのも辛い状況だったが、それを知られるのは都合が悪いと思ったので、気丈に振る舞った。

「くくつ、そうだな教えてやるよ。セブンス様の指令からは外れて
いるがな」

リンの前に現れたのは、いかにも“難民”といった風情の男たちで、身なりも貧相でみすぼらしかったが、体格は大きくその異様さが際立って見えた。そして何より、その男たちはみな手に身体一つ分はあるであろう武器をそれぞれ所持していたのだ。リンはそのどれもに見覚えはなかったが、不思議なことではなかった。争いに溺れていった地球に残ったのは、大量の兵器だけなのだから。問題は、何故そんなものが今必要なのか、だ。

リンの前に立ち饒舌に話していた男の脇から、もう一人の男が出てきて、話を中断させようとした。

「おい、余計なことは……ぐっ!？」

「……………黙れ、俺に指図するな」

しかし後ろから現れた男は、前の男が携えていた巨大な砲身を擁するバズーカの様なものので殴られて、倒れこんでしまった。その様子を見て、リンは少なからず身がすくんだ。

(なによ、こいつら……やばいつ!)

「余計な邪魔が入ったが、気にするな。俺達は見ての通り、地球に残された難民だ。それもあんたの様に良い暮らしはしてねえ。だが、そんなことにもうなんの意味はねえのさ」

「だから!それがどうしたっていうの!？」

論点を絞らず、的を得ない男の話にリンは苛立った。自分は今は丸腰だが、格納庫にはメシアがあるし、そしてなによりレータがいてくれる。今まで、どんな状況でも乗り越えてきたのだ。これしきのこと、怖じ気づいたりはいしない。

「ははは!気の強いねえちゃんだな。あんたがここの施設のリーダー格みてえだな。ああ、話が逸れちまったぜ。今、この地球の各地にとんでもねえ兵器がばら撒かれた。発動まで、もう時間もねえ。

その時が来たら、地球は終わる」

男が話し終わると、辺りを静寂が包んだ。

リンにとって突拍子もない話だった。そんなことを言われて、はいそうですかと信じられる訳がなかった。だが、一抹の不安が彼女の脳裏をよぎる。

「……………まさか、ラグリップスだっていうの……………!？」

「ふふ、ご名答。知っていたか。地球での戦争末期に使われ、その余りの非人道性、無差別性に使用が自粛された代物さ。あれを更に高濃度に圧縮し、爆薬と混ぜ合わせてある」

「そんなことをしたら、貴方達も死ぬわよ!?!いえ、地球にもう生物が生息する事さえ叶わなくなる!」

リンは、激昂して叫んだ。

.....

彼女はその威力を身をもって知ってしまったているから。

「承知の上さ。これ以上生きていたって何にもないんだからな。ましてや、地球がどうなるうとしたこつちやねえ。さて.....ここまで話したら、俺達の目的は分かるよな？」

そこまで相手がべらべらと話して、はいおしまいと済む訳がないこと位リンも分かっていた。だから、一步身を引く。恐怖が再び全身を駆け巡っていく。それは今日の前にいる、こいつらに対してじゃない。やがて訪れる、絶望に　　だ。

「私達の生活を、貴方達に邪魔する権利なんてない！」

「おーおー。辞めようぜ、その話にもう意味なんてない。それに俺達だけで、そんなこと出来ると思ってるのか？」

「え.....？ どういう.....ごぼっ.....こと.....？」

「これは俺達とある男との取引なのさ。おっと、お喋りはここまでにしようぜ.....なあ？ 最期ぐらい誰だっかっていい思いしたいもんなあ.....

.....姉ちゃん!？」

「やっ.....ごぼっ.....やめて.....！」

男はリンの傍まで歩み寄ると、その巨大な腕でリンの肩を掴んで自分の方に引き寄せようとした。リンは抵抗しようとするが、身体が言う事を聞いてくれない。男の吐息が顔にかかるくらいに近付いた刹那、閃光が瞬いて男は吹き飛んだ。

「ぐふっ！」

「.....!? なっ何だ.....!？」

男の周りにいた取り巻きたちは、目の前で突如起こった事態に戸惑っていた。それぞれ、破壊力のありそうな武器を抱えてはいたが、どれも使わなければそれはただの鉄の塊なのだ。

「リンッ！ 大丈夫かい.....？ シンラン、頼む！」

「ああっ！」

二人の声がスピーカーを通して辺りに響き渡り、その直後取り巻き

たちも先程の男の様に何人が被弾し吹き飛ばされた。黒き機体の携えた銃口が光ったのをリンは見逃さなかった。あれは、以前自分達に襲いかかってきた機体と同タイプである。しかし、隣に立つメシアのパイロットは先程の声から考えてもレータである。そして彼は、確かにシンランと叫んでいたのをリンは聞き逃さなかった。

「レータ君、ありがとう！そちらの方は……シンランさん……？」

「ああ……まあ色々あってね。ところで、さっきのやつらは？何を話していたんだ？」

コックピットからの優しい声がリンに届いた。ひと時の安堵感に身を委ねていたかったが、それもいかない。

「それが、大変なの！地球が……」

そこまで言いかけてリンは口をつぐんだ。ここで、それを言うてはいけないと本能が告げていた。なら、どうすればいい？そして、その解答も瞬時に閃く。それは、自分でも笑えるくらいの最高の解答だった。くすりと一人苦笑をもらした、誰にも聞こえないような声で。

「私はやらなきゃいけない事が出来たの！残っている奴らの始末を
お願い！まだきつとたくさんいるから。みんなを守ってあげて……

……。それから……いいや何でもない！」

「ちよつと！リン！？」

「レータ！よそ見するな！」

リンはそれだけレータに押しつけるように言い捨てると、格納庫の方へ走って去っていった。状況を呑みこめないレータは視線でリンを追おうとするが、すぐにシンランの声で目の前に戻された。

男たちは唸り声を上げると、武器を構えてレータとシンランの駆る機体の前に立ちはだかった。

施設からはぱらぱらと人影が現れて、何事かという様子で辺りを見回した。

「みなさん、出てこないでください！」

レータはそう叫ぶと、男たちと施設の間に割り込んだ。施設と“家

族”を守る為の戦いならば、もう何も迷わない。施設の人々は、男たちを見て逃げるように建物の中に戻っていった。

「シンラン、バックアップを頼む……」

「ああ……」

シンランもおおよその状況を？み込み頷いた。二人が“再び”の二人に戻ることはもうないとも言うように、肩を並べて戦場に立つことになった。互いが全てを分かりあえるまでは、まだ多くの時間を要するのだろう。だが、彼らの目指す未来はきつと何も違^{たが}ってないなかった。

（シンランさんと逢えて良かったね）

リンはその言葉を飲み込んだ。何故だろう？それを言ってしまうと、今までの日々が全て泡となって消えてしまうようで。

私の地球での生活は、泡沫の夢の様なものだったのだろうか。幼い頃に与えられたロリポップの様に、いつかは消えてゆく甘い幻想だったのだろうか。

きつと違う。

私が、私達が今まで築き上げてきたものは、きつとそんなものじゃない。だから、私はこうして走っているのだ。

リンは、身体に鞭打つように気を入れて格納庫を目指した。

「えっ……これは……!？」

格納庫についてリンは驚いた。そこも既に多くの難民たちが雪崩れ込んできており、乗り込もうとする者もおれば、破壊を尽くす者もいた。統一されている団体ではどう考えてもなかった。もっとも、どちらにせよ自分が執るべき行動が変わる訳ではない。周りの目を盗んで、その一機に乗り込むと威嚇するように動き回って牽制した。並の人間では乗りこなすことなど出来ないだろうが、武器を所持す

れば誰でも“兵力”になり得るのだ。レータたちの負担を増やすことになりかねない。

「無駄な事はやめなさい！」

「うおおおおおあつ！」

誰もかれもがリンの言葉を聞きいれようとはしない。狂ったように格納庫を舞い踊っていた。もう彼らに自我は残されていないのではないかと、リンは訝った。

先程のラグリップスの件を難民の誰もかれもが望んでいる訳ではないのではないだろうか。彼らの様に死を恐怖せず、それまでを愉しもうとするものもいれば、生にすがりつきたいものもいるのだ、とリンは思った。

「だから、私が止める……！」

リンは、口を一字に結ぶと覚悟を決めたように、空に飛び上がった。

ラグリップスは戦争末期に使われた化学兵器である。放射線を撒き散らし、生物の細胞を原子レベルで破壊することにより、最終的に死に至らしめてしまう非人道的なものだ。即効性はもちろん、空気に溶け込むことにより半永久的に地球に留まり、人を含むあらゆる生物を駆逐していく。よって今地球で人間の生活圏は極めて狭いのである。そしてそれもいつまでもつか分からない。

今回のラグリップスは、難民の言っていることが確かなら、地球の生活圏のほとんどの地域にまかれたと思っただけ。よって、もしこの地域の一つを処理しても、きっと地球は長く保たない。

「レータ君達にこれは伝えれないといけない……。最後になるだろうけど、きつと通信は届くよね」

リンはメシアで空を滑った。難民たちが、もし独断で動いておらず、誰か他の例えば専門の科学者の指示で動いているならば、ラグリップ

スの設置した場所は分かる。
私だからこそ、分かる……………。

私は幼い頃より、恥ずかしい言い方をすれば、人の愛に飢えていたと思う。父と母の顔は面影すら残っていない。事故で死んだとだけ聞かされている。事故、言い方は間違っていないと思う。けれどそれは必然的に訪れたものだった。そして、私もきつと同じなのだ。それでも、その境遇のおかげで私はやってこれたのだ。無理矢理叩きこまれた工学の知識も技術も、最悪の兵器の扱い方すら、私は希望に変えてゆける。

コックピットの中は私の血で朱に染まりつつあった。メシアでの無理な拳動も私の体に負担を強いているのだろう。だが、それで構わない。

「見つけた……………」

高い丘の上に“それ”は存在していた。自分でも感心するほどの好位置だ。間違いなく専門の技術をもったものが計画しているものがある。つまり、まだこんな兵器を使おうと考えている奴がいるのだ。私には、もうその思想を止められない。そしてある意味ではその考えは至極当然のものなのかもしれない。

私達が生み出したメシアが、火星で何かしらの争いを生んでいるのなら、地球そのものをもう破壊してしまおうと企んでいるものがないでもない。希望ではない。

だが、希望は
ある。レータ君とシンランさんなら
きつとなんとかしてくれる。フィエン君だって、きつと動いてくれる。

だから私は……………私のすべき事をしよう。

「おばさん……………」

「大丈夫よ、ユミちゃん。レータさんとリンさんが今まで誰かに負けた事あったかい？」

「うん……」

「じゃあ、信じましょう。きっと大丈夫」

「……………うんっ」

「レータッ！後ろだ！」

「くっ！」

レータの放った粒子ビームが一機のメシアを貫いた。いくら巨大な兵器を抱えようと、生身の人間だけなら対処の仕様がなかった。しかし、メシアとなると別である。操縦がいかに不慣れでおぼつかないものであっても、剣を振り回せばそれは立派な凶器となるのだ。

二人は、施設を守りながら戦わなくてはいけない。

レータはリンの行方が心配だった。なんとか追いかけていが、自分がここを離れると施設のみんなが危ない。シンランも自分と同じく先程の戦いで少なからず疲弊しているはずだ。一人で任せることは出来ない。

「レータ……君……？聞こ………えるよ………ね？」

「リン……？どうしたんだっ、今どこにいる！？」

突如入ったリンからの通信にレータは勢いよく聞き返す。リンからの通信は途切れ途切れで、安定していない。メシアの通信領域は広く、何か特別な場所にもいない限りこんなことは起こり得ない。

「そんなことより……大切なこと話すか………ら聞いてね？もうすぐ地球に本………当の終わりが………来る。ラグリ………プス、分かるよね？」

「ラグリプス………だって？」

レータは思わず聞き返した。その名は当然知っていたが、思いもよらない彼女からの話だったからだ。

「どうということだい？」

「それが地球全……土にばら撒か……れたの。でも安心して、この地域のは大……丈夫だから……。だから何とし……ても、出来……るだけ早く……みんなを連れて宇……宙へ逃げて欲しいの」
「ちよつと待って。この地域のは大丈夫だって、まさかリン……！？やめるっ、やめるんだっ！」

リンの意図を理解して、レータは叫んだ。

「くすっ……私は……もう……長くは……なかったの。だから……、気にしな……いで。一緒に……過ごした日々……楽しかった」

リンの言葉を聞いて、レータは金槌で頭を叩かれたような衝撃を受けた。今まで気にも留めていなかった、リンの言葉、仕草の数々が一本の糸となつて繋がっていく。そして、それらはどれ程悔いてももう戻ってくる事はない遠い日の出来事。

「僕は………僕はっ！」

「やめ……て……。そんな事……を私が望んでい……ないの分かるで……しょ？」

リンの言葉一つ一つが、コックピット内に響いては消えていく。まるで、掌から零れ落ちる砂粒のように、掴もうと思っても掴めない。一度離れた手はもう二度と、掴めない。

「勘違いしないで？」

突如回線がクリーンになり、リンの声が鮮明に届いた。

「私は今すごく幸せ。レータ君と出逢つてから、新しい“家族のみんな”との日々、地球で過ごした日々は、本来の私ができる事の出来なかつたもの。きつとそれは、誰にも汚せない」

レータは、返す言葉が見つからない。涙はとめどなく溢れ出て、嗚咽すら零れてくるのに、何一つ言葉が見つからない。

「リ……ンッ……！」

「ただ一つ我儘言わせてくれるかなあ？……私がいなくても……私と過ごした日々を、地球がなくなっても……地球で過ごした日々を」「リン……ッ……！」

レータは声が涸れるほど力の限り叫んだ。

リンはそれを聞いて、くすりと笑った。知らず、涙が頬を、血が唇を伝う。

「忘れないで」

「ん……？なんだこれは？」

「地震かしら……？」

急に建物が震え出して、ヴェクトとティラナは顔を見合わせた。

「ヴェクト、あれっ！」

ティラナは窓を指して言った。

「なんだ、あれは……？」

ヴェクトもその異様な光景に息を呑んだ。窓の外には一本の光の柱が天まで昇る様にそびえ立っていたからである。きらきらと太陽の光を反射するそれは、きつと水柱なのだろう。

「海の方角ね……」

「ああ……」

その不可思議な現象に、二人は言葉もなく佇むだけだった。そこに、慌ただしくドアを開けて一人の女性が飛び込んできた。

「お二人とも、お逃げくださいっ！」

「ファイリス!？」

次回、『第二十七話：セブンス』

「私と貴方で奏でましょう、崩壊の調べを。私と貴方で終わらせましょう、青い星の軌跡を」

第二十七話：セブンス

ラグリプス発動より、約一週間前

「ライト。一体、どういうつもり……？いきなり、あんな書置きを残して……。クーは無事なんでしょうね？」

「君なら来てくれると信じていたよ。愛すべき妻よ。クーの事なら何の心配もないさ」

サクラはその言葉を聞いて、怪訝そうにライトを見つめた。

ライト「セブンス。リクとクーの父親にしてサクラの夫である。もつとも、ここしばらくは会うことすらなかった関係なので、それを夫婦と呼んでいいのかは分からない。

失踪したクーの病室に残された書置きの内容は、ライトからサクラに宛てたものであったが、その内容は“サクラの地球への呼び出し”であった。普段のサクラならば、いくら夫の書置きとはいえ、多少の猜疑心を持って万全の準備の下、ここに来ていたのだろう。だが今の彼女は情報部長としてではなく、一人の母親としてここに来ているのだ。武器も機体も、何も無い。

「……信じていいんでしょうね？どこにいるのよ？」

「ふっふふ……夫の言葉くらい信じて欲しいものだな。それにクーは私の大切な息子だからな。まずは君にわざわざ来てもらった理由を話したい」

二人は、火星政府の研究所の一つにいた。セレナが生活を送っていた所とは別の施設である。ライトが地球での研究の拠点にしていたところであるが、人員を最小限に抑えてあり、かつ彼らの口を完全に塞いでいたので、今までその居住が誰にも知られることがなかったのだ。

ライトの部屋は薄暗く、生活に必要な最低限の物しか置いてなかった。殺風景な部屋のテーブルに、二人が向かい合うようにして座ってい

た。

サクラとよく似た茶の髪をかき上げて、ライトは話を始めた。

地球を滅ぼしたい

。それが、ライトがサクラに話

した彼の目的だった。その為に、サクラの力を借りたいと言うのだ。理由は単純明快、地球でメシアが造られたように、地球の存在が火星での暮らしに悪影響を及ぼす可能性があるからだ。もう既に火星での暮らしは安定している。地球を残しておく利益などないと考えたからだ。

「私の地球での研究も成熟した……。もう全てを消し去って、火星に戻ろうと考えている」

「随分勝手な話ね……。貴方の様が済んだから、はいおしまいと言つて地球を滅ぼす！？馬鹿げているわ……」

「本当にそうかな……？」

「……？」

ライトの意味深な態度にサクラは、問いかけるような眼差しを向けた。

「クーだよ。あの子だつて、おかしなテロリスト団体がいなければ傷付くこともなかったのではないか？あの人たちが強気になった理由は、地球で機体が造られたからだろうか？」

「そ……それは……」

クーの件を持ちだされると、サクラは言い淀んでしまう。彼の話している論理が正論にすら思えてくる。確かに、“私達”だけの事を考えるならば、いや今火星で生活を送っている大多数の人の事を考えるならば、地球は十分危険因子になり得る。サクラの先程の意見も角度を変えると偽善にだつてなりかねない。今、地球に残っている人々を火星に移住させる為のスペースはまだ確保できる見込みもないのだ。サクラ達は、安穩と……とは決して言えないが、少なくともいつ訪れるか分からない星の崩壊に怯えることはないのだ。

「ふふふ……、私だつて君の能力を買つてわざわざ呼び出した訳じゃないさ。今、火星も荒れているのだろうか？心配なんだよ、夫とし

てな……」

ライトはわざとらしく、にんまりと笑った。サクラはそれを見て嫌悪感こそ覚えれ、微笑み返す事などは決してしなかったが、先程の話は即断できるものでもなかった。

「時間が欲しい。貴方ももう少し考えた方がいいわよ」

「そうはいかない……。もう準備に入っているのだから。それに君には選択肢はないんだよ。わざわざ話したのは私の優しさゆえかな」

「なんですって……!？」

「……クーに会いたがつていたね。おいで」

ライトは、サクラを先導するように歩き始めた。サクラもそれに従ってついていくとこしか出来ないの、同じように歩を進める。

研究所の内部は他の研究所や、火星の施設内と同じ造りになっていた。シアンカラーで塗られた廊下の壁に沿うように二人は歩いていく。

サクラは、二人が出会い結ばれるまでの日々を回想していた。甘く酸っぱい思い出は、時々後悔も混じり、自分を苦しめることもあった。それでも、リクとクーを授かった事だけは絶対に間違いじゃないと思っていたし、これからもそう思い続けるだろう。だからこそ、彼女は彼らを守る為ならなんだってするつもりだった。その為ならば、地球ですら惜しくはないとも思いつつあった。

「この部屋に“彼”がいる……」

ライトはそう言って一つの扉を指さした。

二人が辿り着いたのは一見普通の部屋だった。アパートやマンションの一室のようにも思える。ただ、入り口が嚴重に封鎖されている事を除いて。

「アルファ。お前にお客さんだ」

ライトは鍵を解くと、部屋の中に向かって言った。

「アル………?」

ライトの言っている意味が分からず、サクラは心配そうな様子でク

ーが出て来るのを待った。本当ならば、自分が部屋に飛び込んでいきたいのだが、ライトによってきつく制限されていたので、クーの方からやってくるのを待った。

「はい……」

消え入りそうな声と共に、パイロットスーツを身に纏った少年が二人の前に現れた。ライトは、サクラの方に手を向け紹介でもする様に言った。

「サクラさんだ。お前に話があるらしい」

アルファと呼ばれた少年は、じつとサクラの方を見据える。

サクラの視線とアルファの視線が空中でぶつかった。

「クー……？クー……」

震えた声でサクラがなぞる様に優しく言う。アルファであり、クーである少年は虚ろな瞳で空を見つめたまま全く反応を示さない。だが、少し首を傾げてから呟くように言った。

「……おかあ……さん？」

その声は紛れもないクーのものであり、そのイントネーションや仕草までも彼であった。どれ程、その声を聞かなかっただろう。そう思うとサクラの胸は締め付けられるように痛んだ。

「クー！」

サクラは駆けだして、抱きすくめようとクーに近づこうとした。だがそれを、ライトの手が阻む。

「やめろ！馬鹿な……！もう自我など……残していない筈……！」

「離して！クーは……私が……私がつ！」

さすがのようにサクラはライトの手を振り払おうとした。だがライトもまた、頑なにサクラとクーの接触を阻んだ。まるでそうすることで何か失われてしまうように。

「まさか……意外だった。君がそこまで母として想われていようとは……」

ライトはサクラと会ってから初めて焦った表情を見せた。クーとサクラの再会により、この様な状況になるとは想定もしていなかった

のだ。

クーはライトによって火星から連れ出された後、地球での治療により再び息を吹き返して、外での生活も出来るようになった。ただ、ライトが行ったのはそれだけではない。彼自身が遙か昔に生み出した技術、人智を超え悪魔の所業と言われた“デザイン”のものを流用して、肉体を強化していたのだ。そもそも彼が生み出した“デザイン”は完全に零から、戦闘に特化させた人間を生み出す。それに対し、既に普通の人間として生きているものにそれを転用させるのは並大抵のことではない。クーはその弊害として、以前までの記憶、そして自我を失いつつあった。ライトにとってはそれすら都合がいいのかもしれないが。

「よくもそこまで酷いことが出来るのね……」

ライトがクーを無理矢理元の部屋に戻した後、二人は廊下で顔を突き合わせていた。サクラは鬼気迫る表情でライトを睨みつけていた。「そう言ってくれるな。そうでもしなくてはクーが生き永らえることは出来なかつたのだと、私が言ったらどうする……?」

ライトは試すような調子でサクラを挑発した。

「それを言うのは卑怯ね。私では確かめようがない。で……私は何をすればいいの」

「君は頭の回転が速くて助かる。だから好きなんだよ。地球を全て滅するのに効率のいいラグリプスのシミュレーションを頼みたい。私がそういつた電子的なものが苦手なのは知っているだろう?君以外だと信用できなくてね……」

「クーは……元に戻るんでしょうね」

「……君次第だよ。我が妻」

それを聞くと、サクラは苦々しげにライトを一瞥し、踵を返してそこを後にした。

「サクラ、君に彼の素行を調べてきてもらいたい」

「……はい！」

私が地球でまた新米のオペレータ諜報員として活動している頃、一つの指令が下った。ライト「セブンス」という科学者についての身辺調査である。地球内がピリピリしている時であったので、天才的な科学者や危険思想を持つ革命家などは、常にどこかの国の誰かが見張っているような状況だったのだ。つまり私に託された任務自体も特別珍しいものでもなかった。ライト「セブンス」という名自体は、そこそこの有名であったが、まだ何を成し遂げたという実績がある訳でもなかった。

私は研究員として、彼の研究所に潜入することに成功した。そこで彼は、孤立していた。誰にも相手にされないような研究に、憑りつかれたように一人で没頭していた。彼自身の能力は確かに目を瞠るものがあったが、彼の目指している先は、まさに誰も描けていない領域だったのだ。それを誰もが冷たい目で見ては、嘲笑していた。

「ライト？ああ、あいつは才能はあるが、頭がどうかしてんだよ。もったいねえ」

「いくつも賞をとってるのにね。良い具合でまとまるときゃいいのになあ」

そんな話ばかりだった。

その姿は、くしくも自分に重なってしまった。自分も、彼と同じだった。

「サクラさーん、勉強ばかりするのはいいけど、化粧の一つでも覚えたら？」

「きゃはは！そんな必死こいてコンピュータと睨めっこして……きめえなあ」

別に彼女たちの言葉に、いちいち傷付いていた訳ではない。それでも第三者の立場から見ると、こんなにも胸が苦しくなるのか。私だからなのだろうか。

努力をして、自分の目指しているものに近づこうとして何が悪いの
だろう。

だから、きつと彼もそんなやつらを見返したかったのだ。勿論、意
地もあるだろう。

私は彼を見張る立場から、見守る立場へと徐々に移行しつつあった。
彼の成功を祈る一人の女性になった。彼は、電子機器の扱いが得意
ではなかったが、それは私が得意な分野だった。当時は、きつと私
達はバラバラのパズルのピースの様なもので、二人で完全になれる
と……そう信じていたのだ。

私がライトの足りないところを埋めて、ライトが私の足りないところ
を埋めてくれる。それは、素敵な夢だった。

だから、彼の研究が成功した時は手を叩いて喜んだ。自分の事のよ
うに喜んだ。

だが、世間はそれを認めようとはしなかった。確かに、彼の事を賞
賛し協賛してくれるスポンサーの様な者も来るようになった。でも、
彼はそれでまだまだ満足しなかったのだ。私も……彼についていこ
うと思った。

「それで、二人で部長になって……あの時はあんなに喜んだのに。
そして、リクとクーを授かって……なんでそれで満足できないのよ
……」

サクラは、与えられた部屋のベッドで横たわっていた。自分達は何
故間違ったのだろうかと過去を紐解いても、どこにも答えは見つから
ないままで。

ラグリプス発動より三日前

……。

サクラは、ライトの研究室でコンピュータを叩いていた。ライトと
の取引の為、ラグリプスのシミュレーションに日夜を費やしていた。

しかし、彼女も火星で情報部長として経験を積んできたのだ。ただ、ライトの言うとおり動いている訳ではなかった。クーに関してのデータをなんとか調べようと、あらゆるファイルをハッキングしていた。そういった分野に関しては、彼女は彼に負けているとは思わなかったし、事実そうだからだ。ただ、それ関連のデータは全くと言っていいほど見つからなかった。

「そこまで迂闊ではないのね……。用心深さは変わってないわ」

サクラは一旦手を止めて、ふうと溜息をついた。天を仰いで、これからの事を考えた。一応、ライトとの取引条件であるシミュレーションは進めているが、はいどうぞと渡すつもりはなかった。ライトが、約束をすんなりと守る保証はなかったし、地球が滅びることに、たくさんの人が死ぬことになるのは、やはり自分の子供と天秤にかけても決断しづらい。

「……………!？」

サクラは、部屋の前に気配を感じ、すぐさまファイルを切り替えた。

「サクラ……………進んでいるかね……………?」

「……………ええ、順調よ。何もご心配なく」

ライトが急に部屋に入ってきた。何もやましい事がなかったかのように、サクラはライトに調子を合わせた。詮索しているなど、想わせないように。

「それなら結構。明後日が期限だからね。決して忘れぬよう……。我が子の為にも……………」

「そうね。偉大なお父様がいて、クーも幸せよ」

サクラの皮肉に、ライトはくつくつと笑みを漏らして部屋を出ていった。

「ん……………?」

サクラの端末が振動と点滅を繰り返していた。サクラが地球にいる事を知っているのはミサキだけである。だが、ミサキが地球に来ているはずもない。

「中継通信……………!」

直接利用をした事はなかったし、そんな機会もないと思っていた。火星と地球上の間にいくつもの中間ポイントを設置することによって、時間はかかるが相互の連絡を可能にする技術である。

そこまでして自分に伝えたい事実があったのか、とサクラは幾分緊張して端末を開いた。

そこにあるのは、思いも依らない真実。

「……………嘘……………でしょ？アルト……………が……………？」

冷然とした事実を突き尽きられて、サクラは身体中の血が引いていくのを感じた。そんなことが信じられる訳もなかった。しかし、ミサキがそんな虚偽の通信を送ったりなどは、絶対にしない。だから事実なのだ。

そして、火星政府が襲撃を受けそうになり、激しい混戦状態に陥っていたことも同時に知った。その中心にいたのは地球で造られた“メシア”だということも。

「このタイミングで……………偶然にしては出来過ぎよ……………」

もし自分が私情で部を空けなかったら、アルトは死ななかったのだろうか。

そんな考えがちらとよぎっただけで、胸を掻き毟りたいほどの激情に駆られた。

いつも仕事に対して真摯で、誰に対しても厳しかったけど、何より自分に厳しかった。それでも、彼は言ってくれた。

『頼りにしてるぞ』

自分の能力を必要としてくれた。それが何より嬉しかった。

サクラは独り、言葉を零した。それに同調するように瞳から涙が零れ落ちた。

「クーを傷付けて、リクを傷付けて、そして、アルトを……………」

ねえ、ライト？終わらせましようよ、私達で。

そんな悪魔の囁きが、サクラの耳にこだました。

約束の期日

「さて、約束の日だ。データを渡してもらおう」

「待って。まずはクーに会わせて。クーを元に戻してからよ」

サクラは噛みつくように言った。

二人は、最初に会話を交わしたライトの自室にいた。同じように向かい合うように座って、相手を探る様な眼光はどちらも緩めることはない。

「まだクーを君と会わせる訳にはいかない。約束は守る。だが、今は無理なんだ」

ライトは唸る様に言った。

「そういうと思った。ちなみに、私は渡さないわ。罪もない人を殺した手で再び子供たちを抱けるはずはないから」

サクラも鋭利な刃物の様に言葉をライトに突き刺す。そして、奔流のように続ける。

「茶番は辞めましょうよ。最初から私の事を当てなんてしてないんでしょ？そこまであなたが尽力した計画を不確定要素である私に任せる訳がない。私を誘いだした本当の理由言いなさい」

ライトは黙っていたが、最後まで聞き終えると、口の端を釣り上げて笑った。

「本当に君は聡明で、鋭い。そう、私には優秀な右腕がいてね。君を騙した理由は………君を守りたかったからだよ。君だけが、この世界で私を見つけてくれた。君だけが、私を愛してくれた。だから離せない。何かの間違いで君を失いたくないのだ」

ひと時の沈黙が二人の間に漂った。ライトは表情を変えずに、サクラは視線を落として、憂うように瞳を伏せた。

「なんで……今更そんなことを言うのよ……」

「今更も何も、私の答えは変わらない」

ライトは、ゆっくりと立ち上がり、出口に向かって歩き始めた。

「ちょっと！話は終わってないわ！」

サクラはライトの背に言葉を浴びせるが、気にすることもなくライトは部屋を出た。そして、扉を閉じるとなにやらガチャガチャとそれを触っているようだった。

はつとしてサクラは駆けだして、扉を開けようと試みる。

しかし、扉は開かない。

「出さない！どういってもりよっ！」

「君はここにいれば安全だ。最後の野暮用を片付けたら、迎えに来る。その時は共に火星に行こう」

ラグリプス発動後

ライトは、発生する水柱を眺めていた。

「なるほど……、この地域は失敗か。マスクも必要ないな、これは」
そう言つて、身体を覆い尽くすほどのスーツを取り外した。もしラグリプスが発動して、自分が生身であつたらなら、その被害を受けてしまう。それを防ぐために、自らが特別に生み出したものだった。「だとすると、面倒だな。やはり人手が足りないとはいえ、難民共を使ったのが間違いだつたか……。まあいいさ、アルファ、いやクー。お前の活躍にかかっているわけだ……」

ライトは、マイクを通じてメギドのコックピットに通信を送った。

「はい……」

クーは感情の色を見せずに応えた。

彼等は、ライトの住居を除けば、地球最後の火星政府研究所の目前まで迫っていた。

「ポイントS - 27以外のラグリプスの発動を確認。……全て私の
予想通り……。これで地球は……。救われる」
眼鏡の奥底の瞳は光をたたえ、青年は液晶を見つめていた。

次回、『第二十八話：Over the day limited』

「クー……。なんだろう？俺の事……。忘れちゃったのか？」

第二十八話：Over the day limited

リキはとても面白くなさそうな顔で、二人を眺めていた。この所、自分以外の誰かに訪問客がすこぶる多いのだ。

そして、本日の相手は特に気に食わない。セレナに免じて一度は許した相手とて、彼の事を心から信じている訳ではなかったからである。

「フィエン、本当に久しぶりですね……。会いに来てくれて嬉しいです」

「セレナ、無理はしていなかったかい？でも、もう終わりだ……。話がある」

「話……ですか？」

フィエンは真面目な顔でセレナを見つめていた。対してセレナはきよんとした様子で、小首を傾げる。

研究室の玄関ロビーでリキはセレナと談笑していた。すると、突然フィエンが二人の前に現れたのだ。その姿を見て、リキは一瞬頭に熱が上り心の中で煮えたぎる想いが溢れだしそうになったが、セレナが嬉しそうに駆けだしていったので、気が抜けてしまった。

セレナはリキに、“フィエンの事を信じてくれ”とは言っていないし、許してやれとも言っていない。それでもリキは、セレナの笑顔を見ているとどうしてもフィエンを憎むことが出来ない。

どうしようなく馬鹿な自分を許して、そして暖めてくれた人だから。相変わらず不器用だよなあと思いつながら、リキは一人苦笑いを浮かべるのだった。

「ん……？」

バタバタと騒々しい音が奥の方から聞こえてきたので、リキはふいと振り向いた。

「セレナ達……、こんなところにいたのね。貴方達も早く避難の用

意を……！」

ファイリスが慌てた様子でロビーに飛び込んできた。息も切れ切れにそう言うと、後ろからさらに二つの人影が現れた。その内の一人はロビーに着いた途端、はたと足を止めると、殺気を放ちながら獣のような唸り声を上げた。

「貴様は……っ！！」

その視線の受け手も、眼鏡の奥底の瞳を丸くして驚いた。

「貴方は、火星の……っ、何故こんなところに!？」

ヴェクトとファイエンは思いもよらぬ形で再会してしまった。もつとも、ファイエンを捕える為にヴェクトは地球までやってきていたので、いずれ出逢っていたのかもしれない。それでも今はあの時とは状況が違い過ぎた。

二人の不穏な様子に息を呑む、テイラナ、ファイリス、リキ、セレナ。誰もが状況の把握に時間を要した。

「お嬢さん……その男から離れるっ！」

ヴェクトは腰から銃を抜くと、ファイエンの額に照準を合わせるように構えた。

セレナは声を受けたのが自分だと分かってても、その場を動かうとはしなかった。その場に戸惑っていたのもある。だが、ファイエンが命を狙われているのは火を見るより明らかだったからだ。自分がここを動けば、間違いなくファイエンは撃たれてしまう。

「ヴェクトさん……！貴方達二人の間に何があつたかは私は存じません……！ですが、ファイエンは私を救ってくれた人なのです……。」

どうしようもない暗闇で溺れ落ちていた私を救い上げて、生きる為の希望を与えてくれた。もつとも、彼がどんな事を考え、何故そんなことをしてくれたのか。そして、彼についての何かを知っている訳でもありません。それでも……彼はっ！」

セレナは両手を広げて庇うようにファイエンの前に立つと、声を張り上げて訴えた。

自分が彼について知っていることなんて何も無い。それでもそんな

ことはどうでも良かった。彼に何かの思惑があつて、私を救う意志なんてないのだとしても、結果的に私は救われている。生きる希望を見つけて、そして兄にも会わせてもらった。

その結果だけで良かったのだ。

ヴェクトは苦虫を噛み潰したような顔になつたが、銃身を下ろすこととはしなかつた。セレナを撃つつもりなど毛頭なかつたが、ここでフィエンを逃がすことと天秤にかけると心が揺らいだ。

一度は逃がしてしまつたのだ、二度とそんなことは出来ない。

「やめろっ、ヴェクトさん！いきなり何キレてんだよ！」

今度はリキがセレナを守る様に、ヴェクトとセレナの間に立ち塞がった。当然、銃口に一番近い位置にくることになる。

恐怖がない訳でない。それでも体が勝手に動いたのだからしょうがない。リキはよく似た感覚を以前も味わっていた。

クーを助ける為に、こっそり宇宙船に乗り込んでテイラナに懇願した時である。

クーにもセレナにも死んで欲しくない。その為に自分の命を投げ出すのか？と聞かれても、そんなわけない。死にたくは、ない。

それでも、友達の為だから。

リキは歯ぎしりをして、噛み締める。自分の願いを貫く為には、力が必要だという事を。

「リキ」

テイラナの澄んだ声が辺りに響いた。迷いのない凜とした声だった。リキは一瞬助かつたと思つた。テイラナがヴェクトを止めてくれるものだと思つたからだ。

「どきなさい。これは命令よ」

そんな淡い希望は粉々に打ち砕かれる。テイラナは、自分が火星を離れてからずっと頼ってきた人だった。自分の無茶な願いも聞き入れてくれて、そして新しい世界を見せてくれた。

だから、信じた？いや違う。そんなのは、自分にだけ都合のいい話だ。

「勘違いしないで。貴方がどかなくてもヴェクトは撃つわ。私は貴方には死んで欲しくないの。だから、どきなさい……」

ティラナの声には若干の憐憫が交じっていた。きつと、リキの気持ち分からない訳ではないのだ。リキがセレナを守りたい気持ちを痛い程分かるのだろう。それでも、ヴェクトの想いをここで自分が邪魔など出来ようもない。

「少年……。人は誰しも命を張つてでも守りたい人がいる。私にもそしてお前にもだ。お前がどかぬならそれもお前の自由。だが、勇氣と無謀とは違う。今は、“その時”ではない」

ヴェクトが落ち着いた声で言った。殺気を緩めてはいなかったが、表情は優しく、リキを宥めるような口調だった。

「ふっふふ……。みなさんお揃いでこんなところで何を……?」

突如現れた来訪者に、ヴェクト、ティラナ、ファイリス、リキ、セレナ、フィエンは皆、目を奪われた。

「共に滅びゆく者たち同士、仲良くしようではありませんか……!」
ライト「セブンスは、まるで舞台上で演目をこなしているかのように優雅に両手を広げると、全員を中心まで滑る様に歩いていった。

「ライト……。さんっ……。何故ここに……?」
まず声を上げたのはフィエンだった。自分の見ているものが信じられないとでも言うつように、驚き戸惑っている。

「白々しい事を……。いやいい。お前には感謝している。今までよく働いてくれた」

ライトの言葉にフィエンは押し黙る。自分の描いていたシナリオ通り進まなくなつたようで、苦渋の表情を浮かべた。

「だが、ここを失敗させたのはわざとだな?誰かに情でも移つたかどちらにせよ無駄なことだ」

「私は……。貴方と協力するとは言ったが仲間になつた覚えはないんでね。自分の目的が果たせればそれでいい」

「フィエン……。貴方は一体……?」

セレナには話の行く先が全く見え、それがつい声に出てしまった。フィエンはそれに気付くと、困ったようにセレナに微笑みかけた。

「すみません……。私の事は良いのです。ただ、貴方は死なせない……。貴方が歩む未来だけは嘘も偽りも何も無いものであって欲しいのです」

フィエンは、マーゼ・アレインとして地球の研究所でスパイを働き、同時にセレナの守護役も任されていたが、そこでライトに出逢った。そして彼の思想に賛同し、協力もしてきたのだ。ライトには、サラにすらまだ話していないこの計画の真の目的があつたのである。そして、この地域でのラグリップスの発動を失敗させたのはフィエンの思惑に依ることだつた。

「どうせ、難民どもをけしかけて優秀な科学者の元へでもやったのだらう。だが、何故だ？何の為にそんな事をした？」

ライトはフィエンを詰る様に、問いかけた。もつとも、その言葉に重みは感じられなかった。ライトにとってはそれは興味本位に過ぎないからだ。

「ただ一人の少女の笑顔と未来を守りたい、友が見出だした希望を紡ぎたいでは……。理由になりませんか？」

フィエンは、リキとセレナの前に立つて柔らかく言った。しかし、その瞳は光をたたえていた。

「……。ふつ、十分だ。だが、変わったなお前も……。人の命などに執着しようとは」

ライトは尚もねちつこい口調でフィエンを刺した。

「私も最初は貴方と同じ考えでしたよ。母なる地球の上での人間の愚行は許されることではない……。けれど人は変わることが出来るというのを私は識ることができたのです。だから……。ただ、もう少しだけ見届けたいんですよ」

もつとも、私が生きていければの話ですがとフィエンは心の中で付け足しておいた。

「ねえ、ヴェクトさん……。でしたよね？ 私と手を組む気はないで

すか？」

「馬鹿な事を」

フィエンはヴェクトの方を向いてなるべく笑顔を装って言ったが、ヴェクトは一考することもなく切り捨てた。

「貴方の大切な人……守れなくてもいいんですか？」

フィエンはテイラナを一瞥すると、先程よりやや強めの口調で言った。

「何だと……？」

その言葉で、ヴェクトの表情が変わる。フィエンの言い分を信じている訳ではなかったが、先程のライトとフィエンのやり取りで何かしら厄介なことが起きているのは想定できる。そして、ライト「セブンスの名も知っている。少なくとも、平和な噂は聞かない。」

「フィエンよ、私たちの言葉では彼らも信じられぬだろう？ファイリス、君から説明したまえ」

ライトはファイリスの方をジロリと睨むと、薄ら笑いを浮かべて話を促した。ファイリスはびくつと怯えたような顔をしたが、すぐに覚悟を決めたように唇を結んだ。

「皆さん、これは到底信じられる話ではないかもしれませんが。けれど、事実なのです。よく聞いてください」

ファイリスは地球で今起こっている事を、順を追ってヴェクト達に伝えた。各地に配備してある計器より異常が見つかり、調べてみる結果だった。当初は自分の目を疑ったが、先程の水柱を見て確信したのである。

リキとセレナは当惑しつつも、恐ろしい事が起こっていることだけは理解できるようで、ただ立ち尽くすしかなかった。

テイラナとヴェクトも顔を見合わせて、その事実を呑みこむしかなかった。この状況で、冗談で済まされる訳がない。

「ライトさん……いや、ライト「セブンス。貴方は何を企んでいる？何故、彼らにそれを伝える必要が？」

フィエンはライトの方を見やって質問を投げかけたが、その答えは

返ってこなかった。ライトもただ黙って瞳を閉じ腕を組んでいるだけだった。

「ただ、貴方の目論みだけは話そうとしないのか……」

ライトからの返答がないままフィエンは言葉を続けた。

「フィエン、君も自分が生き残る道をそろそろ考えた方がいいぞ」

ライトはそれだけフィエンに言うと、予めつけていたインカムを口の方に持ってきて呟いた。

「アルファ、やれ」

「嘘……でしょ……？」

ティラナは茫然として、ただ見上げるしかなかった。そこにあるはずのない“空”を。自分がさっきまでいたのは確かに室内で、今もそのはずである。そう、そして何も間違っただけではない。それも事実なのだから。

ただ、屋根がないという事を除いては

そこにいたライトを除く全員は、戦慄するしかなかった。突如屋根が刈り取られて、そこに剣を振り終えた漆黒の機体が佇んでいたのだから。

「メギド……だと……？」

ヴェクトもそれを見て口から不意に言葉が漏れたが、いち早く状況を察知した。

「ティラナ！」

ヴェクトの声を受けて、ティラナもヴェクトの言いたいことを理解する。長い時を重ねてきた二人にこの状況での言葉はいらなかった。ティラナは無言で頷くと、リキとセレナ、そしてファイリスをかばうように背に抱え込んだ。ヴェクトはそれを見届けてから、どこかへ走り去っていった。

「頼む、ティラナ……。少しの時間をくれ」

ヴェクトはそれだけを呟いた。

「ライト＝セブンス……！どういつつもりです……！？」

フィエンは、さすがに困惑が隠せないようだった。ライトの考えていることが全く読めない。

「アルファは完全に覚醒した。もう、お前に話すことなど何も無い……。どうせここで朽ちていくのだから」

表情一つ変えずに、ライトは言い放つ。その言葉尻に、フィエンは恐怖すら覚える。ちらと見えた彼の瞳の色は狂気に染まり、今までのフィエンが知っているライトではなかったからだ。

「皆さん、離れないでください……！」

フィエンはテイラナ達の元に駆け寄り、考えを巡らせた。宇宙に出るにしても、第二宇宙速度を振り切る為の射出場に行かなくてはならない。ライトがそれを許すとも思えない。

いや、そもそもライトの考えが分からない。どちらにせよ、隙が必要である。先程ヴェクトが行動を起こしたが、何をしようとしているかまでは、フィエンには分からない。

「テイラナさん……でしたか？貴方は戦闘に関して素人ではありませんね？一旦外に出る事を推奨します。いつここが崩れるか分かりませんし……」

「賛成ね。ここでは身動きもとりにくいわ」

テイラナがリキの手を、フィエンがセレナの手を引つ張り、ファイリスと共に五人は一斉に外に駆け出した。絶妙にメギドの攻撃をかわせるような角度で。

「無駄だ」

ライトの声に呼応するように、アルファの駆るメギドは素早く剣を翻すと、五人めがけて剣を振り払った。

「しゃがんで！」

テイラナの掛け声で、五人は一斉に床に伏せた。間一髪、剣は空を切った。

しかし身体を起こそうとする間もなく、第二刃が五人に襲いかかっ

た。

「馬鹿な……！」

「そんな……！」

ティラナとファイエンは、同時に悲鳴にもつかない声を上げた。速すぎるのだ。どう考えても通常の間人には有り得ない動き。ファイエンの脳裏を友人の影が過よぎった。彼女と“同じ”動きなのだ。避けようもないその攻撃に皆、全てを甘受するように立ち尽くすだけだった。

リキも瞳を閉じた。全てを受け入れられた訳ではなかった。ただ、怖かったから。今まで何度も怖い目にはあつてきたけど、恐怖が全身を支配するなんて、そんな形容でもなんでもない現実に身体を凍らせるしか出来なかった。

「え………？」

生きてる？

リキの頭に浮かんだのは、そんな当たり前の疑問だった。恐る恐る目を開けると、自分だけではなく全員が無傷だった。メギドが刃を途中で止めていたのだった。

「どっ、どっということだ……？」

誰も何が何だか分からなかった。生きている事を喜べるような余裕もなかった。呆気にとられる五人に対して、ライトだけは一人違う顔をしていた。

憤怒の様な形相で、メギドを睨みつけていたのだ。

「どっということだ、アルファ………！？」

「出来ない………何故か、それも分からない………」

アルファの声がスピーカーを通して辺りに響いた。それは独特の甲高さが残っていたが、感情を廃棄したように冷たかった。だが一人、この声に反応した。

「え……この声は……？クー……なのか……？」

リキはメギドのパイロット席を見つめて、自分自身に尋ねているかのように言った。だが、その事実を自分でも信じられるはずもなかった。だって彼は火星の病院で眠っているはずなのだから。

「貴様……クーを知っている？」

ライトの鋭い視線は今度はリキに向けられた。獲物を狩る肉食動物の様な眼光に、リキは思わず身をすくめた。ライトは想定していないイレギュラーに苛立ちを隠せないのだ。

だが、ライトの言葉でリキは確信をする。あの機体に乗っているのは、クーであるということ。

「なるほど。貴様の存在がクーに迷いを与えているのか……。サクラのことといい、お前はなかなか未練がましい様だな」

ライトはリキを認知して、一人納得した。そして、不快感に顔を歪めて言葉を吐き捨てた。

「お前っ！クーに何したんだよっ！？クー、俺だよ！分かるだろ！？」

リキは怯える心を奮いたててライトを威嚇するように言葉を投げつける。そして、メギドのパイロット席に向かって大声で叫んだ。力いっぱい叫んだ。

「聞くな、アルファ！」

リキの声を遮る様に、ライトはインカムに怒鳴る。怒鳴る必要もなく、ライトの声がクーの所には響いているのだが、ライトはそれすら忘れていた。

「お前が邪魔だ……！」

「くっ！」

粒子ビームが瞬いて弾けた。

ライトがピストルを構えて、リキにめがけて狙い撃ったのだ。しかし、それをいち早く気付いたフィエンがリキの前に立ちはだかった。粒子ビームはフィエンの肩をかすめた。少しの鮮血が飛び散って、辺りを染める。

「誰もかれも邪魔をするなあっ！」

フィエンのその行為に激昂したライトは、執拗にリキめがけてピストルを構えた。

「ぼけつとしないで！」

今度はテイラナがリキの体を抱いて転がった。

折り重なった粒子ビームは空を切って、施設内の壁に突き刺さった。光線が煌めいて、壁が抉れる。

テイラナはリキを庇うように身体を抱えていたが、即座に移動に移れるような体勢ではなかった。リキも、非日常すら飛び越えた現実
に何が何か分からず、テイラナに抱かれて震えていることしか出来
なかった。

「無駄なことだ……！」

ライトは再びピストルを構えなおして狙いをつけた。

しかし、彼も予想していなかった所から光が照射され、続いて轟音が鳴り響いた。

大型の粒子ビームが狙いすましたかのように、先程メギドによって刈り取られて脆くなった所に当たって弾けた。そして、壁の一部が剥ぎ取られて、ライトとリキ達の間で落下して両者を分断したのだ。
「間に合ったようだ……」

「ふっ……遅いわよ……」

ヴェクトの駆るメギドが、ライフル型の射出機を構えて近くまで来ていた。

荒野に行くメギドとメシア、それぞれ一機の機体が陽光よりの影を研究所まで伸ばしていた。

「リンを殺したやつら……許さない……」

ライトの思惑も分からぬまま、傷付いていくフィエン達。
クーの心を取り戻そうとするリキだが、タイムリミットはほとんど
残されていない。

そんな中、レータとシンランも現れて……！？
ヴェクトとティラナに残された道とは？

次回、最終回前話『第二十九話：ウィーラー - 未来を守って - 』

もう誰も、死なせない。

第二十九話：Wi-Fi - 未来を守って - (前書き)

一万二千超えました。
携帯の方はご注意を。

第二十九話：Wiili - 未来を守って -

「はっ！」

「……右からの攻撃、防御……」

ヴェクトの駆るメギドとアルファ、つまりクーの駆るメギドは互いに剣を交え、鈍い音を周囲に響き渡らせた。音の反響が、誰もに現実を知らしめる。

「ヴェクトさん！駄目だ！それにはクーが乗ってるんだっ！」

「ヴェクト！」

リキは張り裂けるようにヴェクトに向かって叫び、ティラナもそれに言葉を添える。今回ばかりは、看過できない。

「分かっている！だが、いつ君達を傷付けるか分からんだろう！？戦闘能力だけでも奪っておかなくては……」

ヴェクトも額に脂汗を滲ませて、唸るように怒鳴った。

「無駄だよ……、いくら彼が手だれだろうと、所詮人間に相手出来るものではない」

幾分かの落ち着きを取り戻したライトが一人呟いた。その表情には、絶対の自信が満ちている。

「うおおおおおお！」

「……………」

ヴェクトの攻撃はことごとくクーには通らなかった。あらゆる角度からの波状攻撃も、防御ないし回避されてしまう。そして、反撃も早かった。ヴェクトが攻撃から防御に移る前に、既に剣を打ちこむ態勢に入っているのだ。

劣勢なヴェクトをリキもフィエンも皆心配そうに見つめていた。ただ一人、ティラナを除いて。

「あれなら……大丈夫」

自分にも言い聞かせるようにティラナはぼそりと言った。ただ、例え相手がどのような怪物でもヴェクトは屈しないという確信は抱い

ていただけるっ。

「はっ！」

「……………！？」

一転、ヴェクトのメギドの攻撃がクーのメギドの各所を捉え始めた。先程とはまるでパイロットが入れ替わっているかのようになり、反対の動きだった。クーが防御に入る前に、ヴェクトが攻撃を当てていく。斬撃は機体に傷を与え、打撃による衝撃はパイロットに動揺と疲労を与える。

「……………っ！」

クーは思うように行かず呻き声を洩らした。

「馬鹿な……………！どういうことだ……………！」

「簡単ね。身体能力だけなら、確かにあの子の方が上みたいだけれど、戦い方が単純すぎるのよ。さすがに戦術パターンまで叩きこむことは出来なかったようね。そして、ヴェクトだって身体能力が劣っている訳では決していない」

狼狽するライトにテイラナが淡々と事実を述べる。

「ふっ……………ふふ。はっはっはっは！そうか、そういうことか。だが、構わんさ。もうそんなことはどうでもいい」

ライトは一人で狂ったように笑い、頭を抱えて俯いたと思ったら、今度は目を剥いてテイラナ達を睨んだ。衰える事のないその鋭利な眼光に、誰もがまだ自分達が瀬戸際に立たされている事を再度認めざる得なかった。

しかし、痛めた肩を庇いながらもフィエンが身を乗り出して叫んだ。「動くな！ライト」セブンス！私は貴方の企みを理解出来ているつもりでいましたが……………どうやら違うようだ。何を考えているか知らないが、もう……………やめましよう……………！」

フィエンがピストルをライトに突き付けて言った。ただ、その態度とは裏腹に語尾は徐々に弱々しくなっていく。彼はライトに対する畏怖の念をまだ払拭しきれていなかった。

「それでどうするつもりだ？私を殺そうとでも？浅はかだな……………」

私は今まで自分の野望は達成してきた。そしてこれからも！私の死
ごときがそれに影響を及ぼしたりなどしない！」

ライトは、尚も威厳を保って吠えた。その迫力が彼に纏っているの
は、それが決して言葉だけのものではないから。今までの彼の経験
が、どんな困難も苦行をも乗り越えて辿り着いた境地が、彼に味方
をしていたからだ。

「……………！ま……………さか……………そんな……………」
ファイエンの脳裏に一つの最悪なシナリオが生まれた。

「気付いたようだな、だが同時にそれに対抗する手段などないこと
も知るだろう」

「何……………？どういうこと？」

ティラナは二人の会話が分からず、一人問答を繰り返していたが、
ファイリスにも心当たりがあったようで青ざめて口に手を当てた。

「そうだ！最後のラグリプス！それがこの研究所の地下に埋まつて
いる！」

「ラグリプス……………つてあの……………？え、じゃあ私達はっ！？」

ティラナは、ファイリスに答えを求めるように視線を向けた。しか
し、ファイリスも言葉にすることすら出来ないようで、黙って首を
振るだけだった。

「落ち着いてください、ティラナさん。ラグリプスには発動する為
の条件があります。そして遠隔での起動も出来ません。ですよね、
ファイリスさん？」

「……………！はい……………！間違ってはいません。そして、ライト部長が少
し前にここに立ち寄った時に仕掛けたものだとなれば大体の位置も
分かります……………！」

顔面蒼白だったファイリスは、ファイエンの言葉を聞いて少し顔に赤
みが戻った。そして記憶を辿る様に、過去の日々を回想する。仮に

もここは自分が長い間住み込みで研究していた施設なのだ。その細部に渡るまで構造は把握している。

「ならば、まだ希望はある……！」

「無駄だ！私が、何の準備もなくこんなことをのたまっていると思っただらうか？アルファアアアアアア！」

フィエンの言葉に被せるように、その希望を摘み取る様にライトは尚も両腕を振るう。ライトの命を受けて戦闘中だったクーは、ヴェクトとの距離を置いて研究所の格納庫の入口方まで飛んだ。

「出番だ……！ベータツ！ガンマツ！」

クーがメギドを操り、その剣で格納庫のシェルターを叩き割った。そして、内部のコード数本も同じ要領で切断する。それと同時に、格納庫の暗闇が幾線もの光線に彩られ、無機質な機械音ともに不気味な協奏曲を奏でた。それは、ライトが仕組んでいた最後の切り札だった。

「新たな機体だと！」

ヴェクトは思わず叫んだ。

格納庫より二体の機体が飛び出し、研究所の入口まで飛行する。ヴェクトはテイラナ達を庇うように仁王立ちになるが、対するは三体の機体である。そして、パイロットはどれも人間離れをした能力者ばかりなのだ。

「はぁ……………はぁ……………」

しかし、クーは苦しそうに薄い呼吸を繰り返し始めた。長引く戦闘で、彼の体が悲鳴を上げ始めているのである。反射能力や敏捷性は強化されていたが、持久力及び心肺器官だけは、そう変えられるものでもなかった。そして、ここには彼に精神的に動揺を与える人物もいる。

「クー……………」

リキが心配そうにクーのいるコックピットを見つめる。彼を救いたいのには、今自分には何も出来ない。そう考えるとやっぱり悔しくて、瞳には涙が溜まっていく。

「また、泣くんですか……？」

その様子を見て、セレナが悪戯っぽく笑った。

「泣かない！もう泣かないって……あの日、決めたんだ！俺達で、世界を変えるって！」

「そうですね、だから………諦めてはいけません。きっとチャンスはきます。クーさんを救えるのはきっともう貴方だけなのですから………」

セレナはリキの肩に手を置いて優しく言う。もっともその笑顔にもあの時リキを元気づけたほどの光はない。セレナも希望を信じていない訳ではなかったが、今の状況が好転しようなどとも思えなかった。

「一体、どういう状況なんだ……？」

新たな機体が二機空より舞い降り、地へと足を着ける。漆黒のメギドと純白のメシア。並ぶとそのコントラストはより一層映えて、美しくみえる。

「誰だ……！？その声はシンランか……？」

女性の声を聞き、ライトは怪訝そうに機体を見上げた。その顔を視認したシンランは驚いて声を上げた。

「ライト……部長？何故、こんなところに？一体、これはどういう………」

ライトの姿を認めると、シンランは少しの安堵感を覚えた。彼女の中ではライトは同じ火星政府の部長という同志であり、信頼するサクラの夫でもある。このような状況下でこれ程頼れる人物もいないと思っていた。

「シンランのようだな。話がある」

今度はシンランのコックピットにライトの声が響いた。部長同士、それぞれの機体の識別コードは把握しているので、ライトはインカムを通じてシンランに個人的な話を持ちかけたかったのだ。

ライトはシンランに二言三言の言付けをした。シンランはそれを聞

くと血相を変える。

「本当……なのですか……。サクラ部長もそこにいるのですかね……？分かりました。レータ……私の友人なのですが彼にも伝えるので、その時刻にステーションで落ち合いましょう」

「宜しく頼む」

シンランはライトとの通信を切ると、今度はレータに連絡を繋いだ。そして、ライトから受けた話を伝え、お互いの役割を確認する。

「……………」

だが、レータは何も答えない。

「レータ！いい加減にしろ！私達はまだ死ぬわけにはいかないだろう！？お前が今まで守ってきたあの家の者たちだって見殺しにするのか？」

レータの態度を見兼ねてシンランは叱責する。だが、シンランにレータとリンの仲の事など知る由もない。そのことがレータを更に苛立たせた。

「シンラン……！頼む、今は黙っていてくれ……………」

「……………ッ！レータ。私はお前を信じる。伝えた事、頼んだからな！」

シンランはそう言葉を残して飛び立っていった。

レータは尚、拳を握りしめてコックピットでうなだれるだけだった。

「突然で悪いが、状況が状況だ。貴方は誰だ……………」

レータのコックピットに精悍な男の声が届いた。そうそれは、以前地球に攻め込んできた男の声だった。レータはあやうく墜とされそうになったが、あの時はリンに救われたのだった。そう、リンによって。レータの中に、この男に対する憎しみなどはもうなかった。もう、どうでもよかった、そんなことは。

ふと視界を下げて地上を見下ろすと、そこには見知った一人を見付

けた。

「フィエンさん……？聞こえるかい？……誰なんだ！？こんなことをしでかしているやつは！？」

レータの金切り声がスピーカーを通して辺りに響いた。そして名指して呼ばれたフィエンは一瞬考えるように腕を組んでから、ふうとため息をついて苦笑いを浮かべた。そして、人差し指をある男に向けた。

「あの男ですよ。ライト＝セブンス。私達の敵、火星政府の人間です」

その言葉を受けて、ライトは思わず吹き出した。

「はっ！大体事情は呑みこめたが、お前も私並の悪党だな！フィエン！」

ライトは笑いを堪えながら叫ぶようにそう言った。

そのライトに広く重い影が落ちる。メシアとその剣だった。

「うらあああああああつ！」

「ベータ！」

レータは剣を構えると、ライトめがけて振り下ろそうとした。しかし、ライトの掛け声に反応するように一機のメギドが瞬時に現れて、それを防いだ。

「なんだこいつは……！邪魔をするなあっ！」

レータはバックステップで距離をとると、腰から射出機を取り出して粒子ビームを乱射した。しかし、ベータの駆るメギドにはかすりもしなかった。

「さて、私はそろそろ失礼しよう………」

ライトは一人そう呟くと研究所の方へ向かって歩き出そうとした。

「待て！そんなことはさせないっ！」

「ガンマ！」

フィエンがライトを追おうと走り出そうとしたが、そこにガンマの機体が現れて立ちはだかった。

「フィエンと言ったな！お前の話を受けよう！話がある！」

ヴェクトは辺りを見回して、もう一刻の猶予もないと悟る。とにかく希望を紡いでいく為には、取れる手などそう残ってはいない。

「クー！」

リキがあつと声を上げた。

レータの攻撃を受けて、クーの乗る機体が崩れ落ちようとしていた。レータにとつては三機の機体はどれも自分の邪魔をする存在に過ぎなかったからだ。

「くっ……今しかない！」

ヴェクトはそこまでぐつと距離を詰めると、装甲が剥がれ落ちて崩れゆく機体のコックピット部分だけを

掴み、すぐさま離脱した。機体はすでに誘爆を繰り返して、無残なものとなりつつあった。

「ティラナ！」

「ええ！」

ヴェクトはそのコックピット部分をティラナ達がいるところにそつと置いた。そこにティラナもリキも皆が駆け寄った。リキは必死に入口をこじ開けて、クーの身体をコックピット外に運び出そうとしていた。

「ファイリス、貴方は医学も博士を持っていたわね？」

「ええ！診てみます！」

ティラナの呼び掛けにファイリスは力強く頷いた。

「ファイエン……！話がある。この状況で取れる手は少ない」

ヴェクトがベータの攻撃を防ぎながら一気に言った。ベータとガンマはクーより強靱な肉体を持つよう、戦闘中でも息を切らす様子を見せずに淡々と剣を振るい粒子ビームを乱射している。ガンマはレータを敵と判断したようで、そちらでも火花が散っていた。

「きつと私の考えていることも貴方と同じだと思えます……けどね」
「ファイエンもヴェクトに向かつて返事をする。」

事実二人の考えていた事はほとんど同じだったので、これから先の

計画もすんなりと練り上げられた。

守るべきものを守る為に、過去の敵同士のしがらみからはもう既に解き放たれていた。

「決まりだな。だが、お前はいい。テイラナ達と共に行け」

「……お断りですね。自分の始末くらいつけさせてください。最後まで、足掻きましょう」

「……ふん、勝手にしろ」

ヴェクトの提案はフィエンによってあっさり断られてしまった。もっとも、最初から自分の言う事を聞くとも思わなかったので、ヴェクトもそれ以上は言わなかった。いや、むしろ自分の目の前に迫る敵機とのせめぎ合いで手いっぱいなのである。

「問題は移動手段ですね……。車ということになるでしょう」

「うむ……」

フィエンの言葉に、ヴェクトは困ったように黙り込んだ。

その二人の間に新たな声が響く。

「僕が……運びます！場所も分かりますし、守らなければいけないもの……僕にもありますから。信じてください。リン、彼女が守ったもの……僕が必ず繋がなければいけない……。例え、この命果てようとも……！まずは、こいつを倒してからですが……！」

先程までのヴェクトとフィエンの会話を途切れ途切れながらも聞いていたレータが名乗りを上げたのだった。しかし、彼は息も切れ切れにガンマとの戦闘を繰り返していた。シンランとの一戦、そして難民からの施設の防衛。今日一日だけでも、かなりの戦闘を行ってきているのだ。身体に負担がない筈がない。

ヴェクトとフィエン、彼らの作戦と呼ぶには簡略すぎる計画はこうであった。

ヴェクトが機体の足止めをし、フィエンがライトを追ってラグリップスの発動を止めさせる。その間に、念のために他の者をステーションに送り宇宙への脱出準備を整えておく、というものだ。

ただ、そのステーションまでの移動手段がないということだ。車で

は遅すぎる。しかも、もう既に乗り込める機体は他にないのである。そこでレータが、皆の運搬を行うと主張したのである。

「ヴェクトさん。レータさんに頼みましょう。ここからステーションまでは、距離があります。少しでも短縮できた方がいい」

「ああ、そうだな。だが……………」

ヴェクトは、自分の請け負っていたベータを吹き飛ばすと、レータとガンマの間に割り込んで言う。

「こいつは私が引き受けた！急いで行け！」

「ということですよ。皆さん、迅速に行動に移してください」

ファイエンはテイラナ達の所に行くと言情を説明した。ファイリスはクーの様子を診ており、それをリキとセレナが心配そうに覗き込んでいた。ファイエンが来たことに気付いたファイリスはすつと立ち上がる、ファイエンに向かって言った。

「……………私はここに残らなければいけません。ライト部長を追うのでしょうか？内部構造は貴方達が思うより複雑です。案内が必要だと思います」

「だが、クー君は？」

「クー君に関しては応急処置を既に施してあります。あとは、火星で治療する以外にありません。精神がやはり錯乱しているようです」
ファイエンは一瞬迷ったように視線を宙に投げたが、ファイリスの言っていることはもつともだった。自分では正確なラグリプスの位置も、内部の構造すら分からない。

「そうですか……………なら、宜しく頼みます」

「テイラナ、子供たちを頼む！」

ヴェクトはガンマとベータ二機を相手に、鬼気迫る勢いで機体を振り回していた。その合間を縫ってテイラナに希望を託した。

「分かったわ」

ヴェクトに対して、テイラナは即答した。

「……………ありがとう」

それを聞くと、ヴェクトは頬の筋肉がふつと緩み、それだけを呟いた。ここにるのがティラナで本当に良かったと思った。彼女と組んで来れて本当に良かったと。

「何でここでお礼を言う訳？来なかったら許さないから」

「……………ああ」

皆が去った後に残ったのは、ヴェクトとベータ、ガンマだけであった。

どういう命令を受けたのかは分からないが、ベータとガンマはティラナ達の後を追おうと駆けだそうとした。それをライフルと剣を駆使してヴェクトは阻止する。

「ここからは一歩も行かせん！」

言葉は強かったが、反対に長引く戦闘で身体は各所がガタが出始めていた。戦術パターンが甘いとは言え、自分より遥かに優れた能力を持つ者を相手にするのは、やはり一筋縄ではいかなかった。そして、相手は二機である。こちらがいくら相手にダメージを与えようと、相手は変わらず起き上がって立ち向かってくるのだ。話を聞いた後では、ヴェクトとて相手の命を奪ってしまうことになるのは胸が痛む。彼等はライトによって生み出された罪もない者たちなのだ。

「何度立ち上がってこようが構わん……………！」

「……………ライト様の為……………！」

ベータとガンマはうわごとのように同じ言葉を繰り返すだけであった。

「しまつ……………！」

一瞬の隙を突かれて、ヴェクトは左肩に直撃レベルで被弾してしまった。その爆発で煙が巻き起こり、辺り一帯を覆う。左腕が千切れる寸前まで損傷を受けて、ぶらりと垂れ下がってる状態となっ

まった。当然、左手に持っていたライフルは下に落としてしまっただけ。しかしヴェクトはひるむことなく、その霞を突っ切り右手に携えた剣でベータのコックピットを突き刺した。スパークが辺りに帯びて、少しずつベータの機体を包んでいく。

「許せ……！」

機体は誘爆を繰り返して四散した。

ヴェクトは顔を歪めて、ベータに一瞬の祈りを捧げていた。しかし、ガンマがステーションの方角に向かって飛ぼうとしていたので、再びすぐにレバーを握る。

もうヴェクトに武装は残されてはいなかった。しかし、ガンマをここからテイラナ達の元へ行かせる訳にはいかない。

「うおおおおおっ！」

ヴェクトは半壊していた左手を自ら引き千切り、それをガンマの機体めがけて思い切り投げつけた。

機体は、それに直撃しバランスを崩すと地上へ落下していった。

テイラナ達はクーが乗り込んでいたコックピットに入り込み、それをレータが持つて飛行していた。まずは彼が他に助けないといいない人がいるという施設まで向かっている。そこまでいけば、もっと快適に移動できるようになるという。

「クー……大丈夫か……？」

相変わらず目を覚まさないクーの髪をリキがそつと撫でた。

「うう……あう……」

「クー！」

かすかにだが、クーは反応を見せるようになっていた。

その様子をじつとセレナは祈る様に見守っていた。今までの事情を知る彼女だからこそ強く願った。二人がまた笑顔で相見えるように、青空のもとでなくてもいい、星雲の中でだって、冷たい研究所の中

でだっていい。

生きているなら。巡り合わせは変わってくるから。

ティラナは壁に身体をもたれるように預けて、窓から眼前を見下ろしていた。束の間の休息……と感じている余裕もなかった。確かに緊張の連続で身体は疲労に満ちている。

それでも、今ヴェクトは自分達の為に戦っているのだ。彼の痛みを覚えれば、自分に降りかかっていることなんて微塵もないことなのだ。だが、だからこそ苦しい。彼の無事を信じることしかできないのは。

「サクラさん！ここにいますね？大丈夫ですか！？」

「その声は……シンラン……なの？なんで貴方がここに……」

「話は後です。早く、脱出しないと！ちよつと待ってください。確かパスワードは……」

シンランはサクラがいると思われる部屋の前に設置してあった機器にライトより教えられた数字を打ち込んでいった。やがて討ち終わると、甲高い機械音と共に扉が開いた。それと同時にサクラが部屋から飛び出してきた。

「ライトは……！？まだ、地球は無事なの？」

「ええ……詳しい事は聞いてませんが、とにかく地球が大変みたいで、ライト部長とはステーションで落ち合うことになってます」

シンランの話聞いて、サクラは考えを巡らせる。自分が軟禁されていたのはせいぜい、一日の事だ。その時点ではラグリプスは発動していないと考えていい。しかし、今日発動の予定のはずである。まだだというのだろうか。

サクラは部屋を調べるうちに一つのデータディスクを見付けた。そこに記してあったのは紛れもないライトのこの計画の真意である。それを加味して考えても、情報が少なすぎる。今はとにかくシンランと共にステーションに行くしかなかった。

「ファイリスさん……、ラグリップスの心当たりがあると言いましたね……？」

「ええ……。ここはそもそもライト部長が所長を務める研究所だったんです。彼は地下に設置してあると言いました。しかしラグリップスが本当に効果を発揮するのは、より高い地点にある時です」

「フィエンとファイリスは、並んで研究所内を走っていた。ライトが研究所内に入っただけでいったのは随分前になる。かなり距離は開いていると考えていいかもしれなかった。

「だから、地下からリフトですぐに地上まで運べる所……きっとそこです」

「分かりました……！急ぎましょう」

二人はシアンカラーで塗られた壁に沿うようにひたすらに走った。

「ところで……フィエンさん。貴方は何者……という方は失礼ですが……一体……？」

「さあ……？もはや自分でも良く分からない……私は一体何がしたかったのか、何が出来たのかさえも……」

「フィエンは苦笑ともとれないような困った笑みを浮かべて憂うような表情をみせた。ファイリスはそれを不思議そうに見つめる。

「たとえ貴方が何者でも……セレナを笑顔にしてくれた事実は変わらない。そのことは感謝してます」

「はは……むしろ心配掛けさせていただけかもしれませんがね」

「ふふ、そうですね。あの子は心配症でしたから。きっと今も……少しの間だが、二人の間に穏やかな空気が流れた。共通の人物を想う気持ちだけが、境遇も素性も何もかも全く違う二人を繋げることが出来た。

「そろそろですね……あ、あれはっ！」

ファイリスが声を上げ、フィエンも前方を注視する。目的地まであと少しというところだった。そこには鮮やかな深紅の血だまりが、所々に点在していた。大きいものから小さいものまで、そしてそれは足跡を刻むかのように奥へと続いている。

「ライト」セブンスのもの……か？」

「ええ……そうでしょうね。どこか怪我していたようには見えませんでした」

いや、違うとフィエンは考えた。ラグリップスの研究に関わって、かつそれを大量に配備するまで生産に関わっているとしたら、それだけで人体にも多大なダメージを与えるのではないのか。ライトの身体は知らずのうちに、いやもしかしたら本人は気付きつつもこの計画を進めていたのでは……？

「確かに、その可能性は否めません。それ程、ラグリップスとは凶悪なものです……」

ファイリスが怯えるように言う。二人はその血痕を辿る様に、再び走り出していた。

「ここですっ！ラグリップスとライト部長は……！？」

二人は、勢いよくそのエリアに飛び込んだ。そこは吹き抜けで地下であるはずなのに、地上より漏れた光がほのかに差し込んでいた。そして、何より目を引くのが巨大なリフトとそれに設置されている球状の物体である。二人はいやがおうにもそれを目にいれなければならなかったが、それよりはコントロールパネルとライトの姿を探すことが先決である。

ファイリスの声に反応するように、フィエンはライトの姿を探した。そして血痕の跡がまだ続いているのに気付き、その先を視線で追う。

「ライト」セブンスううううう！」

フィエンの構えたピストルの先から閃光が弾けた。そして、緋色の血飛沫が辺りを染める。

「ぐうっ！無駄だ……！」

「やめる！」

フィエンの放った粒子ビームは、ライトの肩を射抜いたが、ライトはそれを庇おうともせず、コントロールパネルにもたれかかるようにして、入力を続ける。ライトの口からは血が糸を引いていた。フィエンの攻撃によるものではなかった。

フィエンは再び粒子をチャージすると脳天めがけて攻撃を放つ。しかし、二人の間に地面よりシャッターが飛び出しそれを防いだ。ライトが予め造っておいた機能だった。

だが、徐々に開きかけていた地上へのシエルターも動きを止めた。「この機能を操れるのは、貴方だけじゃないですよ……！」
ファイリスが手元のコントロールパネルを撃ちつけて、操作していたのだった。だが、再びシエルターは動き出してラグリプスは昇っていく。

「我が願い、誰にも邪魔することは出来ない！」
ライトが叩きつけるようにして、拳骨でボタンを押した。それを覆っていた薄い液晶が割れ、辺りに破片が飛び散った。

ラグリプスが起動を始めた。

フィエンとファイリスが、ライトを覆っていたシャッターを破壊して彼に近付いた時、彼はコントロールパネルに寄り掛かる様にして既に事切れていた。パネルは彼の口から零れたであろう血で、深紅に染まっていた。

フィエンはそれを見下ろし溜息を一つつくると天を仰いで言った。

「……ふう……間に合わなかったみたいですね……」

「ええ………こんな言い方はふさわしくないかもしれませんが、ある意味ではこの作戦をとっておいて良かったのかもしれない」

「ファイリスさん、この辺りに通信機器はありますか？」

「………！そうですね、ティラナさん達とヴェクトさんに伝えなくてはいいですね」

「ええ……………まずはあの男からですね」
通信機器をファイリスから借り受けるとフィエンはそう言って、ヴ
エクトに連絡を繋いだ。

「まだ生きてます？それなら一言だけ。逃げてください。間に合
いませんでした」

「生きては……………いるが、残念ながらもう自由に動ける状態でもな
い……………」

「そうですね……………ならば最期に、私からの餞別です。回線開きつば
なしにしておいてください」

「……………?」

ステーションでは、宇宙への発射準備を整え終えたシップが、ヴェ
クト、フィエン、ファイリスの到着を待ち焦がれていた。

テイラナ達のグループに、レータ達の施設に人々、そしてシンラン
とサクラも加わり、既にシップは大人数の騒ぎになっている。

そんな中コントロールルームでは、浮かない顔をしたテイラナ、レ
ータ、シンラン、サクラ、リキ、セレナが痛い沈黙の渦中にいた。

クーは別室で休んでおり、顔色も幾分と優れてきていた。ここに
いる誰もが、タイムリミットが迫っていることを知っていた。だが、
彼らを放っておいて、先に出発できるはずもなかった。

「こちらフィエン……………。繋が……………て……………ます？というか、波長こ
れで……………いの……………かな」

「フィエン！」

スピーカーからフィエンのものと思われる声が雑音に混じりながら
も響き、セレナが飛びつくように声を上げた。

「ええ、繋がってるわ。こちらテイラナ、状況を教えて」

「率直に言……………います。失敗……………しました。私達は間に合いそ……………」

うもありません、逃げてください」

そのフィエンの言葉にその場の皆が凍りついた。誰もが、聞きたくなかった言葉。そして、信じなくなかった言葉。誰もが一瞬は抱いてしまった結末かもしれない。それでも不安をかき消すように、祈った。きつとみんなで、助かることが出来ると。

「みんな……無事についているみたい……だな……。良かった……」
「ヴェクト！」

今度はヴェクトの掠れた声がスピーカーから響いた。それに対し、テイラナが声を張り上げる。

「テイラナか……よくやつてくれた。悪いが私は……」

「嫌よ……来てくれるって言ったじゃない！……来てくれるって……っ！！」

「済まない……。だが、“私たち”はまだ死んでないだろう？まだ希望を紡ぐことが出来たのだから」

ヴェクトはゆつくりと自分自身にも言い聞かせるように言った。その様子から、手負いでありヴェクト自身も重傷なのだろうということが容易に想像できた。

テイラナは彼の言葉を聞いて、震えながら瞳を伏せて唇を噛み締める。唇の端が切れて血が滴った。

「残念ですが、もう時間がない様です……みなさんお元気で……セレナ、貴方にこんなことを言う資格はありませんが……幸せになつてくださいね」

ファイリスが急いではいたが穏やかに言った。

「それでは……急いでください。貴方達が生き残らなかつたら、私達も死ぬに死ねませんしね……」
フィエンが自嘲気味に笑った。

「貴方は……なんでそんなことを……！！」
セレナが大粒の涙を瞳に浮かべながら、しかしそれを堪えるように、言う。

「少年……。いるんだろう？私の言葉、忘れるな。君の勇気、いつ

かきつと実を結ぶ。それまで……強くなるんだな」

「ヴェクトさん……」

リキももはや言葉になるかならないか程の声で、咳くしか出来なかった。襲いかかる現実は、今の彼が受け止めるには大き過ぎた。

「では……出発します……！レータさん、サクラさん、準備は……！？」

テイラナがコックピットの前面の液晶を見つめながら、振り返らずに言った。

「こちら、いつでも出れます」

「こつちも大丈夫よ」

二人も感情を言葉に込めず、淡々と言った。

誰もに様々な想いが広がっているに違いなかった。だからこそ、誰も自分の心を吐露しない。誰かが零すと、止められなくなりそうだから。

まだ、助かると決まった訳じゃないのだ。

「発射しますっ

！」

テイラナの号令で、皆がそれぞれの操作を行う。

眼前に広がっていた赤茶けた大地が急速にぼやけていく。シップは轟音と共に煙を吹きながら空に舞い上がった。

「セレナ……。ごめんなさいね、これからは普通の暮らしを……」

「こんな最期こそ、私にはふさわしいのかもしれないな。カレン、君に別れを告げられなかったのが唯一の悔いだよ。君とのコンビ……悪くなかった」

「テイラナ。灯し続ける……お前の正義を！お前が生きていれば、決して消えない……！」

ファイリス、フィエン、ヴェクトは、誰に向けるでもなくそつと最期の言葉呟いた。いや、もしかまだ通信環境が生きていたのならそれはシップにも届いたのかもしれない。それはもはや知る由はない。

シップが大気圏に突入しようかといったときに、一点がどす黒い赤

に滲んだ。研究所の地点であった。
シップの面々は誰もが、それを言葉なく見つめ続けていた。

僕らの明日は何色だろう？

赤？青？緑？

何色でもいい、それは可能性だから。多ければ多いほどいい。
次回、『最終話：七色の明日へ』

描こう、たくさんの色彩で。

最終話・七色の明日へ（前書き）

最終話となりました。

最後に筆者挨拶を書いておきましたので、ご覧ください。

最終話・七色の明日へ

傷付いて、傷付けて。

そうやって、識ることもある。

いや、そうしないと識れないこともある。

だから、生きることは辛い。ものすごく辛い。

辛くって、苦しくて、泣きたくなくて、逃げたくなる。

袋小路に追い詰められて、逃げる為の道も術もなくなって、絶望して、諦める。

それでも

きつと終わりなんかじゃない。

誰に後ろ指を指されても、嘲られても………自分が負けてないと思っていれば、いつか必ず勝ってやるって思っていれば、必ず未来は開けるんだ。

地球でのあの日から、一年が過ぎた。

あれからの日々は目まぐるしく、色々なことがあって、長い様な短い様なそんな一年だったと思う。

俺は、この一年でどれだけ変わったのだろうか。

………

いや、どれだけ変わったのだろうか。

少しは、ヴェクトさんみたいに強くなれているのかな……。

「いや、まだまだだ………」

鏡に映る自分の顔はやっぱりまだまだ子供で、出来ないことだってたくさんある。でも、いつかこの手で誰か大切な人を守らないといけない時が来る。その時の為に、俺は強くないといけないんだ。

「あまり気負い過ぎは身体に毒だよ？リキ」

「うわわ！セレナか！なんでここにいるんだよ」

「扉が開いてたから。クー君も、もう待ってるよ？」

そういうことじゃねーだろと、突っ込みを入れたいのを我慢しつつ俺は苦笑を浮かべた。セレナのその悪気のなさそうな笑みは今でも俺には効果抜群だった。一年前、彼女と星空を眺めたあの時から、俺はずっと彼女には逆らえないのだから。

それでも、将来俺が守るべき人はきつと彼女じゃない。きつとそういう感情を抱いたりはしないだろう。そもそも、俺なんかじゃセレナだって迷惑だ。

「じゃ、外で待ってるから！早くしてね！」

「分かってるよ！」

初めて出会った時の様にセレナはぱたぱたと部屋から出て行った。相変わらず、そういう所は変わらないんだろうなとしみじみ思う。でも、時々のもそういう発見が俺を救ってもくれる。

人は、確かに変わっていかねければいけない。でもそれと同じで、変わらない所だって絶対あるんだから。勿論、それを言い訳にして自らの向上から逃げるのは駄目だけど、それでもやっぱり変わらなないことがあるのも悪くないんじゃないだろうか。

セレナは、火星に来て言葉遣いや仕草が変わった。俺もあの日から頑張つて勉強するようにしたり、出来るだけ自分の事は自分でするようになった。クーも……きつと少しずつ変わってきていると思う。昔のクーを俺は知らないけど、初めて出会った時の自分を押し殺しているようなそんなことはなくなった気がする。

それでも俺達の関係は何も変わらず続いているんだ。それはきつとすごいことだと思う。

意図的に変わらないことを維持するっていうのは、変えるってことと同じくらい難しい。あの事件は、その事実をたくさんの人に植え付けたと思う。

「ごめんごめん、ネクタイに手間取っちゃって！」

「うん、でもまだ歪んでる」

え？と俺が確認するより早くクーは俺のネクタイを直し始めていた。
「悪いな……ありがとう」

気まずそうに頬をかく俺と目が合うと、クーは柔らかく微笑んだ。
ちらとセレナに視線とやると、セレナも嬉しそうに笑っていた。

クーは火星の病院に運び込まれてしばらくは集中治療が続けられた。
以前治療を担当していた医師が言ったには肉体の損傷は驚くべき回復を見せている……ということだったらしい。どう考えても信じられないような医療に依るものとまで断言したとか。やはり、ライト
「セブンス クーの父さん は、クーを救うために、
治療を施したのだろうか。精神の錯乱はその副作用？今となってはそれを知る由もない。

退院したクーは、記憶が失われるといったこともなく、俺やサクラさん、リク兄ちゃんのこともぼつちり覚えていた。もっとも、怪我をしてから地球で何をしてたかについては全く覚えてないのとだったけど。

でも、俺は時々それが本当なのかと疑いたくなるような瞬間がある。
なんでだろう？

確証も何もないけれど、懐かしい感傷の様な不思議な感覚がふつと頭をよぎるんだ。

「今から学校？早くしないと遅れちゃうわよ」

「うわっ！ティラナねー……ティラナさん。おはよう……」

通路を三人で歩いていると、後ろから急に声を掛けられて動揺してしまった。無意識に昔の呼び方が口をついてしまい、慌てて言い直す。

「おはようございます」

セレナとクーは仰々しく深々とお辞儀して挨拶を交わした。

「おはよう。クー君もセレナちゃんも、体調はどう？何か困ったことがあったら何でも相談してね」

「ありがとうございます……。僕はティラナさんのおかげで今ここ

にこうして生きている。感謝してます」

クーは罰が悪そうに、顔を伏せて視線を落とした。クーが地球でどうなっていたかを本人にはほとんど知らせてはいなかったけど、聡明なクーの事だからきつとおおよその推測はついているんだろうと俺は思う。

ティラナさんはやめてよと困ったように笑った。そしてこう続けた。「君達を、私達を救ってくれたのは、“あの人”なんだから。昔も今も彼みたいになりたくてずっと追いかけていたけれど、結局彼には一生敵わない……。本当に立派だった」

髪をかきあげて、労わるように穏やかな瞳でティラナさんはどこかを見つめていた。

ティラナさんだって俺を守ってくれた。

ティラナさんだって立派だったよ。

そんな言葉が胸から喉まで出かかって、無理矢理呑みこんだ。今俺がこの言葉を言うべきじゃない。

だから、俺は精一杯の激励を送る。ヴェクトさんの遺志を継ぐ同志として、誇れる道を歩む為に。

「頑張つてね、隊長さん」

「貴方もね、ヴェクトの言葉……忘れてら承知しないわよ」

ティラナさんは貫録をたたえた笑みと言葉と共に、去っていった。

……………忘れられる訳ないじゃないか。

「そういえばさ、今日お母さんが皆にご飯食べにいらっしやいって昼休み、俺達は三人でお弁当を囲んでいた。他愛のない雑談を縫って、クーはそんなことを言った。

「サクラさんが？」

「うん、なんか兄ちゃんたちも友達と帰ってくるみたい。多分、レオさんも帰ってくるんじゃないかな？セレナは聞いてない？」

「何も……聞いてないわね。まさかお兄ちゃん、クー君のところで飯を食べてうちに寄らずに帰るつもりだったんじゃない……っ！」
セレナは箸を握り締めてわなわなと震えだした。その背後には見えるはずのない烈火の炎が燃え盛っているような気させする。
リク兄ちゃんもレオ兄ちゃんも基本的には弟思い、妹思いだと思う。俺が見ている範囲ではこつちから連絡したらすぐ返ってきているよ。うだし、時々は実家にも帰省している。それでもクーはともかくとして、セレナには少々物足りないらしい。

「まあまあ………」

宥めるクーも、いささか気分が悪いと思う。条件が“違う”から。サクラさんは、お仕事を引退して家でクーと共に暮らしている。セレナの父さんは、俺達が火星に再び帰って来た時には行方を眩ましている、誰も所在が掴めなかった。

そういえば、オーベルト・アケルトがセレナの父さんだという事実には驚いた……と言いたるところなんだけれど、もう驚くことに慣れてしまっているというかなんというかですんなりと受け入れた。もう、誰を憎んだり恨んだりしてもしようがない。

「でもいいの。私には素敵な友達が二人もいてくれるんだから！」
セレナは、笑う。勿論、本心じゃなくて無理矢理笑ってるのかもしれない。

でもそれはセレナだけではないし、きっと誰でもそうなんだと思う。笑いたい時に笑えて、泣きたい時に泣けるなら人生はなんて楽なんだろう。だから誰だって、素直になれなくてそんな自分が嫌になつたりする。

。 だけど、俺達は独りじゃないから

情けなくて嫌になることもある自分。そんな自分を必要としてくれる人がいる。それはどれだけの救いだろう。

火星政府内でも重要な会議にしか使われない、蔽かだがどこか機能美を感じさせる円卓の机に一人の女性が姿勢を正して座っていた。時折、大きな眼鏡をいじっては退屈を紛らわせていた。

やがてもう一人、顔立ちは端正で若々しいが熟達者特有の物腰の柔らかさと、その豪胆さを備えているような青年が隣に腰を下ろした。青年に気付いた女性が声をかける。

「エルド……貴方も呼び出しですか？」

「ああ……ミサキもか？まだ僕たちだけみたいだけど、部長達全員が集められているのかな」

「さあ、どうでしょうか……？」

二人はここに急に呼び出されたのだが、その理由も分かっていなかった。それぞれ部長の座が空いたことにより、一年前より副部長から昇格していた。もともと、サクラは実家よりバックアップ態勢をとっており、ミサキのサポートは行っていた。

やがて、白ひげをたくわえた二人の良く知る政府の中枢の男と、その後ろに見知らぬ男が新たな部長の腕章を身につけてやってきた。政府の男は恰幅のいい身体を揺らして、快活そうに笑いながら二人に声をかけた。

「やあ、お疲れ様。他のものは都合がつかなくてな。君達にまずは紹介しておこうと思う。科学部長に就任するレータ「カミヤ君だ」そう言つて政府の男は、後ろに立つ青年の肩を持った。

レータですと黒髪の青年は、丁寧に二人にお辞儀した。二人も、部長らしく堂々とした仕草で挨拶を返す。

「彼は地球の軍にいた頃から優秀な科学者でね。地球に残っていたみたいだが、政府の方に復帰して貰うことになった。これからは宜しくやつてくれたまえ」

男の言葉を聞いて、二人は一瞬眉をひそめる。

「地球にいた……信用できるんでしょうねえ」

ミサキが疑わしげな視線でレータの全身を見回した。

「ま、僕の目が黒い内はこの火星で変なことはさせませんよ」

それに対しエルドは、余裕たっぷり微笑んだ。

「ははっ、精々信じてもらえよう頑張りますよ」

レータは苦笑いと共に、渴いた笑い声を上げたあと、二人に握手を求めた。

リン。これから僕は、誰かを傷付ける為じゃなく、何かを壊す為じゃないことに自分を捧げることで、今までの罪を償おうと思う。勿論、一生かかっても払いきれぬものじゃないかもしれない。

君は、僕がシンランを信じ続けることを願ってくれた。君のおかげで僕たちは分かれずに済んだんだ。だけど、彼女と一緒にいることは出来ないよ。それでも、僕たちの目指していることは同じだから大丈夫。

これからも、僕や施設のみんなを見守ってくれるかい？

君の願っていた世界を必ず、この宇宙のどこかにいる君に届けてみせるから。

火星政府開発部室。

そこで一人の女性が、自らのデスクに座って書類を纏めたり、引き出しを漁って何かを探したりととにかく忙しそうにしていた。

そこに、もう一人体格のいい男が部屋に入ってきた。女性の姿を認めると、落ち着いた声で言う。

「シンラン部長……！何やらお忙しそうですね……」

「ツバルか。ああ、明日から何人かが月に異動になるからな。その為の準備だよ」

ああそうかと、ツバルは両手をぽんと叩いた。

「異動と行っても、全員が自主希望だがな。月はこれから重要な意味を持つ。開発を早急に進めなくてはいけない」

シンランは険しい顔をして、正面を見据えた。いや、彼女にはこれから先進めていく様々なプランが視えているのかもしれない。その様子をツバルは慈愛に満ちた表情で見つめた。

「シンラン部長……なんだかお変わりなられましたね。以前の貴方も好きでしたけど、今はもっと魅力的ですよ」

「ツ……。馬鹿なこと言っていないで仕事しろ！」

「はいはい……」

ツバルの軽口にシンランは大声で反論してツバルを追い出した。

お前こそ変わったじゃないかと、シンランは胸の内毒づいた。

いや……。違う。お前は元々そういうやつで、でも私が近寄りがない存在だったから、なかなか自分を出せなかったのかもしれない。

私はレータによってデザインから人間へと変わったと思っていた。

そして、いつかは再びデザインに戻る運命さだめだとも一時は思った。そうじゃないんだ。今の私を支えてくれているもの、そんなに軽くはない。

レータともう一度やり直そうとは思わない。そして、それを一番強く思っているのは恐らくレータだ。

あいつは自分を許せない。そして私も自分を許せない。

だから　　手を取り合ってでなくてもいいから　　二人同

じ想いのもとで、これからを見守っていいこう？

私達にしか出来ないことも、まだまだあるはずだから。

大きな展望ガラスからは、海のように果てしない砂漠が延々と続いている。その先にあるのは、かつては生命の息吹きに包まれていた青い青い母なる地球ほしである。

長い黒髪を手で撫でつけながら、女性はじつとその景色を眺めていた。

ここは月の端、かつては“マーゼ・アレイン”の本部として使われ

ていた基地であった。今は月の開発拠点となっている。

部屋のドアが開き、一人の男性がゆっくりと室内に入って来た。男は女性の姿に気付くと、歩み寄って同じように外の風景に目をやる。しばらくの沈黙が流れた後、女性の方が口を開いた。

「エクスル。シンランから連絡が来た。明日の朝、火星を立つそう
だ」

「そうですか。これで、月の開発も活発になりますね」

「ああ……」

二人は揃って、地平線の果てに煌めく星々の海を眺めていた。まるで、そのどれかに“誰か”を探す様な、もう二度と逢えない誰かを星に映して、それに心の中で語りかける様な。そんな他愛のない、けどどこかささやかな愛おしさを感じる行為は、束の間の安らぎを与えてくれた。

明日、火星の開発部から新たな人員が月に派遣されてくる。現在の月の開発は元マーゼ・アレインを含む少数の人員で自主的に行われていたものだったが、政府の方とカレン、エクスル側との話し合いの末、協力体制の下、以後は進められることになった。カレンとシンランは時々連絡を取り合って、デザインの生き残りの者たちの手助けなども行っていた。

「カレン……辛いですか？」

エクスルは心配そうに問いかけた。

「辛くないと言えば嘘になる。私はまた何も守れなかったのだから。ハヤブサもファイエンも義父さんも……」

もつとも、オーベルト、アケルト、マーゼ・アレイン隊長

は、一年前に姿を消してから誰の前にも姿を現していなかった。その生死すら二人には分からない状況だった。

カレンは無念そうに瞳を伏せる。だが、その悔恨すら日々薄れていくようで、そんな自分が時々嫌になる。背負うべき罪は永久に消えてなんかいかないのに。

そんな言葉を聞いてエクスルが言う。

「何故、貴方がそこまで自らを戒めないといけないのです？それでは彼らに失礼ですよ。彼らは皆、己とその信念の為に闘ったのですから」

「そうだな……。こんなことを聞かれたら、皆に笑われるか、怒られてしまうな」

カレンは強張っていた表情をふつと緩めて、ぎこちなくだが柔らかかに笑った。

「今、前を向いて新たな道を歩み始めている貴方を、フィエンもハヤブサも隊長も、皆が祝福し応援しているに違いありませんよ」

カレンからは顔を背けたままそっけなくエクスルは言った。気を使ってくれているのだろう、その絶妙な距離感がなんと彼らしくて、カレンは嬉しくなった。

「……ありがとう」

彼らの未来もまた誰にも分からなかったし、彼らを恨んでいる人だつて少なからずいる。例え、原因の所在がどこにあったのだとしても、失ったものは二度と戻っては来ない。それは誰に対しても平等で、責められるべきは、彼らだけではないのかもしれない。

そして人は痛みを知る。失うことの痛み、自分ではなく大切な人が傷付くことの痛みを。

カレンもエクスルも、その痛みを二度と忘れない。

そして忘れないことが、分かりあうことへと繋がっていく。

「よっリク！久しぶり！」

「ああ、久しぶり。元気にしてたか？副部長さんよ」

久しぶりに会うユーリの姿はなんだか大人びて見えた。少し恐縮しそだったので、俺は憎まれ口を叩いて誤魔化そうとする。

「元気……は元気だけど、忙しくて敵わないわよ。サクラさんもミサキさんも、全然そんなところ見せてなかったのになあ……」

ユーリはうーんと伸びをして、天を仰いだ。そんな様子を見ていると、なんだか前と変わっていなくて俺は少しほっとしたような気分になる。

「ま、忙しいのはお互い様だよ。肩書きこそついてないけど、俺だって現場じゃ結構頼られてるんだぜ？」

「ふーん……？」

「なんだよ、その目は……」

なんだかユーリを羨んで、見栄を張ってしまうような自分が懐くかしくてくすぐつたい。新鮮な空気を胸一杯に吸い込んだような、気持ちのいい清涼感だった。こんなやりとり一つで、俺の中でのしがらみとか僻みとか、そういったもやもやがゆっくりと解けていった。「レオとハルカは……まだみたいね」

「ああ。まあ、約束の時間までまだあるしな」

俺はそう言っただけで自分の端末を確認した。今日は、レオ、ユーリ、ハルカと俺の家で食事するということになっていた。クーも友達を連れて来るとか言ってたし、大人数になるなこりゃ。

だから、仕事が終わってから待ち合わせをして四人で向かうということになっていた。待ち合わせ場所にユーリが指定したこのエリアは、展望が良くて一面に広がる宇宙を全身で感じているようだった。星々の瞬きは果てしないようで、永遠にこの景色が変わらないような錯覚さえ起こしそうになる。

「一年か……」

「……………うん」

俺が何気なしに呟いた言葉に、ユーリは頷いた。

「父さんの……ライトIIセブンスの計画は成功すると思うか………」

俺の問いに珍しくユーリは言い淀む。俺に遠慮をしているのか、それとも本当に分からなくて考えているのか、それとも考えることすら出来ないのか。俺にはそれは分からない。

だがやがて、ゆつくりとユーリは自分の思いを語り出した。

「ライトの計画……。最近少しずつだけど、世間にも広まりつつある“地球再生計画”。貴方には悪いけど途方もない話だと最初は思ってたわ。いえ、今だってそう思う自分がほとんど」

「変な気を回すなよ。俺だってそう思うぜ。あいつは狂ってたさ。“地球から全ての生物を消し去って地球の再生を待つ”だなんて、どう考えても現実味がない」

「でも、その考えに同調して協力者がいたことも事実よ。そして、紆余曲折を経つつも賽は投げられた。これからどうなるかは私達の世代では到底分らないことだけれどね」

「そうだな……。ライト“セブンスの計画の成果が分かるのはこれからずつと先の話だ。でも成功するにしろ失敗するにしろ、俺はあいつの考えが許せない」

「そうね……。それだけの頭脳があつて何で一人で決めてしまったのかしら……？」

「人は、どれだけの力があるうとも一人では何も視えない。もし視えてるとしたらそれは幻想だ。だから……争いが起きる」

「うん……。だから私達は話し合わなくてはいけない。武器を持って戦うのではなく、分かり合うことでしか、得られないものだから」

「綺麗事かもしれない……。俺達が偉そうに講釈できるものでもないかもしれない。でも、もう過ちは繰り返したくない」

二人を包む宇宙は表情を変えることなく、悠久を漂い続ける。それは、当然のように一年前とも二年前とも変わらず在り続けた。だが、その間に二人に積み重ねられたものは重く、そして大きい。

ただ、あの頃の自分に唾を吐いて卑下したい訳じゃない。あの頃の自分達はあれが精一杯で、一生懸命に生きていたんだ。

「やあ、こんばんは。待たせたね」

「ええ雰囲気の所邪魔したかいな」

レオとハルカが並んで集合場所にやってきた。

「そんなんじゃないよ。そっちこそ一緒に来るなんて聞いてなかつ

たぞ？」

ハルカの茶化し言葉を受け流しつつ、俺は逆襲を試みる。

「実は僕たち付き合ってるんだよね」

「なっ!?!」

「嘘ッ!?!」

「……冗談っ」

「あれ？冗談なんや？」

『え?』

まるでコントの様な一連の流れだった。結局勝利者はハルカということでもいいのだろうか。

俺達は並んで、星屑の中を突き進んでいく。目的地は俺の家。目的は、みんなでご飯を食べること。

幸せとか、生きる為の理由とか、そんな小難しい理論は並べるだけ無駄だつてことに、俺達は気付くことが出来た。だからこんな些細な、だけどこんなにも胸躍らせる楽しみを生きる糧にして、毎日歩んでいこうと思う。

「レオは、明日月に向かうんだろ？」

「そうだねー、ここで開発を続けるのもいいんだけど、あそこで僕は頑張っつていこうと思っただ。今度は誰の意志でもない、僕の意味で決めたこと。セレナにも許してもらえたしね。……もっとも時々帰ってくることを約束させられたけど」

レオはくすりと落とすように笑った。

俺達の道はどこまでも一本道じゃない。何度も分かれたれて、交わつて、誰にも分らないどこかへ向かっていくのだろう。でも、それは可能性。無限の可能性だ。

「これから、こちらはとうなるんやろうなあ……」

「そんなの誰にも分からないわよ。だけど、だからこそ楽しいんじゃない?」

「そういうことだね。僕たちは、誰も知らないそれぞれの明日を生きる。そうでしょリク?」

「ああ。だから向かおう、七色の明日へ」

『七色の明日へ』完

筆者コメント。

まずはここまで読んで頂いて本当にありがとうございます。

感謝をしても尽きません。ありがとうございます。

拙い表現や見苦しい箇所多々あったと思います。それでも、なんとかここまで書いて来れて本当に良かったと思います。そもそも飽き症の僕がここまで来れたこと自体が……笑

正直、伝えたいことが多すぎて詰め込み過ぎたと反省しています。

もう少し一貫したテーマがあれば、引きしまった内容になったのかなあと今更ながら思います。それでも、この作品を生んでリクやユーリ達に出逢えたことは一抹の後悔すらありません。

彼等が描く明日はどうなるでしょうか？勿論、笑顔や幸せだけで塗りつぶすことは出来ません。だからこそ、人はそれを欲して毎日頑張っているのかなあと時々思います。

また、新しい作品の構想とかもありますし、これからも書き続けら

れたらいいなと思います。

もちろん、プロットはちゃんと書かないとね！（笑）

それでは、最後に重ねて。

本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7532g/>

七色の明日へ

2010年11月15日12時46分発行